

奇譚クラス

新しい風俗文献誌



FEBRUARY '66

昭和四十一年二月号 奇譚クラス 定価 三〇〇円



THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



定価 三〇〇円

★最新資料／文献写真／特別分譲品★

落ちた下着後手吊

大手札三枚一組 略号(ろよ) 三〇〇円
東浦ひかる
激しい緊縛ブレイの連続の束、
たった一枚残ったパンティが足元
に引き上げられ、厳しい高小手の
縄尻が高々と天井へ引き上げら
れる。爪先立った脚線の緊張。

浴槽荒縄強烈折檻

大手札三枚一組 略号(ろる) 三〇〇円
山原清子
トゲトゲとした荒縄が柔肌を痛
めつける上に、更に浴槽に浸され
て緊縛する荒縄。情容赦のない折
檻の手と足は、悶える裸身を水中
に埋没させようとする。

梁から両手吊り

大手札二枚一組 略号(ろふ) 三〇〇円
木村洋子
交叉して括られた両手首は梁に
しっかりと縛りつけられた。両足
は床から離れて全身が完全に宙
に浮いてしまった。軽量のマゾ性
のモデルだからこそ出来る難業。

床柱宙吊り縛り

大手札二枚一組 略号(ろへ) 三〇〇円
木村洋子
裸身を床柱にぐるぐると胸から

胸、膝頭、足首と括りつけられて
完全に宙に浮かんだまま正面向い
て晒される女体。全身を締めつけ
る緊縛感に苦悶の表情が漲る。

開股々間縛正面

大手札二枚一組 略号(ろほ) 三〇〇円
山原清子
麻縄による全身を縦に真二つに
割る強烈な股間縛りの上に更に両
膝を八の字に開かせ両足首を括つ
た縄を左右に引っぱって後手の縄
に連結した凄惨な目のむきさ。

一女連縛責模様

大手札十枚一組 略号(ろそ) 一〇〇〇円
大塚・山原・小原
後手高小手に嚴重に縛り上げ
た二女の縄尻を連結して、いたぶ
り続けると、両足だけは自由にさ
れてるので、いたぶりに対して
奇妙な姿態が交錯する。

一女連縛煩悶場面

大手札十枚一組 略号(ろひ) 一〇〇〇円
山原・大塚
縛られた二女の上半身は高小手
手に厳しく只自由な四本の足だけ
が空を蹴って悶えめき、後手を連
結した縄がきしきしと悲しいきし
めきの音を放つ二女連縛の姿態。

股間縛刺青競艶

大手札三枚一組 略号(ろさ) 三〇〇円
山原清子
背中刺青をいっばいに見せて
股間縛りと刺青の競艶は、むごた
らしいサジスチックな連想を画面
に映しだす。

股間縛正面表情

大手札三枚一組 略号(ろす) 三〇〇円
山原清子
豊胸をくびれる程縛った麻縄が
身体を正面と背面から大寫しに
よって鮮鋭なレンズの眼を透して
いきいきと描写しました。

喰込む股間縄目

大手札三枚一組 略号(ろせ) 三〇〇円
山原清子
肉づきのよい肌をまるで歯をく
びるように区切った横縄にプラス
して縦縄が身体を割った有様を側
面からのカメラアングルで前面背
面の様子と同時に捉えました。

女レスリング寝業

大手札八枚一組 略号(ろわ) 一〇〇〇円
東浦・大塚
晒の六尺揮一本の両端が、プロ
レスのルールに従って大胆に、奔
放にマット敷しと流れ狂うレスリ
ングの寝業の攻防戦。双方共真剣
に興味を以って相争う数場面。

女斗美争闘シーン

大手札八枚一組 略号(ろか) 一〇〇〇円
大塚・東浦
裸女二人がなりなり構わず、こ
こを先途と掴み合い押さえ込み
合う女体の躍動美となまめかしい
エロチシズム。押さえる者も下
なる者もナマの裸身を晒けだす。

女相撲取組場面

大手札六枚一組 略号(ろぬ) 一〇〇〇円
大塚・東浦
相撲俵をきつちりと身につけた
両者が十二分に練習を続けた上で
がっつきにより一方が仕手とな
り戦いが繰りひろげられます。

女相撲実戦場面

大手札六枚一組 略号(ろお) 一〇〇〇円
大塚・東浦
機が熟したところで、お互い
相手の物の見事に倒さんものと懸
命になったチャンスを見過さず、
早いシャッパターで次々と撮影し
ていく実戦的な興味のある場面。

女相撲投業場面

大手札六枚一組 略号(ろり) 一〇〇〇円
大塚・東浦
力の強い女が四つに組んで投業を二つ
魅が輝くように感じられるエロチシズム
の瞬間。

★総天然色(カラー・プリント)作品写真分譲★

従前より天然色の色彩豊かな
写真の分譲を希望されておな
がりました。比較的高価な写真
を果して注文される方があられ
る。そこで注文した方が、今更
る。女性として稀有な美しさを
めづる。女性として稀有な美し
角の女性として稀有な美しさを
見る。女性として稀有な美しさを
対しては、物足りないという向
は。女性として稀有な美しさを
早。女性として稀有な美しさを
は。女性として稀有な美しさを
ました。女性として稀有な美し
の。女性として稀有な美しさを
て。女性として稀有な美しさを

天然色刺青写真

☆モデル 山原清子
☆手札型カラー・プリント
【第一組】 略号(ゆき) 一〇〇〇円
全裸の清子の背中の刺青が極
彩色で極めて美しく出ています。
【第二組】 略号(ゆこ) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(ゆさ) 一〇〇〇円
彩色豊かな室内の背景の前に浮
かびあがった刺青の色模様。
【第三組】 略号(ゆさ) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(ゆさ) 一〇〇〇円
羞らなながらも背中全面にタイ

三面鏡の刺青裸身

☆モデル 山原清子
☆手札型カラー・プリント
【第一組】 略号(ゆそ) 一〇〇〇円
三面鏡の前で背中の刺青を十分
に見せながらお化粧するところ。
【第二組】 略号(ゆた) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(ゆた) 一〇〇〇円
鏡に映し出した裸身のすべてを
【第三組】 略号(ゆち) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(ゆち) 一〇〇〇円
豊かな刺青の臀部をあらわに見
せて鏡の前でさらけ出す嬌容の模様。
【第四組】 略号(ゆて) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(ゆて) 一〇〇〇円
姿勢を鏡の前に投げだした清子
【第五組】 略号(ゆと) 一〇〇〇円
刺青の背中を大鏡に映して、こ
ちらを向いて微笑んだ嬌容の姿。

天然色緊縛写真

☆モデル 山原清子
☆手札型カラー・プリント
○柱宙縛りにあえぐ 略号(やか) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(やか) 一〇〇〇円
床柱にきりぎり縛られて両足先
が宙に浮いたままもく姿態。
○高小手に閉める全裸 略号(やき) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(やき) 一〇〇〇円
たった一枚の腰布も剥きとられ
て高小手で悶える華麗な肌。
○緊縛に映える入墨 略号(やく) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(やく) 一〇〇〇円
赤い紐に白い肌を映える。たう
つ刺青が美しく光に映える。
○脱がされた着物のなかで 略号(やも) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(やも) 一〇〇〇円
着物の長襦袢、腰巻、帯、それ
らの色彩の中に埋れた緊縛裸女。
○裸のたうつ裸身 略号(やし) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(やし) 一〇〇〇円
定評のある清子の腰え方、それ
が豊富な色彩の中でのたうつ。
○腰巻一つで縛られる 略号(やみ) 一〇〇〇円
手札型三枚一組 略号(やみ) 一〇〇〇円
腰巻一つで縛られてところから回
る豊満な肢体の華麗な色模様。

天然色野外女相撲

☆モデル 大塚啓子、東浦ひかる

☆手札型カラー・プリント
【第一組】 略号(うに) 二〇〇〇円
手札型六枚一組 略号(うに) 二〇〇〇円
波静かな湖畔の砂の上にて四つ
の組んだ相撲の一本の二に映る。
【第二組】 略号(うひ) 二〇〇〇円
手札型六枚一組 略号(うひ) 二〇〇〇円
のびのびとした自然のなか、何
を打つ見事な自由さで大きく何
【第三組】 略号(うほ) 二〇〇〇円
手札型六枚一組 略号(うほ) 二〇〇〇円
実戦的な力強い相撲の早打ち
【第四組】 略号(うと) 二〇〇〇円
手札型六枚一組 略号(うと) 二〇〇〇円
激しい相撲の最上は、投げ
【第五組】 略号(うち) 二〇〇〇円
手札型六枚一組 略号(うち) 二〇〇〇円
十数度の熱戦で汗と砂にまみれ
のた見せ場である大業の応酬。

●秘蔵版△SM資料△優秀作品分譲●

女奴隷を弄ぶ

大手札八枚一組 一〇〇〇円
大塚、東浦、木村 略号「きあ」
生来のマゾ女性木村洋子を大塚啓子、東浦ひかるの二人の女性が一緒になつてぎりぎりと縛りあげさんざんにいじめ抜く場面を実際のプレーから選びました。

股裂きと逆さ吊

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号「きう」
大塚啓子、東浦ひかるの二嬢が後手高小手に縛りあげた木村洋子を逆さに引きあげ、両足を左右にそれぞれ引っぱって股裂きにしようとする緊迫的シーン。

口中の詰物で汚辱

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号「きお」
裸身の胸に喰い込む細目もむごたらしく高小手のままだがされた木村洋子の上に跨って押えつけた鼻を摘んで開いた口の中へ無理矢理布片を押し込む二嬢。

猿ぐわのいたぶり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号「きさ」
痩せ気味の木村洋子の裸身をぐ

るぐる縛りあげ思うまま弄んだ二嬢は、洋子の口にぎゅうぎゅう絞りの猿ぐわを力いっぱい噛ませて、その悲鳴を封じる。

抓ねりと擦ぐり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号「きし」
柔らかな脇腹、豊かな乳房、お臍のまわりと、大塚啓子、東浦ひかるの二嬢の手と足は、執拗に木村洋子の肌をとこる嫌わず襲いかかつて抓ねり擦ぐりまくる。

二女を虐める啓子

大手札十枚一組 一二〇〇円
東浦、木村、大塚 略号「きい」
木村洋子、東浦ひかるの二人のマゾ女性の裸身を緊縛した大塚啓子は二人を一緒にして踏みつけ狼ぐつわを噛ませ抓り擦り、押さえつけ虐めつくす連続組写真。

血紅使用介添切腹

大手札五枚一組 八〇〇円
大塚、東浦 略号「きつ」
東浦ひかるの豊満な下腹を背後に回った大塚啓子の手によって、きりきりと切りさばかれてゆく凄惨な介添切腹の場面を豊富な血紅を使用して真迫的に描写した。

柔肌を切り裂く

大手札五枚一組 八〇〇円
大塚、東浦 略号「きち」
下腹を真紅に染めて仰向きに倒れた東浦ひかるを冷ややかに見下ろした大塚啓子は、更に右手にした脇差でひかるの胸を、脇腹を、下腹を切り裂いてゆく。

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦 略号「きす」
縛られて仰向きに転った東浦ひかるの上に馬乗りになった大塚啓子は脇腹、臍のまわりをくすくすくする。悶え喚めき馬乗りになった啓子をはねよけようとする。

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号「きせ」
身動きできぬように東縛されたひかるの豊満な胸、腹部、馬乗りになった啓子の手にした火のついたローソクから熱い蠟涙がたらりたりとしたり落ちる。

豊満な乳房責め

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「きそ」
只でさえ巨大なひかるの乳房は細目によって一層膨れあがる。啓子は足で踏みつけ、ブライヤーで乳房をさみ、あらゆる方法で乳房を痛めつける乳房責め決定版。

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「きて」
女奴隷東浦ひかるの裸身をくびるように強烈に縄をかけた大塚啓子は、どのように飼育してゆくのか。さまざまな素晴らしい傑作縛りフोटにて解説します。

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号「きと」
総べての身の自由を奪われた女奴隷東浦ひかるが、きびきびした大塚啓子の手によって、人間性の喪失を宣言され、凌辱のかずかずを強要される幾場面の展開。

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚、東浦 略号「きな」
見事な高小手に緊縛した東浦ひかるの鼻を思いのままに責める啓子。女の誇りの鼻を痛めつけられ、どうすることも出来ない捕われの裸身のひかるである。

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号「まく」
M男性モデル募集に応じてきたM男性に対して東浦ひかるが自分のMとして体験から、その膨大な尻の下にM男を敷くといったプレイの場面を特に分譲いたします。



奇譚クラブ 2月号 目次

◆奇クサロン.....編集部選.....(9)

○青い空に白い雲.....編集部選.....(9)
○我が家.....編集部選.....(10)
○文壇.....編集部選.....(11)
○あう(14).....編集部選.....(12)
○下さい.....編集部選.....(13)
○の場.....編集部選.....(14)
○ハサロ.....編集部選.....(15)
○ハサロ.....編集部選.....(16)
○ハサロ.....編集部選.....(17)
○ハサロ.....編集部選.....(18)
○ハサロ.....編集部選.....(19)
○ハサロ.....編集部選.....(20)
○ハサロ.....編集部選.....(21)
○ハサロ.....編集部選.....(22)
○ハサロ.....編集部選.....(23)
○ハサロ.....編集部選.....(24)

△本文△

扉.....本誌の信条.....編集部.....(25)

のおと・あと・らんだむ.....千草 忠夫.....(26)

ボケット・ブックに発見した.....河津 安春.....(32)

M的小説クライマックス紹介.....久我 庄一.....(40)

S・コント「男と女と」.....牧 高志.....(42)

漫筆 裾の乱れ.....黒田 寿.....(47)

私のイメージ 青雫美女.....夜乃 探郎.....(50)

「牝犬羞恥地獄」.....並原 新一.....(54)

△告白△流腸とオシメと僕.....辻村 隆.....(56)

SMカメラ・ハント.....黒淵 要一.....(68)

「みゆきのパースデー」.....島田 啓子.....(80)

アリアドネ (希臘神話の再編成).....

〔告白〕異常なる夜の記録.....

耕土散筆 「落穂拾い」 (五).....保藤 久人.....(84)

心傷たむ遍歴 (ミシュリーヌの公判).....西条 操.....(92)

随想 サークラスの想い出.....曲馬 団好.....(104)

夏彦蛇行録.....堀 夏彦.....(116)

「珍学的善讀美論」.....夜乃 探郎.....(125)

女相撲物語 「花の女斗美たち」.....奮斗士好太.....(131)

小説「花と蛇」その文学性について.....保藤 久人.....(135)

鬼六談義 「日本三文映画」.....団 鬼六.....(141)

△KK時評△論壇の転を願う.....橋 行司子.....(146)

ガン作・マニヤのノート.....

濡れにぞ濡れし.....芳野 眉美.....(150)

青木順子さんについて.....丸鬼土佐渡.....(157)

続・悪女の手紙.....福田 久文.....(162)

ひいらぎの花 △花物語・1△.....万田 不仁.....(164)

或る回想 (ファンタジックな明日への期待).....保藤 久人.....(172)

連載小説 花と蛇.....団 鬼六.....(178)

想うこと (三たび).....西条 操.....(181)

小説・新解体新書.....高野 原美.....(184)

読者通信.....編集部選.....(188)

☆極最近撮影△悦虐▽写真新分譲品☆

◎カラー・プリントの部

真紅の腰巻着用

大手札二枚一組 八〇〇円
大塚啓子 略号ハうおV
真紅な腰巻を全裸の腰にまとうところ、従来の黒白写真ではあらわせない色彩を腰巻ファンの方々の要望によって特にカラー写真にて分譲品に加えました。

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円
東浦ひかる、大塚啓子 略号ハうてV

真紅の腰巻をまとった大塚啓子を高小手に縛り上げ、珍らしくも東浦ひかるが責め手に回って子の縄尻をとるという今までに書てなかった横図がカラーにてお目みえいたします。

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一五〇〇円
大塚啓子 略号ハうこV

真紅な腰巻の乱れた裾から、真白な太股が、脛が、素足がこぼれるエロチックな緊縛シーンが、力強い責めフォトです。

◎モノクロ写真の部

オシメと女学生

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号ハうえV

肉づきのよい真白な太股を八の字に開かされてオシメを当てられるオシメ・カバーを着けられる可憐なセーラー服姿の女学生。オシメマニヤの憧れの的である羞恥と汚辱に一人の感興を催させます。

◎三人による女相撲

大塚啓子 (東浦ひかる、木村洋子)

マワシを締めあう

大手札印画紙焼付 十五枚一組 二〇〇〇円
略号ハうみV

三人の若き女性が素裸になってお互いに相撲を締めあう様子を三十五ミリ判にて漸次スナップしていった、女相撲準備中のありのままの状況描写の連続写真。

好取組三番勝負

大手札印画紙焼付 十枚一組 一五〇〇円
略号ハうむV

三人のマワシ着用の女性が、勝抜きの三番勝負を展開、控えの人は双方に声援し、技に対するアドバイスをするなど入れかわり汗みずくになって繰り返す女相撲。

迫力実戦好相撲

大手札印画紙焼付

十枚一組 一五〇〇円
略号ハうめV

三人がお互いに相手を選んで力をかぎり女相撲の技を競うところを次々と早いシャッターで場面を捉ええました。その中で妙味のあるシーンを選びました。

マワシの二人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
略号ハうやV

相撲マワシを締めた三人の娘が三人揃って立つて並んだところを記念撮影しました。仲良し三人娘の裸の写真です。背面からのポーズも忘れず集録いたしました。

取組む三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
略号ハうゆV

三人の中の一人が行司役となつて躊躇して向きあう二人から始まって睨みあいから四つに組むまで型通りの女相撲の展開を、一つ一つ丹念に狙ってゆきました。

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原清子 略号ハうもV

イルリガートル、ガラス製一〇〇CC浣腸器を用いて、浣腸に心をこめて清子が蒲団の上にて自ら精神でフォト化しました。

浣腸されるマニヤ

大手札四枚一組 五〇〇円

山原清子 略号ハうわV

浣腸マニヤでもある山原清子が他人の手によって各種の浣腸器具によって浣腸される状態を、浣腸ファンの眼を楽しませるために刻明に描写いたしました。

刺青姐御の切腹

大手札四枚一組 五〇〇円
山原清子 略号ハうたV

白晒の六尺褌を前垂れなしに、きりりと締めた背中一面刺青の姐御が脇差を右手に右膝を立てての覚悟の切腹。裸一貫女伊達の最期はこうぞとばかり下腹を切る。

◎Mフォトの部

二女のなぶりもの

大手札三枚一組 六〇〇円
山原清子、大塚啓子 略号ハうるV

応募してきたM男性モデルが二人の若い女性に手どり足どりされてなぶりものにされ、あとでこんど楽しいことはなかったと述べたに至ったMプレイ・フォト。

二女の馬にされる

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原清子、大塚啓子 略号ハうまV

二人の逞ましい肉づきのよい女性から、文字通り人間馬とされ、二人の全体重に喘えながら四這草をくゆらして大笑いしながら馬の乗心地を楽しむ若い女性。

仕事忙しいということは大変結構なことである。又好きな仕事に熱中できるということも至極幸福なことであろう。しかし、これも程度を越すと繁忙ノイローゼになりかねない。本誌のような型破りの雑誌を作っていると、何やかやと全く楽しいことが多い。肝胆相照らす友が次々とできるし、いくら夜おそくなっても、一向苦にはならない。

しかし、父のあとを継いで情性でやっている証券取引が、七月下旬以来の株式市況の盛況で、このところ、一日の中の午前中は完全に売買で忙殺されてしまう。そこへもってきて、これも父譲りの投資した事業が、おきまりの今や業績悪のドン底で、取引先の倒産だ、やれ受取手形の不渡りだ、と、いいところなしである。



一日の二十四時間が三十時間もあってほしいと思ったこともあるが、辻褄の合わないところは、差し当り、睡眠や休養の時間をさいたり、レジャー用の時間を犠牲にしたりしなければならぬ。映画やテレビをゆっくり見る時間もないし、ましてやデイトに費す時間など見出せない。次々と送られてくる新刊本や雑誌は堆高くなってくるが、読むどころではなく、目を通すのがやっとなのである。

それでも信用取引で買った中山製鋼や平和不動産が忽ちのうちに百円も棒上げして、濡れ手で粟の掴み取りといった景気の良いと

きは、寝不足も大してこたえなかったが、大蔵省の規制でダウの百円近くも暴落、その翌日には本年最高の上げを演じたりすると、蒼くなったり赤くなったり、その後始末が大変である。

そんなとき、たった一人で自動車旅行をして、九州の果てにでも行って、のんびり砂風呂へでも入ってみたいくなる。校正に疲れた目を窓外に向ければ、青く晴れ渡った空には、石鹼の泡のような白い雲が遅ましく盛り上って、陽にまぶしく輝やいている。青い空にくっきりと浮かんだ白い雲は、見た目には、まことに精力的である。むくむくと盛り上っている白雲のような精力ふりで、あらゆる難問を快刀乱麻してみたい。

昨今の本誌は大分評判がよいようだ。世評で叩かれ読者にも見はなされたら、誰かの言ではないが、廃刊を待つより外なろう。いや、そんな本誌だったら、頑張っただけのおいたって、存在価値はないだろう。通刊二百号を突破

し、二百数十冊の雑誌を世に送ってきたというだけで、以って瞑すべきかもしれない。

丁度十年前のことである。本誌がワイセツ容疑を受けたとき、担当の検事は、折角の才能を持ちながら、世間から白眼視されるタイハイ的な雑誌を作るといふことはつまらないじゃないか、もっと青少年の志気を鼓舞させる内容のものを作ったらどうだといったことがあった。志気を鼓舞させるのか具体的に訊いてみたかったが、関大の法科出とかいう色の黒い貧相な女にもてそうにもない、その検事の顔を見ていると八国体の本義の講釈でもされそうな気配なので思いとどまった。

戦時中のような雄壮な軍歌が若者の志気を鼓舞させるのか、どうか。又若者の志気を鼓舞させて、そして一体なにをやるかというのか。そんなことを考えていると、敵と対峙したジャングルの中で樹の間に青い空に、ぽっかりと浮かんだ白い雲が忘れられない。あのとき雲と今の雲とが、何んだか一緒のような気がして仕方がないのだ。

青き空に白い雲

編集子

ゴムマニア夜話

梅川幸子

今迄三度ばかり私の告白を載せて頂きまして、その間本誌には森中雨奇男様や津田亜紀子様のごマニアの告白が載り大変興味深く拝見いたしております。また私も筆をとりたくなり、拙い文章ながら書かせて頂きます。毎度の事です。私の愛用する品物を並べてみましょう。

(1) ゴム長靴

これは農家の方が田植仕事の時にはいている茶色い裏表共に総ゴム製の長靴で、ひざまでのと腰まで届くのがあります。底は平らく爪先は地下足袋の様にできており、私は腰まで届くのを二足用意しております。

(2) レインコート

絹や羽二重の裏にゴム引きしたレインコートで、今では都会でも

田舎でもさっぱり見られなくなつてしまいました。襟の形やボタンの位置で何種類かありまして、サイズは普通(44)サイズですが、特大の(46)サイズがあり、全体に非常に大きくゆったりと出来ております。私のコレクションは全部この(46)サイズで、赤、ピンク、緑、ネズミ、茶と五着揃えております。フード、ベルトはなさない様に大切にしています。

(3) ゴム合羽

皆様の告白に刺戟されて私もうとうこれを求めました。黒いゴム引きの裏は茶色い総ゴム製の男物の雨合羽でフード、ベルト付きです。サイズも特大を選び、袖口はアメゴムで手首を固く締めるように出来ています。何故もっと早くこの雨合羽を求めなかったのか不思議でした。

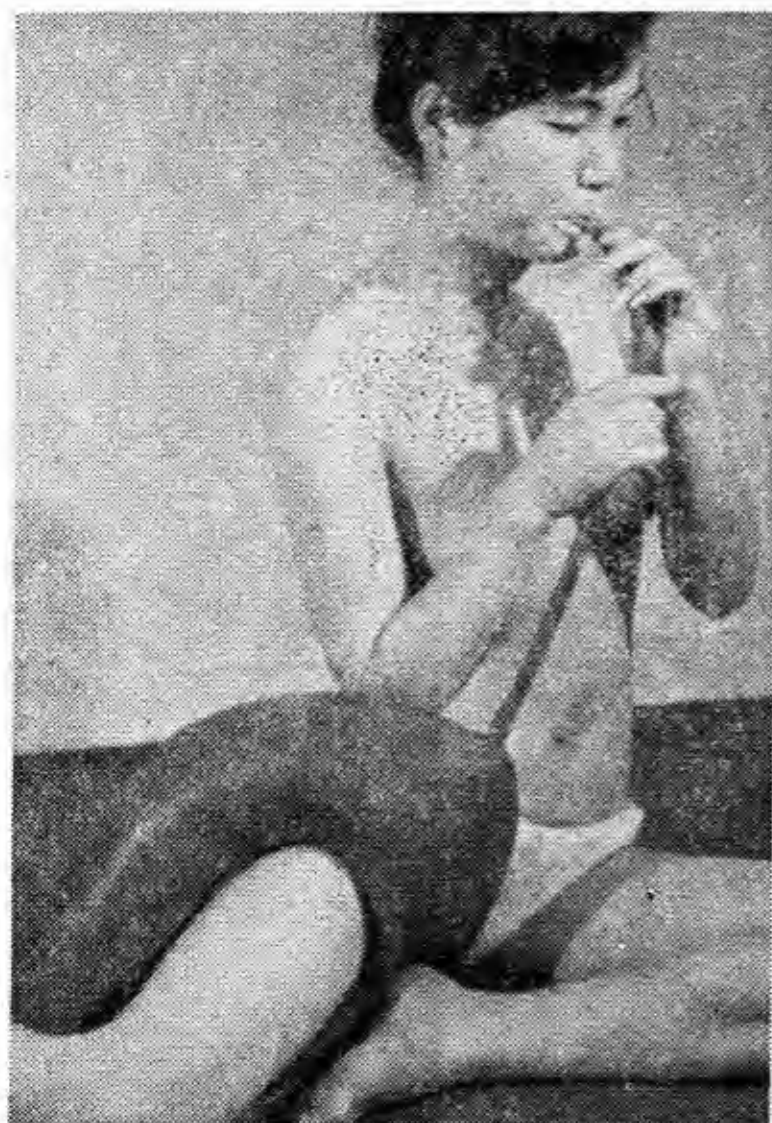
(4) ゴムマント

ゴムマニアの方々の告白には、このゴムマントに関する記事が少いですね。私はなんといつても、これが一番好きなのですが、今でも自転車に乗った男の人が着ているのを時々見かけます。黒いゴム引きで裏はゴワゴワした茶色い木綿地のフード付きのマントです。

(5) ゴムマスク



以上の品を用意してブレイに移りますが、時間は午前二時ごろでテレビの深夜放送が終って一息ついた頃に始めます。まず着ている物を脱いで裸になり、三面鏡に自分の姿を写しながら、これらの品



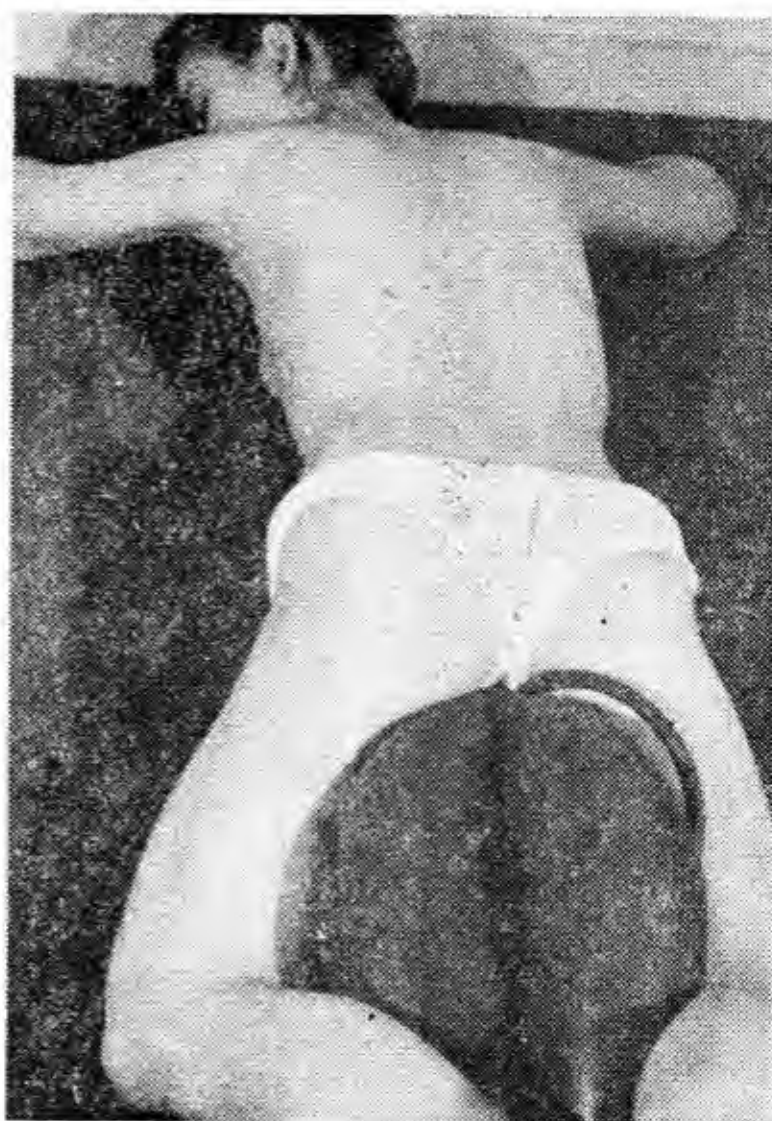


を身につけてゆくのですが、今夜はどれを着ようかと、あれこれ品定めするのも楽しいものです。何はともあれ先ずゴムマスクをはめます。ゴムの匂いが鼻孔をふさぎ、息をはずませる度に口に吸いついたりふくらんだりします。

(息苦しく感ずる時は鼻孔を出します) それから、ゴム長をはきます。ヒヤリとした冷たい感触が両足を快く包みます。そしてレインコートをまとい、腰のベルトを結びフードをまぶかにかぶります。小柄な私がこれを着ますと、フ

ードは眼までかくし裾はまるでガウンを着ている様に足首迄とどきます。その上から雨合羽を着て腰のベルトを結びフードをレインコートのフードをかぶった上からかぶり、フードについている小さいベルト(男物の合羽類によくみられる鼻から下をかくすためのベルト)を締めま

す。この姿を鏡に写して眺めると我ながらおかしさがこみあげてきます。男女装のゴムづくめの異様な女の姿。雨合羽を着物にたとえればレインコートは、さしずめ長じゅばんという



所でしようか。たしか津田様の奥様もレインコートの上から雨合羽をお召しとの事でしたわね。でも私はこれでもまだ物足りません。更にゴム手袋をはめ、この異様な姿の上にマントをすっぽりと羽織ります。

私はこのゴム装束の自分の姿を鏡に写してとくと眺めます。

黒いゴムマント、魔法使いの様なそのフード、身体全体を包みかくし、裾はひきずる様に長く、フードから僅かに眼が、裾からは茶色いゴム長の爪先がちよっぴりの

ぞいています。

ゴムマント——これこそ私をゴムマニアにしてしまった、いわゆるつきの品です。私が今一番望んでいます事は、ゴムマニアの女性の方とプレイを楽しみたい事なのです。出来れば雨奇男様の奥様にお目に掛けて二人で心ゆくまでプレイをしたいのですが。二人共ゴム装束の姿になって責具を使い、汗とゴムの匂いにまみれてプレイを楽しみたいものです。

△挿入の写真はゴムマニアの愛読者某氏の提供によるものです▽



(第二十回)

辻村 隆

毀譽褒貶は世のならいというが、最近では辻村隆が随分ペンの肴にされて、実際の処、喜んでいいやら怒って見たものやら、トンとその始末に困ってしまう。相手になればキリがない様にも思うし、といって、黙殺するのも悪い気がして、結局自分なりの線ですペースを守って行くより致し方ないとなんか処に落付いてしまうのである。迷論、卓見、私見が輻輳

して、今までになく誌面は活潑に、花盛りでもあるが、最近読む雑誌になったと強調される方は、過去、グラビヤだけを見て楽しんでおられたのであろうか？。奇クは昔より読む雑誌ではなかったのかと、そんな点に首をかしげたくなる。『花と蛇』の団鬼六先生なんか、一切我れ関せずと悠々そのみに専念していらっしゃる。とすると、私なんか矢張り、色気が多すぎるのかも知れない。

× × ×

先月、久し振りに志村善子さんから便りがあった。いよいよ二月吉日結婚するといってきた。相手は赤穂市の土建会社の御曹子であるが、見合の結果とは意外だった。それまでに機会あれば、恐らくそれが最後になるかも知れないプレイに、是非暇をつくって下さいといってきたが、既に彼女の結婚がきまった今、そのプレイへの誘導に出掛けていっていいものかどうか迷っている。最近頓に人間臭くなつたといわれる私。万一プレイの果てに、人間心の意馬心猿で、なる様になった時の事を恐れるのである。綺麗ごとで終れる確信のない私なら、むしろそつとその俤にしておいた方がいい様な気もす

る。彼女の手紙の内容から察して、結婚前の最後のプレイに、何か彼女のオンナを賭けている様な気がするからである。結婚式には来て下さいと書いてあるが、当日私はドンな顔をして新郎新婦を眺めていたらよいのやら、兎角不可思議なるは女心である。とはいえ最後のチャンス。ジェキル博士でゆくべきか、ハイドになろうか。どうも思案がきまらない。

× × ×

奇クにとって忘れることの出来ない人、画家の四馬孝からヒョッコリ電話があった。別用もあって来阪しているという。箕田氏とも逢つたといっていたが、私はどうして描かないの？と尋ねると、もう私の出る幕はないと、心なしか淋しい応えであった。挿絵を制限し、グラビヤ絵もない今、描いてものらなきや、労力の空廻りだと仰有る。何か面白い？ことを私に求めている電話であったが、急に電話されて、そうそう奇抜なことも、アブの探求も転がってはいない。私だって毎日は、ごく平凡に、自分のなりわいの中で生活している市井人に過ぎないのだから。十数分の電話で別れたが、夢よう一度は、豈に私のみでなく、四馬孝

編集部だより

○秋口より寄稿家執筆の方々、モデル志願の方々或は長年の読者の方々と親しくお逢いする機会が比較的多くあり大いに有意義であった。秋の一日、雪崎京人氏が来阪されたのをチャンスに、大塚啓子、東浦ひかるの二嬢の女相撲を指導して頂いた。僅か半日のことであつたが、本格的な女相撲の取口を、手をとって指導して貰えたので全く素晴らしい迫力のある女相撲の写真が沢山撮影できた。

○生前の伊藤晴雨氏と非常に親しかったという愛読者の某氏が、門外不出の秘蔵のコレクションを見せるというので、晩秋の一夕、貴重な資料を見せて貰った。伊藤晴雨氏の最も脂ののつた頃の雄渾な作品で思わず唖ってしまった。

○このまま書庫の底に埋めてしまふのも惜しいという某氏の意向を体して、何らかの形で陽の目を見せたいと思う。伊藤氏の作品は相当流布されているが、某氏のこの秘蔵品は色彩のついた肉筆画で未発表の点は折紙付きである。

○色彩のまま、複製できたなら一

も懐旧の情一入であるに違いないと、つくづく思った。

× × ×

輪禍で御母堂が急逝されて、芳野眉美氏の悲嘆は、他人事ながら胸が痛くなる。早速お悔み申し上げたが、氏の現在の、そんな心境

謹啓・福田久文殿



久 我 庄 一

新年号ハサロンVに掲載された貴殿の「地獄メモ」に答えて——の御文、心して拝見させて頂きました。あの超異色作（地獄メモ・十月号）は、たしかに大脳側頭葉だけが独立して発達し、前頭葉の発育が遅れた珍文であったと信じます。貴殿を、その世界に断りなくも無礼にも登場させてしまった事、まさに切腹ものですが、武家の出ではない小生、そのつめ腹だけは平にお許し願ひ上げます。あの愚作は、長篇記録映画「タブウ」

の今、筆もつい沈み勝ちも当然である。論説の方々に、願わくば、余り彼を刺激なさぬ様、乞うや切である。

奇クに旺盛な筆力のふるえる時は、家庭の心配も悩みも憂いもなく、有り余った余剰活力を発散出

観賞中にインスピレーションされた、五月の夜の夢をまとめ上げた物で、構成の不備は投稿前に意識していました。ただ、紳士の雑誌（六月号編集後記参照）にこのようなゲテモノもどうかとハ奇譚Vの悪サンプルにと座興に投稿しました物で、掲載されておどろいた位です。さぞかし大方読者も御笑覧読み捨て下さると思っていた所、いまになってハ不快だけを残しますVとの御一文。深く謝します。なお、貴殿の御心情をスカッ

来得るときである。だからその点奇クに書かれている人は、皆平和に愉しく暮している人であるという三段論法になる。『小人閑居して不善を為す』という古人の言も裏返せば、平和な時代にこそ適用される言葉ではなからうか。

とさせる意味でも次に、あの貴殿についての個処のエキスのみ記します。それでお許しを——。

ハ理由の如何にかかわらず「去れ」という言葉はこの共通の広場たるK誌にあってタブウである。芳野氏の福田氏に対する批評（感想）は冷酷だ。また福田氏はなぜ、SMの情事とその編集の中心でもあろう奇クに背をむけようとし乍ら、当の奇クを読者に「親しむだけで癒すことができる」というような無責任なムジユンした言葉を吐くのか。投稿作品に反響の無いうっぶんもふくまれていたのかV。なお、現在、読者通信などで貴殿の作品に対する理解と憧憬者が増えてきた事を、貴殿と共に、小生心からおよろこび申したい。一層の御健筆を祈り上げます。（昭和四十年十一月末日）

ばんいいのだが、費用の関係で、できない時は、せめてグラビヤ印刷かコロタイプ印刷ぐらいにして後世に残したいものだ。多数のデッサンと共に処分一任で預ってきいているので、次号あたりから誌上で紹介してもと考えている。

○M男性モデルの志望の方々とに時間の許す限りつとめてお会いしプレイに興じたり写真撮影をやったりしているが、志願者が多人数のため、予定している方でも中々時間が見いだせなくて困っている状態だ。殊に女性モデル志望の方で度々お便りを貰いながら面接の日時を通知できなかった方々や執筆寄稿家の一部の方で折角通知を頂きながら、お返事も差し上げなかったことについては、まことに相済まなく思っている。

○山原清子後援会の件も同嬢の一人上の都合で十一月、十二月とも会合の機会を持つことができなかったが実施する時は必ず会員の方へ御通知する故お待ち願いたい。○近頃、大塚啓子さんへのファンレターが多くくる。後援会を作ったという熱心な方もあるが、今のところその余猶がないので、どなたか提唱者となって面倒を見てくれるのなら、お名乗りを乞う。

「嗚呼！げてももの・ショーの無惨美」

—【新年号・SMカメラ・ハント紀行】を見て—

よるの・たんろう

「耽美」「頽廃」——と△幻想△は快楽主義者（または耽美主義者）にとって不可欠の条件でもあろうか。だが微温的な床上には、なまぬるい夢より咲かない。現実直視と逃避の混沌として漂う中からこそ、華麗にして強烈な夢も開花されようと思う。一言で示せば△乱調美△。

他者にとって「無惨」と単なる△好奇△のみより感じられない世界に△美△が昇華される瞬間こそ△アブ追求の独断場である。なぜ、このようななかなたぐるしいきめ付けたような言葉で文をはじめたかと云うと、おそらくカメラ・ハント『讃岐の蛇娘』は、その投稿、賛否、相反する評？が殺到するのではないかと考えたからである。だから、まず、私もハッキリとした線を出しておく必要を感じたのだ。このハントの評は、いわばマニアに提出されたテストのような物で△奇譚△△アブ△△SMプラス人間臭△△美△がどう受け取れたか——という一点にかかっている

察しられる。私が才能の乏しさをうらみながら、『耽美主義者の手記』をめんめんと書き続けてきたのは、少しでも無惨美を出そうとしたロマンが根底にあったからである。それが、このカメラ・ハントを見て、ドキリとさせられた。完全にシヤッポをぬがざるを得なかった。辻村さんは、きわめてリアルに、カメラとペンをもって蛇娘を捉えた。それはけれんのないオーソドックスなルポ形式でもある。私はその背後に、たしかに△無惨美△を意識した。というより、その無惨美に酔い、魂宙外にとぶうれしさだった。だれか知るこのむごたらしさに秘めるアブの香りよ。異常と美のむすび目は、子供のママゴトではない。大人の、それもマニアにとってのスリルだ。（枚数という点もあるので、ここでは、最も私が刺激された個処を少し列記抜す、寸言させて頂くことにとめる）

◆鼻孔深くで交叉した鎖を掛声と共に、右へ左へととき始めた。

口は一杯に開かれて、真紅の舌が、しどきにつれてハアハアと喘いでいる。（探郎言・真紅の舌という表現がこの際、特に印象的で生々しいものがあつた）

◆鼻責め愛好者なら垂涎もののこれは又何とも無惨な光景だろう。（探郎言・マニアと一般者との断絶した場——これをえぐる辻村さんの鋭筆はさすが）

◆撮っている私自身、余りにも非情、無惨なショーにともすれば嘔吐を催す程の凄烈さだ。（探郎言・凄烈という表現が、いっそうアブ感を刺激する）

◆あんな恰好をしてハタタリをきかしているが、根は善人なのだ

あと、私はこの世界で生きる彼等の偽悪者の姿を見た思いだった。（探郎言・この数行があつて、生きた哀愁とロマンを無惨な世界にほのかにただよわせる。）

『あしぶみ』

室井亜砂路画



貴女のメンズ・バンドにして下さい

—全国の皆さまからのお手紙をおまちします。

鬼 頭 莊 吉

後手に手錠（当方持参）をかけられ裸でころがされた私の頭の所へ椅子を持ってきて腰掛け、貴女の足（ハイヒールをはいていても結構）で私の顔を踏みつけられたり、足の裏に接吻、靴底接吻、更には泥をなめて取られ、踵を口

中や鼻の穴に入れられる。或はおみ足を口の中へグイグイ入れられ口が裂けそうにさえる。その濡れた足でペタペタと又愛撫して貰う。と、一転してその足で顔をふまれたり、けとばされたり貴女の気のすむまでいいようにされる。

「蒼ざめた夜」

室井亜砂路画



ヒイヒイ男泣きしますが、それは喜びの声なのです。浣腸はするのにもされるのも好きです。イルリガートルが一番です。しばらくは私です。貴女のお好きなポーズで浣腸して下さい。

更に鞭打たれたり、ローソクを所かまわずたらされる。絶叫してのたうち回るでしょう。貴女の犬となり豚となり忠実なドレイとなるのです。御希望でしたら貴女にも浣腸をして上げたい。然し排便是私の顔の上にまたがり、遠慮せず十二分に出して下さい。そしてそのまま私を暫く放置しておいて下さい。

私の好きな下着はブラジャー、コルセット、スリーインワン、パンティ、シュミーズ、黒のストッキング、ガーターベルト、メンズバンドで前開きのもの、海水着、T字帯式のメンズバンド等です。

女性の下着がほしい。新品や洗濯したものはいらない。よごれた汗ばんだ、穴のあいたもの等がよい。特にパンティやバンドはシミのついた不潔なものがほしい。貴女の肌にジカについたものなら、なんでも結構です。穴あきの靴下でべっとり脂足のあとのついたものがいいのです。

私の好きな女性の職業。アクロダンサー、ストリップパー、女子プロレスラー、猛獣の調教師、水商売の女、女学生、看護婦、スポーツの選手、バレリーナ、サーカスの女など。

女性の不具者の方、例えば顔にアザがあるとか、三ツ口、或は大火傷の跡が残っている、ビッコだとかセムシだといったような方。私はそのような方とプレーがしたい（私は五体健全十九貫、五尺三寸の男子）その時は先ず貴女の一番さわられたくない患部に、温かい接吻をくり返した後で、ゆっくりプレーに入りましょう。何も人にひけ目を感じることはないのです。私を利用し、やりたいことをやり満足するまで存分にたのしんで下さい。

私の肉体の凡てを差上げます。男性の隅々迄知って下さい。プレーの最初から終りまで私をしばたままでもかまいませんし、又見られるのが嫌でしたら、私に目かくしをするか、或は貴女のパンティでも顔にかぶせて下さい。女性のはずかしめられつつ責められないのです。ヒドければヒドい程うれしいのです。

HNK放送テレビ……………兵頭庫一……

太閤記「大願」 (北之庄天主閣の場)

去る十一月二十一日夜、かねて期待していたお市の方自害の場面が放送された。絶世の美女と語り伝えられているお市の方には、岸恵子が扮していたが、絶世とまではゆかなくとも、その切れ長の美しい眼を持つ彼女は、淋しくほえむと男を強く惹きつける魅力をも

具えた美女で、お市の方にはふさわしい女優といえる。その美女がどのような自害ぶりを見せてくれるかは、私のひそかに期待していたことだった。勿論、茶の間を対象としてのテレビだから、その上NHKのことだから、余り露骨な演技は見られないものと承知はし

処刑される奥女中

新井伸治



新井伸治

腹切腹月臨



ていた。

一寸珍らしく思ったのは、介錯人一人ずつを背にして勝家とお市の方とが、まるで内裏様のよう

無難作で普通なら膝の上に結び目をこしらえるのを、結ばずに膝に巻きつけた紐の端を左横に敷いただけに見えた。

仲良くならんで自害の座についてのことである。封建時代の男尊女卑の風習の中で、それがたとえ最期の場であっても、このように女性が男性とほぼ同格に取扱われたことには一寸奇異な感じがした。

お市の方は女の嗜みとして細紐で膝を縛るが、それがあまりにも

逆手に持つ頃には、前面から硝煙が登りだして、その後の動作は遺憾ながら煙の中に消えて見ることが出来なかった。例によって亢奮の動悸を感じだしていた私は期待外れに大魚を釣り逃がしたような口惜しさを味ったのである。

△サロン▽「夫婦のSMフォト」 小竹一浩



編集部の皆様、種々の制約に耐え、我々奇クファンを喜ばせて下さる日頃の御健斗に心から頭を下げます。

グラビヤ廃止後、色々な意見、希望があるようですが、全てに満足願うことなど不可能なのが当然でしょう。私などは最近「夫婦のSMフォト」と辻村氏の「SMカメラ・ハント」さえ載っていれば必ず買います。(といっても、

過去十二年間殆んど本屋では内容も見ずに買い続けてきました)が事実この二つが大きな比重を占めていることは、多くのファンも同感ではないでしょうか。

所が十二月号には「夫婦のSMフォト」が出ていないではありませんか。その上、新年号から編集方針も少しく変ると書かれていたで、その存続を願うあまり慌てて投稿する気になったのです。し

かし三冊にのぼる私達のアルバムを見直したのですが、その殆んどが所謂投稿不能なものであるのに吾ながら驚きました。

そこで数日前一本撮った中より同封の二葉を選んでみたのです。どうも辻村氏、塚本氏のと比べて余りにも拙劣なのでためらってしまふのですが、素人なのだし実存的ムードがあるからと自惚れて敢て送る次第です。今この便りを記している私の傍らには、妻が全裸で横たわっております。眼鏡型の乳枷をした上に麻縄で雁字搦目

にし股間縛りにしてあります。口中には先程まで穿いていたプレイ用の小さなパンティ(小生も手伝って汚したものを詰めこみ同封のフォトでごらんのような猿轡をはめています)が、今しきりに呻めき身悶えているのでペンをおき、待ちかねている責めをしてやろうと思います。

末筆ながら辻村、塚本両氏の活躍を願ひ、夫婦のSMフォト(日記風でもよい)の投稿がふえ存続するよう念じつつ、拙いペンをおきます。



短 信 往 来

東浦ひかる様へ

吉井幸男より

私の大好きな東浦ひかる様。以前、読者通信で呼びかけたことのある吉井です。

貴女が山代様の呼びかけに応じられたのを見て、大のファンである私も急いでペンをとりました。

貴女が奇巧に始めて登場されてから約三年位になりますね。確から三十八年の二月号か三月号かで貴女の緊縛姿態を拝見、素晴らしいボリウムに魅せられて以来私は貴女のファンになってしまいました。

その後暫らく奇巧から遠ざかっておりましたが、最近カムバックされたのを通信で読み、早速お便りを差し上げた次第です。

最近益々ふとられたとのこと、大変結構です。元来私は豊満な女性が好きで、奇巧では貴女や大塚様、古い人では伊吹真佐子様、遠藤百合子様などが好きです。一度貴女とお逢いして色々お話がしてみたい。縄で緊く縛られたら、どんな気持ちだったでしょう。貴女と膝つき合せてお話がして

みたいのです。その上で貴女が承知して下されば、プレイへと進んで行きたいと思えます。私はプレイの経験は皆無です。辻村様のようになまぐ縛れないでしょう。しかし、貴女の豊満な肢体を縛り、くすぐり、つねる、何と素晴らしいことでしょう。プレイの時は何処か豪華なホテルの一室でしてみたいと思います。

誠に自分勝手ですが私は大変忙しい身で正月より休みが取れませんが、一月四日午前十一時阪大O S劇場附近迄来て頂けませんか。目印は大阪地図、尚、私の特徴は身長一・五七米位眼鏡を掛け、濃緑の冬オーバーを着ています。又私である証拠に貴女のフォト数葉と三十年一月号、三十八年二月号の二冊を持参します。

何卒ファンである私の願いをお聞き入れ下さって是非お越し下さるようお願いいたします。若し貴女が来られない時は、短信往来か読者通信で貴女の御都合の良い日をお知らせ下さい。

赤畑修造様へ

須渾 朔より

昨9、11月号の赤畑修造様。御通信拝見、そして感激、何度も読ませて頂きました。感激のお礼の

通信をと思いながら何となく気恥しくのびのびとなり相済みません。肥体趣味を快よく表明下さり嬉しいです。新年号増田氏の御通信といいこのうした趣味の記事がたとえ片隅でも散見されだしたことも嬉しいことです。貴方様は素晴らしい奥様とプレイなさるそうで誠に羨しい限りです。

又超ボリウムの外人女性のお話楽しく読ませて頂きました。貴殿はFの他Sとお見うけます故M、コプの私のたわごとなど興味をお持ちにならぬかも知れませんが、お読み頂けますれば幸いです。とはいいますが、肥体女性へのS記事でも、又女斗美記事、特に名筆「花の女斗美たち」の小林さんなる女性の出現は次号を待ち遠しくさせますし、小妻様の画も堪能致して居ります。尤もかかる超ボリウム女性に対するM男



の画なら一層とは思いますが、之は私のせいたくのようなです。たとえ本文でなくとも9、11月号のような通信でも嬉しき限りです。といいますが、私に肥満女性への経験が乏しく、特に現状では空想領域で楽しむのみという情けない次第で、専ら未来の何時かに理想女性に再会出来るのを気長く待ち続けるしかないとはぞを固めるのやむなきに至っている位で、

私の告白等発表したくとも種がないこともあり。女性への経歴といえ、もう大分前、その際していた職業柄女性の美酒は楽に入手出来、気に入った女性にたまにめぐり会々と、こっそりそれをストリート、又は酒類、ココア、ハッカ等と混合しーそれでやっと心の安らぎを覚えたり、又は益々亢奮しやむなく本物の飲酒でまぎらしたりしました。もっとも職業上での入手故間接的な陶酔にしかすぎず、又すぐ飲みたいためにわざわざトイレへ行き口にした、又落ついて味わいために仕事を終えた後、夜アパート又は旅館でチビビやらねばならず、といった時間がたつにつれ味が落ちることもあり、カクテルにしてのが多く、これではもとより量も多くはない上、ストリートの素晴らしさにはやや遠かったのも、致し方ありません。これというのも性来Mの上、或る女性への失恋が重なり前述の如き行為を過去の何年か続けた次第です。彼女とは職業上何度か顔を合せ得た、年長の未亡人。ポリウムはやや肥満の程度ですが、気性、貫録共に今尚考えただけで半日も亢奮し続けさせる程の私の理想の女性でしたが、プロポーズを

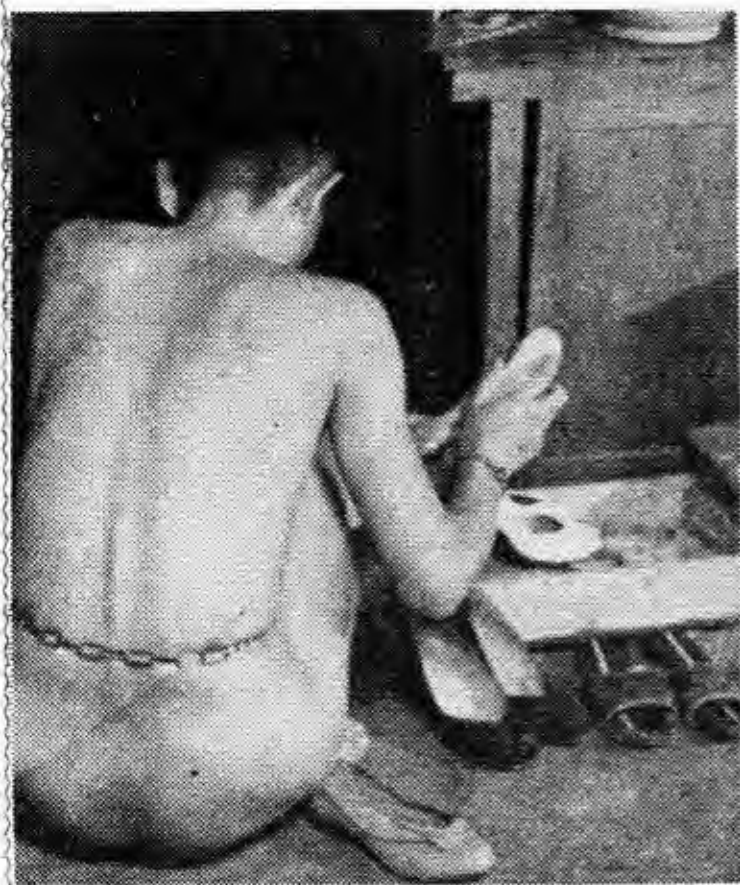
拒否され、以後相手にもされなかった悲哀と自尊心の損傷にもかかわらず、せめてもの代償にと、彼女の美酒の入った試験管を持ち帰り、秘かに毎晩毎晩数滴づつ味わい、全く腐敗するまで陶酔し、悲哀をまぎらそうとしたものです。特別その時彼女は棘皮動物を生きと仰山口にしたためか印象的な味で、その後それを食べた直後の方の美酒をもう一度と激しく慾情したこともあり。それまでよく酒をくみ交し、酔ったふりを

して色々M的モーションをかけたのですが、私など子供扱い、問題にもしてくれず、彼女の太腿の辺に顔を接せんとして叱られ、わざとメモを付けていて、鉛筆を落しでは机の下に入り股間の匂いにくっつき酔いしれたり、ともかく彼女は私には大変魅力的でしたが、威厳と気品と貫録があつて、気弱で惚れた弱味のあるうぶだった私などは、全く気押され、気恥しさに赤面するのみです。会えなくなつて後は、仕方なし

に例によって仕事でぶつかる女性のうち、少しでも類似点のある女性をたまに見つけた時の喜び、美酒は飲まずにはいられませんでした。はかない陶酔、飲酒。奇妙にもいつしか飲酒する気もなくなり、最初は一人飲酒しつつ彼女の力強く豊満なお尻で存分にふみ潰れるイメージを思い浮べて陶酔のために酒も美味だったのに、やがて酒そのものをいとうようになり、そのくせ彼女の肥満したイメージは永遠に去らないのです。



〔連作Mフォト〕



「御主人様の靴を磨くドレイ青年」 美柳輪生

映画通信

『東山映史』

最近の緊縛映画から——速報版——

エロダクションの独立映画のエロダクションのみならず、東宝や大映上映の作品にまで、緊縛シーンがふんだんにあらわれ愛好者を喜ばしている。

東宝で上映された近代映劇協会の新藤兼人監督作品「悪党」では乙羽信子扮する侍従が柱に緊縛されたり、後手に縛られて引き回しにあらう。新藤監督はサジスチックなシーンを好む。かつての新藤作品「縮図」でも、乙羽信子の芸者がやかたの主人のいうことをきかぬというので、ふとんむしにあたり、柱にがんじがらめに縛りつけられたりする。そこへ父親の宇野重吉が現われ、黙って連れて帰る。迫力のあるサジスチックなシーンだった。

今度の「悪党」でも、小沢栄太郎の高師直に岸田今日子の顔世御前をとりもつために、木村功の塩谷判官の館に行き、色よい返事を求めようとする。ついに怒った夫の塩谷判官は、乙羽信子を押さえつけ、後手にねじあげ柱に縛りつ

ける。少し肌ぬぎになり、ぎゅぐゅりと二重巻きで縛りつけられる。そして京の館から顔世を連れて逃げだすが、そのとき人質として後手に縛られて引きずられてゆく。逃げださないからと後手の縛りととかれるが、新藤監督と乙羽信子のいきがびったりあっていて、S・Mという関係のようだ。

大映の市川雷蔵の「新鞍馬天狗 五条坂の決斗」で、グラマの万里昌代が勤王のスパイという身分がばれ、山嶽党の私刑（リンチ）にあらう。後手に縛られガイコツの装束の同志の前に引きすえられ、極刑に処すべしという判決が下り首領に「女として最もはすかしいハダカにして、みなごろしにすべし」と宣告される。そして胸にまわされた縄をとかれ、着物をぬがされようとする時、鞍馬天狗が現われ救助するは定石通り。もう少し着物をぬがし、縛り上げる位の緊迫シーンを見せてはしかった。杉作少年が二度も三度も猿ぐっわ

をはめられ緊縛される。

東宝のアクション作品・国際秘密情報員シリーズ「鍵の鍵」で、浜善枝、若林映子の二人が三橋達也の秘密情報員とともに捕えられ、後手錠で椅子に緊縛され、蛇責めや電気責めにされる場面がある。これが中々真実味があり、谷口千吉監督の演出が熱っぽく秀逸だった。

また植木等の「大冒険」で、団令子が国際賈造紙幣団の越路吹雪に捕えられ、後手縛りで椅子に縛りつけられるが、はつきりと後手縛りを見せてくれたのは、うれしかった。

エロダクションの作品では、香取環の「赤いしごき」が「日本刑罰拷問史」にいずれ劣らぬ女優虐待映画、作品の三分の二が本縛縛りの晒シーン。その中には雨中の晒シーンもある。その間に回想で吊し責めや石抱き責めも出てくる。吊し責めでのたたきなどが弱かったが、「ヒイヒイ」いいながらの吊し責めは迫真力があつた。

山窩ものの「愛欲」で福井ゆき子の山窩娘が、逆エビ縛りを見せしてくれ、「情死」で牧和子が後手にねじあげられ縛られるシーンをを見せてくれた。

代理部だより

○本誌の旧号をほしいという新しい読者の方が多いのですが、発行所には最近のものしかないのです、若し不必要な分がありましたら、譲っていただけませんか。昭和二十六年頃から昭和三十年頃当時のもの欲しいそうです。

○本誌の在庫も昭和三十八年以前のもは全部売切れになってしまいました。臨時増刊号「花と蛇」特集号なんか、未だに注文して来られる方があるのですが、一覧表に載ったもの以外は在庫はしてないのです。△花と蛇△の再版の希望もあるのですが、ああいってグラビア写真集や口絵は、今の状況ではとても発行できませんのでどうしても、写真も口絵も挿絵もない単行本形式になると思うのです。そんなわけで企画をためらっております。

○限定版写真集の第七集、第八集以降、材料は取揃えているのですが、いろいろの都合で印刷がのびのびになっていきます。これは必ず作成しますから誌上での広告をお待ち願います。

〔読者習作〕

「磔」

H・K 生



あるマゾヒストの
望むマゾ・フォト

魔像風人

一、足なめ
椅子に腰かけた女王様の足を舌
でなめる男。女王様が立ったまま
奴隷の口中へ足指を押し込む。
二、人間椅子

正坐した男の肩の上に跨ってや
すむ女王様。四つ這いの男の肩の
上に足を組んで坐った女王様。
一、人間馬
四つ這いの男の口に手綱、首の
上に跨って乗る女王様。立ち上ろ
うとする奴隷の肩の上に跨って誇
らしげに微笑む女王様。
一、肩車
奴隷の肩の上に跨って立つよう
に命じている女王様。立ち上った

男の肩の上に乗っている女王様。

一、顔面騎乗

男の顔の上にぴったりとお尻を
据えた女王様。そのまま尻をゆす
って男の顔を踏み潰す女王様。

一、凌辱

男の口の中へ汚れたパンティを
足の指で押し込む女王様。口の中
へ唾を吐きすてる女王様。

一、人間便器

便器の上は男の顔をのせ、その
上は跨って、用便をしている女王
様。用便後の後始末を男の舌でさ
せている女王様。

一、浴室の奉仕

女王様の全身を洗わせられて
いる男。女王様の足をマッサージ
している奴隷。

一、如隸の宣誓

平伏した奴隷の頭を土足で踏み
つけている女王様。男の顔を両股
の間に挟み、口中へ唾や痰を吐き
掛けている女王様。

ハ女王様の小道具として、鞭、ハ
イヒール、紐、くさり、綱犬の首
輪、パンティなど。

以上のようなアイデアにてMフ
ォトを是非作成して下さい。Mモ
デルには私がなりますから、豊満
な肉体の持主で気品のある女性を
女性を女王様に選んで下さい。

○地方での本誌の入手難をかこつ
便りや代理部分譲品総目録或は既
刊号在庫一覧や内容一覧などのお
申込みがあとを絶ちません。しか
し残念ながら、目録とか内容紹介
のパンフレットといったものは一
切作成しておりません。発行部数
が少いので、残存している最近号
でも部数が次第に減少している状
態ですから、いずれ、極く最近の
ものの以外なることでしょう。
○分譲品の写真でも古いものは漸
次最近の新聞の広告からはずして
ゆくようにしております。もう十
年も以前の雑誌に載っている広告
で御注文される方がございますが
古い号からのお申込みは、一応在
庫の有無を御照会願います。
○御送金はなるべく現金書留か振
替をご利用頂ければ安全ですが、
切手にて代用される場合は、紙に
貼りつけたりバラバラに切りはな
したりしないでシートのままお送
り下さい。記念切手でしたら尚結
構に存じます。
○局留にて品物をお受取りになら
れる方は、未着のときは、一、三日
間をおいて再び局へお出向き下さ
るようにお願いします。尚、小包
のときは保管場所が違ふこともあ
りますので一応お確かめ下さい。

マニアの手帖

(池田 勝)

縛り方教室「女体デコレーション」

数年前の私の僅かな実験を前回で紹介したが、今回は三章として「女体デコレーション」を記してみたい。

一般に女性は華やかに飾る本能をもっている。その本能を満足させつつ、また男性である私も満足しようというのである。最近では衣服そのものの美もさることながら、中身の軀の美を強調しようとしてスカートを短くなっているのは見た目にも楽しいものである。が私のようなSには女性の軀そのものの美しさが最高と思う。

女体射的で記したあのプレイ当日、私が観賞した女体デコレーションプレイを紹介しよう。射的にすんだあと「美しかった、ほんとに美しかった」と思わず出た私の言葉に、彼女満更でもないらしく、初めのうちは恥かしがって思うように体を動かしてくれなかったのに「もうおしまい？」とのたもって衣類に手を出そうとしない。クリスマスも間近かなのは、白い体

は赤味を帯びてはてっている。

そこで断られるのを覚悟で持つて来たものを取出す。式のととき胸につける造花のリボン数個、ネックレス、蠟燭、紙テープ、セメダイン、口紅は借用。

一、両手をそろえて縛り、柱、天井近いところにねじこんだフックに爪先立がやっとな位に吊し上げる。足首もそろえて縛る。口紅で乳首と周囲の色づいているところを入念に厚目に塗る(勿論くすぐったがるが吊られているので除けられない)その上をセメダインをチューブから出しながら覆うように塗る。これはデコレーションの一つであると共に、紅が私のシャツなどに着かないため。またセメダインは対し刺戟があるので、口紅を塗っておけば傷つかないし、あとでとるときは紅がセメダインと共に一皮になってきれいにとれる。それでもセメダインが乾くときの収縮力で、責めになる痛みがあるようで、体をよじるようにし

て耐えている。

二、リボンについている安全ピンで、皮膚をつまんで引張って表面を薄く、一寸痛い瞬間的であるとめる。一寸痛い瞬間的であるし、皮膚には痛点と無痛点があるので、はじめ突いて見て成るべく痛くないところを差す。針はマツチの火で消毒すること。あとで外したとき針の先程の点が残るが全くわからないし、三、四日で無くなってしまったそうである。

このリボンの花を二つ三つ適当なところへつける。どこにしようかとあちこちしているときは芸術味を感じる。軀と接したのはこの花と紅で、ネックレスで胸元を



飾り、紙テープを手先から胸、腰、足と飾れば出来上り。

つけるときは目かくしをしておき、出来上ってから、鏡に写る我が姿をみて「イヤダ」と云いながらも「美しい、美しい」を連発すると流し目でにらむ女心ではある。美しさの前には手首、足首、ピンの痛さも我慢出来るものらしい。

そのまま十分に観賞して、時にはくすぐって動かしてみたりして、時余のあと手と足の縄を解放する。

三、外した軀を次はそのまま机の上に仰向けに寝させ、手足の大字に開いて机の脚にしっかりくくりつける。または後手縛り、足



首縛りで正座から後に倒して腕膝から縄で机の脚に引張って背中に折った座布団、枕を当てる逆海老に腹の皮を一杯に張らせる。

蠟燭は三、五センチの長さのものを五、六本火をつけて、溶けた蠟を垂らして上から火を近づけると溶けた蠟が広がるから、素早く蠟燭を立てる。作品すべてを照らせるよう胸、腹、ものの上に立てる。まさに生きたクリスマスケーキであり、光と色の芸術である。ただし、あの部屋には手鏡が無かったので、彼女にはわが姿を正面から見せられず、わずかに顔を上げて横から、短くなる蠟燭の火を心配げに眺めるだけであつた。

蠟燭が短くなるまでに数十分も要したであろうか、彼女が熱さを訴え始め、蠟がはげしく流れ、三、四耗を残すのみとなったものか

ら、一本一本消していく。最後の一本を消してデコレーションケーキプレイは終る。別れ際、ネックレスと何がしかを差出したところ互の趣味だからと金子は固く辞して受けず、ではとネックレスを首にかけて贈呈した。

以上が十一月サロンで書いた通り、約二年前私が実験出来た、ただ一度の想い出深い新宿の一夜である。いつの日かまたM女性に回りが、願いたいものだと思つて腕を撫でるが、願い叶えばまた構想を実験してから発表しようと思う。

なお新年号の「縄の結び方」で本文「二結」は別もので、図の「二結」であるから訂正させていたたく。デコレーションの写真は「射的」で発表したほどよく写らなかったもので展示出来ないのが残念である。ご想像におまかせしたい。

「ボクの責め方」

宝塚二三夫



ボクの撮った写真は、すべて若い女の足を中心に狙いをつけたものばかりである。この二葉も、ボクの好きなものの一つである。軽い緊縛によって、足をさらげだした軽い羞らいにボクは絶大な魅力を感じる。



感想

最近の奇ク

津治良一

新年号を期待をもって読んだが昭和四十年も多難な年になりそうだというのが正直な感想だった。最近の不振はどうしてなのか、グラビヤ写真や口絵の廃止など、枝葉末節のことなのだ。それが最近、低調の原因などではない。肝心なのは本文の内容だ。内容がコマ切れすぎる。短い随筆や評論などを、ちよこちよこ載せられても面白くない。先月号の感想などといい、つまらぬ文章、しかも、 unnecessary なものを載せるなど、この雑誌が狭い愛好者の間の同人雑誌であると言われるのも当然だ。芳野眉美と夜乃探郎とのや

りとりなど、二人があって話せばよいのだ。なにも、この誌面に載せるまでもあるまい。

ここで編集部に言っておきたいのは、この雑誌がどんな人に読まれるかということだ。彼らは殆んど、サディストでもマゾヒストでもない。ましてやSM行為などしない普通の人間だ。SMのこみいった専門的なことなどに、ほんとうに興味を持つことなど恐らくあるまい。娯楽雑誌や週刊紙を読むように、奇クを読んで心のウサを晴らしたいだけなのだ。そして、サディストにもマゾヒストにもなりたくはないのだ。SMについての細かい評論や考証などは、実際にそれらの行為にひたっている人間には面白いだろうが、普通の人には、そうでない。そういうものが多く載せられていくというところが、同人雑誌的であるとの悪評を受ける根本原因なのだ。現在のところ、奇クは八花と蛇Vで保っているといっている。それも一月号では、ほんの少しだけ。話の進行も遅く、これでは雑誌の延命策として、話をひきのばしているのかと疑いたくもなってくる。そんな疑いが起るというのも、他の内容がお粗末だからだ。

編集部は読者のことを、もっと考えるべきだ。社会の目に気をとられすぎ、読者を忘れてしまったのではないか。ひとは奇クを娯楽雑誌として読むのだ。SMの啓蒙雑誌として読むのではない。このことを忘れないでほしい。でなければ、いまに廃刊する恐れ、なきにしもあらずだ。

奇クを想う

オールド・ファン

一月号に「泥沼に落ち込んだ奇ク」という宗像俊彦氏の感想があり、私はこれに深く共鳴するとともに、こういう文章を敢えて掲載した編集部の良識に一抹の希望を抱いた。

実際のところ私のような古い読者には最近の奇クは読むに耐えずむしろ同種風俗雑誌の方が充実している場合が残念ながら屢々であって、もう毎月購読するのさえやめてしまおうかと思っていた矢先であった。しかし宗像氏のような率直な意見が掲載されるところからみると改善の余地もあるのではないか？

宗像氏の言われる通り、夜乃探郎、木戸川健両氏のような浅薄な

教養をひけらかした同人雑誌的文章は読みたくもない。しかし、宗像氏の批評はまだ寛容に過ぎるのであって、私の見る処その他二、三の常連執筆者の文章もまた大同小異である。この人達の論争？等というものは、よくいつて狎れ合い、悪くいえば八百長、更に推理を逞ましくすれば此処に書くことさえ憚る一種の策謀さえ感じさせる態のものである。

それもいいだろう。問題はこれら一握りのペンネームを持った人達の文章には、かつて奇クを飾った鬼山絢策氏、沼正三氏等の文章に脈打っていた迫力と苦悩、敢えて言えば、その栄光と悲惨とがミリグラム程も感じられないことである。そうして、こういうフヌケタ者達に奇クを占領され、私物化されていることにこそ問題がある。

奇クは、その輝やかしい歴史を自ら放棄し、オチャラけた漫才雑誌と化して生き続けることに甘んずるのか？ 編集部の良識を肯定しながらも、私はいま一步突込んで今後の編集方針を全読者とともに問いたいと思う。奇クは私達の苦悩のオアシスであることをやるのかどうか？

奇譚クラブ

昭和41年2月号

(1966年・2月号 <第20巻第2号・通刊211号>)



本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビア写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



のおと・あと・らんだむ

千 草 忠 夫

昨今の『奇譚クラブ』は、まさに文字通り

の百家争鳴、まことにかしましい。私もそれに浮かれて何か書きたくなって来た。つまらない内容かも知れぬが、枯木も山のにぎわいと御寛容ありたい。

さいわい私の説に反対をとええる人が簇出すれば、これに過ぎるしあわせはない。

一、奇譚クラブは悪書である

『奇譚クラブ』とは可成り長いつきあいである。最近二百号を突破したそうだが、おそらく、その中の百五十冊ぐらいには眼を通してゐるだろう。

その百五十冊にもわたる『奇ク』に接して私はかつて一度も『奇ク』が良書であると思

ったことはない。

はじめて『奇ク』を店頭で手に取ったとき（多分二十才頃だったと思う）正直言つて、私は「これはとんでもない悪書が出たぞ」と思わず、その手を引っこめ、心臓が異常な脈搏を打つのか感じたものだ。その後三日間ほどというもの、私は、その書店の前を通るとき、とても平静ではいらなかった。

それから幾星霜。『奇ク』は良識ある人のヒンシュクを尻眼に、大衆の好奇心に投じ、隆盛の一途をたどつて来た。勿論、ときには調子に乗り過ぎて発禁の憂き眼を見たり、ふくれるだけふくれ上がったその絶頂期に一大鉄槌をこうむつて、いわゆる「白表紙時代」と称されたこともあった。

しかし、『奇譚クラブ』は不死鳥のように根強く生き残つて来た。

私はこの事実を見ると、世の中の悪の、悪書の強じんな生命力に舌を巻かざるを得ない。社会に潜在する悪徳愛好者の数の多きに驚かざるを得ない。

この事態を、かねてから青少年の保護育成に肝胆を砕いている諸団体が見過すわけはなく、遂に、醇風美俗を害する悪書として公式に烙印を押され、追放されることになったのである。これはむしろおそきに失する位で、当然の成りゆきといわねばならない。国家政府は常に国民を正道から踏み外さないよう指導し、国民の進むべき大道を示す責務を負うているからである。

ところで、『奇ク』の悪書たるを最初の一
べつで感知した私の鋭敏な感受性は、この十
五年間に、どのような変貌を強いられたであ
ろうか。これを語ることは、『奇ク』の悪書
であるゆえんを最も端的に表すことになるだ
ろう。

その当時すでに成人に達していたとはいえ
まだ満足な性体験のなかった私にとって、性
というものは全くの未知数だった。そして、
未知数なるが故に私の感覚は、餌を求めて触
手を伸ばすアメーバーのように、性のにおい
を求めてヒリついていったのだ。

『奇ク』はまさに、そのアメーバーに投げ与
えられた分厚いビフテキのようなものであっ
た。私の処女のような感覚はビフテキによっ
て汚しつくされ、それを餌として体内に吸収
する代りに、ビフテキの中に吸収され尽して
しまった。

顕微鏡的だった存在は今やグロテスクなビ
フテキ的存在に膨脹し拡散し、過度の養分は
ゲップの頻発だけでは、とうてい間に合わない
状態に立ちいたった。

つまらない比喻は、ここらあたりで止める
ことにして、真面目な所を要約すれば、私の
汚れを知らない感覚は、正常な、人の道にか

なった性のあり方を知るより前に、沼の瘴気
にも似た異常の世界に引きずり込まれてしま
ったのである。

私の前には、無限の多様性を持った妖しい
世界があった。そして、私は青年の持つあの
旺盛な好奇心をもって、どんらんとその世界
が提示するものを吸収していった。

吸収したと思ったのは実は大きな間違いで
こちらがその世界にからめ取られてしまった
のだということに気付いたのは、それからか
なり後のことであった。感覚の導くままに拡
散するだけ拡散しつくして、実体を失なって
しまった人間がそこにあった。

私は今でも、当時見た、ある映画を思い出
す。原爆の放射能を受けた男が巨大なアメー
バー状の存在に変形してしまい、餌を求めて
あるときはタコのように、あるときはイソギ
ンチャクのように触手を伸ばし、グロテスク
にその姿を変じてゆくシーンである。

私はその姿の中に、崩壊した私自身の倫理
観を見た。

このような倫理観の崩壊、ひいては人間性
の解体をもたらすものが『悪』でなくて何で
あろうか。『期待される人間像』を高くかか
げる当局が黙過するにしのびないのは当然で

ある。

さて、こうして『奇ク』は、悪書と公認さ
れ、かく言う私も以上の結論から悪書と断定
した。これではこの論文が『奇ク』に載る筈
がない。ボツになるにきまっている。

それでは困るのだ。悪を善と言いくるめる
便法はないものか——と頭をヒネって見たら
あった。『奇ク』は悪書ではあるが良書であ
る。という結論を出す方法が見つかった。そ
れを以下に述べる。

当局が悪書という場合の『悪』は、『期待
される人間像』を形成するのに有害な影響を
与えるという立場からする判断である。即ち
一連の倫理規定に合致しない行為を『悪』と
呼ぶのである。

だから、時の支配者にとって、何者にも拘
束されない自由な人間のエネルギーの発露は
常に『悪』と規定されて来た。新しい真理の
啓示は、常に『公衆をまどわすもの』として
拒否されて来た。イエスは十字架にかけられ
ガリレオは盲目の身を宗教裁判の法廷に引き
出されて『地動説』の撤回を強要され、サド
は一生を獄につながれた上に、その著書は世
上から抹殺された。身近かな所では、戦前マ
ルクスは最大の悪書と見なされていたのでは

なかったか。

「よらしめよ、知らしむべからず」

これがいつの時代にあっても、権力の座にある者の座右の銘なのである。

さて、それでは『奇ク』はバイブルに次ぐ良書か、というところ簡単にウンと言うわけにはゆかない。それでは、色を好む者は英雄という論法と軌を一にすることになる。

ここにエロチシズムを取扱う書物の二重の困難がある。エロチシズムが人間性に関するほとんど唯一の未開拓の分野だからである。

『奇ク』は国家権力による統制と、個人の意識に根強く残っている、性には触れるべきではないとする『良識』と、この両者に戦いをいとまねばならないのだ。

かつて私は『奇ク』に「奇ク私見」と題した論文を発表して袋だたきにあつたおぼえがある。その第一の原因はエロチシズムというものに対する見解の相違から来ているように思われた。『奇ク』の読者にして、なおこのような有様だから、世間一般の考えは推して知るべしであろう。

ことほどさようにエロチシズムには誤解が入り込みやすい。(もっとも、わざと誤解しようとしている輩もあるが)そして、この誤

解を解こうとする努力は、徒勞に帰するのが常である。

そこで、必要なのは、そのような無駄な努力よりも、誤解をおそれない態度の確立ではないかと私は思う。悪書を良書に変ずるモメントは、ここにある。

先に私は、『奇ク』によって人間性が崩壊した。と書いたが、あれは誇張でも何でもない。ただし、あれには続きがある。

人間性が崩れ去ったとして、ただ『奇ク』を恨み悲しむだけの者にとつては、『奇ク』は遂に悪書で終ってしまうであろう。だが、人間性の崩壊を、新しい、より視野の広いより逞ましく自由な人間性の確立へのスプリングボードに転化させようと決意した者にとつては、『奇ク』は良書と変る。アメンバーは、その体のグロテスクさをなげくことを止めて、その自由さを楽しむようになるであろう。

『奇ク』は善でもなく悪でもなく存在する。支配者はこれを『悪』と見る。これを『善』に転化するのには、それを読む者の主体性の問題である。ゴミ箱をあさる野良犬であることを止めて、飢えた虎になることである。

二、「花と蛇」一つの

ユートピア小説

奇譚クラブの代価三百円のうち、二百九十円までは『花と蛇』のために支払っているというのが、私のいつわらない気持ちである。正篇続編あわせて何十回かになる『花と蛇』の各回ごとに、私は作者に感謝し、更に一回でも長く続かんことを祈り、感謝しつつ再読三読して来た。

ところが、ウカツにも、私はこれまで、この作品が読物か小説か考えて見たことが一度もなかった。それで、九月号で夜乃探郎氏がこの問題を持ち出されたのを読んで、いささかショックを感じた。更に十一月号で久我庄一氏がこの問題を受けて立たれて、文学的悪讚美論を堂々と展開されたのを読んで、ショックは痼疾となった。私も何かしゃべりたくなつた。

先ず、夜乃探郎氏の提出された『読物か小説か』という問題にいたって考えて見よう。はっきり言ってしまうと、この問題は無意味である。なぜなら、この問題がつきつめられて行った場合、必ず起ってくることは、読物とは何か。小説とは何かという論議であり

それについて論議が沸騰している間に『花と蛇』は鍋の外にこぼれ落ちてしまっているだろうからである。

おそらく夜乃氏は芳野氏の言葉にカッとなつて、こんな挑戦状を突きつけられたのだろうと推察するが、芳野氏の発言は、さほど軽くじら立てるような性質のものではなく、軽く聞き流しておくべき性質のものではなかったかと思う。私が『花と蛇』以外の作品をほとんど読まないのと同じように、芳野氏も、その好みから『花と蛇』は大したものではないと考えられたに過ぎないのであろう。

芳野氏の頭の中には、多分読物とは小説よりも劣ったもの、単に読者の好奇心をくすぐるだけの御都合主義に満ちた作り話、という漠然とした観念があったのではあるまいか。「読物か小説か」を論ずる場合には、先ずそこからあたりをハッキリさせてかかる必要がある。しかし、私はそんな事に興味はない。『花と蛇』が読物であろうと小説であろうと、いっこうにかまわない。とにかく面白いのである。好きなのである。

およそ、SMの世界ほど『好み』のやかましい所はないのではあるまいか。SMに限らず、マニヤの世界というのは、どこでもそう

なのかも知れないが、『奇巧』に登場する人は、すべてこれ一國一城の主ばかりである。サド、マゾと簡単に片付けてしまいうわけにはいかない。早い話が、女を縛るだけでも応接にいとまのない程多くの『好み』がある。ヌードか着衣か、パンティか湯文字か、ロープか藁縄か、鎖か革紐か、等々。更に生首、切腹、浣腸に自殺まである。

このような世界に厳正公平な批評が確立できようとは、とうてい思えない。せいぜい。自分の好みをあげつらつて、やにさがるのがいい所ではなからうか？

さて、私が『花と蛇』を、こよなく愛読するのは、それが私の好みにピッタリ合っているからに外ならない。好きなSMの世界で、『花と蛇』スタイルのものが最も私の好みに合っているのである。

そのスタイルというのは、一口で言えば、凌辱による女の実存の開示である。とりました美女（それは必ず、財閥の令夫人とか、ミス××とか、女学校の優等生とか、衆にすぐれた存在でなくてはならない）、一皮めくればタダの女にすぎない、雄の暴力に甘んずる雌にすぎない、ということの確証を示すことである。

このスタイルを実現する手段として、いわゆる羞恥責めと総称されるものの、さまざまなバリエーションが登場する。団氏の筆が最も冴えるのは、ここに於てであり、私が熱狂するのもこの点に外ならない。

おそらく、羞恥責めこそ、このスタイルを実現する最も有効な手段であろう。何故なら羞恥とは、他人の眼差しによる自己の屈辱を示すものに外ならないからである。そして、常に受動的態度で生きている女性には、他人の眼差しには最も敏感なのである。

以上述べたことに対する例証は『花と蛇』の愛読者には不要であろう。試みに、最近号で眼についた著しい例を二つあげるにとどめる。

静子夫人は、千代によって遠山令夫人の地位を追われた筈なのに、相変らず『奥さん』であり『令夫人』であるのは、このシンボルがなければ、この女を責める動機が消滅してしまうからだ。

第十回の百八十頁に、こんな一節がある。「数々のひどい責めにあいながらも、そうした初々しい羞恥を忘れぬ美津子を竹田や堀川は頼もしげに見つめているのだ」

女に羞恥がなくなれば、これまた責める動

機は消滅する。

さて、このように作者好みのスタイルと方法を盛った『花と蛇』は、あまりにも作者の好みと密着しているが故に、『読物である』と軽蔑的に言われることになってしまった。

そこには、何かを追求する厳しさが欠けている。小説の本質ともいうべき構成、それを支えるリアリズムが無視されている。読者からアイデアをつくるなどとは（『鬼六談義』参照）言語道断である——と、おそらく芳野氏はおっしゃりたかったのであろう。

確かに、それは、もっともの事である。生活に密着した、現代的SM小説を求められる方は、そう考えられるのが当然であろう。私もそう思う。

しかし、私は芳野氏のような立場から、この作品を見たくないのだ。かといって夜乃氏のように「羞恥文学」（又は『心理小説』）とも思わない。ましてや、久我氏のように、『悪の追求』とは考えたくない。

私は『花と蛇』が発表された舞台『奇ク』がマニヤ誌である事を先ず念頭に置きたいと思う。（余談になるが『奇ク』がマニヤ誌か同人誌かという議論があるらしいが、この議論も無意味である。なぜなら、『奇ク』に於

ては、マニヤ即同人だからである）

マニヤ誌に於ては、各人、好みのテーマに熱をあげることができる。これを評価する基準は、好悪、上手下手、という以外にはありようがない。

団氏はおそらく、それを承知の上で、徹底的に自分の好みに遊んでおられるのではあるまいか。『奇ク』は一般世間と隔絶した別世界であり、そこに一つのユートピアを建設しようとしておられるのではなからうか。アイデア募集ということも、このユートピアを一人でも多くの人に開放しようとする努力のあらわれと見れば、容易にうなづける事なのである。

このユートピアは、そこに登場するヒーローやヒロインたちにとってユートピアなのではない。読者、そして作者のユートピアなのである。作者は他人を顧慮することなく孜孜として自分の好む世界の構築にいそしみ、それと好みを同じくする読者は嬉嬉として、そこに遊ぶことができる。このユートピアを好まぬものは去るにまかせておけばよい。

いったい、SMの世界で自分の好みに徹しようと思えば、それはユートピア小説とならざるを得ないのではなからうか。これはSM

が現世では『異端』であり、その世界に耽溺しうる可能性は皆無に近く、サジスト、マゾヒスト等を自任している者も、多くは空想によって自己の欲求を開放する以外に道を持たないからであらう。この事は、世間の指弾が激しくなった時期に、この形式の小説が多く現れることによって立証される。

白表紙以前の『奇ク』には、この種の小説はほとんど見られず、現実的なもの、告白的なものが多かったのに、白表紙以後になるとガゼンこれが多くなる。『家畜人ヤプー』『壊滅の前夜』『魔教圏No.8』『影の国』『宇宙のどこかで』等々枚挙にいとまがない。そして『花と蛇』はユートピア小説でありながら、現実性を失わないだけの筆者の巧妙なプロットの設定と、すぐれた描写力によって、この種小説の最高条件となり得たのである。（蛇足ながら、こちら辺でことわっておくがここで用いた『小説』という言葉は、『読物か小説か』という論争に関係のない一般用語として使っている）

団氏は『花と蛇』の導入部で巧みに一般世間との絆を断ち切って、それ以後全くそれと隔絶された世界内の描写に全力を注いでおられるのは、この作品がユートピア小説である

事の有力な証左となるであろう。(団氏自身は、こんなに長く書くつもりではなかったと言っておられるが、これはこの種の小説が長篇となる為には、必要的にユートピア小説とならざるを得ないことを示していると思われる)

このように一般世間と断絶したユートピア

においては、悪はもはや、その意味を持たない。なぜなら、悪は一般世間の倫理との対立関係において、はじめて追求される問題だからである。悪は、このユートピアにおいては倫理的なものよりも審美的観点から評価される。言いかえれば、『花』をひきたてる為の『蛇』的な存在でしかなくなる。対立は当初

から意図されていないのである。以上、夜乃氏の提出された問題に、私なりの反論を示し間接的には久我氏の所論を評し、あわせて、私が『花と蛇』を愛する理由を理論づけて見た。おそらく八方破れの論となっていると思う。反論を手ぐすねひいて待っています。

〔浣腸フォト新版〕

△山原清子が無類の浣腸マニア東浦ひかるに施す力作浣腸写真▽

○浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(かね)

○百CCの溶液注入

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(かと)

○グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(かて)

○シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(かた)

○イルリガートル

嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(かち)

○アースス浣腸帮助

大手札四枚一組 七〇〇円 略号(かの)

○イルリガートルの浣腸

大手札十枚一組 一五〇〇円 略号(かも)

○オシメを着用させる

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(むし)

○ゴム製カバー着用

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(むに)

〔女相撲と女斗美写真〕

△湖畔女相撲(第一回)▽

モデル 大塚啓子、東浦ひかる

〔第一組〕 略号(すや)
大手札印画紙焼付
二十枚一組 二五〇〇円

〔第二組〕 略号(すゆ)
大手札印画紙焼付
二十枚一組 二五〇〇円

〔第三組〕 略号(すよ)
大手札印画紙焼付
二十枚一組 二五〇〇円

△女斗美場面写真▽

〔砂浜での格闘〕

大手札十二枚一組 一〇〇〇円 略号(すえ)

〔叢で止めをさす〕

大手札十二枚一組 一〇〇〇円 略号(すう)

〔松林の中での死斗〕

大手札十二枚一組 一〇〇〇円 略号(すき)

〔責めフォト新版〕

○全裸強烈縛り

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なの)

○猿ぐつわにあえぐ

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なむ)

○真紅の腰巻をする

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なれ)

○膨大な臀部責め

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なに)

ポケット・ブックに発見した

M的小説クライマックスの紹介

河津安春

「波瀾の一年」ファビアン文庫

これは、ステイヴという青年の女性遍歴の記録だが、こんなに多くのS女性が登場するのは、ちょっと珍らしいので、少し詳しく書いて見たい。

1、メリイ エレン

メリイは上流階級の娘で、ステイヴは彼女の両親に学資を出してもらい、彼女の学友としてカレッジに通学する。メリイはガイという大学生と婚約しているが、彼が大学を卒業するまで、結婚は待たなければならぬ。ある夜、メリイはステイヴを庭に誘い出し、櫥の下で最初の関係を持つ。

○ 「ステイヴ、貴方、私が好きなんですしょう。

私よく知っているわ。でも私はガイと結婚することになってるの。二年さきにね。二年って、随分永いと思わない。私には辛抱出来そうもないわ。ステイヴ、それでね。もし、貴方さえよければ、ガイには何の後ろめたいこともなく、二人でお互いに楽しむ方法があるんだけど……。厭だったら構わないのよ。二人は今迄通りの友達でいれば、いいんだから」

エレン、貴女は、俺が貴女に首ったけ惚れこんでいるのを、承知の上で、貴女のいうことなら、どんなことでも俺がするのを、承知の上で、あんなことをいったんだ。その証拠に貴女は俺の返事を待とうともしないで、いきなり俺の頭を両手で持って、引下げようとしたではないか。貴女がスカートを少し引き上げ、綺麗な足を上に挙げた時、下着をして

いないのが判った。予定の計画だったんだ。首ったけ惚れこんだ馬鹿な俺は、貴女を押し退けるどころか、まるで砂漠でオアシスを見付けた旅人か、飢え疲れて葡萄園に迷いこんだ乞食のように、貴女を貪り吸った。俺の肉体には何の快楽もない。俺を興奮させたのは貴女の喜びの呻きと、夢中で喋っている貴女の言葉だった。それは俺の頭の遥か上から、ネクターのように降り注いで来る。

「アア、夜は美しいわ。何もかも、皆美しく見えるわ。ステイヴ、私も綺麗に見える？アア、ステイヴ、貴方は私を夜のように美しくしてくれるのね。私を女神にしてくれるのね。夜の女神に……。貴方は私を崇め、奉仕している。もっと奉仕を、もっと……。アア星が落ちてくる。露が降ってくる。私は空へ舞い上る。アア、止めて、否、止めないで。



△波爛の一年▽

そう。そうよ。サア、天国へ連れて行って頂戴。もっと優しく、ゆっくりと……。アア、また、地上に戻ったのね。こんな気持ち、始めてよ、ステイヴ。もう一度、天国へ連れてってね。サア、ゆっくりと、ゆっくりと広い夜空へ連れて行って……。アア、星が落ちてくる。私は美しい女王様、星も露も、夜の世界が皆、落ちてくる。私の足許に跪き、私の美しさを崇めている。アア上って行くわ、高く、高く、速く、速く……。アア、目眩いがるようだわ。まるでお酒に酔ったみたい。露が降ってくるわ。こんなに良い気持ち、始めてだわ。もっと速く。オウ、星が廻り始め

たわ。流れ星が近づいてくる。なんて熱いんでしよう。私も熱くなってきたわ。とても熱いわ。燃えてしまいたいそうだわ。星よ廻れ、星よ落ちよ。アア、私は空に漂っている……。お止め、ステイヴ。しばらく、このままじっとしてきたいの。お止めたら。そっとして。ステイヴ、もう、いいわ。あっちへ行って」

馬鹿な俺は、引き退って、彼女が呼ぶまで待っている。いつかは、俺も彼女と一緒に、空高く舞い上る日が来ることを期待して。その期待はついに実現されることはなかったがそれでも、彼女が呼べば俺は飛んで行った。

「いらっしやい、ステイヴ。サア、私の熱情を解放して頂戴。だけど貴方の熱情は、解けないよう、しっかり縛っておいてね」

エレン、貴女は俺にこう命じているのだ。しかも貴女は、私に奉仕させながら、婚約指環を指の内側に廻して、私の後頭部にしっかりと押し付けていたので、ギザギザした金属は皮膚を破り血を滲ませた。俺は厭でも、貴女の婚約者のことを、思い出さなければならなかった。

○
二人のこの関係は、エレンの結婚後も、密かに続けられた。違うことは、婚約指環が結婚指環になり、後頭部に痛む線が一本増しただけだった。エレンは間もなく急逝する。そしてステイヴは、他の女に対して、自分が不能者になっていることを発見して驚愕する。それから彼の女性遍歴が始まる。

2、ジーン

街はずれで、スナックバーを経営している三人姉妹の次姉である。ステイヴは、このバーの内部塗装を引き受ける。

○

俺が天井に刷毛を動かしていると、カウンターに寄りかかって、ジーンと俺を見ている娘がいた。姉のボビには最初に逢ったし、妹のフィリスは、さっき出かけたから、きつと二番目のジーンに違いない。凄く短いショートと、安物のブラウスを着ていたが、恐ろしくセクシイな女だ。どう見ても、ヒップは少し広過ぎるし、バストはまた突き出し過ぎるし、太股はまる過ぎる。だけど凄い娘だ。俺は仕事を投げ出して梯子を下りた。カウンタ―で、冷たいジンジャエールにウイスキーを

注いでいると、娘は手に持っていた酢漬けの胡瓜を、俺の口に押し付けて

「一口噛まない？」

といった。俺が口を開くと、グイと押しこんだので、一寸余りも噛み切って、俺は酸っぱい顔をした。娘も少し酔っていて、何時か二人は手を取り合って、外へ出た。俺が壁に寄りかかると、娘は俺の顎の下に手をやると指で俺の頬っぱたをギュッと挟んで、俺の口を開かせ、猛烈なキッスをした。熱くて、強くて、恐ろしくアクティヴなキッスだ。それから俺を裏のトラックの上に引き上げた。外から見えないように、向い合って腰を下ろすと、娘は俺のポケットから煙草を取り出し、俺に火をつけさせた。娘はフーッと煙を俺の顔に吹きつけると、片手でブラウスのボタンを外した。下には何も着ていない。見事に突き出した乳房に見惚れていると、また、俺の顎の下に手を入れて頬っぱたを挟み、グッと引っ張って乳房に押しつけた。俺は飢えた犬のように吸い着いた。今度は空いた手で、シヨーツのジッパーを引き下げ、俺の顔をそこへ引き寄せようとした。俺は周章して、娘の手を振り離れた。

「そいつあ、出来ないよ」

「出来るわよ……」

娘は荒々しくいった。

「ねえ、怖がらなくてもいいのよ。誰も見ていないし、それにあんた、こうするのが好きなんじゃない？」

彼女の口調は自信に満ちていた。そして片手を伸ばすと、俺の頭髪をグッと握って、力一杯、引っ張ったので、俺は前にのめりそうになった。

「暴れないで！ いいこと、あんたが、こんなことを好きになるように教えてあげるのよ。ホラッ」

娘はいきなり、俺の首筋に火のついた煙草を押しつけた。俺は飛び上って、もがいたが頭髪を握って引っ張られているし、煙草を持った手は、俺の後頭部をグッと押さえているし、俺は窮屈な恰好で、ただもぐだけだった。火の粉がバラバラ俺の膝の上に落ちて来た。

「サア、手向いしないで始めるのよ。お始めたらッ」

後刻、ジーンは俺にいった。

「あんた、あの気があると、見たんだけどね。でもいいわ。もし、ああして欲しくなったら、何時でもおいでよ。相手をしてあげる

から」

俺は末妹のフィリスから、ジーンについて色々話を聞いた。

「ジーンと私は、家で使っていた黒人農奴の子供のロニイと一緒に育ったの。ロニイは黒人にしては、色も浅く、顔立ちも悪くなかった。ジーンは私やロニイより、二つ年上だったから、毎時もボス気取りで威張っていたわ。ジーンがロニイを虐待していると気付いたのは、私が十才、ジーンが十二才の時だった。裏の空地に電話器の発電器が捨ててあったの。古いけれど、ハンドルを力一杯廻すと誰もさわれない程の電流が発生したわ。ジーンは、これを使って電気椅子ごっこをしようといいだした。犯罪者は勿論、ロニイ。納家に発電器を持ち込み、ロニイを椅子に縛りつけると、ジーンは二本の電線を、ロニイの足に注意深く巻きつけたの。死刑執行人はジーンで、ハンドルを持つと、凄い力で廻し始めたの。ロニイの縛られた身体が、ガクンと飛び上り、拳を固く握りしめ、足の筋肉がブルブルンと震え、首は右、左に振られ、歯はガクガクいていたわ。でも、ジーンは止めないの。自分の腕が疲れて動かなくなるまで続けたの。電流が止まると、ロニイは口を一

杯開いて、大声で泣き出したわ。あんなに大きな声で泣くロニイを見たのは、後にも先にもあの時だけ。私は恐ろしくなって、ロニイの縄を解こうとしたら、ジーンは私を突きつけて『表で遊んどいて』といったの。一時間余りして、もう終っただろうと思って、納家へ行ったら、中から錠が下りているの。ロニイの泣声は聞えなかったけれど、ハンドルを廻す音が、未だ聞こえたわ。夕食がすむと、ジーンはまた、納家へ出かけたの。私に見えないように、何か持っていたけど、私は知っていたわ。それは姉のボビが大事にしている写真なの。ボビがストリッパーをしていた頃の写真で、男が跪いて、ボビに奉仕しているの。

その翌る日から、ジーンは余りロニイに、構わなくなったの。父がジーンに何か用事をいい付けると、彼女が何もいわなくても、ロニイがチャンと片付けてしまうの。ジーンが何かをボビにさせようと思うと、その顔を見ただけで、ロニイは飛んで行くの。ジーンをひどく怖がっているようだけど、そのくせ、いつもジーンの見える所を、ウロウロしていたわ。まるで鶏を殺した犬が、死ぬ程ひどく折檻されても、尻尾を垂れて、その主人の足

をなめているように見えたとわ。

ジーンは早熟だったから、十六になった時は、もう一人前の美しい女になったわ。だから男が多勢、彼女の周囲に集って来たの。中でも、やくざのリッチ・シェヴィスが一番熱心で、また、金廻りもよかったから、自然、ジーンは彼と出掛けることが多くなったわ。ロニイはもう悄気きって、もう見るも哀れな有様なの。そんなロニイを捉まえて、ジーンは慰めるようなことをいって見たり、じらすようなことをいって見たり、その都度、ロニイの顔が赤くなったり、青くなったりするのが面白くて、たまらないといった様子なの。ある時など『私はリッチと結婚する積りだけど、お前は棄てないから、安心おし。奴隷として連れて行き、身の廻りの世話をさせてやるから。リッチも賛成なの』といった時は、余り怒らないロニイも顔色を変えて、身体を震わせたわ。

ジーンが十七才になった年のある晩、リッチと一緒に出掛けて、帰って来なかったことがあるの。翌る日のロニイは、もう半病人で仕事も休み、ズーッと庭に座って、表の方ばかり見ていたわ。午後になって、ジーンは大笑いをしてながら帰って来たの。自動車の警笛

を喧しく鳴らし、片手を挙げて結婚指環を見せつけながら、車から飛出して来たの。ロニイは一言もいわず、黙って立ち上ると、家の方へ歩き出したわ。ジーンはそれを見ると、後を追って駆け出したわ。ロニイを捉えて、笑いながら、何もかも大丈夫よといったけど、ロニイは素知らぬ顔で、また歩き出したの。彼がこんな反抗的な態度を見せたのは、始めてだったから、ジーンはカンカンになって怒り出したわ。ロニイを突き倒して、顔や頭を目茶苦茶に蹴りつけたわ。殺してしまうんじゃないかと心配したけれど、その中、ヘトヘトになって止めたわ。しばらくの間、フウフウと荒い息づかいだったけれど、やがて笑い出したわ。ロニイを抱き起すと、納家の方へ歩き出したの。ロニイは未だヨロヨロしていたけれど、ジーンの方は、もう一分も待てないといった様子で、グイグイ引っぱって行っ

たわ。夕食の時間になっても、二人が納家から出て来ないので、私、寝ているリッチを起して二人は納家にいると告げたの。リッチは黙って納家へ行ったわ。実は私、少し前に納家を覗きに行ったの。何時だったか、貴方は寝ている私を、真実に気持ちのよいキスで、起

してくれたことがあったでしょう。あれと同じことを二人はしていたの。私達のキスは快く清潔だったけれど、あの二人のそれは、下品で、厭らしかったわ。ジーンはまだもっともっと汚ない事をロニーにさせたわ。

私はリッチを納家へ行かせて、二人を止めさせようと思ったものだから、また、見に行つたの。だけど、リッチが仲間にはいると思ひもよらないことになったの。リッチが彼の男性を誇示している側で、ロニーは一心にジーンに奉仕しているの。私には、ジーンが地獄から出て来た怪物のように見えたわ。

その晩、ロニーはいなくなつたわ。ジーンはもう半狂乱で、彼を探したけれど、遂に見つからなかった。それからジーンはリッチを余り相手にしなくなつたわ。ロニーはもう帰らないと諦めたジーンは、今度はその後釜を探しているの。誰か新しく男がやって来るとすぐに誘いをかけるの」

3、アリス

アリスは農場主ドク・ハートの一人娘である。街を遠く離れているので、アリスは、男は父と農場で働く黒人以外知らない。

俺は小麦を買付ける目的で、ドク・ハートを訪れた。話は旨く進み、ドクと俺は、ポーチで祝杯を挙げていた。その時、馬に乗って美しい娘と、黒人の若者が帰って来た。娘は俺達を見ると、嬉しそうに笑いながら馬から身軽に飛び降りた。

挨拶がすむと、アリスは直ぐに俺の手を取って彼女の室へ連れて行つた。社交的な交際の全然ない田舎だから、彼女は俺の訪問をひどく喜んだ。

「だって私、いつも夢見ていたの。いつかは貴方のようなハンサムな青年が来て、私をここから連れ出してくれるって」

彼女は人なつこく、俺の肩に手をかけて、キスをしようとしたが、ハッと飛びのいた。裏側の戸が静かに開いて、さっきの若者がはいって来たのだ。

「ロニー、馬の世話もしてやらずに、一体どうしたの？」

「ミス・馬は、後でもよかろうと思ひやしたので」

若者の目は疑い深く、俺の方に向けられていた。

「いいから、直ぐに馬の世話をしておやり」
アリスは出来るだけ静かに話そうと努めて

いたが、手に持った鞭は苛立たしげに、長靴を打っていた。

「馬は大丈夫ですが。それよりミスの着換えの手伝いをさきに……」

「出てお行き、ロニー！いいつけたことを、サッサとおやり」

彼女はもう怒りを隠そうとはしなかった。

ロニーは一步退つたが、動かなかった。

「でも、ミス・馬は大丈夫ですが」

突如、アリスは鞭を振り上げて、ロニーの肩先きに打ち下した。ロニーは手を上げて、肩をかばおうとしたが、その時は、第二の鞭が、巧みに彼の胃の辺りを襲っていた。彼女は、この鞭を使い慣れている事は確かだった。

適確に鞭はロニーの無防備の地帯を次々に攻撃した。しかも外部から見える顔や手は絶対に打たなかった。ロニーは遂に腹を抑えて悶えたが、アリスは長靴をはいた足で彼の胸を蹴り上げた。仰向けに倒れて苦しんでいるロニーの顔の上に立ちだかつたアリスは、彼の顔を彼女の方に向け、彼の唇の上にペツと唾をはいた。それから彼の頬をギョツと挟んで口を開かせたので、唾は彼の口中に流れていった。

「サア、いいつけたことを、サッサとおやり

……ソラ、飛んでお行き」

ロニイが出て行くと、驚いてポカンとして
いる私に、アリスは恥しそうに笑った。やが
て、ロニイについて話した。

「ロニイが、ここへ来て間もなく、彼が私を
崇拜していることが判ったの。だって私がど
んな無理をいっても、まるで奴隷のように仕
えてくるのですもの。それを宣いことにして
私はだんだん、大胆になって行きましたわ。
厭なこと、腹の立つことがあると、彼を虐待
して鬱憤を晴らすようになりましたの。時に
は、ホンの気紛れから彼を鞭で打って、痛さ
で縮みあがる彼を見て喜ぶ事もありました。
このような権力の快感が、女にどんな影響を
与えるものか、ステイヴ、貴方には判らない
でしょうね。私、子供の時分、男になりたい
と思いましたわ。たとえ黒人でもよいから、
男になりたいと思いましたわ。働き、喧嘩を
し、自由に何処へでも飛んで行ける男に。で
も今は違いますわ。ロニイを自分の思うまま
に出来るようになった今は、女に生まれてよ
かったと思っています。女であればこそ、こ
れまで自由だと思っていた男を、私の奴隷に
することが出来たのですもの。ロニイを鞭で
打つたびに、私は、自分が美しい女であると

いう自信が満ち溢れて来ますの。だってそう
でしょう。私の虐待から逃げ出せないのは、
私の魅力の方が強いからでしょう？」

その中に、彼を鞭打つと、私、ひどく興奮
するようになりましたの。彼が男で、私は女
だというような差別を忘れてしまつて、彼の
上に飛びかかって犯したいと思っていますの。で
も、彼は黒人でしょう。だから私は彼を他の
方法で、私を満足させるために使うことを考
えつきましたの。ええ、それをズーツと続け
ていますわ。ロニイは満足しているかどうか
は知りません。また、それは私にはどうでも
よろしいのです。只、私に判っていることは
ロニイは私の手の中にいて、私の思うままに
彼を使用出来るってことだけですの。ですか
ら、時々彼の奉仕に満足している印とし
て、私はキスを恵んでやりますの」
「キスって、さって、貴女が彼を蹴り倒し
て、唾を吐きかけたことかい？」

私は驚いて反問した。

「そうですわ。だって、それは距離の問題だ
けでしょう？ さっき貴方とキスをしかけま
したが、ロニイは黒人だから、上からキス
を落してやる訳ですわ。アラ、どうして、そ
んなに吃驚りなさいますの？」

「もし、それがロニイでなく……。アリス、
もし君が街に住み、多くの男達がロニイのよ
うに君を崇拜したら、君はやはり彼等を君の
奴隷として使用する積りかい？ 否、今、俺が
ロニイのように、君の魅力の虜となったとし
たら、君は俺を地下室に連れて行く？」

彼女は俺を見詰めた。不思議な熱情と興奮
の表情があった。

「連れて行くわ。もし貴方が完全に私の物に
なったとしたら、私は貴方を私のしたいよう
に扱ってやるわ」

そういうと彼女は身をかがめずに、片膝を
ついて、床に落ちてゐる鞭を拾い上げた。私
からズツと目を離さずに。鞭は彼女の両手の
中で、威嚇的に弯曲した。

「ステイヴ。どうやら、貴方は私の物になっ
たらしいわね。貴方は私を崇拜し、私を怖れ
ているようだわ。そうでしょう。私、貴方に
それを証明してあげる。あとで私、貴方を鞭
で打ってやるわ。貴方は抵抗せずに、その鞭
を受けるのよ。貴方が床に這い踞つて私に許
しを乞うまで、鞭打ってやるわ。貴方が私の
足にキスしようとする、その顔を蹴とばし
てやるわ。そして私の腕が疲れて、打てなく
なったら、ヒイヒイ泣いてゐる貴方の顔の上

にキッスを落してやるわ」

彼女は夢見るように微笑んだ。

「あとで、私の一寸した楽しみのために、貴方を地下室に連れて行くわ。貴方の楽しみではなく、私の楽しみのためによ。貴方は私を田舎者だと思っているらしいけれど、貴方、きつと驚くわ。私があんまり色々な方法で、貴方を私に奉仕させる術を知っているのよ。私、貴方を傷つけてやる、卑しめてやる、思い切り虐待してやるわ。それでも貴方は、私を崇拜すること以外、どうすることも出来ないのよ」

○

ステイヴは彼女の鞭を耐え、アリスは歪んだ欲情から解放される。二人は結婚を約束するが、ロニーがアリスの許にいたことを知ったジーンが、やくざのリッチを使って、アリスを殺害し、ロニーを連れ去る。

絶望したステイヴは、長姉ボビのバーを訪れる。

4、ボビ

ボビは若い頃、ストリッパーだった。当時の彼女は美しく、多くの崇拝者が彼女を取り囲んでいた。彼女はそこでS的な女に成長し

た。気に入った客には、彼女の思うままに奉仕させた。いくら金持ちでも、気に入らない客には、金だけを取り上げて、室から蹴り出した。お前は犬だよといって、首輪をつけ、散々部屋の中を這い廻らせた揚句に「この野良犬奴、お前見たいな薄汚ない野良犬には、用はないよ。出てお行き！」と足で蹴りだしたりした。

今は三十の半ばを過ぎて、まだ昔の美貌はその面影を残してはいるが、中年の女の肥満の兆候は隠す術もなかった。もう男を虜にする程の魅力はないと、彼女は淋しく諦めている。時々、昔の写真を取り出しては、昔を偲ぶだけだ。ジーンは姿を隠したし、フィリスは何を思ったのか、ジーンに逃げられた、やくざのリッチと、それに黒人ロニーと三人一緒に暮している。バーに残ったのはボビ一人だけだ。

○

俺がバーの扉を押した時は、ボビが一人で淋しそうにグラスを空けていた。

「ハロウ、ボビ。景気はどうだい？」

「駄目だよ。ジーンもフィリスも出て行ってしまった。ジーンはとも角、フィリスまで、あんな趣味を持っているとは思わなかった

よ。リッチやロニーと三人で暮すなんてね。家には皆、変な血が流れてるんじゃないかとこの頃考えるの」

「貴女も、そうだという意味かい？ボビ」

「馬鹿におしでないよ。今はこんなだけど、昔は悪かあなかったんだよ。どんな男でも、喜んで私の手から餌を喰べたものさ」

俺達はしばらく黙って、ウイスキーを飲んだ。

「ボビ、今だって貴方は悪くないよ。世間によくそんな男がいるじゃないか。エディボスコンフレックスとかいうんだ。若い女より、お袋を思い出させるような女を、好きになる男をいうんだ」

ボビは信じられないといった顔付きで、俺を見詰めていた。

「ほんとうのことをいうとな、ボビ。俺は始めて、貴女と逢った日から、貴女が忘れられないんだ。フィリスと遊んだのも、貴女が怖かったからだ。もし貴女と遊んだら、俺はもう貴女のいうことに、ノウといえなくなるに違いない。そう思ったんだ。それが怖かったんだよ。だから貴女を忘れようと思って、色々やって見たが駄目だった。あの当時は俺も貧乏だったし、貴女は貧乏人なんか相手に

しないだろうと思ったんだ。今、こんなことをいうのは、貴女がもし、今でも、俺を下男か何かに、あるいは唯、貴女のその脚の間に俺を座らせる気があるかどうか、それを聞きたいからなんだ」

ボビは、いきなり俺の手首を握ると、グッと引き寄せて、俺の顔に酒臭い息を吹きかけた。

「オイ、二枚目、ボビを揶揄うのはお止し。

あの婆、赤くなって喜んだと笑うつもりなんだろう」

「嘘じゃないよ。ここに俺は五百ドル持っている。これをみんな、貴女に上げるよ」

「本気かい？」

「本気だとも。みんな貴女のものだよ。金も、

俺も。俺は貴女の、その脚の間に座って、綺麗な愛、汚ない愛、今迄にしたことのないような色々な愛をして見たいんだ」

「ボビわね、ハンサム。一旦、その金を取ると、もう一生、お金もお前も離さない覚悟だよ。だからお前に、もう一度機会を与えてやるよ。サッサとその小汚ない金を仕舞って出てお行き！」

俺は返事の代りに、ボビの両脚の間に膝を入れた。ボビはギュッと、凄い力で締め付け

た。まるで、バイスで締められたみたいだった。ボビの顔は喜びに輝いた。二度と得られないと諦めていた好運が、思いがけなく訪れたのだ。

「ベビイ、今日は、ボビの生涯、最良の日だよ。捉まえたよ、ラブボーイ、捉まえた。もう、お前は私の物だ。サア、キッスしておくれ、ベビイ。お前の小さい可愛い口で、ママにキッスしておくれ」

俺は柔しくキッスをした。

「そんなんじゃないよ。こうだよ」

ボビは唇を押し付けると、グリグリと廻し両手で俺の後頭部をグッと引き寄せたから、二人の唇は一枚の板のようにペチャンコになった……

その夜、彼女の部屋で、ボビは最初の愛情を俺に示してくれた。

最初は平手打ち。俺は薄く笑って、次に彼女のすることを待った。今度は力一杯の平手打ち。それでも、俺はジッと立っていた。ボビは夢中になった。どうして彼女の愛情を、俺に示そうかと、狂気のようになった。拳で膝で、脚で、そして全身で、ぶっつかって来た。遂に俺は床の上に伸びた。ボビは俺の上に屈みこんでいった。

「ベビイ、私がショウを止めてから、誰もしてくれなかった愛の奉仕をしてくれるかい」
彼女は欲する物を得た。しかしボビはエレソンのように星空へ上らなかった。代りに地獄の焰を得た。情欲に狂っている間の彼女は、唯巨大で、下品だった。まるでソドムの百二十口を一度にしようとするようだった。

翌日から、俺はボビの命ずることを聞き服従し、仕事をした。俺はだんだん口を利かなくなった。黙々として料理、掃除、洗濯、アイロン掛けと片付けて行った。俺は、エレソンが死に、アリスが死んだその罪滅ぼしをしているつもりだったが、考えて見ると、これが俺の性癖かも知れないと思いだした。マゾヒズム、そうだ。

ボビは俺を虐待して喜んでいたが、彼女は一線を画して、それ以上の残酷には進まなかった。彼女は恐らく、彼女の人生にとって最後の幸運と思われるこの機会を、失いたくなかったのだ。俺に逃げられるのが怖かったのだ。しばらくは、平和な女主人と奴隷の生活が続いた。しかしこの平和は思わぬ事件で破れることになった。

5、フィリス

ある日フィリスが突然帰って来た。寒い日で、俺は暖炉に火を入れ、ボビは側の椅子に座っていた。その時、ドアが開いて、冷たい風が吹きこんで来た。見るとフィリスが立っていた。スーツケースを床にドンと下して、コートをとっていた。

「帰って来たわ、ボビ。リッチとロニイは、もう私が要らなくなったの」

「リッチが誰か他の女を引きこんだの？」

「そうじゃないの。リッチには、もう女は要らないの。ロニイもよ。二人に要るのは、自分達二人だけなの。少し変だとは思っていたんだけど、二人はホモよ。ボビ。あんた、前に、私に帰って来てでもいいって、いったでしょう」

「ああ、いいともさ。よく帰ってくれたわね。ここでは、話し相手がなくて淋しかったよ。といって、あんなものとは、話も出来ないしね」

ボビは躊躇っている俺を指差した。フィリスは怪蔑し切った態度で俺を見た。

「でも私、そいつが要るの。そいつと、他に男もね。ボビ、リッチもロニイも、永いこと私を相手にしなかったの。だから私、ここへ多勢の男を連れて来るわ。そのために、そい



<S・コント>

「男と女と」

久我庄一

鞭による激しい音がした。男と女は、動物的な息を吐いた。どろどろに汗ばんだ女の身体が血に飢え、白蛇の如き姿体をのたうちさせた。情欲の果てに、男と女に取っては、もうこの方法より何もなかった。男は鞭を振り上げ女を痛めつけることによって、実は自分の心を傷つけることを知ったが、もはやどうにもならなかった。明日が信じられないならば今に戦慄することだ。

……男は疲れて鞭を投げ、たたみの上におむけになった。

女は裸のまま、男にすがりつき、激しい呼吸を男の顔に浴びせかけた。

「これからどうする」

男は大儀そうにつぶやいた。

「逃げて」

女は弾力のある乳房を、男の胸にこすりつけた。△性△の臭いが、いっそう立ち込めた。甘ずっぱいというより必死の生命が

燃えるようだった。

「いま、私たちは、たしかに生きていたのよ。これからも生きられるわ」

男は無言だった。

カーテンのすき間からこぼれる月光が、女の肌に赤い血筋が走るのを、おぼろに浮出していた。

宝産業KKの社員・風見早太郎が、未亡人・朝子と知ったのは、ふとした偶然からだった。妻のお産の手助けにやとった家政婦それが彼女だった。

夫婦のいとなみが遠のいていたことが、風見のあやまちを助長した。幾度かの密会のはてに、朝子は鞭で責めてくれと哀願した。

どろ沼から抜け出そうとした風見は、そのことによっていっそう深淵にめり込むことになった。それは妖しい異常な快楽をもたらした。その時になって、おのれの血が

「つは私に必要なの」

ボビは心配そうにいった。

「ただどファイリス、やり過ぎては厭だよ。私も、もう年だからね。こいつの代りは、もう見付けられないと思うからさ。傷つけたり、骨を折ったりするのは御免だよ」

「もっと酷いことをしてやるわ。まあ、見ていてよ、ボビ。こいつに、あんたが想像もしなかったようなことを、させてやるわよ」

ファイリスは、それからもう俺を見ようともしなかった。二人は俺の仕度をした夕食を済ませると、バーへ出て行った。俺はその夜、ファイリスの帰って来るのが怖かった。一度は俺を愛したファイリスだが、俺がアリスに乗り換えたため、彼女の愛は憎悪に変わっている。こんな場合に女が、いかに残酷になるか、俺はそれが怖かった。唯、彼女が俺を見た時に俺は、その眼に俺に対する愛情が残っていると思ったが……。

その夜遅く、二人は四、五人の酔っ払い共を引連れて帰って来た。ファイリスも大分酔っていたが、俺に酒の用意をさせた。

やがてファイリスは立ち上ると、「私は男が欲しい！」と宣言した。一人の男が申し出たが、ファイリスは唾をはきかけて突き戻した。

サディズム的な物を求めているのを知り愕然とした。

赤いネオンがにぶく照らす名ばかりのホテルを出た男と女。後を引く二つの影は、複雑な様相を物語るかのように近づき、また離れた。

「やはり、このままでよいのか」

男は女にいった。

「宿命なのよ。私と貴方が会ったということとは」

二人目の男が申し出た時、彼女は嘲笑した。

「お前が男だって？ 小僧、小汚ない小僧、お前はそこのどっちもだよ。お前なんかより、そこに跼っている、あいつの方が余っ程、男らしいよ。あいつは人間じゃないけどさ」

「そんなことはねえよ」

酔っ払い共は、声を揃えて喚き立てた。

「そいつは男じゃねえよ」

ファイリスは立ち上ると、俺の側に来て、足で蹴った。

「お立ち！ 立って、彼奴等に、お前の男を見せておやり」

だが俺は動かなかった。

ファイリスは口汚なく罵って、何度も俺を蹴りつけたが、俺は動かなかった。逆上した彼

流れ星が、はるかの空に一瞬、輝やき消えた。

「あら」

そして小声で女は「十、勘定しない内に消えたわ」といった。

「なんのことだね」

とてもよいこと。

女は着物のたもとで、胸を抱くようにして哀しく笑った。

(終)

女は、コートからナイフを取り出した。

「サア、立つんだ！ 立って、お前の男を見せるか、それとも、お前の男を失うか。どちらなんだよ」

俺はファイリスの声の中に、俺への愛情の響きを聞いた。彼女は選べとっている。奴隷のままでいるか、男になって彼女の愛に応えるか、俺の決断を迫っているのだ。

○

ステイヴは結局、男になる。ファイリスのナイフを叩き落とし、彼女を抱えてボビの家を出る。

(おわり)

× × ×



漫筆 裾の乱れ

牧高志
文重

一言に裾と云えば洋装の場合だってあり得る。しかし卒直な文字の受け方からは多分に日本的なニュアンスが濃い。すなわちずばりきものの裾を連想するのである。

昔らかこの裾（和裁の本にある寸法的な裾はしばらく除くとして）の生感（こんな言葉が当て嵌まるかどうか判らぬが）については

惑を感じており従って機会をみては私なりにそれに関する絵、写真（いわゆるスナップ物）それに文献（少々怪しいが……）などを精々蒐めたつもりだがさてこれを今仮りに文字化して論文形式に構成しようとしても、丁度譜のない三味線を鳴らすようなもので、この種の無形文化財？は非常にまともにくい（こ

昔から、よかれ悪しかれ、いろいろと物議をかもしている。しかもその物議たるや一方的に道徳めいたものもあるが、がらりと専ら色気本位なものが圧倒的に多い（のも面白い）ここに採りあげた「裾の乱れ」がまずそれである。

私は正直なところ、この「裾の乱れ」については、ひとかたならぬ魅

とがあとで判った……。

従って初めから緒論があらうと無かるうとどの道、結論が掴みにくいのなら、行きあたりばったりに散文的なことを書くよりほかに方法は無いであらう。まして色気本位に割切れば勢い筆者好みの数奇風に触れざるを得まい。

ともあれ、ちよっぴり緒論めいたところから入ってみるとしよう。新派の名女形で一世を風靡し遂に舞台で倒れた花柳章太郎の著書である「きもの」を引用すると「長襦袢」と題する中に……。

「裾を敷いて坐った場合の長襦袢の出し方はきものの裾の合わせ目から鱗形に長襦袢が出て居る程度がよろしいので、これは芸者のきものを着る時の定式であります。あまり出過ぎても嫌なものですし、またあまりきちんと仕過ぎて居るのも却って堅苦しい気がします」……云々とある。

つまり乱れぬ前の定式とはおよそこんなものだという定義なのである。この花柳章太郎という役者は俗称きもの博士と云われた程、きものに対してはなみなみならぬ愛着と見識を持っていた人であった。しかもこの心底は

男性としてではなく自分を表型的にも心理的にも女性化して優美な絹ずれを口にされた程だから芸の細かさは本物の女性以上である。

曾って新橋の新米芸妓が先生、あたし着付が下手で裾がばあばあしてとても困るンですとぐちをこぼすと、「パンティを嵌めていちゃ話にならんよ、即刻脱ぎ給え」と云う偉大なる助言を賜った逸話が残っている。

いつか筆者らが鹿児島に旅行した折、多分遠来の客をまずはねぎらうつもりか、宿の女中さん（と称したがどうもその中に何人かの正規の酌婦さんが混っていたと思われる）数名が一席踊りをサービスして呉れたことがある。

処がその中に黒田節というどなたもご存知のどちらかと云えば男舞に近い豪放な踊りの番になった時、連中しきりに裾を直おしていた。そうしないと、どうもお客さんに対して悪い、大変失礼になると云うんだそう。

悪るかあないよ、大いに捲くれる程演れよ……とやじる大向の客に向って「いつもは、はくんですが今日は略式ですからどうしようかと思つて」と一斉に笑う。

武士になったつもりで仙台平のハカマでもはくのかと思つたら怪の见えないあんどん式

のお腰をつい忘れたと云うのだからたわいもない話。

因みにこの時の黒田節は酔客の誘いに乗つてそれ相当年期の入った老歌手が途中で何かのはずみで笑い出したため連舞の形で一緒に踊っていた四人の黒田武士も遂によりたり出し、パツとひき立つ芸妓の華やかさは無いにせよ彼女達なりの一張羅のきものの裾を大いに開陳して前あきの赤い腰巻だのピンクの裾除をここぞと大っぴらに見せて呉れたものである。座興とは云え浅い川を敗戦の女兵が渡れば多分こうなるだろうという見本のようにもあつた。

ずうっと昔、昭和八年十二月に丸の内のある講堂で藤間喜与恵の雪二題の内「浦里」という意欲作で抒情味たっぷりの日舞を観たことがある。舞台はかなり暗かったが青っぽい花魁衣裳の裾がさばきにつれてほどほどに乱れ、中から緋色の長襦袢がしつとりとからみついた哀姿は一幅の浮世絵を見るようで非常に魅力的かつ印象的であつた。勿論女は二条の黄色い縄で厳しく後手に縛られたままであ

るが……

たのを憶い出す。

「妹背山のお三輪の衣裳が無地の緑色一色であるところへ目の覚めるような鮮やかな緋色の下着（長襦袢などを指す）はそれだけで舞台効果満点である……云々」。

要は緑色のきものに配するに内側の下着の赤は裾の乱れによって、より白い肉体を誇張するに有力な媒介物たり得るという風に解釈すればよいのだろう。

筆者が昭和十三年からとことんの終戦まで一軍人として狩り出され、その前半、丁度大陸の戦地に居た頃はよく「藤娘」だの「北州」などの古典舞踊を一夜造りのアンペラ劇場で見せて貰つたものである。そして一連の踊りが万雷の拍手で終演ともなれば兵隊さん達は何んとかなく気が落ちつなくなつて、さながらさかりのついた牛馬の如く巷に流れ出た。

日直に当たった同僚の某将校曰く「何がつらいつて射撃準備完了に不発と来ちゃ、いくら何んでも砲兵は可哀いそうだよ、まして射っちゃいかんと云うのは土台罪な話だぜ……」

これ程オーバーな物の云い方をしなくても視覚にうったえた女の裾の乱れは鬼神をも裂くといわれた当時の将兵の心臓を痛くゆさぶ

りかつ躍動させたものである。

洋装なら口常茶飯事でも和装の場合、よく二の腕が見えるともみっともないと云われている。これを胴体で云えばさしずめ太腿のつけ根あたりを指すものだろう。和服だと当然お腰でしっかり包むことになるが、総じてこのあたりを視覚で表現しようとする仲間むずかしいものだ。

例えば雑誌の挿絵にすれすれの処を描けば春画と紙一重の差でにらまれるだろうし、ましてグラビア写真にとレンズ描写でもしようものなら忠実さ余って飛んだことにもなり兼ねない。空想は春霞の如くそれ自体誠に心楽しいものであるが、暗中誤って肥溜に落ち込んだ如く、およそ醜態と名のつくものに対しては一切初めから手は勿論のこと、目で確かめたりしない方がよいのかも知れない。

往年の女流作家であった岡本かの子女史は病氣になったらわが児（今の岡本太郎画伯）でさえもママは見たくないの……と云ったというが、どうもこうせんじつめてくると、いわゆる「好奇心」などと称するもう一つの言葉の使い道が永久になくなるような気がしてならない。

今、上方喜劇だのと騒わがれている元祖は

これまた可なり昔のことになるので多分忘れて居られる御仁もおありだろうが、曾我廼家五郎という一座があつて三カ月か四カ月目に一度ずつ上京、新橋演舞場を本拠として大阪弁で独特の笑いをふりまいていた。

この一座にはもともといわゆる女優というものが一人も居らず専ら男性の女形によって色物を濃厚に演じていたが、その中に若い芸妓、娘、若い妻をやつしたら天下一品の秀蝶。秀蝶が風邪でもひけばその次の桃蝶が舞台に立つ、また年増の女や世話女房はこの人を置いて右に出る者なしと云われた大磯……と云つた面々の女形連は全く何処から見ても女であつたような気がする。

その頃の筆者はまだ若かつたと見えて生意気にもオペラグラスならぬ古物の六倍望遠鏡を常時持参して観劇（実際は経済上一、二等席には坐われなかつたので）、望遠はすべからく色と声を近くするのたとえの如く大いに舞台のエレガントな香りまで満喫して帰つたものであるが、今当時を憶い出してみると、例えば不安定なハリコの階段を昇る時とか姉さん冠りでお座敷箒を右手に左手で軽く裾をつまんでからげる何気ない動作にしても彼女等は決してすねの出るようなへまはこれ

ばかりも見せなかつた、否見せて呉れなかつた。適当に赤いお腰なり派手な長襦袢をチラつかせるところで軽く逃がっている。（そっちは逃がっているつもりでもどっこい観客は案外執拗に追つてくるものだ……）。

その頃帝劇では森律子、初瀬浪子を初め堂々と本物の女優連で公演している時に原作、脚色、演出、主演の五郎の一座に比較的大勢の女性化の男優が居るという理由は、御大五郎氏の性格上からのことでもあろうが、それにしても限られた舞台の世界でしばしば本物の女よりも女形による女の方が数段と色っぽいというのはそもそも何であろうか。

つまるところ、それは女によさつつやっぱさを充分認識し第三者的な気持ちになり身を以て再現してみようとするいわゆる役者の土根性からではあるまいか。

いつか本誌にも書かせて貰つたことがあるが今でも日本式の旅館（本式のホテルでは駄目）に泊ると大抵の場合、まず夜だけは着物の女中さんが一切の面倒を見てくれる。この女中さん達が畳の上で後向きになりしかも中腰でお膳を運んだり御飯のお替り、さては布団の敷き揚げなどする時には、きものの裾の間からやや奥にかけて長襦袢やお腰などが



たたみ込まれて重ねられたまま外から見えるのが実に何んとも云えないと本当にこれだけで専ら日本式の宿屋に泊ることにきめている知人が居る。

そうだからと云って彼は決して接触欲とか蒐集欲とかという魂胆ではなくただ視覚による数少ない乱れた女らしさの一つを採求して

いるのだと私は信じている。彼はまた酔えばきまってふらつきながらも絵筆を握って、その時待った女性をスケッチするのに余念がない男だ。会社の用事でいつか彼と名古屋周辺の或る宿屋に泊った時若い芸妓がお酌に、よばれて来た。

「どうだい…膝を一寸崩して御覧、楽になるよ、もう少し…そうだ、それで心持ち左足をあげるようにしてご覧、ほんのちよっぴりそうだなあ、なら、思い切りあの鏡台の処に行ってお化粧ごっこでもするか…」

といった調子である。始めは神妙にスケッチブックにとらめっこしているうちに興味深々、あれこれあらぬしみを衣類につけた挙句、高価な

長襦袢とお腰を買わされたことも何度かあった由：大人のお遊びにしては手の込んだ裾の乱れではある。

岡山県の津山からバスで北へ一時間あまりゆられて行くと鳥取県寄りに奥津温泉がある。この渓流には昔から名物の素足の洗濯が伝わっているという話だが、これを撮った昔の写真と最近の写真を較らべてみると勿論被写体になった娘さん達は全くの別人だから美醜は兎も角として、裾のからげ方といい、裾から出した下着にしても、決して同じではない。ましてこれが観光用に宣伝を兼ねて撮ったと云うのであれば、どの新聞社でも超時代錯誤的なオーバーな演出を試みるものと見える。

昭和十年頃に撮った某新聞のそれは赤いたすきに姉さん冠りそしてほとんどが赤いお腰をからげた裾からひらめかしながら喜々として足踏洗濯をしている情景が大きく載っている。しかもこのスナップでも感服したことは第一この裾をからげた位置と高さが娘さんによって皆違っていることだ。昭和十年頃と云えば白木屋の火災事件から日本の伝統的なお腰と欧米風のパンティの丁度切り替えの時期に当る。写真は決してあぶな絵とは云い切れ

ないがややそれに近い。

これに似た話で曾って本誌にも引用したことがあるが、東京の銀座風景を紹介するのにただビルの林立だけでは面白くないから、その時風が吹こうが吹くまいが何人かの歩く女性を添景物として撮るのが常法。ところが、どっこい浮世絵師広重が活躍した徳川末期と違って近代化された大江戸のビルのあい間を吹き抜ける風は凄く冷めたく無情であるからたちまちのうちに着物を召した女の裾はパアッにとられていとも無残絵を現出する。余談だが、こうした情景を絵筆に載せた画家は新しい処で山川秀峰画伯の「風」から谷脇素文の川柳漫画に至るまで無数と云ってよい位いわゆる絵の文獻？がある。

ただ、惜しむらくは「愛は惜しみ惜しみ使え」を、そのまま「裾の乱れもほどほどに」と云うべく余りにも日本的女性が数少なくないことは当世如何にも残念だ。

卑近な例が筆者の懇意にしている友人の娘さんがさるお嫁入りの時、「足が痺れて痺れて、どうしようもなかったわ。だから気付かれぬようにお座布団の上でちょっぴりあぐらかいてみたのホッホッホ……、いけなかったか知ら？」と頗る茶目気満々である。

道理である時、花柳章太郎先生直伝の定式を遙かに通り越して目鮮やかな緋の長襦袢が明滅するなアと思ったが果たせるかなである「乱れて物こそ思え」は、ここでは善意に解釈したいと思う。竹久夢二が好んで描いた往年の頹廃美ともいささか違うであろうし、さりとて初めから場末の女郎屋風勢のふしだらな着付ではこれまたうんざりする。

言葉を換えて云うならば「乱れ」そのものの追究ではなく本来正（整）姿であるべき状態が不可抗力的に——極めて自然裡に崩れる……そこに今まで認知することすら出来なかった新しい美の要素を発見するというものではなかるうか。

市販の読物雑誌にいわゆる挿絵画家として登場する数多い中に本篇の裾の乱れをひとときわ繊細な線また線で表わそうとするのが岩田専太郎氏であるならば、これと対照的に筆太の丹念な筆法で一枚一枚の下着の重なりを描くのが木俣清史氏である。勿論これらの中に伍して宛ら日本画家の元老伊東深水氏の如く端正な乱れた裾を描く志村立美氏も居ることは諸兄姉ご存知の通りである。

ただこうした熟練円達なベテラン挿絵画家の手にかかると、往々にして誇張の余り自己

陶酔的な情景を拝見することがある。絹か木綿製の湯文字が肌の体温によってさながら縮んだ人絹の如くなることは有り得ぬ……ことなのに、あえて描かれることなどがその一例である。

兎もあれ、この日本という東洋の島国で、服装の革命はあっても伝統のキモノが廃らぬ限り、いい意味での裾の乱れは、まだまだ見られることであろう。折しも暮から新年にかけてはキモノのシーズンである。

筆者の住む東京なら、さしずめ何万何千のオール・キモノ・キモノで賑う明治神宮。さては出の衣裳に下駄の音もなまめく人形町は水天宮。いなせな浅草観音……と云った界限は、植木等じゃないが銭の有る無しに拘らず、めでためたの風にあふられて、裾模様の裾をなびかせることであろうが、願わくば、どなたさんも艶麗無比な裾さばきをして貰いたいものである。

（終）

☆代理部の分譲品について☆

○本誌上に只今広告してありますものは、全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りいたします。但しカラープリントは若干の御猶予を、お願いいたします。

私のイメージ

脊髓美女



黒田 寿

死後硬直が死の瞬間にくる話は御存知でしょう。生前はげしい筋肉運動をしていたものが即死した場合にみられ、弁慶や木口小平がその例です。

恐怖の場合にもあるらしく、爆撃を受けて破片のため首をスッパリともっていかれた女性がおりましたが、彼女の身体は地上に伏せたまま、両手は首が残っていたら、その目と耳をおさえていたであろう姿勢のまま硬直し

てしまいました。首の方もおそらく口を大きくあいたままだったでしょう。

女囚を絞首台からつき落したとたん、ショックで即死してしまった。しかし両手はロープをはずそうとして頸のまわりに、両脚は宙をけるような恰好で硬直した話。

この反対の例はないでしょうか。生理学に「脊髓蛙」という言葉があります。首をチョン切った蛙の脚を酸につけると、ピョンとは

ねあがるのです。これは運動神経が脳だけでなく脊髓にも一部残っているのです、死後もある時間内なら運動ができるのです。

もうおわかりでしょう。脊髓美女の意味が……。

夜道を歩いていたB.G.が兇漢のため心臓部を一突きされる。しかし彼女は血まみれになりながらも自宅まで帰りつき、玄関に一步入ると同時にバツタリ倒れる。彼女は胸を刺された時に即死したとは思われないのです。自宅に帰ろうとする本能が、死後も彼女を動かしていたのでしょうか。

日本戦国史上最も死にたくない討死をしたという義仲の愛妾葵は、完全に組敷かれたあとも抵抗をつづけ、折角相手が礼をもって首を掻こうとしたのに「傷をうけてさえないければ、お前なんぞに討たれるものか」と口惜しがりつつ、遂に首を落されました。

「きえっ」という悲鳴と共に鮮血がほとばしり、相手がほとと一息ついた時、死せる葵の身体がスルリと、その下からぬけだし、そこで動かなくなりました。

彼女の美しい首が味方に收容されたのは三日の後で、旧暦五月のこと、ほかの死体は腐敗しかけていたのに、尚も生前と変らぬ美し

さを残し、それと同時に無念そうに唇をかみしめた表情も残っていました。美女の執念もこうなるとすさまじいものがあります。

私は今までずいぶんチャランポランなことを書いてきましたが、仕事のこともあり血汐にぬれたペンを一時休めることにします。最後にわれらがモデル嬢たちに登場を願うことに致しましょう。

世間を恐怖のドン底におとしこんだ七人の美女も、遂にその年貢をおさめる時がきた。数々の悪事のむくいで、死刑の執行をうけるのだ。

先頭をきるのは最年少の亜紀子とマリ。刑は斬首であるが、役人が大刀をひきぬいて背後にまわった時、彼女らのリーダー啓子が高らかに叫んだ。

「皆さん。人間の意志が、どの位つよいか、これからお見せしましょう。せめてもの罪はろぼしよ」

声に応じてマリが叫ぶ。

「でもあたしたちは、未熟ものだから、首を斬られてから三步あるくだけよ」

意外ななりゆきに、ちよっとたじろいた刑吏は、一息入れてから大刀をふりあげる。

「かつ」という頸骨のひびきと共に、ふたつ

の首は胴体をはなれたが、とたんに二人はスックと立ちあがり一步ふみだした。

歩いたのだ！首のない女が！

競走でもするように、三步までふみだした亜紀子とマリ。やがてバツタリと前のめりに倒れる。刑をみまもる群衆は驚きのあまり声もでなかった。

次は百合子の番である。

「わたしは斬り落とされた首をひろって、皆さんにお見せします」

その言葉が終るや否や、二十二才の美しい首が宙をとぶ。百合子の身体はいったん横にくずれたが、再び坐り直すや手をのばして前方をさぐる。なるほど、首がなくては目も見えぬわけだ。

首のあったところから血を噴きだしながらやっと自らの首をさぐりあてた百合子は、立ちあがるや首を高くかかげる。前後左右のすべてに見えるように。再び正面に帰ると同時にバツタリと、朽木を倒すようにころがり、二度と動かなかった。

四人目として茂美が、その野性美満点といわれた姿をあらわした。

「私は首を斬られてから、逆立ちをしてみせます。女らしくないなんていわないでね」

ポロリとその首が地上へと落ちてゆく。

茂美は坐ったままの姿勢で、両手を前についた。

「ヤッ！」とかけ声と共に、茂美のスラリとした二本の脚は、青空に向かって長くのばされた。血汐は激しい勢いで両手の間、地上へ滝となってふりそそぐ。

数秒後、その身体はあおむけにひっくりかえったが、途中両脚が大きくひらいて、ちょうど、そこにころがっていた首をはさむような恰好となった。斬首された女囚を葬る時はこのようにして埋めるのだ。

ここで文代が登場したが、彼女はつねづね絞首刑が大好きだと宣言している女性。この希望がいれられて、ただ一人絞首刑に処せられる。

「わたしは首を吊られたまま、バレーをおどるわ。『白鳥の湖』なんかどうかしら」

「バタン！」

踏板が落ちて文代の身体は宙に浮いた。ロープの長さだけ落下し、その端で美しい身体が、キリキリとまわっている。

やがて完全に静止したと思われた時、彼女の両手両脚が動きだした。まさか白鳥の湖ではあるまいが、なかなか優雅に踊っている。

首を締められているというのに。

十分。十五分。普通ならとっくに絶命している頃だが、まだ踊っている。

一時間三十六分。満場の見物人の見守るなか、踊り終えた文代は片手をふって挨拶すると四肢がダランとたれさがった。

“アンコール。アンコール”

群衆のなかから声がかかる。

文代は顔をあげた。ニッコリほえんだかにみえたが、再びガクリとなってしまう。

“文代ともあろうものが、どうした”

この声にはげまされ、手足が再び徐々にではあるが動きだす。

十三分十三秒のち、今度こそ永久に動かなくなった。見物人の一人が言う。

“『白鳥の湖』でなく『白鳥の死』と言った方がよいね”

いよいよ大詰めが近づき、悠起子が六人目として首を打たれる。

“わたしは首を刎ねられてから切腹してみせます。これはわたし以外にはできないわ”

短刀を握ったまま首の座へ。首すじめがけて大刀が走ったが、コロリとおちるはずの首はまだ胴についていた。

あわてた刑事は続いて二度三度とふりおろ

したが、肩や後頭部に斬りこむだけで、なかなか首を打落すことができない。早く彼女の芸をみたい群衆から、ブーブーと非難の声があがった。

“あんた。ヘタねえ。わたしに借して”

悠起子は刑事から大刀を奪うように受けると、右手で柄を左手で刃先をもち、頸のうしろにあて、一気に前へ持っていった。

“ザクリ”と音をたててころがり落ちる美しい首。彼女の身体はまだ突っ立ったままだ。

一度はこのまま大刀で腹を切ろうとしたようだが、やはり勝手がわるいか短刀ともちかえた。美女の切腹だ。

噴きだす血汐はもう全身を染めている。それにかまわず左の脇腹へブスリと………続いてキリキリと右へひきまわす。

十分に横一文字に切り裂くや短刀をぬきとり、今度はおへソに柄までふかぶかと突き刺すや一気に真下へ切り裂いた。鮮やかな十字型が美しい下腹に画かれたわけだ。

拍手かっさいの聲がこだましたが、彼女には見えも聞えもしないだろう。目と耳を持つ首がないのだから。

彼女は静かに坐り直し、短刀を置き前方をまさぐった。おそらく首を拾って三宝にのせ

ようというのだろう。しかし彼女の首は割と遠くの方までころがっていた。遂に彼女の力をつきた。前のめりにくずれるように倒れ、もうピクリとも動かなかった。

いよいよ啓子の番となる。リーダーとされている以上、これまでの六人をしのぐすばらしい芸をみせるだろう。

“わたしの芸？ フッフ……まあ、たのしみにして”

刑事が大刀をふりあげ、啓子は美しい頸をせいっぱいにのぼし、これ待つ。

“かっ！”

耳なれた響きがこだまする。大刀は彼女の右の首すじに僅かに喰いこんだだけ。それでは何の音だろう。たしかに頸椎を断つ響きと思われたのだが……。

啓子の生命は右の頸動脈を切断された瞬間失なわれ、それと同時に死後硬直があらわれたのだ。喰いこんだ刃は、その強い力のために引いても引いても動かなくなっていた。

“忍法死後硬直取り！”

啓子の聲がひととき高くひびき渡った。

(おわり)

「牝犬めすいぬ羞恥地獄」

夜 乃 探 郎



——この一篇は『読者通信』昭和四十年、十・十一月号の東京八山中冬子Vによる物をモチーフとして創作した。その意味で便りそのままではなくフィクションされた事をご諒承願っておく——

東京の郊外、静かなK邸の庭はうっそうとした立木にかこまれた別天地を形成していた。あたりに人家少なく、その上、高い塀がいつそう外部との遮断を厳しくしていた。日中も夜も表門は鉄の扉が閉められており、ただ土曜日の晩のみ自家用車の警笛によって開かれた。この家に訪れる人間は、ときたま食料品店から御用聞に来る小僧達位のもので、

それも裏門の小さいくぐり戸から一步も入れず、お手伝いさんであるくみ子という小娘がその度、一寸顔を出して用をすませていた。たまに四十を過ぎた、とみ——という、どこか教師を思わせる冷酷そうな面相をした女が外出をする程度であった。

おめかけさんが住んでいる別宅であろうことは推察されるのであるが、邸の人達の他にその二号さんの顔を知る者は無かった。

——その晩、山中冬子は、玄関わきの立木に糸まとわぬ姿で首輪をはめられてつながれ四つ這いになっていた。御主人様のBがお泊りになる土曜日でもあったからだ。月の無い

薄暗い夜空の下に、にぶい灯りが投げかける陰にうずくまる彼女の姿は、さながら一匹の牝犬を思わせた。いや牝犬そのものであった。

それにしても、なんと美しい動物であろうか。長いまつげからのぞく瞳は、まるで黒い真珠のようにきれいだ。ときたませつなそうにもらす吐息は甘美なおいをはなつた。あごから胸元に至るなだらかな曲線は、処女雪を抱く神秘的な深山を想像させた。

クラクションが鳴った。牝犬は、身体をぴくりとふるわせた。

「御主人様のお帰りだ。うれしいだろう、さ

あ、はなをならすんだ。この犬め！」

とみは、美貌の冬子を、さも憎ったらしい眼で見ると、下駄で腹のあたりをけった。

「あっ、おばさま許して……」

冬子は、悲痛な声を上げた。

「生意気に人間さまの言葉を出すなんて」

チエツと舌打を残すと、とみは小走りに表門の方にむかった。

やがて門は開かれ、すべるように車は入ってきた。

うやうやしく拝礼する運転手を背に、とみをBはじろりと見付めた。

「牝犬の調教は、うまくいってるか」

とみは、みにくい容貌を赤らめ、卑屈な態度で答えた。

「……それが」

「そのために多額な金をはらっている。——とにかく案内せい」

Bは大腿に歩きはじめた。

親を入院させたい一心で十カ月三十万円という金子で飼われた女奴隷に過ぎない冬子であったが、いくら決心したといっても処女の羞恥が、幾度も屈辱の悲鳴をあげさせた。

ただ、条件とされた責めだけで身体を望まないという事だけがせめてもの救いでもあった。

たのだ。しかし、その羞恥責めは、死以上のはずかしい物ばかりだった。

「おい御主人様が来たのだ。ワンと吠えろ」

Bは、冬子に命令した。

「あっ……」

彼女は身もだえし、まつげから熱いしずくがポトリと落ちた。

「犬は三日飼えば恩を忘れないと言う。たまには、おれさまの顔が見えたら尻を振るなり威勢よく吠えるもんだ」

「ハイ、旦那様」

「ワンと言え、動作と鳴き声で示めせと、いつも言ってる筈だ」

Bは、毛むじやらの手をのばして冬子の乳房をわしづかみにしてふった。

「こんな大きなオッパイを持ってるくせに、

まるで、小犬のような態度ばかりしようとする。お前は発情期の牝犬だということを忘れるな。さあ、少しは艶っぽい鳴き方をして飼主にじやらせて見せろ」

運転手がニヤニヤしながら様子を見ていたが

「社長、罰をしなければなりませんね」

と忠義面していった。そして、そっと近づいて耳打ちした。

Bは、ニタリとして大きくうなづいた。

——くみ子が、やがて黒光りのする鞭を片手に本当の牝犬を一匹連れて来た。この邸の番犬として飼っている。それは図体の大きいアメリカ産のコリー犬だった。

「いいか、お前は、このSM号の通りに動作をするのだ。寸分でも違ったら、その度に鞭が飛ぶからそう思え」

Bは美しい女奴隷、冬子の全裸をなめまわすように見ながらキメつけた。

冬子の両眼から、またポトリとなみだが落ちた。それは予期しがたい羞恥地獄を悲しむなみだでもあったのだ。「チン」と、BはSM号にむかって号令した。犬は後足だけで、すばやく立ちチンチンをした。そして後をさい促すかのように、うっとうなった。

「びしり！」

Bの鞭が冬子の背に鳴った。牝犬はおずおずと腕を立てると、チンチンのかっこうをした。

「うなり声は、どうした」

また非情の鞭は鳴った。

牝犬は小さく「ううっ」と言葉を出した。それは、うなるというより、おえつの声に近かった。

SM号が、片足を上げて放水をはじめた。

Bの眼がキラリと光った。

「どうした。早くまねをしないか」

Bは、またも鞭をかまえた。Bは、冬子の白いのど元に手をかけ顔を上向きにさせ、その美しい口元をめがけてツバをとばした。

「いいか、完全に十カ月の期間が終らなければ、後金はやれないのだぞ」

Bは惨忍な様相をむき出しにして言葉を浴びせた。

冬子は、白い身体をくまなく赤くさせて、いやいやした。

「旦那様、口だけで食物も頂きます。みなさまの前で……朝食のとき……でも、でも……」

後は言葉にならなかった。

「やるのだ。排泄のどこに変わりがあるか。かた足上げてするのは犬の習性だ、お前にふさわしい動作だ」

牝犬は眼をつぶった。まつげがこまかくふるえている。

「なんて、にくたらしく白いオケツだこと」

とみがいやという程、そのやわらかく盛上っている肌をひねった。

「ああっ」

冬子は身体をけいれんさせた。

……液体がはじめはゆるく、そして、鞭の鳴

る音につれて激しく、黒ずんだ土の上を濡して行く。強烈な臭気があたりに立ち込めた。

冬子は、Bの満足した顔や、さげすむようなくみ子のこまちやくれた顔、好色な運転手の顔をぼんやり眺め意識したのもつかのま、失心した――

△顔にも似あわず、なんて臭い物を出すんだろうね▽

「まったくだ。おれは鼻がどうかすると思っただけ」

美人だなんて言っても、この汚物の上に倒れている姿は何さ……冬子は、夢うつつに、声を耳にし、ぼんやりと眼をひらいた。

「あっ、おかあさん」

とつぶやいた。ドツと笑い声がした。

「ふん、おかあさんだっけさ。片足上げてションした犬が、ねごとを言ってるア」

運転手が言った。彼は冬子の頭をおさえるなり、まだにおいの消えない地面に彼女の顔をおし付けた。

「どうだ、自分の出した物を、なめるのも乙なもんだろう」

冬子は、臭気にまみれ、むせった。

仲間をリンチしていた所を見込まれてやとわれたズベ公上りのくみ子が、むぞうさにス

カートをたくし上げ、冬子に放水した。

運転手はさすがにくみ子だけであると、ますますこうふんした顔をさらけ出して足をならした。たまりかねて、とみが嬌声を上げつつ冬子に近づき

「この牝犬め、この牝犬め」と、所きらわずふみつけた。

庭に面した座敷で、Bは静かに煙草をくゆらせていた。次にはどのようなように責めるか――その方法を案出するための貴重な時間だったのだ。

貧から身を起し今日を成した彼にとって、すべての△美▽はあばくことによってのみ存在するとの過信があった。醜の世界で育ち物欲の社会にあって、きたえあげられて来たBは、美が破壊された事実のみ信じられた。刺激があった。責める時、彼の内部に巣くう原始的な欲望が歓喜し、のたうちまわり、生きる事がたしかめられた。その時、はじめて女の△性▽が、Bの前に露出された。

彼が求める△美▽は、虚構の物で無く、裏返しされた、この眼で、この手でふれることの出来る世界のものだった。

――その書棚には、K誌やA誌、新刊されたS誌ETCの雑誌が、ぎっしりと積み重ねられてい

た。Bは、小説は嫌いだった。事実のみが真実と信じていた。だから蔵書された中で、告白の分野に、輝やかしい金字塔を打ち建てたと評されるK誌は、特に興味があつた。

お手伝いさんでもある、くみ子がやってきた。

「あの、これからどのようなプレイを」と彼女が言った。くみ子もK誌の読者であつた。とみも、そうだ。そして二人は運転手をふくめてサディストであつた。そのために特に高給をもって、Bの助手役としてやとわられていたのだ。

「風呂場の行事はすんだか」

Bは背のびをしながらかつた。

「はい、牝犬プレイが終つた後、すぐ後手しぱりのまま、よく全身を洗いました」

くみ子は、まだこうふんのさめ切れない調子で復命した。

「ションもよいが、後始末が大変だな」

「御主人様、とみさんばかりでなく、運転手さんも手伝いましたから、それこそ隅から隅まで」と、くみ子はふくみ笑いをした。

「あの野郎、抜目の無い奴だ。まあいいさ。」

御苦労賃のようなものだ。では、いつものように手錠、鎖のままここまで連れて来てもら

うか」

全裸で、足には両足首を二十センチ位の鎖でつなぐ足錠をつけられ、両手も手錠をかけられたままの、あさましい姿で冬子が引ずられるようにして部屋に連れ出されて来た。明るい電気をおそれるように冬子は身をこごめてうづくまつた。

「おい、犬め！もう八カ月余にもなるのに、何を恥ずかしがっている。これから、どの位身体がきれいになったか、検査をしてやる」
Bは、一緒に連いてきた運転手の松田に眼くばせした。

そんな事ならまかせてくれと、松田は冬子に近づき、白い裸を抱くなり、次の部屋に運んだ。

K誌の五月号・おもだか・しの作「直腸鏡検査の事など」に記された「一糸纏わぬ丸裸の両足を高く広げて眺めるのに丁度よい高さの所へお尻の穴を出されたまま、身動きも出来ないように手足を縛付けられて……男女の人達に見物されていなければなりません」という直腸検査鏡による初実験をしようとするプレイだった。

その道具をひそかに集め、如何に多額の金子が支出されたか、ともかく冬子が運ばれた

洋間には、産婦人科で使用される診察台に似た物が設けられていた。

シャンドリアのまばゆい光線に映し出されて不自由な手と足を必死に動かしてもだえる美女、山中冬子の姿体はまるで逃げ場の無い密室に迷い込んだ蛾のように哀れだった。

べつとりとひたいにまとわり付く前髪。むーとした体臭があたりに流れ、「あつ、あつ」という冬子の吐き出す息が、いっそう松田の、Bの、とみ、くみ子達の加虐心をあふり立てた。

小説・花と蛇のファンでもある松田が「手術の前にはハ断髪式Vが必要ですぜ」と、かすれ声を上げた。

「それは看護婦役にあたりにまかしといて」
くみ子が黄色い声を出した。

「とにかく、わしは直腸鏡で検査をすればよい」と、Bが医者を気取って落着きはらって言った。

「これでも昔は看護婦をしたこともあるんですからね」

底意地悪そうな眼を輝やかせて、なれた手付で、とみが注射器を取上げた。

「お前達、こんな経験はまたとないのだから充分に気を付けてやれよ」と、Bが皆に注意

した。

「御主人様、あつ……」冬子がいっそう身体を悶え反転させた。

「片足上げて、おれ達にシヨンまでやって見せた姐さんじゃないか、こうなったからにはすっかり御ひろうしちやいな。せつかくだ、時間をかけて、ゆっくり検査をしてやるぜ」松田は、どんらんな眼付で、あたりをうかがった。

「もう、もう……」

いまはなみだもかかれた冬子は、ただ、うつろな声を、意味もなくもらし続けた。

——ぐったりとした冬子の手と足の錠がはずされた。Bの指図の下に、皆の手によって台に移された。冬子の乳房のあたりが小波のようにかすかに揺れていた。



日数は早くも次の土曜の夜を迎えた。珍しくも冬子は座敷で御主人のBを待っていた。床の間を後に寝かされ、両足を広げて上に挙げ自分の手で、その足のヒザの後を抱くようにさせられ、腰が上を向く姿勢のままであった。

このアイディアは、松田の考案によるものだった。昼間に彼がやって来て、そう夜まで

してると笑いながら命令し、お手伝いさんのとみがそばで鞭を持って立った。松田は去り際に、手にしたホンコンフラワーを体（からだ）に差し込み、半日眺めているんだな。風流なものだ」とすてぜりふを残した。花は、冬子の悲

しさも知らぬげに、真赤な色を絶えず、あけ放された外から吹いてくる風にゆるがせていた。

Bが、帰ってくるなり「ほほう、人間花瓶か」

<告白>

浣腸とオシメと僕

並原新一



僕はこれまでに、いろいろなプレイを楽しんできた。社用で出張することが多いので、出張先のあちこちのホテルや旅館。また街角や映画館、大衆浴場、病院、マッサージ院……などで、オシメと浣腸のプレイを楽しんできた。

四、五年前までは、恥かしさに胸をときめかしながらデパートや雑貨店からズロースやパンティ、ブルマーなどを買ってきては、それを下宿の二階でこっそり穿いて、鏡にうつる女性化した自分の姿を楽しんでいた。パチンと締まる裾のゴムの感触を味わったあとで失禁に濡れる感じに、うっとりしていた。

そのうち、だんだんすすんで、いつのま

にか、黒、ピンクのメンスバンド。黒のストッキング、コルセット、ガーター、ピンクや黄のシュミーズ、スカートなどで中型のトランクが一杯になった。奇クにオシメや浣腸の記事がつぎつぎ発表されるうちに大人用のオシメカバーも三組、ビニールのパンティ型のオシメカバー、三〇CC、一〇〇CCの浣腸品なども揃ってきた。

鏡の前に一面、厚手のビニール布をひろげて、その上で浣腸責めにあって、あえぎながら、みじめな女ドレイは粗相した。ときには真白いズロースのままで、ときには恥しいオシメカバーをゴボゴボ鳴らしながら……。下宿の二階では、あとしまつが大変なので、せいぜい失禁遊びしかやれな

「——そう言って高笑いを上げた。

何カ月もケモノのような暮しをしているのに、まだ羞恥心が捨てられない冬子は恥辱に悶えた。

「おい、『K誌』の十月号に、お前のお便りが載ったぞ」

Bは上気げんな声を張あげた。冬子は瞬間何千人の読者の前に、一糸まとわぬ体を晒されたような気がして、さあっと青ざめた。すぐ今度は身体中が高熱をはったようになりふるえがとまらなかった。

「ところで、手記も後篇と行こうか」

Bはますます愉快そうな顔を見せ、ポイと差込まれていた花を抜き取って、部屋の隅に投げた。

冬子は人間花瓶からやっと解放され、そこにくずれ落ちた。

「おい、倒れるのは未だ早い」

Bは、松田が手にする錠を取り、冬子にすばやく足錠をつけ、手錠をかけた。

ぬけるように白い手と足に、ドス黒い錠をつけたまま、哀れな牝犬は、しじまのなかでよよと泣きくずれるのであった。

(終)

ったが、旅先のホテルでは、それこそ、自由、どんなはげしい、いじめ方でもゆるされた。

あるときは、五〇〇CCの浣腸をしてオシメカバーを当てたままズボンをはいて、ホテルのロビーを散歩し、帰りのエレベーターの中で失禁してしまったこともある。浣腸して女学生のブルマーをはいて、ビニールを敷いたベッドの中で洩らす感触にうっとりしたこともあった。また、あるときには、パンティ、ストッキング、コルセット、シュミーズ、スカートと完全に盛装したまま、ヘヤの壁にもたれて逆立ちさせられ(逆さ吊りの感じ)、そのまま粗相してしまうシーンも行なった。

しかし、これら独りでの遊びで物足りなくなった二年前ごろからは、誰か他人の目にふれて、思いきりケイベツされたり、笑われたりしてみたいという欲求がすくなくってきた。それまでは一人二役で、さまざまな粗相のシーンが演じられていたが、しかし、いざ他人(特に女性)の目にふれるところで行なうことは、かなり恥しく心臓がいたことだった。第一、たとえば大衆浴場の脱衣場で僕がズロース姿になるということだけでも、仲々抵抗があった。はじめは女マッサージ師のところへ行っ

て、パンツの下にズロースをはいているのをチラチラのぞかせるという工夫をした。若い女あんまは気がついていられないのに全く反応がなかった。少しがっかりする一方、気が強くなって、オシメカバーをはいて、その上からパンツをはいていった。そのときには、さすがにむこうから「何かご病気ですか」と尋ねてきたので「痔が悪いもんで」といってごまかした。あんまは同情して、いろいろ痔の治療のことで助言してくれた。僕は一思いにその若い女あんまに「僕はバンドやオシメをはくのが趣味です」といってやりたくなったが……さすがにいえなかった。

局部に湿疹ができたので皮膚科の医院へいったとき黒いズロースをはいていった。中年の医師が「そのベッドに横になって出して下さい」といった。若い看護婦が寄ってきてズボンを下げるのを手伝ったが、僕は恥しさを目を閉じていた。どんな表情で、そのズボンの下のズロースを眺めていたことか……

僕は、そのうち奇くで人工便のことを知って、それからは街角や電車の中、映画館の中などでも粗相あそびができるようになった。

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト

・・・・・△続増田みゆきの巻▽・・・・・

『みゆきのバースデイ』

辻村 隆

『みゆきのバースデイ』

『辻村隆様、永らく御無沙汰申しました。その後御健康の方は如何ですか。お伺い致します。お忘れではないと存じますが、辻村様のカメラ・ハントに、夫婦善哉として発表して頂きました増田です。

奇クはその後愛読し、特に辻村様のカメラ・ハントは、妻のみゆきともども愉しく読んでおります。二回許りぬけた時は、誠にガツカリした次第です。

さて、ズバリ言って、実は辻村隆様を拙宅に御招待したのでありますが、というのは十月三日は、妻みゆきの誕生日でありまして幸い日曜日でもあります。

妻の誕生日に、ボクはボクなりの変った趣好をこらして、必らずや辻村様があつと驚かれる様な奇抜な着想で、貴方をお迎えする所存であります。御招待するのは無論辻村様一人であります。何卒万障お繰合せ、是非是非御来訪下さいませ、お願い致します。

現住所は会社寮〇〇荘を先月出まして同じ豊中市内ですが別記の処へ引越しました。ここは独立した一戸建ちのアパートで、六帖と三帖二間に小さい勝手元もあり、以前よりは広くなっております。みゆきも辻村様のお越しを心よりお待ちしております。

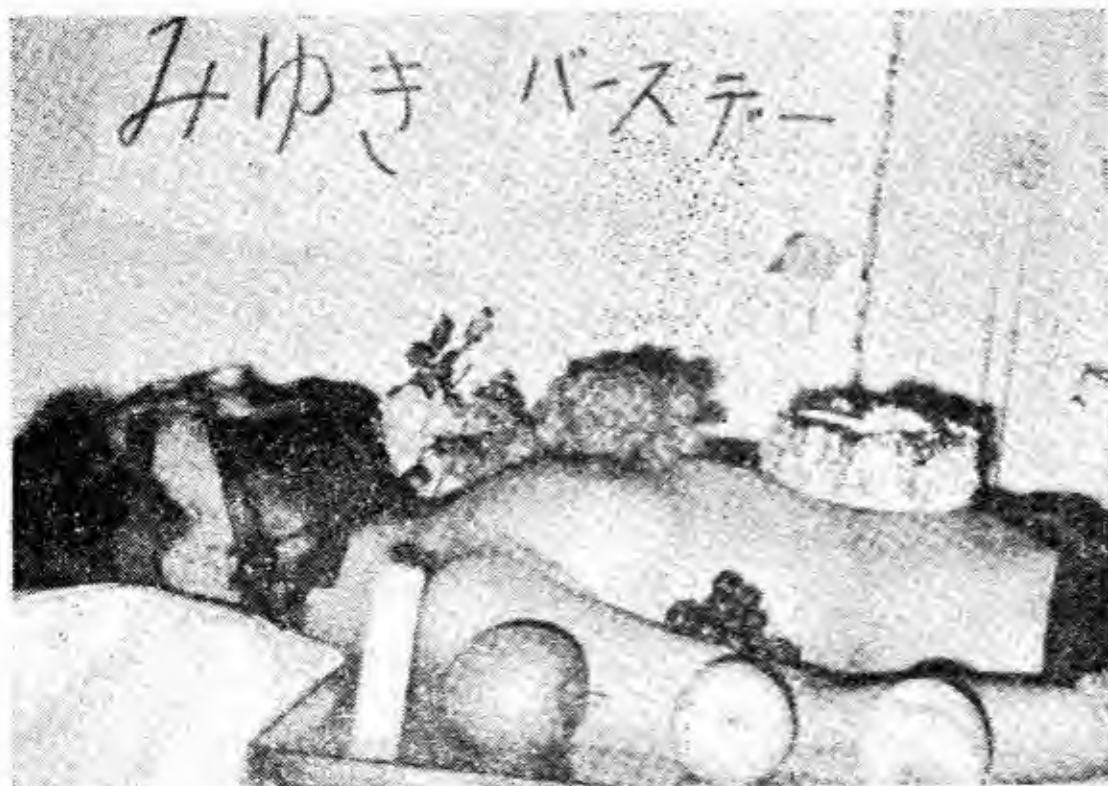
甚だ勝手なる申出であります。十月三日

正午ジャストに八号室の、ボクの部屋の扉を叩いて下さい。なお必らずお一人で来て下さることを希みます。十月二日までにお返事なきときは御来訪と受取り万端準備致します。種々のお心づかいなき様、手ぶらにて、カメラのみにてお越し下さい。ではその時にくわしく――。みゆきよりも、よろしくとのことです。

辻村 隆様

増田 生

こんな一風変った便りを受け取ったのは、九月も中旬を過ぎた頃だった。六五年七月号で、鼻責版「夫婦善哉」として、カメラ・ハ



ントに、増田喜代司、みゆき夫妻を紹介したが、二人に逢ったのは、春も浅い四月初旬だったから、もうかれこれ半歳近くなる。この半年の間、二度許り便り戴いたが、一度はカメラ・ハントの日の感想と喜び、妻のみゆきが意外に協力的だったことなど書かれてあっ

た。二度目は七月下旬だったか、彼等のカメラ・ハントが鼻責版『夫婦善哉』として掲載された直後だった。内容についての感想とチヨッピリ批判。もう少しフオトがあったらとそんなことが書かれてあった。多忙に紛れてつい返事を出しそびれて今日に到っていた。

夫婦プレイの方々は、かなり知合っているが、誕生日に招待を受けた事は未だかつてなかった。彼の文面によると、彼なりの変った趣好をこらして、私を招待するといふのだ。しかも私ひとり——私の好奇心を煽る一手段ともとれぬこともないが、尋常の手段では仲々重い腰をあげぬ私の性格を知った、心憎いやり方に、私もどうやら食指を動かさざるを得なくなった。もう一度カメラ・ハントの材料になるかも知れない。しかし、鼻責めの方は前回で食傷気味である。出来得れば、何か変った趣向であって欲しい。私は彼女の誕生日のその趣向に、あれこれ私なりの想像を働かすようになった。

× × ×
約束の日、私は彼との約束通り、カメラとストロボだけの簡単な準備で、少し早いに家を出た。阪急百貨店の地下へ降り、

みゆき夫人の誕生日の祝いと、果物籠をつくらせて、ビニールの籠を提げ乍ら、阪急宝塚線の各駅停車の池田行に乗り込む。彼の文面の最後に、住所と共に、詳細に描かれてあった地図を頼りに、曾根駅で下車すると、ひる前の駅前を地図を見乍ら歩いていった。

目指すアパートは、産業道路を横切って、二町許りの処にあった。瀟洒な外見のマンシヨン風の建物で、成程一戸一戸、入口が別になっている。腕時計を見ると、十一時四十二分。約束の正午より二十分足らず早い。ひるに訪れて、食事の心配をさせてもいけないとは思ったが、彼の指定する時刻が正午だから増田氏としては、その予定なのかも知れない。折角計画されたのだから好意に甘えてよからう。しかし、ここでボンヤリ立ってもしられない。私は五十米許り引返して、ガソリンスタンドの隣りの、パン屋に入った。入口の冷却機のケースに、いろいろの牛乳や、ジュース、ヨーグルトなど入れ、パンや、キャラメル、ガムなどを売る、最近よく見かける簡単な販売店である。カーテンの奥に、机が二つと腰掛けが五、六脚、一寸一服といった恰好にこしらえてある。ジュースとパンで、時間を計り乍ら、一休みし、煙草をふかして

いる。

「この団地へ、どなたかお見舞いですか」

気さくそうなオバさんが、私の果物籠を眺めて、もっともらしく声をかける。おそらくは、増田夫妻の顔もおなじみの店だろう。

「いや、チョット。誕生日のお招きを受けてね——」

「へえ、そうですか。近頃の若い人は、誕生日もなかなか派手にやりはりまんねんなあ」

オバさんは感心したように呟やいた。これ以上根掘り葉掘り聞かれるのも厄介なので、私はアイマイにうなづいて、金を払ってのろのろ立上る。店を出ると、店先までわざわざ出て、オバさんが私の行手を見送っている。

行先をつきとめたい、噂のタネにする好奇心からだろうか。私は辟易し乍ら、スタスタと歩く。目指すアパートの八号室、表札には正しく彼の氏名が金枠にさし込まれてある。

時間は十一時五十八分。二分間行んで、ジャスト正午、私は扉を叩いた。扉の小さい細窓が聞いて、眼が覗くと、スツと扉が外に開いた。緊張した顔に笑みを浮べて、増田喜代司が、セーター姿で私に一礼した。

猫のひたいほどの靴脱ぎが、一步踏み込んだそこにあつた。奥の間へはカーテンの仕切

りでへだてられている。

「遠い処をどうも……お待ちしておりましたよ。さあ、どうぞ、どうぞ」

肩がふれ合う許りの狭さの中で、彼は私の靴を壁にくり込まれた、履物箱に藏うと、しっかりと施錠して、さっとカーテンを開いた。

「呀っ！」

思わず私は、その部屋の異様な光景に、驚きの声を挙げた。

× × ×

部屋の正面には、真新しい白布が、部屋の壁一杯にはられ、首飾りや、腕輪、ネックレス、花のブローチ、ペンダントなどが、あちこちにあしらって止められてあり、白紙の一枚に大きく赤のマジックで「みゆき」と大書し、その横に、少しあがってもう一枚の白紙に、黒マジックで「のバースデー」と書かれた紙が、虫ピンでとめられていた。

その前におかれたテーブルに、みゆきは大字に裸身をさらして、両手をテーブルの脚に縛りつけられて仰臥していた。

私が部屋に入って、その姿にマジマジと視線を落しても、苦悶の眼を開けようとはせずじっと、その俣の姿勢を保っていた。

挨拶出来る筈はない、薄いなめし皮の箆口

具が、しっかりとみゆきの唇を蔽いつくしていたのであるから——。

「変った箆口具でしょう。誕生日に合うよう、四日掛りでボクがつくったのです。口に当る部分は、口中一杯になる程度の袋がりつけてあるんです。袋のあいだへかなりつめものしてありまして、これだけでも相当に口中を圧迫しますが、更に責め様とする時はこの表面のファースナーを開くのです。そして、綿や、布など少しずつ押し込んで行くと口中の袋は、徐々に更に拡大してゆきます。鼻に当る部分は丸く切取ってありまして、鼻孔吊上器で、ホレど覽の様に高々と吊り上げて、それをひたいのバンドに接続させ、頭部にかけるようにしてあるのです」

増田喜代司は、彼の創作にかかる、そのなめし革の箆口具について、半ば得々と説明した。口中を圧迫され、完全な箆口具によって閉塞され、更に鼻孔を拡大して吊上げられたみゆきは、切迫する呼吸のためか、すべすべした白い肌をかすかにケイレンさせ、豊かな胸を大きく波打たせていた。二つの胸の突起が、そこだけ生きものの様に、妖しくなまめかしく波打ち続けていた。

彼女の誕生日を祝う、大きいデコレーション

ンケーキが、彼女の脇の真上に泰然と安置されていた。りんご、なし、ぶどうなどの果物が、その白い肌の周辺に、また胸におかれて机上の、みゆきの首の辺りに、ホンコンフラワーが、さらに鮮やかな色彩りを添えていた。テーブルが正方形なので、みゆきのハミ出た首より上には、毛布や枕を重ね、白いカバーを被せて、彼女の頭部をささえていた。豊かな黒髪が白いカバーに長々と垂れて、その色彩の配色は、正に一幅のカラー写真を見る思いであった。パンティに変えて、黒なめ



抱してもらいません」

見とれていた私は、大慌てで、バッグからカメラとストロボをとり出し、直ちに装填すると、前後左右、また上部から、このポーズをカメラにおさめた。

「今日は、みゆきのバースデイなのです。ボクたち夫婦が、どんな愛情の交歓をするか、たのしみにしていて下さい。お見苦しいときもあるでしょうが、どうぞ我慢して下さい。今日の辻村さんのお招きは、実はみゆきの提案なのです。ボクが、バースデイに、奇抜な

しの革が、彼女の腰から下を蔽っていた。

「辻村さんの来られる前に、みゆきを飾っておこうと思ひましてネ。かなり前からこうして縛って、箆口具をはめてあるのです。このシーン、お撮りになりますか。お気に召さなかったら、解きますが……」

「いや、撮りますよ撮りますよ。もう少し辛

着想を思いついた時、どうせやるなら二人っ切りでは勿体ないから、ボクたちの、バースデイのプレイを、辻村さんに拝見していただいたらって家内が言い出したものですから。なにしろ、家内とのプレイを知っておられるのは辻村さんひとりですからネ。女って一度知られると、男のボクなんかより、反って大胆になるものなんですね。免も角、箆口具だけは外して、挨拶せましよう」

増田喜代司はウキウキと独りで喋った。すっかり私は気をのまれてしまつて、うなずくだけである。こうなったら、もう自由に彼等の演出に任すより術はあるまい。私は第三者の立場で、彼等の奔放なプレイを有難く拝見するだけでいいのである。

黒の箆口具を外すと、よくこんな大きな塊りが、可憐なみゆきの口中に入っていたものだ、感心させられた。唾液にぬれそぼれたそれは優に、傍らに転がっているリンゴの大きさに比例した。

ハーアーと大きく、二つ三つ息をついて、みゆきは一寸首をもたげ、私に視線を移してはにかんだ笑いを浮べた。それが口に出さぬ私へのアイサツであることはすぐ分った。私は無言でうなづき、黙って頭を下げた。下手

に喋ると、すでに熟したプレイの雰囲気がかわれそうに思えたからである。吊り上げられた鼻孔の辺りが、金具の跡を赤くつけて、少し腫れて痛々しかった。縛られた両手はその俤だった。

「家内が唯一つのテーブルを占領していますので、みゆきの体をテーブルと考えて下さい。この体の上で、乾杯とゆきましよう」

彼ははしゃいでいた。愉快で耐らぬという悦楽の境地にひたりきっている。茶棚を開きグラスを三つとバイオレットのリキュールをとり出して来た。始めて逢った、あの時のおどおどした彼、ハキハキせぬ彼は、今の彼からは想像も出来なかった。狭い乍らも愉しいわが家でのプレイという安心感と解放感が私の知っていた彼を別人に仕立て上げていた。

「さあ、やりましよう。ボクは酒は余り強くないんです。洋酒の甘いのなら少しはやります。辻村さん、こんなので構いませんか。そうそうビールも冷蔵庫にある筈です。もって来ましよう」

また、ソワソワと立上って、ビールをとり出してくる。実にこまめによく動く。

「みゆき——、動くところばれるからね。じっとしているんだよ」

妻に声をかけて、彼はみゆきの胸のブドウの束をとりのけ、その胸の谷間から胃のふくらみにかけて、曲芸のように三つのグラスを並べた。ねっとりとしたクレーム・デ・バイオレットが、鮮やかな紫をグラスに映して半分たらずつ注がれていた。

「みゆきのため乾杯して下さい」

「そう、いい奥さんのためにネ。特にプレイに理解ある君の最もよき半身のために乾杯」香りの高い、紫の酒をチビりと舐めて、私はグラスを、みゆきの肌になじかに置く。グラスはかすかに胸で揺れている。

夫はワインをグビリと一息にのみ、ついで妻のために注いだグラスの酒を少し口に含むと、彼女の首の下に左手を入れ、頭を抱えるようにして、自分の唇を妻の唇に近づけた。

唇がヒタと合って、私の眼前で、口移しに、タラタラと数滴のワインが、妻の口中にそそがれていった。何ともお熱いシーンである。

こぼれおちたしずくが、彼女の頬に糸を曳いた。その俤のくちずけは暫し続いた。私はいつしかカメラを握りしめ、そのエクスタシーの刹那に閃光を走らせていた。

やっと体を離すと、夫は紅潮した頬をテラテラと輝やかせていった。

「さあ、いよいよバースデイ・ケーキに点火しましょうか。その前に一寸手首が痛むそうですから、縛り直してやります。なにしろ、このポーズで三十分以上も経過しましたのでネ」

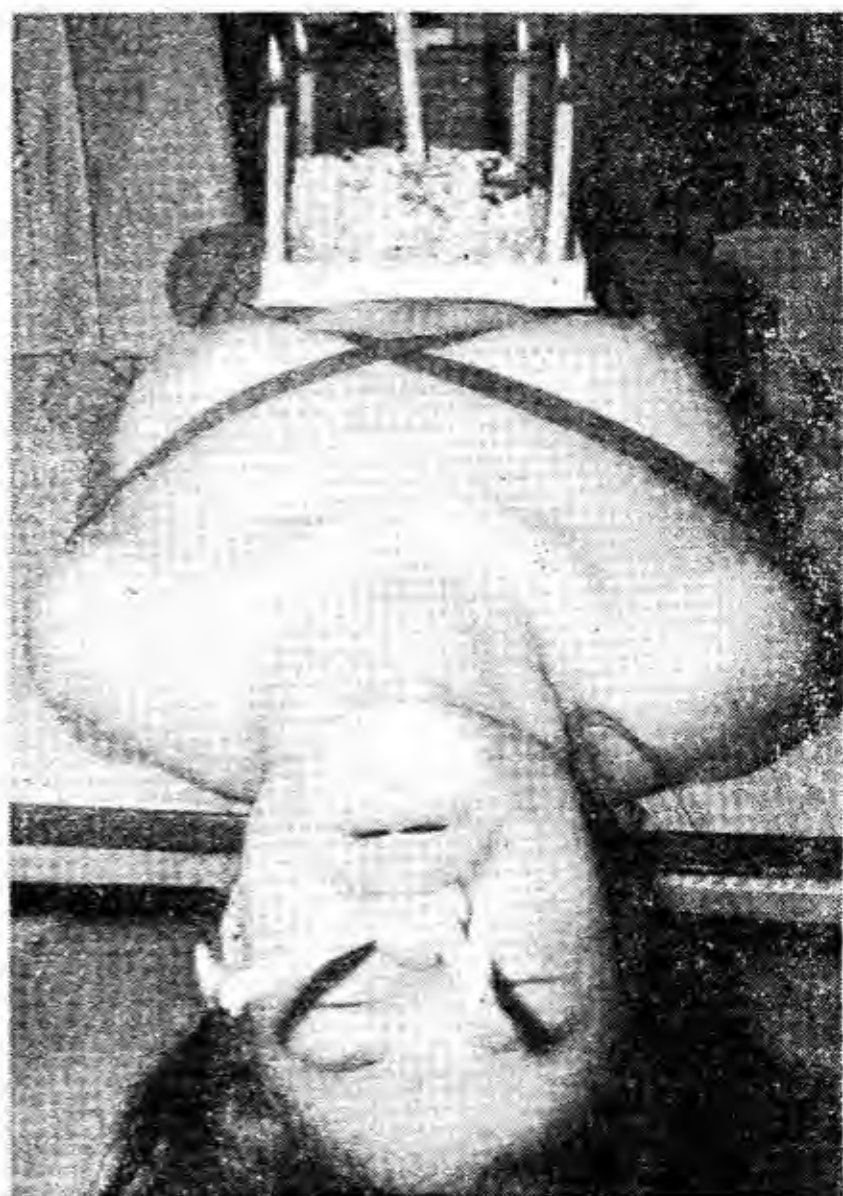
解き放たれたみゆきは、しきりに太腿の裏を揉んでいた。縛られた両手首よりも、大きく拡げていた両足の、机の角に当る個所が痛んだのに違いない。

机より立上る拍子に、まどっていた腰の黒のなめし皮がパラリと落下した。ハツとしたら、その下に、アンネの黒い粗い目のパンツを着けていた。しかしそれはお義理に蔽っているに過ぎず、あみ目を通して、すっかり肌ののぞける粗さだった。

柔かそうな黒い打紐を、胸で交叉して紐をかけ、簡単な縛りで、両手をそのまま垂らして抱くように机に寝かせると、彼はケーキを浅い箱に入れた。ケーキの中心にズブリと一本のローソクを立て、箱のまま臍の上におくと箱の四隅に四本のローソクを立てる。

暫らく思案していた彼は、このポーズがやや物足りないと考えたのか、やにわに、みゆきの首にあてがっていた枕の代用品を外した。ガクリと彼女の首が机の外に落ち、のど

が水平になって、ゴクリと唾のみこんだのが、のどの動きでみてとれる。頭が首で下って呼吸が苦しいのか、みゆきは少し肩をしかめる。首が、テーブルの角で痛いのだろう。しかし、痛いとは云わない。無言でそのポーズに耐えていた。首のささえを外した理由が分った。彼はみゆきの両の鼻孔に、鼻孔一杯のローソクを二本挿し込んで、素早くそれに点火したからである。ローソクは炎を上、斜めに立ったローソクからしたたる蠟涙は、



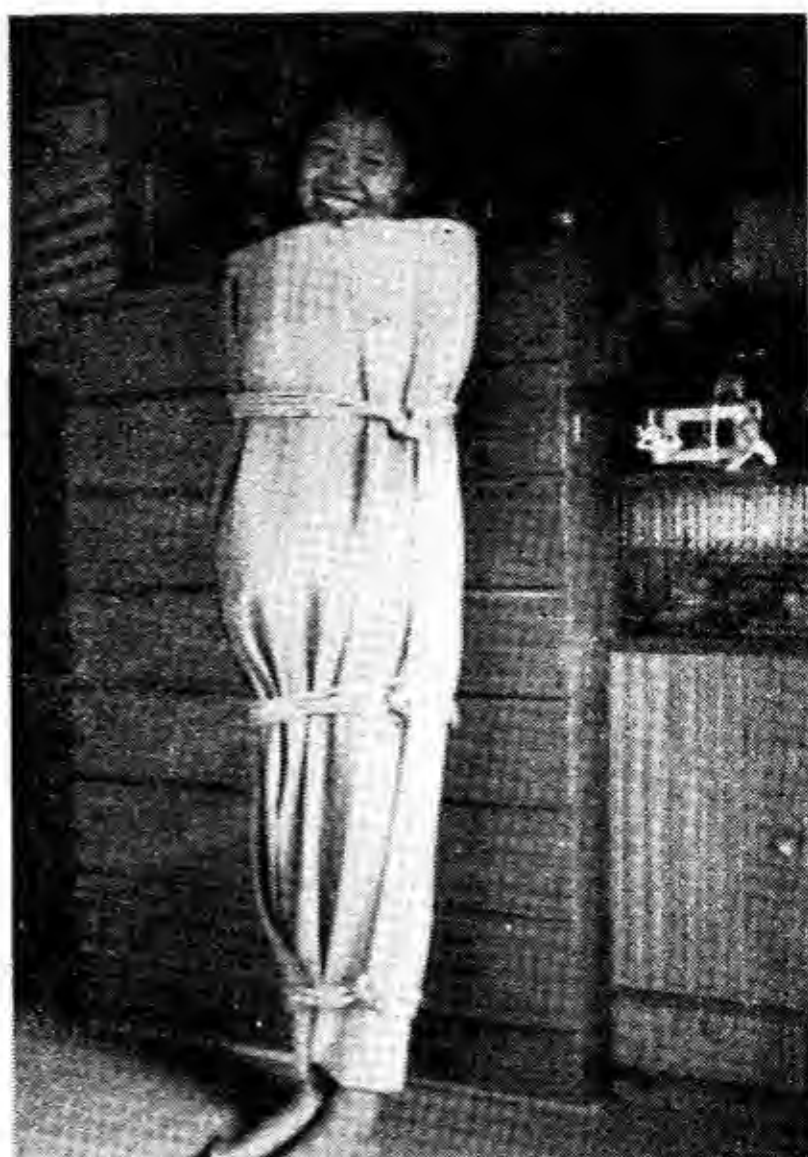
した。私のカメラが、そのポーズのあれこれをつまえたことは勿論である。ジリジリと燈心の焼ける音すら聞こえ、蠟の匂いが、徐々に部屋に充満する。彼はみゆきの鼻孔のローソクを抜きとると、左膝を立てて、みゆきのほんのくぼに当てがい、頭をやや抬げてラクにしてやった。私をチラリと見やると、すぐ視線を彼女の仰向いた鼻孔にうつした。両手に一本づつの点火したローソクを握り、鼻上十センチの辺りまでローソクを近づけると、二

彼女の黒髪をスレスレにかすめて、ポトポトとたたみの上に落下していった。腹上のケーキにも次に点火し、みゆきの体の七本のローソクにすべて点火し終ると、彼は歓喜の極まった溜息をついた。ハアハアと喘ぐみゆきのいきが唇から洩れて、部屋の静まった空気を圧

本のローソクは彼の手で縦から横になった。忽ちポトポトポトと、蠟涙は止め度なく、彼女の双つの鼻孔に流れ込んで行った。ウーツと動物的に呻いて、みゆきはその熱さに耐えている。熱さに首を振ると、蠟涙は、彼女の頬や、唇の上や、喉の下にしたり落ちた。彼の両手は首を振るみゆきの鼻をめぐって、実に巧妙に、ねらいすまして、鼻へ鼻へと注いでいった。半ばかたまった蠟涙が、つぎつぎ堆積して、鼻孔は、蠟によってふさがれてしまった。机上にのびた両手は或いは握りしめ、或いはぐっと指をそろせて、この鼻責に堪えていることをありありと示した。しかしみゆきは苦悶に声を立て、呻き、カラカラの口中に粘ばつく唾のみこんでも、やめてくれとは叫ばなかった。夫の鼻責に対し、気のすむまでやらせようとする、貞淑そのものの妻の意志がそこに汲みとれたのである。

私は彼女の可憐ないじらしさに胸を撃たれた。カメラとる手をとめて、その成行を注目していた。私自身、もうやめてくれと叫びたい気持ちを辛うじて自制していた。

彼としては、妻の耐え得る限界を知りたかったに違いない。彼の蠟滴をたらす形相は、既に嗜虐に憑かれ、私の存在をも無視してい



た。——俺の妻ではないか。俺がどうしよう
と、俺の勝手だ——そんな、ふてぶてしさす
ら彼のポーズから感じとられた。

鼻の辺りがすっかり蛆で蔽われ、やがて口
中へも流れ込もうとしていた。やっと彼はロ
ーソクの火を吹き消した。むしろ彼女より私
の方がホッとしたくらいだった。げにも凄ま
じいバースデイのプレゼントである。

続いて、腹上のローソクも吹き消すと、や
おら彼は私の存在に気付いたかの様に、ニヤ

揉んでやっていた。愛情の濃やかさを見せつ
けられて、私は柄になく照れ、内心辟易して
いたのであるが——。

今の彼は、涙に埋まった妻の、無惨なや
や蒼ざめた顔を、非情に見下していた。私の
内心を見すかしたかの様に、彼はフト振返る
と声をかけた。

「変ったでしよう、ボクも妻も——六カ月の
飼育の成果ですよ。妻はより虐められること
に歓びを見出しています。ボクはより責める

ツと照れかくしの笑
いを顔に浮べた。自
分の前後不覚さに気
付いたのであろう
か。

彼の妻に与える嗜
虐の様相が、既にか
つての六カ月前の彼
とは一変している事
に私は気付いた。あ
の時、逆吊りポーズ
にもハラハラして、
早々に抱き降すと、

彼女の赤くなった足
首を、優しく真剣に

ことに生甲斐を感じているのです。そして、
立場は往々に反対なのです。あの黒の笹口
具をボクに簞めた上、体を犂々と締めつけて
椅子に縛りつけ、鼻に、牛の鼻木を通して高
々と吊り上げて、ジワジワと一方の鼻孔へ蛆
涙を、いまボクがやった様に妻がボクにたら
すのです。ボクは残された一方の鼻孔で、辛
うじて呼吸しているのです。そうして一方の
鼻をローソクのしたたりでつめ終ると、火の
ついたローソクをもう一方の鼻に挿し込むの
です。ボクはいきがつまってしまします。そ
の苦悶の僅かの瞬間をカメラにとるのです。
ボクへのプレイは夜を徹して続くのです。責
められるボクも、責める妻も、夜明けと共に
ヘトヘトになって、泥の様に寝込んでしま
うのです。ええ、勿論毎日じゃとても体がつづ
きません。夜を徹してやるのは土曜口ぐらい
ですが。ボクも妻も、SとMとを等分に持ち
合せているのです。見合結婚でこんな素晴ら
しい妻を手に入れることが出来るなんて、と
ても想像していませんでしたよ。その点ボク
は本当に幸せな男です」

彼の眼は一転して妻の無惨な姿にそそがれ
た。その眼は先刻の非情な眸から一変して、
最愛のいとおしさを表わして、柔かくいたわ

る様にみつめていた。

「妻の撮った、ボクのMフォトです。ほれ御覧の通り、相当強烈でしょう。家内はこれを平然とやるんですよ。時にはボクを椅子に縛りつけ、口中に点火したローソクを立てて、鼻を吊り上げたまま、素肌にもムームー一枚引っ掛けて、近くのマーケットへ、買物に出掛けることだってあります。ボクは本当に死ぬ思いです。それなのに家内は、なお更悠々と買物しているのです。何も穿かないで、裸にムームー一枚きりですよ。ボクは家内がしやがんだり、風が吹いたりして、或いは見られやしないかと、ハラハラするんですが平気ですね。戻って来て、ボクが唇の周囲いっぱいに蠟を垂れ流し、懸命に火のついたローソクを口中で捧げているのを眺めて、ケラケラ笑うのです。その時の妻は、さながら、妖精か小悪魔に見えます。（私の可愛いダンナおりこうね。さあさあローソクをとってあげますよ。おとなしくしていたから、ごほうび上げるわね）そういつて矢庭に椅子に縛ったまま、うしろに倒すと、ボクの顔に馬乗りになり、ボクが窒息しそうになる寸前まで、ぐいぐい押しつけてくるのですよ。そんな妻ですよ。苦しくなって点火したローソクを吐出

して、うまく火が消えればいいが、タタミに落ちて、そのまま火がついていけば、これは一大事ですからね。いつも口中でローソクを捧げていますが、吐き出したくても、吐き出せないですよ。しかし、そんなブレイのあとは、家内に対するボクのお返しも相当なものですよ」

私はも早や、合槌を打つだけで、雄弁な彼にすっかり振り廻されていた。事実、ブレイの状態のまま、憑かれた様に喋る彼に、私の口をはさむすき間はない。

彼は妻を解いてやった。若し彼女がその気になれば両手はその尽なのだから、一寸体がかがめて曲げればスッポリ抜ける紐である。にもかかわらず、ブレイの作法を守って、みゆきは最後まで、夫のなすがままになっていた。解き放された彼女はユルユルと座ると、顔をこすった。ボロボロと蠟の残骸がはがれて行く。恰度それはパックしたあの、メリケン粉の塊まりをとる女性の姿でもあった。鼻をもむ様にすると、スポリと鼻腔の型のままで、蠟骸が、彼女の鼻から飛び出す。鼻腔粘膜でしめっているから、残ることなくすっぱりととれるものらしい。

「ああ、苦しかった……」

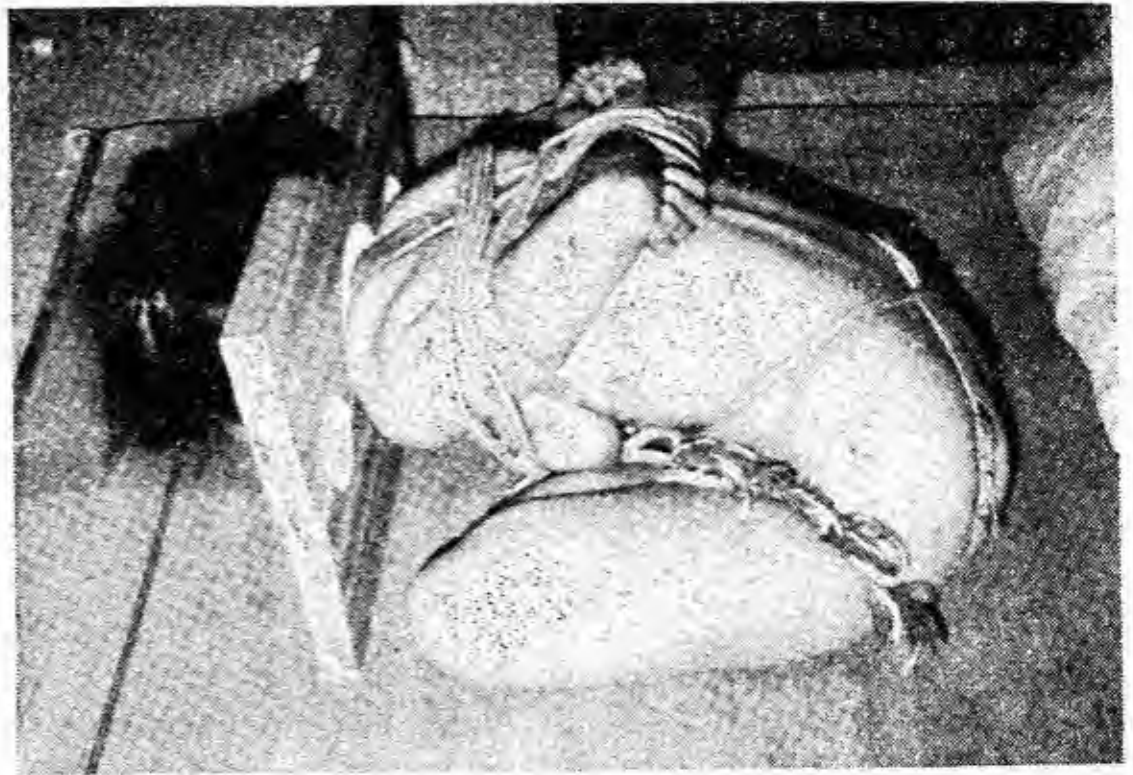
みゆきは誰にともなく呟やいて、タタミに落ちた蠟骸をガサガサかき集めていた。

「さあ、辻村さんのためにケーキを切ろう。もう一度、ホレ」

増田喜代司は机を部屋の中央に据え妻をうながしてアンネをぬがし再び机上に仰臥させた。紐や縄をかき集めると、みゆきの左右の手を、それぞれ部屋の隅へ、手首を縛って引き張り、両足も足首で縛って、引張った。机上で両手足を部屋の四隅に引っ張って吊られ、彼女は辛うじて腰で、全体の重心を支えていた。箱からケーキをとり出し、Vの字になった、体の回みへケーキをおくと、庖丁で静かに半分にケーキを切断する。更に四半分に切り、その一片を皿にとって、私に手渡してくれた。

「さあ、喰べさしてやるよ。旨そうだぞ」

彼は四半分の一片の、ケーキのスポンジの部分を持ち、クリームのかかった方を下にして、みゆきの顔へ、べたりと押しつけた。チョコが喉を塞ぎ、白いフレッシュバターが鼻を蔽い、絵具をぶちまけた様に、彼は、妻の顔をケーキでぐるぐる押しつけて撫で廻した。恰好よいデコレーションの花模様が無惨に崩れ渦巻きはへしゃげ、チョコは赤黒く頬に喰に



「さあ、辻村さん、家内と一緒にたべましよう。旨いですよ」

彼はかぶりつく様にケーキの一片を頬ばっていた。私はその光景に、流石にのどに通らない。一口切って嚙ると皿においた。呻き乍ら、みゆきは口をもぐもぐさせている。

更に追打ちをかける様に、彼はみゆきの黒髪を鷲掴みにして、顔一面のバターやチョコを髪で掻き廻した上、余った一片のケーキを握ると、彼は広げられた妻の両足の間に近づいていった。

ザブザブと勝手の方で、みゆきの湯を流す音がきこえる。風呂が附属していないので、一人用の小さい最新式の浴槽を買って来たのだという。四角い湯舟の上に四方を蔽うカーテンがあり、入浴中はカーテンを引く様になっている。何のことはない。小さいテントの中へ四角いタライを入れた様な恰好だが。これでもない困るそう。湯は瞬間湯沸器から出る様になっている。ケーキの半分が、流されていったことだろう。或いは顔や髪をこそげこそげ舐っているかも知れない。

「こんな移動風呂でもない困るんですよ。よく気がむくと身体に落書しますんでね。家内の書くことはいつもきまっています。

「ドレイ一号」なんです。二号はいませんが、ね。ボクはいろいろ書いてやるんですが、男の書くことは相場がきまっていますよ。御想像に任せても、当らずといえど遠からずですよ」

「本当にいいバースデイに招待して頂いて有難う。私もこんな変わったアイデアは始めてだよ。実の処、夫婦随が羨やましかった。最高のプレイをし乍らも、チャンと二人だけの心に通い合うものがあるんだね」

「ボクも家内には感謝していますよ。唯、結婚後まだ十カ月で、これでしよう。この先二年、三年経つとどうなるかと、その方が少し気掛りですね。思わず過激なプレイになってハッとするんですが、自制しなけりやいかんと思つてます」

私もその点は同感だった。夫も妻も等しくプレイに悦楽を覚えて耽溺し、その挙句のカタストロフが恐ろしい様に思えた。段々と嵩じてくると、現状では満足出来なくなる。更に高度へ、より強度へと進展する時、その結末の不吉さが予想されたりした。私も重ねて自重を促がした。

みゆきがバスタオルで下半身を包んで現われる。狭いアパートの一室、身の置き所もな

いのだろう。そのまま三面鏡に向って髪をくしけづり、化粧水で顔をうるおしている。シャンプーの仄かな匂いもかぐわしく、彼女の髪はぬれて黒々と長く輝やいていた。私はまもなく辞するつもりでいたが、そのみゆきの姿にふと、緊縛の一ポーズをとりたい欲望にかられた。しかし彼女も疲れているだろう。余り無理はいえない。私の思いがすぐ分るかのように、彼は妻に声をかけた。

「どう、疲れた？」

「ううん、別に……」

鏡を見たまま、みゆきは首を振った。若さがものをいうのか、タフな彼女である。

「余り緊縛のプレイはやらなかったから、辻村さんのため、もう少しやって見ないか？」

「どちらでも……」

肯定であろう。彼女の返事に渋滞はない。

何と想ったか、彼は薄べりをとり出してくると、余り広くもない部屋の中央にそれを拡げてのべた。素裸の彼女の手をとって、三面鏡から立たすと、薄べりの中央にまで連れてきて、彼女をゴロリと倒した。打伏した彼女に薄べりのはしを握って巻くや、ゴロゴロと転がす。薄べりで簀巻きにしたみゆきの身体を縄をしごいて薄べりの上からギュウギュウと

まるで、荷物でも縛るように、胸、太腿、足首の辺りと三方を縛り乍ら一本の縄でつないで行く。簀巻きにして、部屋の端から端へ、足で蹴り乍ら、転ばして行く。縄をぐいと握って、バーベルを上げる様に、うんと持ち上げ、どさりと置く。その度に頭だけ出した彼女のたおやかな黒髪が乱れて、髪が藻の様に顔にまとわりつく。抱きかかえて逆さにして見たり、両足だけを握って身体を折って見たり、簀巻きにしたみゆきと彼とのプレイは続いた。じんわりと抱きかかえて立たすと、みゆきが私を見てにっこりと笑った。結構彼女はこのプレイが楽しいらしい。縄をとくと、薄べりの中央で流石にぐったりとのびている。棚の上から彼の自家製の首枷をおろして来たが、首と両手の箝まる個所に、痛くないようフランネルが貼りつけてある。

「これは辻村さんに頂いたロープですが、よく使うので、ホラ、はしっこがこんなにはぐれてしまいましたよ。では緊縛をやりますから、手並みを見て下さい。どうもベテランの前でやるのは、気がひけるけど……」

そういう作ら、彼はロープを捌き、みゆきの両手をとって体を起し、高手小手にして犂と縛り上げた。両足はあぐらをかせて、

縛って股に通し、腹から胸へかけて、手馴れた縄捌きで縛っていった。胸と足の縄をしっかり結ぶと海老責めに近いポーズになった。首枷をパクリと二つに開き、首にはめると、観念した様に彼女は首を垂れる。処刑のシーンにも適用されそうなポーズである。私のカメラはしきりに光る。おさまりかけていた彼の血が、又しても奔放に流れ出したらしい。先刻机上で首にうけていたシートを、みゆきの背後におくと、黒髪を握って、身体を立てて、シートに倒れかけさせた。苦悶するみゆきの顔が正面にある。ねじれて上った両足の縄が、皮肉に深く喰込んで、半分埋まっている。彼は押入れを開くと、小箱をとり出し、それを開いた。ぎっしりつまったクリスの道具。その一つの、ニッケルの丸円椎形の曲った金具をとり出し、それにビニールパイプをとりつける。肛門科の医療器具らしい。長いビニールホースのはしを引張っていった、勝手元の水道栓につなぐ。

「辻村さん、その先をアーンヌスへ——。いいですか」

彼の声につられて、私の手は動く、ニッケル製の丸円椎形は苦もなく陥没する。その尖端に小穴が開いていることは勿論である。

冷めたいしずくが、薄べりに流れる。とぼれ落ちた水滴は、黒いシミをつくってゆく。三十秒、一分……。かなりの水量が流れ込んだに違いない。みゆきの腹部は心なしか膨れている。小さく出した水道でも一分の時間にはかなり注入されていることだろう。ポトポトしずくの垂れるビニールパイプを輪にし乍ら彼は戻って来た。円椎形金具をぬくと、パイプ内にたまっていた水が、チョロチョロと薄べりに流れた。まさか今日クリスタールが見られるとは思ひもかけなかっただけに、私は期待以上の成果に内心快哉を叫んでいた。

「辻村さんのカメラ・ハントで、美木乃々子さんのクリス・ラプソディを読ませて頂いてすぐクリスに興味をもち出しました。ボクのプレイの幅も広くなりましたよ。鼻責めは終始ついて廻りますが、近頃は、鼻だけではないボクを知ってほしかったんです」

「早く、早く解いて……」

みゆきが叫ぶようにいった。私達は二人掛りで大急ぎで縄を解き、首枷を外す。裸のまま、身をひるがえして、この可愛い小妖精は、トイレへ飛んでいった。

× × ×
私達は、先刻みゆきの仰臥していたテーブル

ルを囲んで談笑していた。すすめられるままにのんだビールが二本。殆んど私がのんだものである。増田夫妻は案外アルコールに弱い。彼女は生ビールなら小コップ一杯ぐらいなら飲むというが、瓶ビールは全然駄目だとのまな。生と瓶の違いは、ビール好きの私にしても、未だはっきり分らないが、そんなものだろうか。プレイを終ったあと、彼女が大急ぎで作ったオードブルは滅法旨かった。

くらげと胡瓜の酢のものに、たまごをあしらひ、それにパセリのみじん切りをふりかけピーマンとハムとチーズが形よく配列されていて、この気のきいた前菜が、二十四才の若い妻の手作りとは到底思われぬ配慮ぶりだった。みめよく才たけ、しかもプレイに徹して夫に愛されようと努める妻の姿が、こんなところからもそこはかとなく推しはかられたのである。

「赤ちゃん、まだ出来ないの？」

私がきくと、みゆきはポツと頬を染め、

「本当は欲しいんですけど、うちの人……」

そのあとを彼が引取って

「リングで産制しているんです。妻は早くうみたいというし、ボクもほしいんですが、何しろ、いま妊娠すると、来年はひのえうまで

しよう。ボク達はいいいけど、若し女だったら年頃になって困らないかと思ったりしてね。それで、来年四月ごろになったら、産制を解く予定なんです」

「でも有名な芸能人で、畠山みどりだって、田宮二郎の嫁さんだって、皆来年はうむらしいよ。稀少価値があってかえって、いいんじゃないかな」

「しかし、自分のこととなるとどうも……」

増田喜代司は頭を掻いた。

「どう、来年妊娠したら、妊婦フォト予約出来ない？」

「ええ、いまボクも、そのことを考えていたんです。三カ月ぐらいから、臨月まで、ずっと記録をとってゆきたいと思っていたのです。勿論みな緊縛フォトですが。毎月辻村さんも大変でしょうからボクがとります。気が向いたら、いつ来て頂いても結構ですよ。なあみゆき、いいだろう？」

「ええ」

彼女はうなづいていった。

「でも、そううまく妊娠するかしら……」

それは私も同じ考えでいたが、少なくとも産制の現在よりは可能性がある筈である。

或いは伊藤晴雨以来、未曾有の妊婦の臨月

逆吊りも、彼女なら応諾してくれるだろう。

心なしか、みゆきの瞳はかすかにうるみ一粒種の愛児をもうけて、いつくしむ母になった自分の姿を想像しているかの様に思えた。

歓待に思わず長居して、陽は既にとつぷり暮れていた。妊婦フォトの確約をして、私はアパートをあとにした。駅前までの暗い道を夫婦揃って送ってくれた。肌寒い夜気がはてった頬に快く、朧ろの空に、秋の月が、淡い

光を舗道に投げかけていた。

いい工合に、急行待避の梅田行各駅停車が停っていた。馴染みの駅員なのか、二人は改札を素通りして、ホームに並んで立った。

閉めてある窓を開いて、私は彼等と、車の内外で顔を見合せている。今更語る何ものもない。淡く、二筋、三筋、縄目の跡が、みゆき夫人の手首を、うっすらと染めているのに私は目を落して、愉しかった彼女のパースデー

イの招きの、プレイの数々を反芻していた。

つむじを巻いて、急行が通過する。窓から手を振る私に、二人は睦まじく肩を並べて、大きく手を振っていた。

忽ち小さくなってゆく、曾根のプラットホームに、二人の姿だけが、ガランとした構内にただずんで、いつまでもいつまでも手を振っているのが、小さく見え、やがてレールのカーブと共に、その姿は闇に没していった。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手に縛られた女囚が三角木馬に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫ぶ姿――。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

両足の拇指はくの字にそり反って激しい苦痛と羞恥に悶えぬく凄絶な女囚の海老責め。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白州の粗砂に引き据えられた女囚は高手小手首縄に絞られて竹のささらで、肩口を叩かれる。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

白紙で目かくしされた女死刑囚は土壇に仰向けに横たえられてい。白刃一閃、哀れ女囚の腹は。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

柔かい脛に算盤板のギザギザが喰い込むのに更に膝の上へ伊豆石をのせて非人が揺さぶる痛さ。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

白州の上の女囚がどす黒い捕縄で厳しく縛られ非人の手で竹の棒を縄目に捻じ込められて呻く。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

腰の乱れを必死に防ごうとする真白い足を八の字に開かせて足首に非情の縄をからませてゆく。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)

均整のとれた見事な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足をあらわに投げだして悶える女囚。

美貌で清潔感溢れる新人美木乃々子嬢の体当り演技と読者有志のセッティング並に責役出演とによって完成された「日本女性拷問刑罰集スチール」は、発表以来、同好者の間で大変な評判を賜わりました。座右に置かれるスチールとしては是非一組、お求め下さい。

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒 渕 嬰 一

△希臘神話の再編成▽

ビブリオテーケー さいへんせい

デイオニソス

ビブリオテーケー

希臘神話に於いて、テセウスとアリアドネの挿話は、アルゴ船遠征記のヤソンとメデイアの物語に幾多の共通点を持っている。

一方はクレテ島、他方はコルキユス（コーカサス）を舞台としているが、コルキユスはクレテ王国の植民地らしい。何方も王の娘に助けられて逃げ出す。ヤソンは竜を眠らせ、テセウスは怪物ミノタウロスを殺す。然も、ビブリオテーケー希臘神話百体に於いてアリアドネはメデイアの従妹であり、両方共アテネに關係する。多分、この両者は同一の事件の形を変えた伝承ではあるまいか。（突飛な話だが大国主命

と須佐之男神と須勢理姫の伝説が幾らか似ている。此の青年は蛇と蜂の難を免れ、姫と共に逃げ出すが、八上姫との三角関係もあって結婚生活は余り良くなかったらしい）

ビブリオテーケー

希臘神話に於いて、アリアドネは純情な少女、メデイアは実しいが気味の悪い魔法使いとして描かれているが、女は概して此の二面を持つものだし、それを両極端に分離してしまえば斯うなる事も起り得る。女に同情する側と、男を弁護する側が同じ物語を述べた結果は正反対になって伝わるだろう。

アリアドネとメデイアは共に恋に破れて東方に去った。ビブリオテーケー希臘神話では、アリアドネはナクソス島で葡萄酒神の妻になり、死後冠星座

に上げられたと伝えられるが、これは何を意味するのだろうか。但し葡萄酒神は線文字Bの解説に於いては紀元前千年頃には未だ有力な神になっていなかったらしいから、本篇の時代に葡萄酒神の信者が居たとしても、それは微弱な教団だっただろう。筆者は葡萄酒神と美と愛の女神（ヴィーナス）が共に東方から伝来した神で、ギリシャ渡来は何れも紀元前千五百年頃、即ち本篇と同時代であると思っている。アリアドネが星になったと言うのは遥かに去った事を意味するのではないだろうか。

テセウスはナクソス島附近の海面で、アリアドネを捜したが遂に見当らず、空しく帰っ

た。希臘神話の伝える処では、テセウスは無事生還の際に黒帆を白帆に替えて合図するという約束をエーゲウスと結んでいた。併しアリアドネを失った傷心の為に帆を替える事を忘れ、老王エーゲウスは黒帆を見てテセウスが殺されたものと思い、崖上から海中に投身したと言う。エーゲ海の名はこれに因るともされている。

併し此の話は余りにも童話的である。真相は政治的な意見の対立が惹起した政權交替だったかもしれない。それがクーデタの形で行われたか否か、エーゲウス王の死が不可避のものであったかどうかは知る由もない。

テセウスはミノス五十二世の暗殺を報告した。エーゲウス老王は、テセウスの生還を喜び、その勇氣に感嘆したが、ミノス大王の被害は褒めなかった。

「クレテ王国の国力は我々と違って一人の英雄に支えられているのではない。千年に亘る伝統と、蓄積された財力、確立されている組織にあるのだ。ミノス大王は死んでもその子が直ちに王位を継承する。クレテの軍事力は少しも減少していない。アッティカは再び、そして以前よりも激しく荒掠されるだろう」
エーゲウスは恭順を以て十八年間の基本政

策としていたが、今度ばかりは交戦の止むなきを決意した。太子アンドロゲオースの事故死とミノス大王の故意殺害とでは比較にならない。今回の難は幾ら貢納を積み上げても免れる方策はないだろう。次に起る戦こそは全アッティカの最終的解放か、又は完全滅亡の何れかを見る迄、結末に到らないだろう。而してエーゲウスの止むを得ず固めた決心と「クレテ王国恐るるに足らず」とするテセウスの積極策は常に相容れなかった。昔を記憶する長老達はエーゲウスに服し、新しい年代の者はテセウスを支持した。エーゲウス老王が死んでテセウスがアッティカの支配者になったのは斯かる情勢下である。果して偶然と言えるだろうか。

テセウスがアッティカの王になる為に非合法な手段を用いたとしても、その後にはける統治は、プルタルコス対比列伝の筆頭に掲げられる価値があった。強敵パラスを倒して全アッティカを統一し、アクロポリスの丘に神殿を兼ねた非常時用城塞を増築し、全族の精神的支柱には新しい神アテナを選び、城下の町はアテナと名付けた。希臘神話ではアテナ女神が幼少の頃、女怪パラスと戦って勝ち、その皮を剥いで鎧を作った事をも伝えて

いる。テセウスの功業の訛伝でもあろうか。

アテナ女神は新しい神ではない。併し有力な神ではなかった。本来は先住ペラスゴイ人の城壁守護神である。それが文化の防衛者、芸術の振興者として文武共に秀でた偉大な神に成長し、ギリシャ女神中最大の戦士としてオリンポス十二神の座に連る迄になった。イリアスにはアテナ女神が軍神を二度迄も打ちのめすM派向きの場面があるから、紀元前千二百年頃のアテナ女神は既に十二神の地位を確保していたのであろう。アテナ女神を偉大ならしめたものは、それを奉じたアテネ人であるが、ペルシヤ戦役以前のアテネには特筆するに足る英雄が少い。極端に言えば紀元前五百年頃迄アテナ女神の人氣を支えたのはテセウス一人だったとも言える。プルタルコスがロムルスと対比させたのも当然である。而してテセウスは、知性と、美と、武勇と、技芸と、威厳と、処女性を兼ねた此の偉大な女神の中に、失ったアリアドネの傍を求めようとしていたのではあるまいか。

「アケーヤ人よ。団結せよ。クレテ王国の支配を脱し、独立すべき時は来た」

テセウスはアッティカのみならず、全ギリシャに檄した。糧を積み、武器を集め、墨を

高くして備えた。

余談になるが、テセウスはアテネ建設の英雄として最高の名誉を与えられながら、一方では乱脈を極めた女性関係を徹底的に非難されている。神話的英雄と言うものは、美化されるのが普通だから、テセウスの場合も余程のものだったのだろう。アリアドネを始めとし、アイグレー、アンティオペー、ファイドラ、アナクソー、アイトラー、ペリポイア、フエレポイア、イオペー等の何れも高貴な女性を或は誘拐し、又は欺して手に入れ、子供を生ませては棄て、最後は五十才になった時に十二才のヘレネを捕えて来た。女性の敵と言う語がテセウスの為にあるようなものである。英雄好色と言うが、テセウスの場合は此の乱行から幸運を得ず、或る女は戦争の原因となり又はアテネ市の危機を招き、遂にはテセウス自身の没落と不名誉な死の原因となった。天罰と言うべきか。

・併し筆者は善意に解釈したい。

十七才にして又と得難き無上の初恋を失った男は、その生涯に如何なる影響を被るだろうか。然もテセウスの場合は絶対の危地から手を取り合い、助け合って遁れ出た伴侶を、唯一の過根から永久に失ったのだ。心の傷は

余りに深く、それを癒すべき心の友は遂に現れなかった。

テセウスは満たされぬ苦患の解決を戦場に求め、危険を忘れて馳駆挺身する。創業期の国家が必要とするものは暴勇の英雄であり、ペリクレス型の政治家ではない。テセウスは正に適任だった。されど、英雄の名声愈々高きと等しく心内の懊惱は深まる。筆者は其処に、女から女へと愛の遍歴を続ける孤独な英雄の姿を見る。噫、アリアドネ。今、何処に在り哉。生きてあれば、我が前に現れよ。全ギリシヤにテセウスの名の聞えざる隅とて無きものを。愛して果し得ざれば、寧ろ汝が剣もて我が心臓を貫き、永遠の責苦を終らしめよ。テセウスの慟哭はオリンポスの天に響けと轟き亘る。

アッティカが、戦備の充実に狂奔している頃、クレテ王国では先王ミノス五十二世ラダマンテュスの復讐が決意されていた。

国王と王后と第二王女が同じ日に歿したので人事組織は大幅に変動した。憲法に従い、王太子グラウコスがミノス五十三世として王位を継承し、海軍の統帥権と海神の祭祠権を兼ねた。此の即位は平穩に行われた。蜜族国家なら勿論、後世のローマ帝国でも斯うは行

かなかっただろう。ミノス王位の万世一系は千年に亘って確立されていた。

だが、新王ミノス五十三世グラウコスは、容姿端麗な貴公子という以外に何の特技も才能も無かった。従って政治や軍事の指導は自然と王族の合議制へ移行した。弟のデウカリオンが副提督として軍の実権を握り、妻のアンティオペーが祭祠を補佐した。グラウコスは飾り物に過ぎなかった。然も新王には子供が無かった。武勇のデウカリオンが野心を狭まなかったら寧ろ不思議である。王室は自然と王后派及び王弟派に分裂した。それが衝突に発展しなかったのは、デウカリオンの妃メラニッペーが王后アンティオペーの妹だったからに過ぎない。

王后に昇格したアンティオペーは地母神の祭祠長、迷宮ラビリンスの主宰者を憲法の規定に依って務める事になった。即ちクレテ王国の首相であるが、アケーヤ人は此の制度を理解し得ず、アンティオペーを「女王」と呼んだ。

デウカリオンの妃メラニッペーがアカレーの後を継いで内相兼警視總監に当る官職を受け取った。メラニッペーはアカレーと同年、即ち今年二十六才で、武技、体力共、故王女に劣らなかった。クレテ王国の婦人警官隊は

強力だったから、テセウスに数十人殺傷された位では弱体化する筈もなかった。併しメラニッペーはコルキウス出身の他国人で、アカレーの親衛隊から獅子迄引き継いだものの、前任者に較べ統率力で見劣りがした。

パーシファエー在世中に酷遇されていたエウクシノミアは、その才能を買われ、且つ第八王子の母という地位もあってアンティオペーの前職たる通産相兼港灣局長を譲られた。

アリアドネが去った後の海神巫女筆頭は久しく空席だった。牡牛の舞と学識と容姿と人望に加え、高貴な血統を兼備しなければならぬのだから、適任者は簡単に見出せなかった。エウクシノミアの姉デクシテアは今年二十三才で、一時はミノス五十二世の第四夫人だった事もあり、代理の資格で此の地位に擬せられた。デクシテアは独身だが処女でなかったもので厳密には不適任だったから、アカレーの元親衛隊中からモルパディアが低い身分にも拘らず拔擢を受けてデクシテアを補佐した。而してパーシファエーとアカレーが共に亡い今、アリアドネを迫害する者は居なくなつたわけであり、モルパディアはアンティオペーの命令を受けてアリアドネを搜索する責任者となった。彼女は十六才だった。

グラウコス、デウカリオン、アンティオペー、メラニッペー、エウクシノミアの五人で構成する最高会議は全艦隊のクノスス集結を布告した。

「アケーヤ人を絶滅せよ。最後の一人迄奴隷とするか、然らずば血の一滴迄絞り取れ。全アツテイカを焼き尽くせ。テセウスの首を海神殿に吊けて先王の恨を晴らす迄、帰郷を考へるな」

ミノス五十三世グラウコスは、優美な姿に似ず激越な口調で演説した。

艦船の整備、戦略資材の集積、ギリシヤ本土の偵察其他の準備は一年を見込まれ、作戦発動は明くる紀元前一四九六年夏と予定された。使用兵力は三層機雷艦二百隻、輸送船三百隻、快速艇、給水船、雑役船等百隻。戦闘員四千。艦船操縦員及び後方勤務員六千。機雷奴隷及び軍用奴隷六万。計総人員七万でこれに要する軍需物資は食糧、兵器、甲冑、矢、膠漆、油脂、薬品、皮革、金属、被服、布地、木材、塗料等一年分五万噸が用意された。エーゲ海の風雲愈々急を告げる。

併し筆者は今此処でクレテ王国軍のアツテイカ進攻を述べる事が出来ない。愛すべきアリアドネの足跡を追ひ、その辿り行きし運命

を眺めなければならぬが故に。

アリアドネは眼を醒ました。白昼の光が眩しかった。併し彼女の意識を呼び起したものは視神経ではない。それは騒々しい群衆の歌声と、足踏み鳴らす音だった。

疲れ切っていた。未だ手足は動かさなかった。それでも記憶は蘇って来た。

海水との死闘。何度も溺れかけながら、遂に泳ぎ着いたナクソス島の無人岬。其処で疲れ果てた体を無理に動かし、他人に見られたくない仕事を為し終えた。ミノス五十二世の首を焼き、灰はカルキオペーの骨を納めた壺を開いて混ぜた。アリアドネは父母の骨を合せた壺を再び密封し、人影の無い岬に埋めて目印の石を積んだ。これだけの事を終ると、アリアドネもコルキウスも海岸の平地に這い出るだけの力しか残っていなかった。時刻は五月五日の夜半を過ぎている。朝から何も飲食していなかった。二人は何方からともなく倒れ、抱き合せて意識を失った。それから何の位経っただろうか。

嬌声、歓声、それに歌うような声が渦を巻いていた。リズムに乗った足音。少くとも数十人の気配がする。何事が始まっているのか。「何時迄眠っているの、罰が当たるわよ」

「さあ、立って、わたし達と一緒に踊りなさい」

「いくら疲れたからと言っても、それだけ眠ったら癒るでしょう」

突然、顔の上で幾人かの女の声が呼び掛けた。余り歯切れの良くないアケーヤ、ギリシヤ語だった。同時にアリアドネは三人程の手で引き起された。鍛えてある筈の体が激しく痛み、関節が音を立てた。見廻すと十人程の女に囲まれている事が解った。

女達の年齢は不揃いだった。中年女も若い女も居る。一人は確かに老婆だったし、少女も二人居た。服装は一樣に貧しそうだった。何の飾りもない短い単衣で、部分的には継ぎ布が当ててあった。髪型は皆同じく、単純に後へ梳き、束ねて垂らしていた。何の女も陽気で明るい顔をしていた。悪人ではなさそうだった。併し眼だけは酔ったような、何かに憑かれたような色に見えた。

アリアドネは自力で立とうとしたが、膝が崩れた。前に両手を突いた。

「駄目ねえ。ではこれを飲みなさい」

三十才位の女が大きな把手アンフオーラ附壺を押しつけた。中味を確める隙はなかった。無理に注ぎ込まれて口から溢れた。粗製の葡萄酒らしかった。

った。それは疲労と空腹を救う力があつた。アリアドネは息も継がずに飲んだ。更に、小麦粉を焼いただけの、種を入れてない固パンが与えられた。漸く生氣を取り戻して周囲を見ると、傍ではコルキュネが揺り起され、同じような土器を唇に押し当てられて喘いでいた。

アリアドネもコルキュネも、下着だけの半裸体だった。袖も裾もない、袋のようなものを想像すればよい。腰に結んだ牛の膀胱袋には燧石、薬品少量等、防水を要する物と共に、亜麻の上着も一枚入れてあつたのだが、取り出して着る隙がなかった。此の他に天体観測用の小型経緯儀。アリアドネの金腕環二本。コルキュネの銀腕環二本。これがクレテの元王女主従に残された全財産だった。

「どう。元気になって」

土器を持った女が微笑しながら言った。他の連中は余り関心がないらしく、葡萄酒を一口宛飲むと、妙な手つきで踊りながら歩み去った。

「ええ、有難う。でも、此処は、何処なんですか。そして貴女方は誰なのですか」

アリアドネは標準アケーヤ語で尋ねた。途端に相手の女は驚いた顔をして後退した。

「誰かって、では貴女達二人は紛れ込んだ他国者なのね」

アリアドネは、突然の変化を理解出来なかった。

「他処者が入ってはいけない所なのですか」

「知らなかったのね。わたし達は狂乱女アイナデス。新しい神、葡萄酒神ディオニソスの信者なの。不信者がわたしたちの密儀を見たら必ず殺されます。でも今すぐ信者になるなら良いように取り計ってあげましょう。貴女達は言葉も綺麗だし、悪い者ではなさそうだから」

アリアドネは、安心よりも知識欲が先だった。何事も聞きたかった。

「葡萄酒神ディオニソス。それは何んな神様ですか」

聡明で学識を極めたアリアドネだが、無邪気に過ぎて、社交のような技術は何も知らなかった。後で聞いていたコルキュネが逼って来て抑えた。そして余り上手でないアケーヤ語で話を引き取った。

「信じます。葡萄酒神ディオニソスという神様ですね。拝みます。どのように拝んだらよいか教えて下さい」

そう言うってからアリアドネを振り返り、ミノア・クレテ語で諭した。

「此の人達は気が立っています。問い返した

り逆ったりしてはなりません。言う通りにして下さい。あとは何とでもしますから」

処が三十女は、アリアドネ以上に単純だった。入信者の獲得を手離しで喜んでいるように見えた。

「嬉しいわね。一度に二人も仲間が増えるなんて。貴女達が踊りの上手なら、もっと嬉しいのだけど。わたし達の神様は愛と平和と平等。それは陶酔を授けて下さいます。わたし達は、すべてを神に捧げて踊るの。それが全部なのです」

「踊るのが、すべてですって」

「そう。あれを御覧なさい」

指す方を見ると、百人以上の者が幾重にも輪を作って廻りながら踊っていた。大半が女だった。男も少しは居たが少年が多かった。母親が連れて来た子供だろう。

輪の中央に低い土壇があり、背の高い、髯だらけの中年男が、音頭を執るようにして踊っていた。

「踊れ踊れ、踊りこそ愛と平和、踊る者に憎悪や不和はない。踊りは神の嘉納し給うものなるぞ」

大きな声が、騒々しい中から聞き分けられた。鬚の男は群衆の陶酔を引き立てていた。

「踊れ踊れ、古い世界は間もなく亡びるぞ。」

踊る者のみが神の怒を免れて新しい世界に生き残るのだ。邪念を捨てて只踊れ」

アリアドネは此の虚無的な狂乱の中に、何か一本、骨が通っているのを感じた。

踊る環の外側には、幾箇所か木の壺が置かれ、粗製の葡萄酒を満たした甕や、麦粉菓子盛った鉢が載っていた。踊り疲れた者が時々環を離れて壺に近寄り、飲食したり休んだりしたが、何れも間もなく踊りの中に戻って行った。アリアドネ達が倒れていた場所は偶然にも一つの壺の横で、明るくなってから踊りに集った狂乱女達は、二人を行き倒れと思わず、踊り疲れて眠っている仲間と勘違いしたらしい。

踊りには一定の旋律があった。併し手振りや足拍子は不規則だった。各人が勝手な動作で踊っているようだった。共通なものは踊るという意志だけみたいに見える。

「踊り方は決っていないのですか」

「ええ。自分の好きに踊ればいいの。わたし達は毎日の午後から日没迄此処に集って踊ります。貴女も踊りなさい。そうしたら夜になってから神様の前で信者にしてあげます」

アリアドネは微笑しながら立ち上った。

「解りました。踊らせて戴きます。踊って、神様が喜んで下さるなら幾らでも踊ります。でも此の人は疲れているから、もう少し休ませて下さい。わたしが二人分踊ります」

「二人分ですって。そんな踊り方が有るの」「わたしの踊りが二人分に足らなかったら、首でも腕でも取って下さい」

アリアドネは、軽く跳躍して関節を調整した。鍛えた体は柔軟性を回復していた。

「コルキユネ。見て。わたし達の生命を救う踊りですよ」

クレテ・ミノア語で言うと同時に、踊る環の一角に飛び込んだ。牛背で見せる旋舞を地上で演ずる事はアリアドネにとって遊戯に過ぎなかった。併し始めて見る者には正に神技だった。アリアドネは宙に転回し、地を側転し、急旋しつつ舞踊した。狂乱女達は見る間に陶酔を醒まされ、踊りの環を崩して少し宛アリアドネの周囲に集りだした。間もなく約半数の者がアリアドネを、厚く囲む環を作った。アリアドネが一旋する毎に拍手が起り、歓声が湧いた。アリアドネも自身の踊りと、その効果に酔っていた。

牡牛の舞が一区切りつくと絶讃の嵐が浴びせられた。先刻の三十女が走り出てアリアド

ネを抱き、手を把りながら皆に言った。

「わたくしが入信させたのよ。こんな素晴らしい踊り手を信者に迎えるなんて、今日は何と佳い日なこと」

群衆は漸く元の踊りを再開した。

「わたしはマイアと言います。解らない事があつたら何でも聞いて。わたし達の掟も教えてあげましょう」

アリアドネは、コルキユネから亜麻の上着を受け取って被り、腰帯を締めた。

「有難う。服を着終つたら、もう一度踊りましょう」

マイアは此処で始めて気が付いた。

「上等な服を持っているのね。それに腕環も立派。言い忘れていましたが、わたし達は持物全部を神様に預け、皆で一緒に使う事になっているのです。悪いけれど、その腕環は預らせて下さい。あとで神様の前へ持つて行って捧げましょう」

アリアドネはコルキユネを振り返った。コルキユネは難しそうな顔をしたがアリアドネは素直に決心した。

「神様が望んで居られるそうです。コルキユネのも出して頂戴」

四本の腕環が揃えて差し出された。マイア

は恐る恐る受け取り、弁解するような説明をした。

「わたし達の仲間、穀物、魚、鳥など、自分の出せる物を出し合い、葡萄を栽培し、選ばれた女達が葡萄酒を作り、誰とも争わず、誰にも税を納めず、一日の半分は、此処に集つて神様の為に踊るのです」

言いながら、マイアはコルキユネが持っている残る唯一の財産を発見した。天体観測用の経緯儀だった。

アリアドネとコルキユネが服装を整えている隙に、経緯儀はマイアの手に移っていた。

マイアは「持物全部」についての了解を得たものと判断したし、アリアドネは経緯儀のよき素材価値の少い道具は衣服と同様に見逃されたと考えていた。気附いた時、マイアは既に踊る群衆の渦中にあり、微妙に調節された精巧な機械は踊り手の頭上で乱暴に振り廻されていた。アリアドネは胆を潰した。

「それだけは許して下さい。お願いだから振り廻さないで」

人渦を押し分けて追いかけた。併し踊り狂う群衆の壁は厚く、マイアは全然聞こえない風だった。狂乱女なるものは、一旦踊り出すと簡単には止められないらしい。

それでも何とか追い着き、捉まえた。

「返して下さい。貴女達には何の価値もない物だけど、私にとっては命の次に大切なものなのです」

マイアは承知しなかった。

「持っている物は信者の誰が使ってもよいのが、わたし達の掟なのよ。離して」

経緯儀は四本の手で揉まれ、回転部が軋んだ。此の儘では分解してしまう。

踊りの環が切斷された。争い合う二人の廻りに人垣が出来た。

「喧嘩は止めなさい」

「掟に背いて勝手に争うと、何んな罰があるか知っているでしょう」

周囲から呼び声が上がった。だがアリアドネは経緯儀だけは見離せなかった。迅速な判断で機械を離し、脾腹を衝いた。手から落ちた経緯儀を上手に受け止めた。マイアは脇を押えて地に崩れた。

「御免なさい。説明している隙が無かったのですもの」

アリアドネは左手に経緯儀を持ち、右手でマイアを抱き起そうとしたが、既に不穏な空気が充満しているのに気付かぬわけには行かなかった。群衆の憤怒はアリアドネ一人に向

けられていた。

狂乱女達の叫喚と共に数十本の手が襲いかかった。一瞬早く危険を察したアリアドネは地を蹴って群衆の人垣を跳び越えていた。その俛、驚愕の声を後にして突っ走った。追って来る気配は解ったがスタートに大差があった。アリアドネは駿速。充分に森の中へ逃げ込める自信があった。「暴力」「不和」「強欲」「不信者」などの罵声を忽ち引き離して疾走した。

だが、後方では別の人渦がコルクユネを押し包んでいた。

「王女様。逃げて下さい。早く」

コルクユネの声が聞えた時、アリアドネは絶対確実な逃走を諦めた、経緯儀を地面に下し、追って来る群衆の方に歩み出た。狂乱女達の憎悪に身を委せた。襲いかかる真中に坐り込んだ。四方から撲られ、蹴られ、倒れた上から踏みつけられた。亜麻の上着は引き千切られ、髪は乱れに乱れた。

幾人かの狂乱女は腰帯を解いていた。アリアドネは両手で顔を掩いながらも指の間から外界を眺める余裕があったから相手の目的が解った。併し抵抗はしなかった。一人が背中に乗った時、自分から両手を後ろに廻した。

見る間に両手にも首にも紐が巻きつき、締めあげた。引き起されて胸も腹も縛られ、更に転がされて足も膝も縛られた。アリアドネは縛られた経験は何回か持っていたが、これ程大勢の集団暴力に曝されたのは始めてだった。それでも相手の大部分が不慣れで然も拙劣である事を見抜く事が出来た。だが、質を問題にしながらもよいだけの量があった。狂乱女達は腰帯を幾本も繋ぎ合わせていた。全員がアリアドネの何処かに手を下さなければ済まない位に興奮して見えた。一呼吸毎に新しい拘束が胸や四肢を圧迫した。糞虫の如く縛られ、拗り投げられ、蹴転がされた。群衆の熱気が漸く遠退き、気が付くとアリアドネとコルクユネは中程度の檜の木を背中合せに狭み、太い蔓で頸から足先迄、隙間もなく縛られ、締めつけられていた。これだけの仕事を終った狂乱女達は見張りも残さずに彼方で踊り続けている。

「王女様」

コルクユネがミノア・クレテ語で呼びかけた。背中合せの位置から首も振り向けない状態にされているので、小声で話す事は出来なかった。

「王女様と呼ぶのは、止めて下さいな。もう

只の女になったのですから。それも奴隷以下の、捕虜でしようか。囚人でしようか。斯んなに縛られてしまつて」

アリアドネは、僅かに動かせる肩を揺すった。併し高い綺麗な声は平常通りだった。果して落着いているのか、自暴自棄なのか。

「斯んな場合に冗談は仰言らないで下さい。此の俛では確かに殺されますよ。わたしは動けません。でも王女様なら御自分で縄脱けが出来になるでしょう。わたしの足では逃げ切れませんから王女様だけで逃げる工夫をして下さい」

コルクユネは、焦っている上に、幾分か腹も立てていた。併しアリアドネは快活に笑った。縄目を衣裳にしか感じていないようにさえ見えた。

「又、王女様と呼ぶ。今度言ったら、もう返事しませんよ」

「では何とお呼びしたらよいのでしょうか」「アリアドネと呼び棄てにして下さい。わたしも人前ではコルクユネを、お母様と呼ぶ事にします」

アリアドネの言う事は、余りにも場違いな感じを与えた。コルクユネは我慢出来なくなつた。

「呑気に落着いている場合ではありません。あの連中は氣違いの集りです。昼の日中から集って踊り狂ったり、葡萄酒を浴びる程飲んだり、何が愛の神でしょう。わたし達二人を此の様な目に遭わせて平和の教義などあるものですか。どうか真剣に逃げる工夫をして下さいませ」

コルキユネは腕いたが幾十重にも巻かれた蔓は緩む氣配もない。

「余り動かないで頂戴。わたしだって蔓が喰い込んだら痛いよ。幾ら鍛えてあっても体が青銅になったわけではないのだから。物を言う度に胸が苦しいの。息をする毎に咽喉が締るみたい。解く氣なら二人が調子を揃えて同時に息を吐きながら揺すらなければいけません。無駄な事は止めましょう。わたし一人なら、その氣になれば脱けられるかもしれませんが。でも、斯んなに沢山縛られているのだから朝迄かかるでしょうね。それに二人は同じ木に縛られているのだから、わたしが解こうとして動いたらコルキユネは死ぬ程の酷い目に遭うでしょう。コルキユネを残して一人だけ逃げるような事は出来ませんし、わたし達を朝迄放っておくとも思えません。然も、わたしは狂乱女マイナデスという人達を只の氣違いと考

える事は出来ないのです。話し合ったら解って貰えそうな、それ処か、とても良い人達のような氣がするのです。聞いて下さいな。あの人は、踊っている最中は本当の氣違ひみただけけれど、踊りを止めた時は正常で善良な人に戻るようによい見えます。葡萄酒に酔っているのではなくて踊りに酔っているのですね。

狂人の集りとするには、マイアの言う事など論理的であり過ぎます。踊り狂って狂乱の中に解放感を求めるなど、確かに正常でないかも知れませんが、あの人はわたし達クレテ人と文化程度も思想水準も違うという事を考えなければなりません。狂乱女達マイナデスの大部分はアケーヤ人の中でも一番下層で然も遅れた者なのでしょう。それも何か恐いものに追われて来た人みたいに見えます。高尚な学理で説いても駄目です。不和、敵対、恐怖、虚無。

そう言ったものを心内から除くのが目的なら踊るのが、一番良いかもしれませんよ。多分あの人は何か大きな悩みか心配があつて、それを免れる手段として踊る宗教を選んだのでしょう。御覧なさい。信者の大部分は女です。男は理性的な上に、自力で解放を試みます。それだけの力を持っていますからね。そして成功しなかったら宗教に遁れる前に斃れ

てしまいます。あの人は踊るのと同じ位、熱心に一日の半分は働くのではないかしら。多分夜になったら踊りを止めるでしょう。そうしたら充分に話し合つてみたい。わたし達が許されるように説明するだけではありません。葡萄酒神ディオニソスの事をもっと知りたいのです。今でこそ信者百人位の小さな団体だけれど、何か偉大な力と真理を秘めているように思えます。その内に全世界を掩うような宗派に成長するような氣がしてならないのです」

アリアドネは繩脱け能力の限界を試そうとしなかった。縛られていながら、冷静に観察し、慎重に分析した。コルキユネはアリアドネの意見に賛成したわけではなかったが、三十五才で身体も固くなり、元來が肥満形で自ら脱出する事は思いも寄らなかったから、諦めてアリアドネの思惑に休を預けた。

夕闇の中に焚火が燃え上った。沢山の炬火が近寄つて来るのを見て、コルキユネは焚火の恐怖で戦慄した。併しアリアドネは事態を樂觀して泰然と待ち受けた。果して狂乱女達マイナデスはアリアドネとコルキユネを極に縛り着けてあつた蔓を切り、足の縛を解いた。昼間の縛られる時に被つた乱暴の限りに較べ、今は幾らか丁寧な扱いで、後ろ手と上半身の縄目は

その俣だったが、引き立てるにも撲ったり叩いたりせず、一言の悪罵も言わなかった。

焚火の傍には足台のようなものが置かれ、鹿皮を敷いて、よく肥った中年男が掛けていた。褐色の髯が顔中を掩い、余り上品ではないが、逞しさと優しさを兼備した雰囲気と漂わせていた。アリアドネは踊りの音頭執りと同じ人物である事に気付いた。足台の手前、地に膝をつき、出来るだけ丁寧に拝礼した。コルキユネも渋々それに見習った。

「私はオーナロスだ。皆は、バツコスとも呼ぶ。私自身は神ではないが新しい神の布教者だ。私の神は愛と平和とを愛する葡萄酒神で、私はその神の御意志が解る。だから君達は私の間に正直に答えなければならない」

正確なアケーヤ・ギリシャ語だった。併し余り威厳のある声ではなかった。寧ろ柔和な感じがした。アリアドネは、話せば解りそうな相手だと思った。素直に頭を下げた。

「アリアドネと申します。此方に居ますのは母のコルキユネ。アケーヤ語が余り解りませんから、お尋ねの趣はわたしの方へお願い致します」

オーナロスは頭を振った。

「母親ではないだろう。その程度の嘘なら顔

を見て解る。併し善意の嘘は咎めまい。でも

君は入信を希望して踊りに加りながら、掟に背いたり、私の異母妹マイアに乱暴を働いたそうだな。我々の掟では物惜しみと信徒への暴力は嚴重な罰を与える事になっている。だが君は正直そうだから一応言い分を聞こう。君は逃げられるのに逃げなかったが何故だ」

「コルキユネに就いては嘘を申しました。母ではありません。乳母です。わたしは八才で母を亡くしましたので、コルキユネを実の母のように慕っていました。残して逃げられなかったのはその為です」

狂乱女達は平静に、秩序を守って、美しいアリアドネの縛られた姿を眺め、オーナロスとの問答に聞き入っている。

「君は服装や腕環から見て相当身分の高い女と思われる。先刻の美事な踊りはクレテ島の牡牛の舞だろう。君はクレテ貴族という事になるが、クレテ王国では婦人の地位が極めて高いと聞いている。それなのに何故ナクソス島などに女二人だけで来たのだ。又、君達は金銀の装身具を未練なく提出しながら、此方の妙な青銅器は惜しんで、私の異母妹マイアに乱暴まで仕掛けたようだが、その理由は何か。これが説明出来たら許してあげよう」

経緯儀は腕環と共にオーナロスの傍に置いてあった。幸な事に此の大切な機械は少しも壊れていない。アリアドネは安心した。此処ぞと姿勢を起し、縛られた胸を張った。

「お察しの通りわたしはミノス大王の娘で、海神の巫女をしていました。或る事情があってクレテ島を出ましたが、帰る気はありません。其処にある青銅の円い枠は星を観測する機械で、わたしは毎晩天に現われた新しい神を此の機械で測りながら拝まなければならぬのです。新しい神は星の姿を以て金牛宮に現われ給うたのです」

両手を背に縛られているので、充分な説明が出来なかったが、アリアドネは顎で経緯儀の各部を示しながら操作法を話した。

「惜しかったではありません。献上した上で、改めて使わせて戴いても良いのです。併し此の機械が使えるのは、わたしだけでしよう。そして此の機械は極めて精巧に作られて居り振廻されると調節が狂って只の青銅塊でしかなくなってしまう。乱暴したのは悪かったです。説明する隙はありませんでした」

アリアドネは更に天の彗星を顎で指した。「金牛宮で釣鐘星に囲まれたあの星が新しい

神の天界でのお姿です。わたしは太陽神^{ヒュペリオン}のお告げに依ってあの星の運行を観測し、その直下に赴いて新しい神の分身を地上で見出さなければならぬのです。その神こそ古い伝統を壊し、愛と平和を地上に響く神。これがナクソス島に來た理由であり、観測機械を大切にする理由です」

オーナロスは頷いた。深い感銘を受けたらしく見えた。

「そうだったのか。新しい神を求める為に、王女の身分迄棄てたのか」

葡萄酒神^{デイオニソス}の教祖が手で合図すると、幾人かの狂乱女^{マイナデス}が進み出てアリアドネとコルキユネの縛を解いた。アリアドネの後にはマイアが居て縄目を解きながら話しかけた。

「貴女がそのような方だとは知らなかったのです。御免なさい。可哀相に、上等の服を斯んなに破られて。わたし達は貧乏だから、新しい服はあげられませんが、出来るだけ皆で直します。酷い目に遭わせた事は、どうか許して下さい」

陶酔から醒めると、狂乱女^{マイナデス}も優しい只の女だった。

「悪いのはわたしです。最初に乱暴したのですから。でもその報いは充分受けました。こ

れで見通して下さるでしょう」

アリアドネは、手が自由になると、オーナロスの前に平伏して判決を待った。

「よく聞きなさい。君が捜している新しい神こそ私の葡萄酒神^{デイオニソス}だ。愛と平和の神^{エイレネ}。古い秩序を建て直す神。伝説に依れば、葡萄酒神^{デイオニソス}は幼時アジアのニューサでニュセイデスと呼ばれるニヌフ達に育てられ、ニヌフはその功で天に上げられて釣鐘星^{ヒュメデス}の五群星になったと言う。君の捜す神と一々符節を合すようだ。今日から葡萄酒神^{デイオニソス}の巫女にならないか。君は愛と平和の神を発見した。私は葡萄酒神^{デイオニソス}の宣教に君の知性と美貌と踊りが欲しい。引き受けてくれたら最高の待遇を与えよう」

アリアドネは感謝と承諾の印に最敬礼をして見せた。全面的に信用したわけではない。オーナロスのような貧相な男が宣布し、百人程が狂信するだけの神が、エウローペの言った愛の神とは思えなかった。且つエウローペの契めた愛の神は『東に赴いて求めよ』だった。ナクソス島はクノススの真北に当る。

併し、運命の変転に奔弄され続けたアリアドネにとっても褒められる事は嬉しかった。殊に美貌に就いて言われると、先刻あれ程緊しく縛られた後だけに、娘心が一層擦ったか

った。且つ、理性的に判断しても、クレテ島を離れて抱えるべき何物もない現状では、此の教団に所属する事が得策だった。更に、葡萄酒神^{デイオニソス}の教義には何か惹かれるものがあった。富裕なるも爛熟頹廢せるクレテ王国。陰謀と虚偽と惨虐に満ちたその社会に較べ、此の清貧な教団の何と純粹、清浄、解放的である事か。怒るにしても喜ぶにしても、或は拒斥も包擁も、如何なる虚飾すら伴わず、虐待も優遇も極端だった。葡萄酒神^{デイオニソス}の信徒からは原始の愛が感じられた。

「コルキユネと言ったね。君も信者になってくれるだろう」

オーナロスはコルキユネにも言った。

「アリアドネ様の行かれる所なら地獄^{ハデス}へでも参ります」

コルキユネの返答は、余り巧妙でなかったが、此の社会に技巧は必要でなかった。

「葡萄酒神^{デイオニソス}を信ずる者に悩みはない。今日は時刻も遅いが新入信者を迎える為にもう一度踊ろう。マイア。皆に一杯宛廻してくれ。コルキユネは此の種子を播いて貰いたい」

オーナロスは数粒の種子を渡した。コルキユネがそれを地に撒くと、忽ち種子は地面下に潜り、芽を生じ、蔓が伸び、遂に花が咲い

て葡萄が実った。アリアドネは眼を疑った。

群衆の眼は蔓の尖端を追っていた。皆にも急成長する葡萄樹が見えるらしい。狂乱女達は踊りだした。コルキユネは奇蹟に驚嘆していたが、遂に感動に圧倒され、余り上手でない踊りを始めた。アリアドネだけが葡萄樹を凝視して動かない。

こんな筈はない。自然の理法に反する。懷疑の脳裡に太陽神の黄金円盤が浮び上った。エウローペの声が中枢神経に直接響いた。

「精神を統一し、御神体に写った真の姿を見極めるのですよ」

果して、幻影の葡萄樹は溶けるように消え去り、地上の種子のみを残した。

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食 略号「ほや」

大手札三十六枚一組 六〇〇〇円

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕

男性をいたぶることについては定評のある山原清子他に一名のアシスタントの女性を使って一人のM男性を、こてんこてんに虐めしめる有様を順を追って、刻明に写真化、マゾファンの思わすぞくぞくする場面ばかりを集めました。

集団幻覚だ。

「アリアドネ、見破ったね。君が始めてだ。多分、将来に亘っても君だけだろう。麦酒しか知らないアケーヤ人が葡萄酒を飲むと、容易に催眠状態に陥入るものだ。併し私は悪い事をしていないと思わない。此の人達は救済を必要としている。私が与え得るものは陶醉と解放感だけだ。併し其処から明日の勤勞意欲が生れ、生産に繋がる、どうだ。君はこれを詐欺と言うかね」

アリアドネの傍には、何時の間にかオーナロスが来ていた。アリアドネは微笑を以て答えた。併し肯定も否定もなかった。オーナロスは続けて言った。

「アリアドネ。君も亦救済を必要とする一人である事はよく解る。併し君は無知なアケーヤ人とは違う。いや、君の知識は私などより遙か上のようだ。君には高遠な学理、深厚な思索、それから得られる真理以外の救済は通用しないようだ。だが私は君が欲しい。クレテ島を出た世界には君とは比較にならない救いのない者達が沢山居る。君は救済を受けるよりも与える人だ。その実力を持っている。私の教団に留めてくれるだろうね」

コルキユネが踊りながらアリアドネの前に

現れた。既に葡萄酒神と、その信者の雰囲気^{ディオニソス}に呑み込まれていた。

「今迄疑っていましたが、漸く悟りました。葡萄酒神こそ其の神様です。この神様に救われて、わたしは幸福です」

コルキユネの踊りながら廻って行く後姿をアリアドネは複雑な微笑を以て見送った。幻覚を醒まさせる事は容易だが、それはすべきでない。コルキユネも、葡萄酒神の陶醉に依る救済を必要とする憐れな女の一人になってしまったのだから。

アリアドネは独りで冥想に耽った。

我が身に備った、研ぎ澄まされた理性と、止る処を知らぬ思考力が寧ろ恨めしい。コルキユネと同じように陶醉による救済に溶け込めたらどんなに幸福だったろう。オーナロスの感化力がわたしだけでは通用しないのだ。

だが、アリアドネは、感傷に溺れようとす

る十七才の娘心を猛然と揺り起した。酔ってはいけない。頼れる者は自分しか居ないのだ。わたしはクレテの女。女性としては世界に比類のない教育を受けた。力も意志も、それに僅かだが希望も持っている。此処で挫折してはならない。虚像でない、愛と真理の実体を此の手に握む迄は。

(未完)

＜告白＞

異常なる夜の記録

島田啓子



○ 或る婦人雑誌が、『異常なる性愛の体験』という手記を募集したことがございました。私も書いてみようかしらと思って、下書きだけはしたのでしたが、あまりにもおぞましい

ような、なさけないような気がして、とうとう清書して出す気にもなれないままに、鏡台の隅にそっとしておいたのが、この手記でございます。

夫が、折にふれ買ってまいります御誌を、

ひそかにかい間見ます度に、貴誌ならば、こんな体験告白も、暖い眼でみていただけるのではないかと思つて、清書してみたのです。

○ その夜のことを書きます前に、私達夫婦のことを簡単にお話ししておきましょう。

夫は元軍人の、厳格な家庭に育ち、所謂秀才コースといわれる学閥のルートを通じて大学を卒業すると共に、お定まりの官庁に入つたのです。

私はといえば、父は繊維の工場を経営致しておりましたので、隆退が激しく、子供心にも、二度三度の浮き沈みを感じとつておりました。たまたま、私が女子大を出ます頃、繊維業界は大不況に見舞われまして、倒産とまではいかないながらも、デッドストックを大量にかかえ、銀行融資は閉ざされ、労働組合の赤旗に囲まれた我が家から、私は、赤旗の下をかくぐって、お勤めに出ねばなりませんでした。

丁度その頃、大学を出た新入りとしての夫と知り合つたのです。一寸照れくさいのですが、熱烈なる恋愛結婚、厳格な夫の家庭は恋愛など大反対、それに、落ちぶれた織屋の娘などといったわけでしたが、反対を押し切つ

て結ばれた私達でした。でも、長い長い交際の期間、長すぎる春でしたが、私は夫にこうした趣味、性癖があらうとは、つゆ想像もできませんでした。

やっと思いがかなって結婚して半年程たった頃、夫の出張中のことです。日頃、新婚のうわつた毎日にかまけて、ともすれば乱雑になつてしまふ家中を、独り身のさびしさ故に、何時になく取り片づけていたのです。

たまたま、夫の手文庫を開けるとはなしに開きました所、書類の端から顔を出している数葉の写真、みるとはなしに手にしてみれば太なわで全身を縛られた年若い豊満な女性が浣腸を受けている写真ではありませんか。

一時に私は頭に血ののぼる思いでした。いやらしい、穢らわしい、平常紳士づらをしなから、そつとこういうものを隠して楽しんでゐる、出張といつても何をしているものか分つたもんじゃないわ。私ははじめてヒステリーというものが、こんなに身近かに感じられたことはありませんでした。

ズタズタに破いてやろうか、この写真。でもやめました。いい証拠書類なんですもの。帰ってきたら、きつととちめてやる、その夜は寝苦しくて、一夜の何と長かったことで

しょう。

翌日の晩、夫は何も知らぬだけに、ぬけぬけと帰って来ました。旅のみやげをぶらさげて。一杯やって来たのでしよう、ほのかに赤い顔をして、何時ものように。

「今帰ったよ、どう、さびしかったかい。ほら、京都の八ッ橋だよ」

「あなた、一寸、お話したいことがあるの」

「何だ、改まって、何かあったの」

「何かあったものもないでしょう、はい、これは一体、何なの、これは。あたしを馬鹿にして。こんなもの、どうなさるのよ。けがらわしいわ、私じゃ満足出来ないと、おっしゃるの。返事してちょうだいよ」

カッカしている私は一気にまくし立てました。夫は無言のまま、服もぬがずにあぐらをかいたままです。その無言が、私には何か駄々子の無言の抵抗のように見えたのです。「どうして下さるのよ、こんないやらしい写真。破ってしましますよ、何とかおっしゃってちょうだい」

たたみかける間もなく、矢庭に夫の手がのびたと思うと、私は強い夫の力で押し倒されていました。あつと叫び声を上げる間もあらばこそ、羽交締めにされて転がされた私は、

起き上げる力が一瞬抜けてしまったのです。とちめてやろうと威健高になつた所へ、まさか不意に暴力がふるわれようとは想像も出来なかつたのです。平身低頭して、すまんすまん、僕が悪かつたと陳弁これつとめる夫を想像していた私はうかつでした。

へなへなとくずれた私におそいかかつたのは、着替えに用意した浴衣の帯でした。アツという間もあらばこそ、私の手と足が縛られてしまったのです。勿論、奇巧の誌上をかざるような美事な本縛りではありません。不器用な夫が、そんな素晴らしい真似ができる筈ありません。唯単に手と足を縛つたというだけです。でもそれが、何にもましてすばらしい縛りのように思えたことでしよう。

「なにするのよ」

あとはもう言葉になりません。何か言おう言おうとするのですけれど、口がひきつたやうで頬が痙攣するのが自分でも分ります。どんなに物凄い形相だったことでしよう。どっかとあぐらをかいて、私を見下しながら夫は静かに口を開きました。

「手荒なことをしてごめんよ。だけど、こうするより、今の僕としては、する方法がないんだ。これから僕のいうこと、よく聞いてく

れよ。そして分ってくれよな。いいかい。君を愛してる。お前がかわいいんだ。何時話そうか、何時言おうかと思いつながら、僕だって恥かしくて言い出せなかったんだ。分ってくれるな。僕には人に言えない性癖があるんだ。趣味だと自分に言い聞かせてはいるが、性癖だよ。いいかい、びっくりしちゃいけないよ、カンチョウが趣味なんだ。分るかい、カンチョウ」

「え、何、カンチョウ？」

「そうなんだ、浣腸さ。ほら、便秘の時に、お医者さんの浣腸がすきなんだ」

「まあ、いやだ、何が面白いのよ。そんな変なことをして。このひも早くほいてよ」

「まあ、そうせかないで、僕の話、やっと思いで言ってるんだよ、終りまでよく聞いてくれよ。浣腸だなんて思いがけないことで驚くだろうけど、心理学的にはちゃんと説明がついてるんだ。肛門性欲ってね。赤ちゃんがおっぱいをしゃぶる。乳首を吸いながら唇に感ずる赤ちゃんの性欲は口唇期の性欲とよばれるんだ。その中、排泄の時、肛門に快感を感ずる。肛門期の性欲とよばれる。それがだんだん大人になると、この二つの段階がすぎて、一人前の男女の性欲を感ずるようになる

んだ。そして今の口唇期や肛門期の性欲は忘れてしまう。勿論僕だって、君を愛してる。夫婦の営みは健全に行っていると信じてるよ。だけど、子供の頃から忘れられない肛門性欲が強く働いているんだ。浣腸に何ともいえない郷愁を感ずるんだね。いいかい、というのはね——」

こうして夫の長い浣腸の歴史がつづきました。幼稚園から小学校にかけて、発熱する度に、おかかえの医者がとんできて浣腸したところ。その羞恥が心に焼きついて、お医者さんごっこといえど近所の女の児に浣腸の真似をしたこと、物心ついてから、家の救急箱から浣腸器を、そっとひっぱり出してはいたずらした事。婦人雑誌の浣腸記事を、そっと切り抜いたこと。医学書を買っては、浣腸の項を何度も何度もよみ返した事。そして、いつか妻に浣腸してみたい夢をいだき続けてきたこと等々。

それはそれは私には驚くべき事ばかりでした。でもそんな夫の告白を聞いている中に、縛られている、手足の痛みも忘れて、それが何か遠い夢のような、いや真実の叫びのように見えてくるのでした。

「分ってくれたかい。そこで僕の頼みだ。君

に浣腸させてくれ」

「いやよ、いやいや、そんな恥ずかしいこといやよ、これほいてよ、いやよ、そんなことしたら、大きな声出すわよ」

こういうながらも、私は私なりに、過去の私の浣腸の歴史を思い起すのでした。私にもありました。でもそれは小学校の低学年の頃でした。よく便秘しては、便秘すると必ず熱が出るのです。すると、かかりつけの、ちよび髭はやしたお医者さんが呼ばれて、「啓子ちゃん、又ウンコためちゃったね、どれ、チュッとやってやるかな、それ、モーションとして」

必ずこういっては浣腸されたあの日のいやな思い出が脳裡をかすめるのです。でも、女の子だけに、幼少時の一時だけで、あとはたしか下剤がのまされたようでした。それだけに私には、夫のいう肛門期の性欲への後戻りということとはなかったようです。少くとも浣腸に興味をもつということはありませんでした。ところが、今、夫は私に浣腸するということです。必死に手足を動かしてのがれようともがいてみましたが、縛られた手足はどうすることもできません。大声出すわよといってみたものの、御近所の手前もあって、その勇

気ありません。

「いやよ、いや、いや」

いつか気がついてみれば、私はかつて小学生の頃、駄目とは知りつつ——だってお医者さんはこわかったんですもの——浣腸器を用意するお医者さんの前で、いやよを連発して駄々をこねた時の気分になっていたのです。

何時の間に買ってあったのか、夫は何処からかイチジク浣腸を取り出すと、きつと自分でひそかに使っていたのでしよう、手なれた手つきで先端に穴をあけ、

「いいかい、嬉しいなあ、僕の夢がかなえられるよ、君、感謝するよ。ほんとうに僕は君を愛してる。いとしくって、たまらないんだ。大人しく浣腸させてくれるね」

こうして、はじめて私は夫の手で二個のイチジクの洗礼を受けたのでした。その夜、私は夫の暖い腕にだかれ、不思議とよく眠れたことを、今でも思い出すのです。

○

そんなことがあってから、私は度々夫の手で浣腸されました。夫は何かと口実をつけて私は夫が喜んでくれるならばと、敢えてさからおうとはしませんでした。だからといって私は浣腸がすきになったのか、肛門性欲を特

に感ずるのかという、そうでもありません。別に浣腸されたいとは、つゆ思わないのですが、夫が今夜も浣腸してやろうという事に特にさからおうという気にもならないところを見ると、或いは、浣腸されることに喜びを見出しているのかも知れません。自分で自分を分析してみることが出来ないのです。

夫はすっかり喜んで、イチジクは勿論、ガラス浣腸器、エネマシリンジ、とうとう病院で使うイルリガートルまで買いこんで、適当に私を縛っては浣腸することに、本当に喜んでいようです。いろいろの浣腸姿態、書けばきりのないこと、冗漫になるばかりです。で、本題にあげましたショックなる一夢のことを記して、ペンをおきたいと存じます。

○

結婚して六年、今は二兄の母となりました私です。長女は四才、来年から幼稚園でございます。下の子は男の子、これはまだ乳のみ児です。一口中大部分はねてばかり、夫の申します正に口唇期というわけです。幼児からの教育が大切だと申しまして、子供達は、私達夫婦の寝室から別に、離室にねかせる習慣をつけさせているのです。

さて先日、の或る夜、何時ものことながら、夫は私に浣腸をせがむのでした。

「久しぶりに、イルリガートルでやってみようよ」

「沢山入れないでね。お腹がはって苦しくなるんですもの。それと、あんまり高くつるさないでよ、一時に入っちゃうと、腸がなんだか痛くなるわ、こわいのよ」

「よしよし分った。用意するからパンティぬいでねておいで」

何時ものことながら、何かこわいような、それで期待するような、恥ずかしいような、実に複雑な気持、それをまぎらわすために、下の台所でぬるま湯を用意する夫を待ちつつ週刊紙に眼をやる私でした。

「用意ができたよ。今日はあおむけにねて足をあげてごらん」

「いや、今夜はひえるから、風邪をひきそうよ。横むきにならせて」

何か虫が知らせるというのでしょうか、敢えて夫の要求をこぼしました。夫も毎度いろいろの姿態をとらせるので無理には言いません。平凡な横臥でイルリガートルの嘴管で挿入を受けるのでした。



— 耕土散筆 —

『落穂拾い』

〈其の五〉

やす 保
ふじ 藤
ひさ 久
と 人

- 20 女人像—その〈美〉裸婦展によせて
〈フォト〉と〈プレイ〉と
- 21 内生活に於ける〈アブ・ラブ〉
- 22 生活の記録とその記号
- 23 あとがき（お断り）

20 女人像—その〈美〉
裸婦展—によせて—

十月十九日から三十一日まで、京都・高島屋催し場で
『名作にみる裸婦展』が開かれた。

陳列作品は明治→大正→昭和にわたる三代の近代洋画……その洋画界の大家・名人の美芸麗筆・名作・力作が百余点。
裸婦—それがテーマである。
豪華絢爛。幻想と官能の世界。大袈裟でなく現実夢を纏る感があった。
兎に角、美しく、綺麗であった—。
女人裸像……その〈美〉の底知れぬ奥深さに、今更乍ら驚嘆し、一種の感動さえ受けたものだが、それ程、女性の裸体が極致的芸筆によって画き尽されていた。
正直に言って私には絵画のことは良く判らない。併し〈美〉を〈美〉として鑑賞すること

とは可能だ。又、その美しい裸婦画に憧憬的視線を傾注していた事も事実である。
関西在住の方はご覧になった方も多いと思う。私も今此処で、その内容、画家や作品の一つ一つを取上げるつもりはない。が、鑑賞の手引きとしての紹介文や、別に、さか昇って、裸体美術の黎明期である明治時代の記事の中から、いくつかの話題を拾い出して見度いと思う。
“画かれた裸婦”それも、さまざまの表現、内面の追求をも籠めて—。百余の裸婦は悉く個性的であった。巨匠の作風によって其処に“裸体”は生きていた—。

大家・巨匠・鬼才・天才・俊鋭・奇行と評され称された画家。

年代による変化・画風と特色・写実派と前衛派・内面の追求と表現の技術。

絵画的・幻想的・官能的・現実的——

それ等總てを含めて一堂に集め觀ると、如何に人間が△美▽を△女人裸像▽の中に追求めていたかが良く判るし、實際に、女性の“裸体”は“原則的審美形態”を神秘的な部分を含め、その全姿……曲線の中に秘め育てて来ていることが察知出来る。

確かに△美▽が存在するのだ。絵書きさん達はそれを極めて個性的な受覚の中で完成させて巧緻な筆で表示しようとしたのだろう。

そして“名作”が生れ出た——

黒田清輝の『朝しよう』と題する絵が展示された。大鏡の前にフランス婦人が立ち、一糸まとわぬ姿で朝のよそおいをしている——

世論が沸いた。非難が続出し、某新聞は社説でこれを取上げた。とうとう警官が出動して画面の一部を布で覆って仕舞った。それ程の大騒ぎになった。たった一枚の裸体画で——

明治二十八年春、京都の岡崎で『内国勸業博覧会』が開催され、問題の絵はその『美術

展覧会場』に展示してあったのだ。

裸体画を見せることの是非が論じられたのである。当時の某新聞の『社説』の表題は、『裸体美人画の取捨』とあったという。

——裸体画美人を視察するに、真にこれは天然の中の一つの美しい物象なり。曲線円形の絶妙総合なりとして写したる、精神と意匠とを見るなり

——裸体画をもって、悉く美術の範疇外に排斥するは審美の原則において同意するあたわざるところなり

——要はその形象の末にあらずして、形象によって發揮せらるる理想如何にあり

当時は“美術鑑賞”でなく“裸体画視察”であり、我が国の洋画界を開発し完成へ導いた先人の偉業も、この様な物議をかもしたといい。思えば変わるもの、今昔の感、一入だ。

『裸体展』と呼応するかの様に、古都の秋を飾るに相応しく、『東寺秘宝展』が開催された。(十月二十五日から十一月三十日まで)

千有余年を誇る未公開の国宝・重文等、密教美術の粹を集めて、東寺創建以来の大偉業である。

その中の重要な一つに、国宝△武内宿禰像▽がある。これが我が国

最初の“裸体彫像”だという。

そして、その辺りに、我が国と西洋の美術鑑賞……古代から受け継がれて来た思想・風潮のカギが存在する様に思える。

——日本最初の“裸体像”は、裸体の上に服装をつけることを予想して彫刻されたという。肉体に“ヴェール”着せて“美”を創造しようというのだ。

——西洋美術(彫刻)は、“ヴェール”を剥ぎその内実の“肉体の美”を礼賛しつつ創造しようとした。

大きく根本的に対立する“美術鑑賞創造”の態度であり、この古くから培われて来た思想が前述の『裸体画視察是非論(明治中期)』となり、更に今日なお、一部の人々の因習的なモラルの中に流れているといつては言い過ぎだろうか。

因習打破はむづかしい。併し時の流れというものも存在する。

七十年前に物論をかもした“裸体画展示”も、今は万人の眼を楽ませている。

此処で私は、故伊藤晴雨画伯の言葉をもう一度思い出して見度い(註・10月号拙筆)

“責め”“悲愴美”“悦虐の心理”

『法医学としての学説——』それが画伯の執

念であり信念であった。悲愴↓残酷ではあっても其処にも又△美▽が確在する。想うに伊藤画伯も又、異常↓その中に秘められている△美▽を追求めて悔のない生涯を送られたといえるだろう。

そしてその△美▽異常美▽も、何時か公然と世に示し得る日もあろうかと、その日を念じつつ、この項を終り度い。

21 △フォト▽と△プレイ▽と

十二月号△奇クサロン▽の中に、編集部の△妊婦フォトの撮影可能か▽という一文がある。其の中に、某カメラマン氏の、日本娘のヌードモデル、スカウト論が出ている。

第一がお金。第二が虚栄心。第三が芸術論第四に好奇心。この辺りが結論だという。

非常に興味のある、そして真実を探り得た言葉だと感心したものだ。

勿論、この場合は、詳しくは判らないが、多分、通常のヌード・モデルとしてのなのだろう。若しこれに、所謂「異常心理」が絡んだ場合は、結論は更に飛躍しそうである。

「第一」は論外としよう。そして代りに、「SMの心理」を持って来なければならぬが、それとは別に「第三」及び「第四」が大

きく浮上り更に「第二」へと続いて行く。

奇ク愛読者の中には、プレイ(夫婦の)に専念し、そのフォトを公開し、一種の「露出願望」を昇華していらっしゃる方も多い。

この方々は、「其処」に倅せが確在し、それをお互いに行爲によって認知し合っており、れる。

非常に喜ばしく、大方の読者は羨望を以って眺めていることと思う。

併しそれ以外及び以前(夫婦プレイ或は相互理解によるプレイ)の実践初期に於て、前述した「スカウト論」的要素が必須条件になっていることを、私は特に若い方々にお伝えして見たい。

その事例のいくつかを、実際面から差支えない範囲で発表して見たいと思う。

▽女性△△美▽に対して弱いということ。

△A氏の場合△最初のヌード撮影▽

「彼女のヌードをフィルムに納めるということとは至難な業です。まして縄を掛けるなど(中略)成功の端緒は彼女への肉体賛美。そして、今現在の彼女の若さ、その艶と張りのある実存するものに対する最高度の△美▽の強調でした。」

『君、昔と違うんだよ。考えて見れば昔の人は不幸だった。自分の本当の美しさを物に残し留めておくことも出来なかったのだから。君の今の姿態美は将来、我が子にだって誇れる程だ。女性の華は丁度今の君位の年頃。いくら容姿を大事にしても、子供でも産れて見給え』

私の変な理屈が功を奏したとは断言出来ませんが、常に強調した肉体礼賛がとうとう彼女に脱衣の決意を与えた様です。(中略)今になって思うと我乍らよくも馬鹿馬鹿しい屁理屈を並べて……と苦笑しますが。

私共にとっては、この上もない記念のフォト。尤も現在は賞賛しません。が、取出して競べて見て、僅かに見られる衰えが、容姿維持への怠慢という責め道具となって(下略)――

――A氏はヌード撮影に成功して間もなく彼女と結婚。以来五年余。二児あり。現在は縄のプレイに専念している。

△B氏の場合△ヌードから緊縛へ――▽

「結婚ということでお互いに遠慮はなくなりました。併しカメラで裸を……と言いついて実行するまでは随分苦労したものです。『お互いに若さを留めよう。男の僕なんか若さの値打はないが、君の、その美しい曲線、それ

「彼女がどうしようもなく失われて行くと思
うと残念なのだッ」私の目的は妻のヌードで
はなく、ロープで全身を縋ること。だが、ま
ずカメラに馴れさせることが先決でした。齒
の浮く様な美辞を繰返したものです(下略)」

「B氏が愛妻にカメラを向け出したのは
結婚後一年近く経ってから、との事。

▽女性には好奇心が強いということ。

△C氏の場合「ヌード撮影完了後」

女性切腹 (時代篇) 絵巻

四馬孝画

略号 (えま2)

大判判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求
めて、その構想を縦横に發揮しようと試みた
のが、この時代篇です。近代的なリアルなタ
ッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追
求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」
二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲した
ものですが、今回御希望の方にのみ特に印画
紙に焼付けて頒布いたします。

女性切腹 (現代篇) 絵巻

四馬孝画

略号 (えま1)

大判判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多
くの口絵を發表して斯界に独特の新風を吹き
込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作
の意欲を燃やし、うら若き現代的な女性に絶
對命の境地に追い込まれて、自らの手で自
らの命を断たなければならぬ場面を設定し
て、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿態を
彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しま
した。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

「彼女のヌードは凡ゆる角度から撮り尽しま
した(中略)さてその次は——。胸：乳房の
誇張した美しさ(緊縛による)を示し「どう
だい君、僅かの工夫でこれ程美事に變化を創
り出すことが出来るのだよ。全く女性の肉体
っておかしなものだ。神様はうまい具合に造
って下さった。これなど(この時C氏が提示
したのは一種のホルセツト「蜂胴」の由)ウ
エストの美事さはどうだ。女の君が見ても美

しいと思うだろう。君ならもっともっ」と
彼女に脅えがあったと思う。気味悪くも思っ
た事でしよう。併しそれと別に一種の好奇心
があった様です。恐る恐る彼女は紐を手にし
ました(下略)」

「C氏と彼女との間柄は友人同志だった
(それ以上はセンサクしないので不明)そう
で、今は又別な女性と。そして今度は結婚す
るという話を聞いている。

▽女性の虚栄心は凄まじいということ。

△D氏の場合「プレイ用女性ハント三人目」
「わざと見せてやるんですH子とK子の緊縛
フォトを——。そして彼女の前で、H子とK
子の品評をやり、特に胸部の一種の変形美な
どを喋りまくる「君なら……いや、君の乳房で
はとてこのK子の様な盛上りは望めない。
いや、まてよッ。あの手応え……あの、君の胸
のふっくらとした感じでは、ひよっとすると
K子以上に——」女というものは妙なところ
で虚栄心を持つもので、お蔭で成功。その見
事さは同封のフォトでお判りと思う(下略)」

「D氏は所謂プレイボーイ。細君がある
のにSMガールハントに専念している。唯D
氏の良い面は陰湿猥褻でないこと。SMハン
トは細君も公認ということである。全く羨や

ましい御仁。いわば辻村さんの小型。

▽女性は△愛▽にも弱いということ。並に内部心理に△被虐感情▽が秘められているということ。

△E氏の場合ⅡガールハントⅡ交際▽

——最近E氏から七枚の連続フォトが送られて来た。そして同封の手紙で彼は言う。

「新人紹介。彼女は今まで職業的に写真を撮られた経験はなく、ましてやヌードなど——

同封一連のフォトは『約束が違う』と駄々をこねるのを、強引に追い求めたスナップ。

経過中、カメラと彼女との間の往復に忙がしくて、無理強いの迫力は乏しいですが、最後に『縛るぞッ』と嚇して見たら大声で泣き乍ら既に下着を剥ぎ取られた脚を開いて御覧の通り。彼女、小生に好意を抱いているらしい。いえ、自惚れでなく——。そして、これは後で聞いた彼女の感想ですが『縛るぞッ』といわれて、何だか足首を括られている様な気がして——。小生、新しい彼女の美を発見

今後が楽しみです（下略）」

——E氏も妻帯者。細君にこの方の趣味的嗜好は皆無の由。但しE氏の趣味範囲の行動は黙認しているということ。併し若し、E氏が余り新人（？）に関心を持ち過ぎると、少

々危険性あり、と他人事乍ら心配している私だが、其の後の経過から推察するとE氏も矢張りアブニストの本分はわきまえていた様で目下はますますと安心。

僅かな例しか発表出来ず残念だが、前記「スカウト論」の裏付けとして、提供して見た。

——女性モデルを求める場合、相手が職業人（ヌード）であれば、比較的、金銭による解決法が合理的且つ簡単な様である。

併しこの場合も「SM的」なモデルとなるとお金ばかりで総てを、という訳にも行かない。況して、普通のお嬢さんに対してなど。

若し仮りに、相手女性の内的心理（被虐感情）の有無を探ぐり得た人があれば、その男性は、幸運児といえる。

普通の場合、僅かに望みを託せるのは、矢張り『女性美（裸）礼賛』に初まり、彼女の『好奇心』と『虚栄心』を巧みに引出すこと位。

そして何よりも相手に『信頼感を与えること』が第一。男性は「狼」でなく「紳士」でなければならぬ。

——女性側としての、右「スカウト論」に對して、一つの反対がある。正確に言うると、

スカウト論に對して異論ではない。むしろ彼女もいくつかの結論的な部分には肯定するだろう。

併し彼女ⅡF夫人はⅡは絶対的にフォトを忌避するのだ。

F夫人（性向はM。同性：経験あり。この場合はどちらかというとS的）は御主人の嗜好を満たしている。受縛の感受性も充分で、御主人ばかりでなく、御主人の友人夫婦を招いて緊縛姿態を展示することも拒否しない。逆に、他人が加わる方が心理的に満たされるところ（露出願望）

それなのに絶対にフォトは撮らせない。御主人もそれが最初の約束なので強要しないということである。

何故カメラを嫌うのか？ 根っからのカメラ嫌いなのかというと、そうではない。

F夫人の趣味の中に「カメラ」という一項があり、事実、F夫人は御主人との外出には常にカメラを持参し、風物などを撮りまくっている。

何度か質問を繰返している内にF夫人は次の様な返答をした。

「見られる：羞しい。これは事実だわ。でも羞しいけれど見られてもわたくし一向に構い

ませんの。フォトになって尚大勢の方に、と思うと、羞しきは余計でかえって自分の心が満たされる様な気がします。だけど、今の若さ（註・此の頃F夫人は三十前）を正確に、全姿にわたって留めるということが耐えられませんか。若し十年後、現在の自分と見競べて見たならその容姿、跡の線の衰えというものをまざまざと見せつけられるでしょう。わたくしには、それがたまらない苦痛になる様な気がするのです。だってそうでしょう。女

の：というより其処には人間の悲哀Ⅱ老醜的なものが確認されるのだから。きっと其の時わたくしは自分の惨じめさに泣き度くなるに違いない。若い姿：見競べるものがなかったなら、その時その時点での自分に諦めもつきまですし、惨めな想いをするともなく主人に委ねられると思うのです。普通のフォトならいいのだけれど、何しろはだかでしょう。だから——」

私は微妙な女心を教えられた様で変な気持ち

新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

がしたものである。そして年老いた時のF氏の浮気心(?)を懸念したものだが、伝え聞く処では、F夫人、益々瑞々しい女盛りとのこと。当分は私の心配も必要でない様な状態が続いているらしい。

22 内生活に於ける△アブ・

ラブ▽

△性生活の技術と心理▽という本がある。

既に内容の一部を紹介したこともある(註

・40年12月号・(55露出の心理)

内容については当時(註・37/38年刊行)

著者・東洋大教授・村田宏雄)の若い人達の間で随分と騒がれたという。

発刊当時に私も購入して読み、驚いた記憶

があり、今日でも比較的「異色のSEX書」

だと思っている。

兎に角、従来の「性書」とは、その心理分

析が異質的であった。加えて「技術」まで解

説してある。

私がこの項で取上げたいのはその「性書」

的部分ではなく、アブ的な「心理分類」であ

る。この本は割合多くの人に読まれている様

に思える。従って読者の中にも周知の方が多

い筈で、今更、ということになりそうだが、

それでも、内容中の「性的性格」という言葉とその分類は、SEXを除去したアブ心理を比較的巧みに表現してある為。

△性的性格とそれに見合う愛撫の技巧▽という項目の中にあるのだが、一応△愛撫▽という文字は抹殺して考えることにしよう。

十二項目ある。

△加虐症▽△被虐症▽△両虐症▽△露出症▽△接視症▽△両向性▽△汚損症▽△崇物症▽△自己愛▽△同性愛▽△口唇愛▽△肛門愛▽
総てSM的（アブノーマル）と謂われる心理の範疇に加えることが出来る。

この本のこの項目の目的は、性的性格（アブ的性格）を実生活の中で如何に巧みに応用するかという部分、その技巧の選択の必要性を解説しているのだが、内容中の「愛撫↓SEX」を度外視しても充分に一読に価する参考書の様に思える。

SMマニアは自己を知ると同時に、相手をも又知らなくては意味をなさない。余り一方的なのは何かと問題も起り易い。

相手の心の中に秘められていたもの、或は無意識潜在性のあるものを如何に巧妙に探ぐり当て、引出すかに総てが賭けているといえる。

世の中には、数々の心理分析解説書が多い

が、それ等は皆、学術的な、専門的な立場で書かれているので、単なる知識として受け入れられることは出来ても、実際面となると、取ってつけた様な場違いを感じる事が多いものである。

併しこの異常心理分析を、最も平易な人間のSEXに絡ませて見ると、日常茶飯事的な近親感を覚え、同時に、人間の心の中にある当然の心理＝感情の様な気がして来るから妙で、それを知ることにより、相手側のSM心理探求の足掛かりにもなり得る。

——本当は、もっと忠実に内容についても書き度いのだが、（本当に詳しく書いて見たい）残念乍ら以上の程度まで。

鮑迄「性書」ではあるが、全般的內容としてSM信奉者には必要な様に思う。實際面での必要度合は、むしろ△高橋鉄氏の諸著書▽よりも効能的であると私は判断したのだが。

23 生活の記録とその記号

日記をつけていらっしゃる方は意外に多いだろう。併し、日常多忙（？）な現代人にとって甚だ面倒なこと、記録が将来何時か良い「想い出」になると知り乍ら、その煩雑さに辟易して日を過して仕舞う。私などもその

一人である。

だが、SMプレイ。或は類似行為。フォト加えて、ご夫婦の間では別種の記録して留めておき度い様な事柄が、きっと多く山積することと思う。

所謂「愛情日記」若しくは「愛の記録」であり、更に「SMハント記」である。

特に「プレイ」や「フォト」に関しては、その必要性を痛感していらっしゃる方も多いと思うし、又一つの「プレイ及びフォト」についての内容。経過が大きな意味を持っている筈だと思ふ。

その為の日記体：それを簡略化して一つの定めた記号によって表わす。

實際は、その時点では、それさえも面倒臭い。が、記号なら後からでも気付いた時にチヨイチョイと記し易い。

前記の書（四項中の本）の中に△性生活のプログラミング▽という部分がある。

△クライマックス法▽△ノン・クライマックス法▽△ダイス法▽と三分し、初動↓終了が各段階によって記してある。

第一段階↓第十二段階という具合に。勿論目的はSEXであり、従って此処で取上げることは不適當だが、この「段階推移法」は非

常に意味がある様だ。

医学的に男（オス）女（メス）を特別な記号で表現しているが、あの方式記号を段階推移に取入れて見たなら如何なものだろう。

記号は各人で適当に考案すれば良い。

仮え、撮影（カメラの略図）。胸部緊縛（眼鏡の絵）と言った具合に――。

これは私も人から教わった事で、凡ゆる詳しい記号も記して貰っているが、カット絵・略図といい乍ら、露骨な部分もあるので全部記すことが出来なくて残念。

唯、その中に、『旗』『唇』『ハート』『注射筒』『柱』『椅子』といったものがあり

私が見ても、アア、と納得出来る様な記号であることに随分感じ入ったものである。

日記ではない。ノートには日附と時間が記入してあるだけで残りは『略図記号』の羅列で、その気で見ないと何であるか判らない。

が当人方にとっては、唯一無二の『愛の記録』なのである。

私は非常に興味のある、そして意義のあることだと思った。既に実行していられるお方

もあると思うが、折を見て奇ク読者の皆様に
お伝えしたいと思っていて、今日やっと、その目的が果たせた様である。

あとがき（お断り）

今月から内容を少し変えて行こうと思って
試作的にペンを走らせて見ました。従って、
本来の目的である八耕土散筆『落穂拾い』に
該当しない部分も多くなる事と思います。が
成可く本筋に添って、その上でもっと身近な
部分を取上げて行こうと思っています。

【最新版】女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙（9×13寸）焼付

A1	フミツケ汚辱縛り（新井）	一組一枚	一五〇円
A2	手吊り乳房責め（五月）	五組五枚	五〇〇円
A3	ハリツケ猿ぐつわ（新井）	十組十枚	九〇〇円
A4	全裸正面柱しばり（遠藤）	二十組二十枚	七〇〇円
		三十組三十枚	五〇〇円
		四十組四十枚	三〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇円

A5	亀甲強烈乳房縛り（遠藤）	全裸手吊りムチ打（遠藤）
A6	豊満乳房いじめ（遠藤）	乳房責め股間縛り（遠藤）
A7	鼻責鼻梁いたぶり（遠藤）	全裸後手高小手（遠藤）
A8	膨隆臀部さらし（長野）	全裸正面強烈縛り（長野）
A9	うねる緊縛裸身（長野）	色褪の開股しばり（長野）
A10	正面縛蛙股ひらき（長野）	裸自慢縛りヌード（長野）
A11		
A12		
A13		
A14		
A15		
A16		

A17	正面アグラしばり（長野）	正面大の字開股縛（長野）
A18	遅ましき裸しばり（長野）	荒縄縛豆絞り猿轡（大塚）
A19	両手前縛り髪首絞（大塚）	両手吊り股間吊り（桜井）
A20	両手膝下しばり（関谷）	淫れんする裸身像（関谷）
A21	両股縄掛け開股縛（大塚）	正面裸身強烈本縄（梨花）
A22	乳房晒し肉体自慢（長野）	責衣にはみ出る肌（東浦）
A23	投げ出した全裸縛（長野）	捕われの全裸緊縛（梨花）
A24	羞らいの両股縛り（大塚）	猿轡乳房いたぶり（遠藤）
A25	荒縄全身縛り豆絞（大塚）	
A26		
A27		
A28		
A29		
A30		
A31		
A32		
A33		

A34	盛り上る乳房縄目（長野）	亀甲本縄鼻いじめ（大塚）
A35	ムチ打悶えポーズ（関谷）	椅子またぎ汚辱責（東浦）
A36	縦縄股間縛り正面（関谷）	ゴム猿ぐつわ全身（大塚）
A37	くさり乳房責め（長野）	強制片足挙げ責め（大塚）
A38	正面乳房くびり縛（関谷）	鴨居正面ハリツケ（梨花）
A39	手吊りパンティ落（絹川）	白バンド後手吊り（東浦）
A40	豆絞り高小手呻（絹川）	裸縛り鼻いじめ（梨花）
A41	ガンジガラメ立縛（愛川）	亀甲本縄股間縛り（絹川）
A42	立木縛竹棒責め（桜井）	
A43		
A44		
A45		
A46		
A47		
A48		
A49		
A50		

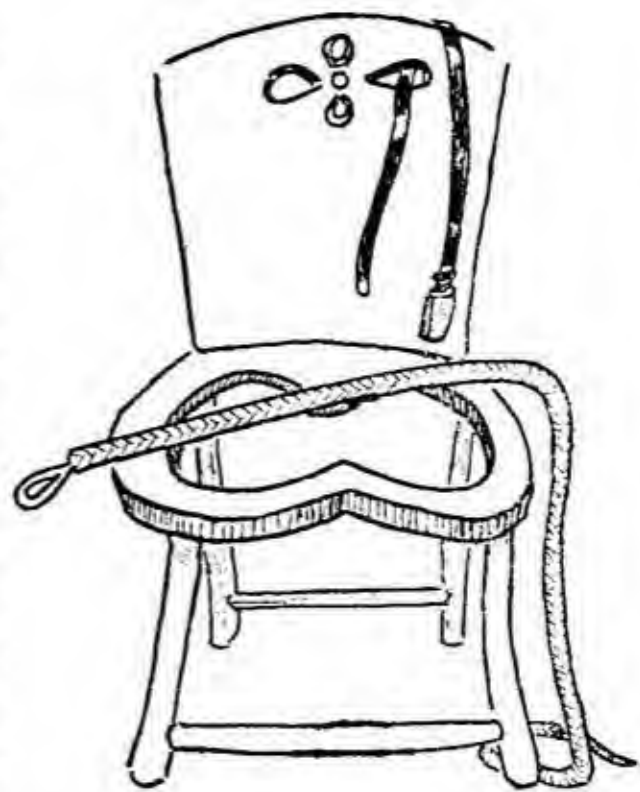
連載サディズム小説

心痛たむ遍歴

△第十七章 そのかみのこと（十七）▽

（ミシュリーヌの公判）

西 条 操



小雨煙ぶる六月中旬の朝、ミシュリーヌは監房の監視窓からエメリーヌ婦人看守に言い渡された。

「今日、公判よ。十時に出廷。いいわね？」
メシュリーヌはうなずいた。今日、公判があることは、三日前にマイヨール弁護士から知らされていた――

「―それでですね、ミシュリーヌ」
マイヨール弁護士はその時、接見室で言った。

「お金の使途なんですがね。方々の探偵社に

相当支払われている様ですな。それに新聞広告にも。勿論、何のためなのか分ってますよ。で、どうですか、そこをハッキリさせれば陪審員は同情してくれますがねえ」

「いやッ。いやです。あの……子の……名を出すのは死んでもいやなの。それだけはお願いです。刑がいくら重くなってもいいの」

ミシュリーヌは手錠の鎖をテーブルの上で強く引張って叫んだのだった。

「それに、あのお金は私のお金で払ったんですわ。盗んだお金は全部……」

ミシュリーヌは口を噤んだ。

「分ってますよ。それも隠すんですね」
弁護士は念を押し、ミシュリーヌはキツパリとうなずいた。

「やれやれ、強情なひとだ。その上、ラグラ
ンジュ氏とのことも伏せるんですな？ やり
難い仕事ですなあ」

マイヨール弁護士はこぼしながら、微かに満足そうな色を浮べたのだった。

監視窓からエメリーヌの眼が覗き、錠の音が響いて鉄扉が開いた。

「さあ、行きましょう」

待ちに待った裁きの日だが、いよいよとなると緊張に身が引締まる思いだ。

「大切な日だからね。落ち着くのよ」

エメリーヌ婦人看守は手錠をかけながら静かに言った。

「はい。で、今日済むでしょうかしら？」

「そうね。どちらかが引き伸ばし戦術に出ない限りは、ね」

手錠につけた草ロープを束ね直しながらエメリーヌが答えた。

「私、早く刑を決めて頂きたいんですの」

「それはまあいいけど、でも主張することはちやんと主張しなきゃ駄目よ。取り返しがつかないことよ」

エメリーヌは革ロープを持った手でミシュリーヌの腕を握した。

「あの、あなたが連れて行って下さるんですの？」

「そうよ。規則は守ってね。ところで出廷は私服にする？それとも、このままでいい？」

公判廷へ曳かれる刑事被告人は、希望によって私服に着替えさせて貰える。囚衣のまま

出廷したがる者はいないだろう。ミシュリーヌは飛び立つ思いでうなずいた。

身検室で待っていると、所持品が持って来

られた。運んで来たのは赤縞獄衣の既決女囚二名、台上に投げ出してミシュリーヌを横眼

で眺めた。一人がぶいと横を向いて歩き出し腰連鎖が張ってもう一人の腰にくびれ込む。

ジロジロとミシュリーヌの品定めをしていたのが顔をしかめ、引き摺られて立ち去った。

その二名を、現われた水色上張りの娘が叱りつける。

「おトイレ、あれで掃除したつもりなの？」

ちよっと、やさしくしてやると、すぐつけ上がるのね。そんな心掛けだから、鎖つける様になるのよ」

二名の年増は忌々しげに娘を見たが、口答えはせずに黙って行った。

マイヨール弁護士が夏服を持って来ておい

てくれた訳を、ミシュリーヌは今知った。ラランジュ氏が情けの新しい下着をつけると

涙が滲んだ。ヴィヴィアン嬢が選んでくれたこの夏のドレスは、あのジュエールが買

与えてくれた唯一の衣裳だ。恨めしくも呪わしいジュエールだが、そのドレスを着ると想

い出が甦える。

（このドレスを買ってくれた時には嬉しかったわ。帽子もねだって叱られたっけ。恨めし

いあなただけど、憎いとは思わな

ことよ。いいわ、あなたのこと庇ったげる。盗んだお金は皆私が費ったのよ。今更、あな

たまで巻き添えにした所で初まらないもの）ミシュリーヌは、しわを気にしながら思っ

た。

「靴下は駄目よ」

「はい」

ミシュリーヌは悲しく答え、素足にハイヒールを穿いた。爪先は黒く汚れていて、監視

するエメリーヌに見られるのが恥かしかった。顔も洗えず、化粧はもとより出来ず、乱

れた髪にかぶる帽子もない。諦めたミシュリーヌは金髪を撫でつけ、精一杯の明るさを粧

おって言った。

「下着の裾が出てやしません？」

「大丈夫よ。でも、よく似合うわ。女でも惚れ惚れする程よ」

淡いピンクの薄物に身を包んだミシュリーヌを眺めて、エメリーヌは皮肉でなく讃える

のだった。エメリーヌはあたりを見回わしてポケットから櫛を取り出し、黙って貸してく

れた。くしけずりながらミシュリーヌは涙ぐんだ。無言で櫛を返したミシュリーヌは、思

わずあたりを見回わす。この姿を鏡に映して

見たかったのだ。鏡などがある筈もなく、台
上には忌わしい拘束具がおかれていた。

「いい？じや、気の毒だけど」

エメリーヌは金具付の革具を取り上げた。

腰枷だ。背後に回って腰のくびれに巻きつ
け、強く締める。胸を抱いたミシュリーヌは
されるままに腰枷を受け、後ろ腰の尾錠に鳴
る錠の音を聞いた。幅六センチの分厚い黒革
ベルトは、どう見てもドレスの付属品とは見
えないだろう。エメリーヌが手錠をキラリと
取り上げ、ミシュリーヌは

「ちよっと待って」

とドレスの前後をつまみ上げる。腰枷にせ
かれて上体が着苦しいのだ。もう一度髪を撫
でつけ襟元をつくろい、ミシュリーヌは両手
を差し出した。腰枷に通した半円形の鉄環、
それを前側中央へ持って来たエメリーヌは、
女囚の右手に手錠を嵌めた。片方の環を3の
字に開いて腰バンドの半円環を潜らせ、おと
なしく寄せる左手首にからませて閉じる。

「こんなにきびしくはしなかったのよ。でも
事故が続いたもんだから……」

エメリーヌはちよつと済まなそうに言い、
後ろ腰に革ロープをつけた。この姿で裁きの
庭へ連れ出されるのだ。そう思うとミシュ

リーヌは悲しかった。漸く届く指先で眼頭を押
えながら、絶対に逃げたりはしないのに、と
恨めしく思う。しかし仕方もない、規則なの
だから。

ミシュリーヌは法院の廊下を人目に晒され
つつ曳かれて歩いた。無理に顔を掩うのは却
ってみじめだし、意地にも堂々と顔を上げ
て歩きたい気持だった。けれども、何かに押
さえつけられた様に垂れて来る首と、自然に
靴音を忍ばせる様になる足を、どうする術も
ないミシュリーヌだった。

二階の二五号「中法廷」被告人席に坐った
ミシュリーヌは、既にまばらな傍聴席の男女
が恨めしかった。マイヨール弁護士がヴィ
イアンヌ嬢を伴ってミシュリーヌの背後に坐
わり、開廷は例により遅れて十時十五分。起
立したミシュリーヌが再び腰をおろすのを抑
えて、エメリーヌ婦人看守が、縛しめを解い
た。広い法廷に唯一人立ったミシュリーヌは
鍵で外される錠の音のみじめさに、全身を屈
辱で熱くした。

陪審員達の宣誓、検事の冒頭陳述、弁護士
の些末な反駁、その都度の裁判官の判定。被
告人席の固いベンチに坐わるミシュリーヌに
は、裁判手続などはどうでもよかった。ジュ

ヌビエーブの名さえ出ず、そしてラグランジ
ユ氏との秘めごとさえ明るみに出なければ、
刑の三年が五年になってもいいから早く決め
て欲しかった。

公判部の検事に任せることなく、自ら立会
検事を買って出たブランシェ検事は、被告人
席のミシュリーヌを憎しみこめて睨みながら
痛烈に論告した。ミシュリーヌは犯行を認め
て深々とうなだれた。陳述は警視庁や検事局
で述べたのと同じだった。尤も盗んだ金の使
途だけは、少しもっともらしくなっていた
が。

マイヨール弁護士の弁護と反対詰問は、つ
まる所「魔のさした女心の出来心」の一边倒
に帰した。

「出来心ですと!!」

ブランシェ検事は喚く。

「最初は、そうだったかも知れない。或いは
ね。しかし、被告人は、犯行の発覚を察知す
るや、被害法人代表たるラグランジュ氏を身
を以って誘惑し、自らの犯行を葬むり去ろう
と企てた。この事実、被告人ミシュリーヌ
・ダリユーが如何に悪事にたけた女であるか
を立証するものであります」

ミシュリーヌは頬を染め、膝のこぶしを震

わせる。

(まあ、あんなことを。ひどいわ、ちがうわ)

「……なお又、被告人は横領した〇〇万フランを全部費消したと主張しているが、これには疑わしい点が多々あり、本官は被告人が隠匿しあるものと断定致します。以上の諸点に就いて検察側証人として次の四名を……」

ブランシェ検事は、ホテル「シャトー・ド・セーヌ」の女中二人とアパートの管理人のマダム、そしてラグランジュ商会の会計士を喚問していた。弁護側の証人は、アパートの隣室の夫婦とソルボンヌ大学助教授ロシュフオー・ラフォレ、そしてピエール・ジョルダン。ミシュリーヌは証人など要らないと言ったのだったが、マイヨール氏とすれば、それでは恰好がつくまい。ひるの休廷が宣せられ立ちすくんだミシュリーヌは革と鋼鉄の縛に就いて曳き去られた。眼前のミシュリーヌを痛ましげに見ていたヴィヴィアンヌ嬢は、見送って弁護士に言った。

「あんな風なひとの弁護は、妙な工合ですわね。本人が刑を受けたがってるんですもの」「そうさ。だからもう、お涙頂戴一点張りしか手がないんだ。飯にするか」

見もしなかったミシュリーヌが気付く筈もなかったが、傍聴席にはリュシェンヌ夫人が来ていた。そして又、後ろの方の席にはジェラルドもいた。それはともかくとして、ジェラルドに伴われて寄り添う派手な女性に気付いたなら、如何にミシュリーヌとても彼を庇う決心を崩したかも知れなかった。あでやかに粧おうその女性は、あのクロードディアの取り澄ました姿なのだった。

午後の開廷。傍聴席で待ち構えていたリュシェンヌとクロードディアは、それぞれの思いを勝ち誇ったまなざしにこめ、腰枷手錠姿で曳かれて来るミシュリーヌを眺めやった。

ホテルの女中二人は、去年の十一月十五日にミシュリーヌとラグランジュ氏がシャトー・ド・セーヌに現われて泊ったと証言した。マイヨール弁護士が反対訊問しても、その日が初めてだったと主張した。

「ええ、確かに、この方とあの女ですわ」ラグランジュ氏は外国旅行中、女中は氏の写真を眺め、被告人席を指さして言う。

「十一月十五日が初めてです。何だか、女の方が引張ってるみたいな感じでしたわ」

ミシュリーヌは呻いて髪かきむしり、隣に身構えるエメリーヌが腕を掴んで制止した。

アパートの管理人は言う。

「旅行なんてしたことないですわ、私の見受けた所じや。御亭主と別れたいとも言ってましたわ。何か、遺産でも転がり込んだのかなあって感じを受けましたの……」

(うそ!! そんなこと、これっぽっちも言うもんですか)

ミシュリーヌはこおしをわななかせた。

「……会計士の証言の通り、ラグランジュ氏が被告人の犯行を知ったのは十一月十二日であります……以上を総合して考えますと、本官の主張の根拠は充分立証されて余りある次第であって……」

ブランシェ検事は勝ち誇る。もう獲物は追いつめたのだ。

「犯行手口が幼稚であるとか、素直に犯行を認めたとか言うことは、その容姿に些かの自信を持つ被告人が、ラグランジュ氏のろう絡が容易であると考えた故であり、又些かの神妙さと改悛の情を示して刑を減じようとする狡猾さを思わせるものであります……」

(まあ、あんなことを!! 悪く取ればいくらでも悪く取れるものなのね。口惜しいわ)

ミシュリーヌは唇を嚙む。

「弁護側証人による証言、すなわち、被告人

の嘗ての生活、性格が如何に高邁且つ清らかなものであったか、などと言うことは、本官が立証した諸事実の前には跡方もなく消え去るものであり、又本件の本質には何らの関わりもなき、取るに足らぬ紛々たる末事であります。被告人の隣室に居住するポアンソン夫妻の同情溢れる証言も、畢竟するところ、被告人が如何に内縁の夫ジェラルに失望と憎悪を抱いていたかを証明するものであります。つまり本件は、被告人ミシュリーヌ・ダリユーが嘗ての豊かな生活に憧がれ、現在の貧しさに耐え切れなくなったが故の……」

七名の陪審員男女の前で、ブランシェ検事は熱弁を振った。ロシュフォーは証言を終えるや立ち去ったが、ピエールは傍聴席で検事を睨みつけていた。ロシュフォーには事故死した同僚の未亡人とひそかに逢う約束があるのだ。そしてその未亡人も裁判中の身だった。クロードディアとリュシエンヌは聞き惚れる。憎い女のツラの皮を、検事の一言一言がひん剥いて行ってくれるのだ。

ミシュリーヌは眼を閉じて、涙を滲ませていた。こんな姿をとうとう見せてしまつて恥かしかつたが、ロシュフォーとピエールの証言に昔を思い出すのだ。とりわけ、ルアーブル

から馳せつけて来てくれたピエールの暖かい言葉を思い返すと、喉に熱いものが溢れるのだった。

「彼女、ミシュリーヌは決して悪い女性ではないのです。出来心で犯した罪を心から悔い進んで刑に服したいとさえ申ししております」
いつになく精彩のないマイヨール弁護士の弁論が初まった。敏腕な彼も、反証するに足る事実を挙げ得ないのだから致し方もない。
「彼女は、皆さんと同じくれっきとした家に生まれ育った女性であつて……」

弁護士の言葉に、又してもミシュリーヌは返らぬ者を偲んで涙するのだった。舞踏会の夜のバルコニーで、庭で、広間の植木鉢の樹の陰で、熱い言葉を囁やいてくれた若い殿方の誰かと結ばれていたら……。あのコモ湖のほとりでひっそりと暮していたなら……。あ、あのジェラルルさえ……。

エメリーヌ婦人看守のスカートの上で手錠がキラリと鳴り、ミシュリーヌは肘を掴まれた。

「立って。裁判長の前へ行くの」

判事が呼んで、自ら訊ねたいのだ。

「何か言うことはないかね？ あれば言つて御覧」

銀髪の判事を仰いで、ミシュリーヌは言った。

「悪いことを致しました。罰して下さいまし。そして、盗んだお金は、きつとお返しします。少しずつ、一生かかっても」

うなずいた老判事の温顔は、すべてを知っているかの様にミシュリーヌには思えた。

ブランシェ検事は懲役五年を求刑した。マイヨール弁護士は肩をすくめ、ヴィヴィアンヌ嬢は眼を丸くして仰天し、そしてピエールは拳を打ち合わせた。ジェラルルは流石に眼を伏せ、クロードディアとリュシエンヌは期せずしてニンマリした。

「では陪審員諸君の審決あるまで休廷する。

陪審員諸氏に注意し要請することは……」

裁判長はミシュリーヌに温かい眼を注ぎつつ言った。

陪審員の構成は事件によって十五名、十一名、七名の区別があり、構成されないこともある。ミシュリーヌの裁判の陪審員は七名。男四名、女三名の彼等は別室で評議を開き、ミシュリーヌは法廷で待たされた。法廷は休廷中、審決の下るのを待つ被告人には、当然戒具が施される。ミシュリーヌを立たせたエメリーヌ婦人看守は、きびしい顔で拘束具を

かけた。

「すみません、お手数かけて」

呟いたミシュリーヌは鼻を吸った。彼女にとっては、もう裁きは終わったも同然だ。あの運命は他人が決めてくれる。会ったこともない見ず知らずの赤の他人達が。

「どの位……かかりますの？」

腰をおろしたミシュリーヌは、長い吐息をついて訊ねた。

「それは分らないわ。十分間のこともあるし一週間かかることもあるし。ま、待ちましようよ。でも、あなた立派だったわ。隠しちや損なことを隠してると思うけど、それはそれで私には何も言うことはないわ。軽く済むといいのにねえ。きつくはないこと？ゆるくしたつもりだけど」

「いいえ」

禁制の裁判批判めいたことを言っただけでミシュリーヌは慰めてくれ、かぶりを振ったミシュリーヌは身を固くしてひたすら待つのだった。

評議室の七人は、お互いの品定め合い間に評議していた。世の中がこう複雑になって来ると、素人の陪審員などは無意味どころか邪魔な場合だって多々あるのだ。

「私はでございます、検事さんの御言葉の方

がうなずけると存じますのよ。如何でしょうかしら？」

大きな帽子の中年婦人が言った。

「私も賛成ですわ。あら、そのお帽子、イタリア製じやございません？ あの女はああ見えましても猫かぶってると申しましようか。第一、あのドレスの趣味はちよっとねえ」

ミシュリーヌの着ているドレスはジェラルの選んだものだから仕方ない。

「しかしマダム方はそうおっしゃるが、私はあの女の最後の言葉を酌んでやりますなあ」と葉巻の男。

「ああ、金は返すと言ったことですな。しかし、借金しに来る連中だって、そう言いますからなあ」

デブプリした赤ら顔が言う。

「しかし何ですな、罪は罪として、なかなかいい女ですな、あれは」

「まあ、いやらしいことを!! ここは神聖な裁判所でございますことよ。殿方と来たら、すぐそんなことばかり。ねえ」

「まあ、そんなことは抜きにして考えましても、盗んだお金をですよ、見付かったから返すなんて言ってもねえ」

「そうですとも。きつとどこかに隠してるに

違いありませんわ。この椅子のクッションの固いこと」

二十カラットのダイヤを指にきらめかすマダムが断定した。

ガラソとした法廷の固いベンチでは、ミシュリーヌが背を丸めて頬を掻いた。

「すみませんわね、私のために……」

「あら、私はいいのよ、これが仕事なもの。悪いけど煙草喫うわ」

革ロープを手に巻きつけたエメリーヌは煙草に火をつけた。

神経質らしい考婦人が評議室で言う。

「ともかくでございます。盗ったのが現金なら、まあまあと言うこともございますわ。けれど小切手でございましょう？ 任せてる小切手を悪用されたんじや堪まりませんわ。私達安心出来ないじやありません？」

「そりやそうですな。大袈裟に言えば、信用取引の崩壊、経済界の基盤危うしですな。アハ、ハ、ハ」

七人の男女は何れも有産階級、有価証券とは縁が深い連中だ。

「思い出したんだが、セレスト工業が不渡り出したって本当ですか？」

「さあて、どうですか。私のところはそんな

三流会社と関係ありませんでな」

「あら、セレスト工業と言えば、ホラ、秘書課長の女が産業スパイだったとこじやありませんかしら？」

「そう言う話でしたな。飼犬に手を噛まれるか。近頃の勤め人ときたら!! これじや、おちおち事業も出来ませんで」

「全くですわ。あの女、今懲役に行ってるそ
うじやありません？」

「所で、あの女どうします？ いや、秘書じやありませんよ、この件の女です」

評議は脱線しては時々軌道に戻る。

裁判官が陪審員に審決を求め得る事項は次の通りだ。すなわち、先ず有罪か無罪、これは被告人の認否如何を問わず必須事項だ。

次に情状酌量の余地ありや否や。これは「全然なし」「少しくあり」「かなりあり」

「大いにあり」の四種類の答えの一つを選ぶ。最後に求刑の量刑如何に就いて。これを「妥当」「軽きに失する」「重きに失する」の三つから選んで答申する訳だ。

昔ほどではないが、やはり裁判官はその審決をかなり尊重しなければならぬ。

法廷でミシュリーヌが、言い難そうに言った。

「あの搔かせて頂けません？ 痒いんですの」
久し振りに触れるナイロン下着が肌を刺戟するのだ。

「いいわ。でも搔ける？」

ミシュリーヌはままならぬ手をもがき、裾をかかげて膝小僧を出した。エメリーヌは三本目の煙草を丁寧揉み消してポケットに納めながら、そんなミシュリーヌを見やっていった。女囚がそんな風に身動きする時には、一部始終を監視するのが担当婦人看守の職務なのだ。

評議室では何杯目かのお茶やコーヒーが啜られ、やっと評決が初まった。

「如何でございますかしら？ そろそろ決めた方がおよろしいんじや……」

「そうでございますとも。私六時に約束がありますの。支度に一時間はかかりますし……」

先ず有罪か無罪か。これは、異論なく有罪だ。情状の点では二つに分れた。勿論、男性側がウェットで女性側はドライだ。

「しかしですな。私は何か深い事情があると睨んどるんですが」

「あら、それなら何故言わないのかしら。言わなきや分りませんですわ」

「そりやまあそうだが。しかし、御婦人の前

だが確かにいい女だて。刑務所へ入れるに忍びない氣もしますな」

男達はうなずき合い、淑女達は眉を吊上げる。

「冗談じやございませんわ。殿方達には魅力がありましようとも、犯罪者は犯罪者でございますからね」

「そうですとも。あんな卑劣で陰險なことをした者は重く罰してやって、見せしめにしてやらなくちゃ。そうでございましょう？ そうでないと、私達小切手帳を持って歩かなくちゃなりませんことよ」

「全く同感ですわ。それに、私が一番我慢出来ない点はでございますよ、被害者の方をたらし込んで誤魔化そうとしたことですの。御夫人がしっかりなすっていたからようございしましたけど。ほんとに殿方と来たら甘いんですものねえ」

遂にその点がポイントとなって、男性四人は御婦人三名の気焰に押しまくられた。男性達にした所で、あえて御婦人連を論破する程の執念があるう筈もない。今夜あたりナイトクラブでの一刻を過ごせば、明日には忘れていくことだろう。

「しかし、あれであんなだとすりや、ちゃん

と化粧でもさせりや大したもんだがなあ……」

一きわ女には詳しいと言ったタイプが首を振って呟いた。評決は「情状酌量の余地なし」だった。もうこれで、ミシュリーヌが執行猶予になる見込は消えたのだ。この評決を握りつぶして執行猶予にした裁判官は未だ嘗てない。

「五年とは、いくら何でも可哀想ですなあ」と葉巻の男が嘆息した。

「犬だったら、老いばれもいいところになってしまいますな」

こうなってはもう、御婦人連の動物愛護精神に訴えるしか手がない。

「そうおっしゃいますけどねえ、あの女があれだけのお金を溜めるには二十年位かかるんじゃないやしません？ お給料で生活しての残りを貯める訳でございますものねえ」

「そりやまあ、勘定はそうなりますがね。しかし、我々の実感として……」

「私達は、そんな実感とやらは全然感じないんですのよ」

「しかし、五年間も苦しめなくてもいいと思えますがなあ」

「あら、じや地道に働いている女のひとはどうなのでございます。不公平じゃありません」

御婦人連は、ミシュリーヌが金を隠匿しているという暗示にかかっているのだ。

「そうですね、それに何でございますわ。

近頃の監獄、いえ刑務所は昔みたいなことはないそうじゃありません？ 仮出獄とやらもありますし」

「そうなんですってねえ。私、或る方から聞いたんでございますけれど、何でも教育刑主義とやらで、考え様によっては歯痒い位なんだそうでございますよ」

「そう言うお話ですわねえ。勿論私なんか見に行くつもりはありませんけど、見たら腹が立って来るかもね。みんな私達の税金なんですものねえ」

評決は遂に「軽きに失する」だった。ミシュリーヌは運が悪かったのだ。

午後四時少し過ぎ。ミシュリーヌは被告人席に起立して審決を聞いた。苛酷な審決結果にも心は動じなかった。ジュヌビエールの名は遂に出なかったし、自分が妖婦にされることによつて、ラグランジュ氏を傷つけなくて済んだのだ。ことのついでにジュエールをも庇い得て、ミシュリーヌは満足だった。

求刑が軽いと聞いて裁判長は眼をむいた。こんな評決は滅多にあるもんじやない。ブラ

ンシェ検事とリュシェンヌとクロードイアはいたく満悦し、マイヨール弁護士は頭を抱えヴィヴィアンヌ嬢はキツと陪審員席を睨みつけた。エメリーヌも驚いて手錠を取り落す。

マイヨール弁護士が真に弁護する気だったら、打つべき手はいくらもあったのだ。陪審員達を忌避するとか、引き延ばし戦術に出てラグランジュ氏の帰国を待つとか、又は事情に詳しい社員に証言させるとか、いろいろとあった筈だ。ジュエールを在廷証人に引き出して責めることだって出来たのだ。

それを敢えてやらないマイヨール弁護士だった。

顔曇らせて別室に去った裁判長は、二十分後に出て来た。

「被告人ミシュリーヌ・ダリユーを懲役四年に処する……」

法廷中央に立ちうなだれたミシュリーヌは丁寧に静かに、そして優雅に会釈した。犯した罪を償う目安を与えられて、ホッと胸の荷が軽くなる心地だった。ミシュリーヌにとつては、五年が七年になっても甘んじて受ける覚悟だった。ミシュリーヌは素直な感謝のまなざしで、裁判長の温顔を仰いだ。審決を無

視して求刑より減じてくれたのは、この裁判長なればこそであった。こう言った場合は、大抵求刑通りになるのが通例だ。

「この判決に不服なら、二週間以内に上告しなさい。分ったね？」

「はい」

ミシュリーヌは素直にうなずいたが、もとより上告する気はなかった。閉廷が宣せられ拘束具を持ったエメリーヌが傍らにカチツと立った。自ら手伝う様にして縛に就きながらミシュリーヌは思う。

(もうこれで罪人になったのね、私)

エメリーヌ婦人看守は、まだ刑の確定しない被告人として取扱う態度だったが、ミシュリーヌの心の中では、既に自らの刑は確定していた。

「いろいろとお世話になりました。有難うございました。あなたにも、いろいろと……」

ミシュリーヌは曳かれて通りすがりに立ち止まり、マイヨール弁護士とヴィヴィアンヌ嬢に頭を下げた。

「いやどうも、ひどいことになっちゃって。申し訳ないと思っとうです」

「いえ、いいんですの。ほんとに有難うございました」

疑いを知らぬ純真な感謝を浴びて、マイヨール弁護士の顔に翳がさした。職業的良心の苛責だろう。

「勿論、上告なさるわね？こんな、聞いたこともないわ」

憤慨するヴィヴィアンヌに、ミシュリーヌはきっぱりと言う。

「いいえ、致しませんわ。ほんとに、これでいいんです。罪に服しますわ」

「ま、よく考えといて下さいよ。二、三日したら行きますからな」

微笑んだミシュリーヌは自分から歩き出し革ロープを握るエメリーヌがあわて気味に追った。ミシュリーヌが振り返ってよく見れば傍聴席の最前列で見詰めるピエールを認めただろう。彼の眼は怒りと同情を漲らせていたし、更に後方の席ではジェラルがクロードイアを抑えていた。彼女は、自分が眺めていたことをミシュリーヌに知らせてやりたいのだ。しかし、ミシュリーヌは遂に眼を上げることなく、曳かれて去ったのだった。

その夜、ミシュリーヌが独房で点呼を待っている頃、マイヨール弁護士とリュシェンヌ夫人とは高級料亭の特別室で逢っていた。「いやあ、もう苦勞したぜ。重くなる様に弁

護するなんて初めてだ。一生懸命やってる様に見せなくちやいけないし」

「そうね。天下のマイヨール弁護士だものねでもまあ、大体うまく行っただわ。御苦勞様」

「ヴィヴィアンヌは妙な顔して責め立てるし言いくるめるのに往生したよ。腕の立つ助手も、こんな時には冷汗ものだね」

「ホホホ。でも、あの裁判長い度胸ね、一年値切るなんて。惜しかったわ」

「冗談じゃない。いいところ三年とってたんだけ。しかし、君もそんな綺麗な顔してて、残酷なひとだ。僕は今日お礼言われた時には可哀想で堪まらなかったよ」

「ウフン。この浮気者!!」

「いた、た」

「私ね、ジャンが愛した女には我慢出来ないの。うんとうんと苛めてやるのよ。少し胸が晴れたわ」

「そりやね、君が未だジャンを愛してるせいさ」

「あら、彼に対する愛情なんて、これっぽちもないわ。これはプライドの問題よ。嫉いてんの？ 馬鹿ねえ」

「やれやれ、可哀想なジャンだ。女房には相手にされず、さりとて他の女も抱けず、か」

「あの女、上告するかしら？」

とキャビアをつまむ。

「いや、おそらくしないだろう。一応すすめてはおいたがね」

「もし、しても、却下されちまう様に上告趣意書を作るのよ」

「分ってるよ。しかし、ほんとに綺麗な女だったなあ」

マイヨールは又しても、テーブルの下で抓られる。

「いたたッ。心が美しいと言ってるんだよ。」

顔は君の方が綺麗さ」

「ウフン。なら、いいの。あら、それじゃ私

の方が心は悪いのね」

「正直な所、あんまりよくはないさ。所で、ジャンはいつ帰って来る？」

「来月末の予定よ」

「ね、リュシエンス。弟をいつ社長にしてくれるんだい？」

「取締役になって、未だ一年足らずじゃないの。それに今うちの会社少し調子がおかしいのよ。立て直すにはジャンの手腕が要るわ」

「景気よくなった所で頂きか。彼の始末はどうつける気だい？離婚を承諾するかな」

「あら、離婚なんてしないわ。彼の名義の株式が惜しいもの。ま、結果的には離婚と同じ

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号〔文献〕

○限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛ケラフ集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号〔美4〕

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号〔美5〕

○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号〔美6〕

ことになっちやうけどね」

「ま、任せるよ」

「いざとなったら弁護してよ。ヘマはしないつもりだけど。所で、今晚おひま？」

悪男悪女はニンマリ笑み交わしてグラスを挙げたのだった。

同じ頃、小綺麗なアパートの一室では、ジェラルとクロードディアが抱き合っていた。

ジェラルは時々浮かない顔をしていたが、クロードディアはシャンペンに眼のふちを染めて上機嫌だった。今日は、あの憎いミシュリーヌの浅間しくも哀れな姿をとくと見物出来たし、戻って見ると嬉しい通知が舞い込んでいたのだ。クロードディアはシネモンド映画の

大部屋女優の一人、内職にモデルもやっている。今度撮る映画に、助演級の悪女役として抜擢して貰えたのだ。

（チャンス到来だわ。体を張ってでも掴まな

くちや。私ももう三十二だものね。私は輝けるスター、そしてあのミシュリーヌは監獄で鎖鳴らしてらって訳よ。ああ、なんと痛快なこと。溜飲が下がるわ）

クロードディアは眼を輝かせ、そして一瞬う

とましげな眼でジェラルの体を眺めたのだ

った。また同じ頃、ピエール・ジョルダン

義足の片脚を窮屈に折って、ルアーブル行の夜行列車に坐っていた。やる方ないふんまんと同情に胸裂ける思いの彼は、何度も思い迷った末、汽車に乗ったのだった。面会してなまじな同情を示すのは、却って彼女を傷つけるだろう。ミシュリーヌの思いも彼と同じだった。思い定めて観念したミシュリーヌは、独りでほうっておいて欲しかったのだった。

そのまた同じ頃、イヴェット・ヴラディは官舎のラジオニュースを耳に挟んで、おそい夕食のフォークを取り落とした。ミシュリーヌ・ダリユー……懲役四年……。ラジオは確かにそう言った。覚悟はしていた報らせだが思いを絶したその重さに、イヴェットの胸は打ちひしがれた。少し耳の遠い母に泣声で訴え知らせ、イヴェットとその母は手を取り合ってオロオロと泣いた。

その翌朝、昨日とは打って変わった明るい朝の陽が、うら寂れたパリ南区の上にも昇った。セーヌ河から遠く離れたこのあたりは、崩れかかった工場や建物が物悲しく並び、同じパリの市内とは思えない。カルーゼルの廃駅の近く、名も知れぬ安アパートの灰色の階段、その危なっかしい手摺りを狭く暗く昇った三階の一室で、メルシェ未亡人のレイモン

ドは朝刊をひろげていた。娘と二人きりの朝食もつつましく済んで、キッチリ計って淹れたコーヒーマーの香が漂う。低く驚きの声をあげた母に登校姿の娘が眼をクルクルさせた。

「どうかしたの？ 母さん」

「え？ いえね、何でもなしのよ」

驚きに喘ぐ胸を押え、レイモンドはなおも紙面に見入る。

（まあ、あの方が!! ちっとも知らなかったわ。何とおいたわしい……。何とかして差し上げられたら）

「母さん、領収書を書いてよ。私、貰って来るわ。届けるのあれだけ？」

「ええ、今週は少ししか出来なかったの。肩が痛くて。心配しなくていいんだよ、お天気がよくなりや治るんだから。マンデュウさんに言っといてね、来週は沢山持って来ますから、お仕事回わして下さいって」

マンデュウ商店へ届ける箱には、内職の刺繍が仕上って納めてある。夫アンドリュウは戦時中に亡くなり、僅かの証券と内職とで娘を育てて来たレイモンドだった。

「だけど、お前、大丈夫かい？」

「あら、私だって、もう十二なのよ」

口とがらせる娘は利発で愛くるしく、学校

では級長だ。

（あの方に生き写しだわ。そりや、実の親子だもの、当り前ね）

継ぎの当った服を着た娘を、レイモンドはいとおしげに眺めやった。

（あのひと、この子を取り返しに来やしないかしら？ 今更そんなこと言わせないわ。でも、ここ三、四年は安心ね）

レイモンドの胸に複雑な感情が渦巻いた。この子とは、これでもう十年、二人きりで寄り添って、世間の荒波の底でひっそりと暮らして来たのだ。

「ジュヌビエーブ。よかったらお飲み。欲しいんだろ？」

レイモンドは、自分のコーヒーを押しやった。

「母さんはいいんだよ。欲しくないし、コーヒーは母さんの眼に悪いそうだから」

「ほんと？ ありがと、ママ」

ジュヌビエーブは嬉しげに飲む。

「ママ。あまり無理をしないでね。私、学校を出たら働らくわ。もう少しなんだから」

「馬鹿お前。お前はハイ・スクールへ行くんですよ。心配しなくていいの。お金は取ってあるし、母さんだってまだまだ頑張るさ」

レイモンドの眼がうるんで明るく言う。
 (父さんさえ生きててくれたら、こんな苦労はこの子にかけないのにねえ。ああ、もうコーヒーを買わなくちや。ルネさんここで、前みたいに安く分けてくれるかしら。お砂糖だって高くなったし、それにお肉だって……)

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です
 毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一月一冊三〇〇円、三ヶ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

私はいけど、いつも羊の骨つき肉ばかりじや、この子が可哀想……

「じゃ、ママ。行って来ます」

「ああ、気を付けてね。ジュヌビエーブ」

レイモンドは愛情こめて名を呼んだ。

「あ、新聞を届けという頂戴」

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一斉に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何月号分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お申込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。

ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返されます。

読んでいた新聞も、隣りのアントワーヌ夫人と共同購読なのだった。

同じくその朝。ノルマンディの丘のふもとで、ペアトリーヌは牝牛の乳を絞っていた。

許婚者が悪事を働いて、彼女は田舎にも住み辛らくなっていた。

(パリに出ようかしら? 働けば暮らせるわよ、自分独りぐらい……)

ペアトリーヌは思い悩み、牝牛がのどかに啼いた。

そしてその頃の日々、アルベールに寄せるシュザンヌの思慕は、片想いながらも僅かずつ燃え初めていた。

また、そのシュザンヌの初恋の相手アンリ・クリュイタンスは、マルソー通りの端の酒場でピアノを弾いていた。自ら生木を裂いて別れた相手シュザンヌの面影を振り払いつつ糊口を凌ぐなりわいの暇を盗んで、彼は作曲にいそしむのだった。

そしてまたその頃の日々――。シュバリエ夫人は一ぱし社会事業家を気取って、忙がしがっていた。

アミアン市に住むイボンヌ・リシュエールは美しく才たけて、これは正真正銘の社会事業に精魂打ち込んでいた。

ロジェ・サンシールは先月末遂に妻と別居して仕舞っていた。胸に灼きつくのはあのミシュリーヌ・ダリュウの面影と声、職掌柄憚かられる後ろめたさに勇を鼓し、女心を確かめるべく日ならずして拘置所を再び訪れた彼だったが、女囚ミシュリーヌは面会禁止処分を受けていた。彼が新しく引移ったアパートはプロヴァンス街のはずれ、廊下を曲ったあたりの室に、同僚の婦人警官シュザンヌ・シヤラも住んでいた。そして、彼はシュザンヌが苦手なのだった。

その日の夕方、ジュヌビエーブは若干の紙幣をポケットに握り締め、わき目もふらずに戻って来た。

「母さん、マンデューさんがね……」
と泣き声で言う。

「マンデューさんたらね、お仕事が減るかも知れないって」

「そうかえ」

育ての母レイモンドの顔が曇る。

「あのね、刑務所で安くやるんだって、ケイムショって、悪いことしたひとが入れられるんでしょ？」

「そうだよ。そうだと」

「悪いことした癖にまだその女のひと達、マ

マや私のこと邪魔するのね。どうしてなの」
いきごむ娘の金髪の柔らかさを、レイモンドは黙って撫でた。

「刺繍ならママに敵うひとないのに。私、マンデューさんに言っちゃったわ、悪いことしたひとなんかママが負けるものかって。でも、それじゃ通らないって言うのよ」

こみ上げるいとしさに、レイモンドはジュヌビエーブの頬を挟んだ。

（そうだと!!ママが負けるものか。可愛いジュヌビエーブ、お前にも心配かけてほんとに済まないねえ。でも、お前の母さんは、この私だよ。あの女じゃないのよ）

「大丈夫?ママ」

まっすぐに見上げる大きな碧い瞳を覗き込んで、レイモンドは明るく言った。

「大丈夫だよ。お前はそんなこと心配しないで勉強おし。お前のためなら母さんは……」

レイモンドは娘の額に接吻した。

「さ、手を洗つといで。御飯だよ。今日は羊肉じゃないのよ、牛肉よ」

「ほんと?嬉しい」

愛くるしく喜んだジュヌビエーブは駆け出して行った。

そしてその頃、パリ拘置所の独房では、ミ

シュリーヌがシチューを食べていた。何日振りがでタップリ入っている肉片は羊肉。かなり匂うが柔らかくて美味しい。噛んでも噛んでも噛み切れない牛肉のすじをあてがわれるより数等ましだ。監視窓からアネット婦人看守が覗いた。

「どう?気が変わった? どうなるか分らないけど、少なくとも損はしないと思うわ。何度もうけけど、一応上告だけはしときなさいよ」

「ありがとうございます。御親切はほんとに有難いと思ってますわ。でも、私、これ以上お手数をかけたくありませんの」

それに彼女は無一物なのだ。これ以上の負担をジャンにかけたくない。ミシュリーヌは静かにキッパリと、そう言ったのだった。

翌日の午後、マイヨール弁護士が事務所でヴィヴィアン嬢に言った。

「クロード君の件だがね。どうやら、検事もアニエス・ノエルの起訴に踏切った様だよ」

クロード・ジュールダン氏はちよとした会社の重役、情婦のアニエスと共謀して妻を殺した容疑で裁判中だったが、先日的高等法院の判決で無罪となり、五年振りに自由の

身となれた男だ。一審の判決は情婦と同じく二十年の刑だったが、その根拠は情況証拠と共犯アニュエスの証言だけ。アニュエスは服罪したが、クロード氏は飽くまで無実を主張して上告していたのだった。そして、晴天白日の身となった氏は、マイヨール弁護士を介して、嘗ての愛人を告訴したのだ。共犯同士がお互いのことに就いて行なった証言は、あとでそれが偽証だと分つても、大抵は不問に付される。しかし、この件に就いては、検事局はツーロン婦人刑務所に服役中のアニュエ

スを偽証罪で起訴することにしたらしい。「ジュールダン氏も喜んでいたよ。何しろ五年間の恨みがあるんだからなあ。所で、ヴィアンス、今日はぜひ分と念入りなおめかしじゃないか?」「お願いしてあったのを忘れ? 私、これから早退けさせて頂くのよ」「ああ、そうだった。そうか今日だったね。しかし君、何度も言う様だが、思い直した方がいいと思うがねえ。御両親もそうおっしゃってるだろ? それでやはり結婚するの?」

「ええ」ヴィヴィアンスは微笑み、決然と眉を上げて言った。「じゃ、勝手にすけど失礼しますわ」粧おいても美しい彼女の行先は、サンテ刑務所。罪に巻き込まれた許婚者の青年が、今日刑を終えて出獄するのだった。両親や友人の忠告ものかは、非運のフィリップに寄せる彼女の愛情は、この三年の間と言うもの、いや増しこそすれ、衰えることはなかったのだ。(未完)

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13種)焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K1 全裸刺青自慢緊縛 (山原)
K2 恍惚たる責の境地 (山原)
K3 苦悶の表情海老責 (大塚)
K4 海老責にあえぐ女 (大塚)
K5 全裸のぐるぐる巻 (玉田)

K6 豊満な臀部を晒す (刑部)
K7 厳しき縛りに酔う (山原)
K8 荒縄で仕置される (美木)
K9 土壇に観念した女 (美木)
K10 ムチ打たれる女囚 (美木)
K11 縛り人形を眺める (山原)
K12 開孔器で鼻を弄ぶ (山原)
K13 足首と首を連繫す (大塚)
K14 後手の複雑な縛り (玉田)
K15 裸縛りに恥らう女 (山原)
K16 夫にされる鼻責め (増田)
K17 緊縛にあう若妻姿 (増田)
K18 猿轡で鼻を虐める (増田)

K19 開股縛にあう女囚 (美木)
K20 罪状を訊かれる女 (美木)
K21 股間縛りの全裸像 (山原)
K22 荷造り縛りで晒す (玉田)
K23 革拘束衣で括らる (大塚)
K24 庭木に立縛りなる (木村)
K25 柱に晒される裸身 (玉田)
K26 セーラー服しぼり (大塚)
K27 高手小手首縄緊縛 (山原)
K28 黒縄豊満刺青縛り (山原)
K29 踏みにじられた女 (山原)
K30 古墳にて吊り準備 (木村)
K31 拷問にあう裸女賊 (山原)
K32 ロープブラジャー (山原)
K33 厳重な後手縛猿轡 (刑部)
K34 エビ縛りにあう女 (木村)

K35 イルリのある風景 (大塚)
K36 麗しき裸身を晒す (大塚)
K37 亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K38 豊満乳房縛り上げ (山原)
K39 全裸を投げだして (山原)
K40 縛しめに哭く乙女 (木村)
K41 エビ責め放置十分 (木村)
K42 豊かな全裸を緊縛 (玉田)
K43 観念アグラ縛り囚 (玉田)
K44 笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K45 猿轡の下にあえぐ (刑部)
K46 縛りに典子の素顔 (刑部)
K47 伸びやかな裸縛り (刑部)
K48 エビ縛り刺青姐御 (山原)
K49 立木より逆さ吊り (木村)
K50 裸身の緊縛と羞恥 (玉田)

〈随想〉

サーカスの思い出

曲馬団好

—

正確な日時は失念したが、今夏の一夜、東京十二チャンネルで、サーカスをテーマに扱った三十分のドキュメンタリー番組を見た。

モデルになったキグレサーカスは、私が少年時代、しばしばお目にかかったサーカス団であり懐かしく、画面を見ながら種々の追憶にひたった。

近年、東京近辺で小屋がけのサーカスにめぐり会わないと思っていたら、このキグレサーカスも、北海道の果てで淋しく興行していた。テレビの内容をざっと紹介しておこう。斜陽の一途を辿るサーカスの今日の姿と、

今後の問題を取上げたもので、中央を遠く離れた地方の小都市で商店街の大売出しとタイアップしながら公演を続けるサーカス団の行動を種々の観点から捉えている。

本隊より一足先に興行地へ乗り込んで、諸々の交渉や準備をする先乗りの仕事振り。天幕の仮設興行所の組立風景。そして公演間際の宣伝パレード。団長の日。 (これはブルードの新車を駆って、土地の親分衆への挨拶やら、近くの町で公演中のライバルサーカスの陣中見舞、海釣りに興ずる余暇等を紹介して、うらぶれムードのサーカスとブルードの新車とが、妙にちぐはぐな印象を与

えた)

本公演の模様の合い間には、年老いた団員の回想がはさまって、華やかだった良き日々のことも描かれていた。若手団員の不足が最も深刻な悩みであり、今この一座を支えているスターと呼ばれる人が、すでに四十才を越えようとしている。しかも子供には、この稼業をつがせたくないと言う。最後に団長の言葉でしめくくる。

「サーカスは、いずれは滅亡するかも知れない。淋しいことだが、時代の流れで仕方がない。ただ一つ生き残る道は外国サーカスのように、たっぷりと金をかけ、早いテンポで豪



華にして行くことだ」と。

二

私は、テレビのスイッチを切って、じっと目をつむった。少年であった私の胸を妖しくときめかせてくれたあの日、あの頃のサーカス、A団がB団が、走馬灯のように流れて行く。私の回想に登場してくるサーカスは、いずれも戦後のものである。何故ならば、それ以前の年代は、私があまりに幼く、ただ単に一般の子供達同様、サーカスの楽しさ面白さにのみ惹かれていたに過ぎないからである。

私はサーカスを見る時、アブノーマルな心の高鳴りを抑えることができない。それは人間性否定を基盤とした、かの帝国軍隊のように、鞭が全てを支配するという私のサーカス観によるものであり、従って私は、木下、シバタといったものよりも、場末の小屋がけサーカスをこよなく愛するのである。

人さらにさらわれてきた、あるいは、継母に売り飛ばされてきた少年少女達が、鬼のような団長に、長い鞭で厳しく芸を仕込まれることによって代表される、サーカスに対するイメージが私を支配して離さない。サーカスの芸の修業は骨も筋肉も柔らかい年少の頃より仕込まなければならぬと言われてきた

が、そうした年少者の確保のために、一部では団長と年少団員達との間に養子縁組が行われ合法的に多くの年少者に厳しく激しい修業を課してきたと伝えられている。現今のように義務教育をたっぷり受け、カッコいい職場でなくては見向きもしない若者には、とうてい理解できない青春がそこにはあった。

終戦と同時に世の中の全てが変わった。我が愛するサーカス諸団も、御他聞にもれなかった。第一の変化は、子供達の人気の的であった動物達が馬を除いて、皆いなくなってしまうことだ。日本本土の空襲が激しくなってきた戦争末期、危険防止のために、動物園、サーカス団、その他で飼育されていた猛獣が国家の命令で皆殺しになったことは大方が御存知の通りである。

第二の変化は、空中サーカスの花形たる男子スターが、それぞれ軍隊にとられ、戦死もしくは復員前のこととて女子ばかりになってしまったこと。

第三の変化は、戦後の性の開放に伴うハダカの波がサーカスに迄及んで、空中曲技の不足をエロで補ったこと、等々である。

当時、我々悪童連は空中サーカスを初めとする曲技の多寡によって、そのサーカスを評

価する目安にしていた。無論曲技の多い方が良いのに決っていたが、私はサーカスの女達が慣れない身振りでストリップショーまがいの舞踊をするのが楽しみで曲技の少い、言いかえれば女ばかりで新舞踊をたっぷり演らなければ間が持てないようなサーカスも好んで見に行った。

東京近郊の私の街には、正月には市の中心部にあるし寺の境内に、必ず一軒のサーカスと一、二軒の見世物小屋がかかるのが例だった。まれには盛夏の月遅れの盆にかかることもあった。サーカス好きの私は、冬休みの日課の一つとして、し寺の境内へサーカス小屋の建てっぶりを見物に行くのが常だった。腰に長い縄を束にして吊るした人夫や、団員達の手によって見る見る小屋が形を成して行く様は楽しかった。私は小屋の規模、様式によって、その年のサーカスの内容を窺うことができた。天井の高い、境内の敷地一杯に建てられた小屋は、格式も内容も立派なものであり、舞台と客席の中間に円型のオガクズ敷き馬場があれば曲馬を得意とする曲馬団であるということ。又、平天井の規模の小さな小屋は女世帯の新舞踊中心派であること等々。

終戦時、小学校高学年だった私は、己が胎

内にアブノーマルな心の芽生えを、すでに自覚していた。今から想えばサドとマゾの両面を内蔵し、時によってサディスティックな感情も持てば、又、時によってはマゾヒズム的な想いに耽ったりした。サーカスを観る時抱く感情はサドのものであり、観る目は冷やかな光を帯びていたが、深夜密かに自室に於て己が身体を全裸にし、手拭と革バンドによるモッコ褌を装着し、自身を被虐者に仕立てたのはマゾの境地であったと云えよう。

私は当時、書物を始めとする印刷物に印された「奴隷」という文字に異常な興味を持っていた。「アングル・トム」の物語では、黒人奴隷が主人に、草鞭で打たれる個所を繰り返して読み、「シンデレラ」の物語では、美しき故に、継母や姉妹達に虐げられるヒロインを空想の中で、もっともといじめたりした。従って、私のサーカス好きは密かなアブへの期待がそうさせたのであり、当時のサーカスが事実、そうした期待に充分応れてくれる要素を持っていたことは否めなかった。

三

サーカスに於て、先ず私の興味をひいたのは楽屋であった。サーカスの楽屋は特異なもので、私の記憶する限りでは皆、表にあって

客寄せの意味であろうが、大っぴらに団員達の着替えるさまを見せていた。普通、小屋の正面に動物の檻があり、その上の高い床にジントの楽隊。正面に向って右側がテケツと呼ばれる切符売場、そして左側に「公開楽屋」があった。表に立っている客の顔の高さ位の床張りで、広さはやっと四、五坪。粗末なハゲチヨロの鏡台が二つ三つ並び、後には安物のキンキラ衣裳やくたびれた道中着、やくざ物に必要な三度笠やら刀が所狭しと雑多に置かれ、近寄るとビン付け油や安白粉の匂いがプーンと鼻をついた。そんな中でこわれ火鉢の残り火をかき立てながら女達が、恥も外聞もなく着替えを行うのだ。

演芸を終えて女達が楽屋へ帰ってくる。激しい空中曲技だったのだろうか、一月の寒空の下でありながら、うっすらと顔が汗ばんでさえている。頭と耳をスッポリ包んであごの下で結んだ水泳帽のようなものを脱ぐ。女達は曲技中、汗で滑るのを防ぐために素肌にはピッチリと白か肌色の肉じゅばんを付け、その上に現在で云うセパレーツ水着のような衣裳を着用している。スパンコールをちりばめた乳当て（ブラジャー）と云うよりも乳当て、又は乳バンドと表現した方が、この場合実感が

湧く）を取り、同じ色柄のパンツを取る。

次の彼女達の出番はレビューなのであろう。肉じゅばんを脱ぎにかかる。背中のチャックを下ろし器用に両手を抜く。少年の私は、いつもこの瞬間、固唾を飲んで見つめていた。羞恥を忘れた（忘れさせられた？）女達も此時ばかりは、たとえ気安め程度でも、誰かの陰に隠れるようにして肉じゅばんを脱いで行く。顔から首へかけては、ベッタリと白粉を塗ってあるが胸から下は健康な小麦色の素肌であり、白粉の塗られた部分と素肌の部分とのチグハグなコントラストが、妙にエロチックに映ったのを憶えている。

そんな私達の目を意識してか、女達の着替へは実に素早い。肉じゅばんを胸から腰、腰から太腿、下肢へとくるくるむき取ると、すぐに次の衣裳を身につけ始める。その一瞬に私の目は光るのだ。彼女等の肉じゅばんの下は、決して全裸ではない。そこにこそ彼女等の貧しい、虐げられた姿を一層わびしく印象付ける、粗末な、うすよごれた木綿の乳当てとズロース一枚の姿があるのである。洗っても、もはや白くすることは望めない程使ったもの。つくろいの跡が残るもの。レースの飾り一つない下着に哀れな女達の哀しい諦めす

ら感じられる。女達はそれ以上脱ぐことはない。汗をかいてもよごれても、その日には着替える予備がないからだ。今夜の興行がハネてからせめて銭湯でそっと洗うのだ。

サーカスの女達は一樣に肌が小麦色か浅黒く、身体は良く引緊って乳房は小さい。色白のグラマーなどは例外的にしか居なかった。人手不足の団では、まだ一人前に成熟しきらない少女の、髪を大人っぽく結び上げ、固い小さなふくらみに木綿の乳当てを締めさせて員数を揃えることもあった。これ等、少女から娘になりかける頃の女達のむき出された腕や太腿が、奇妙になまめかしく少年の私を刺戟した。

客寄せのために、女子団員の更衣の場を、堂々と表正面にしつらえるサーカスの世界。女達は黙々として、しかし多少の恥らいを秘めて、人前に半裸の自身を晒す。それは中世の奴隷市場か、かつての廓にあったぞめき格子の風景に一脈通じるものがある。

四

或る年の正月。私はサーカスと云う文字を使用せず、「曲馬団」と云う文字のみを使用した。T曲馬団Vを観て、そのあらゆる曲技が、従来のサーカス団よりも、新鮮で豊富、

かつ素晴らしいのに一驚したことがある。足芸ひとつ例にとっても、従来のものはビヤダル蹴りから風呂桶の積み重ねの上にビヤダルを乗せたものとか、襖の蹴り分け等であったが、このT曲馬団のものは、少女の坐った大タライを積み上げた風呂桶の上に重ねて、ゆるやかに廻すというものであった。

T曲馬団は、本格派で、本舞台と客席の間に板張の円型舞台があり、その周囲にオガクズを敷いた馬場がしつらえられていた。大胆な曲技と豊富な人員とで、きびきびと観せる各種の演技の中で、ピチピチした若手女子団員による曲馬は、一際華やかな呼び物であった。五頭の馬は、それぞれ五人の乙女達の専用馬で、ある時は一頭で、ある時は三頭で、そして又ある時は五頭全部で、入れ変り、立ち変り鞍上人無く、鞍下馬無し秘芸を披露していた。

私はその乙女達の中に、二人の美少女を発見して、一人悦に入り、毎日のようにT曲馬団へ通った。中学生になるやならずのこととて、ずい分ませていたと、今更ながら恥かし。一人は浅黒く引緊った典型的サーカス娘の身体であったが、黒い瞳が情熱的で漆黒の髪に明るい紫色のリボンを結んで、愛らしい

はにかみ笑いをいつも浮かべていた。わかりやすく女優に例えれば、引退した元東宝の中川ゆきに似ていた。もう一人の乙女はサーカスには珍らしい型で、丸顔でポッチリと肉の乗った色白のグラマー美人だった。これ又女優に例うるなら、大映の若尾文子のニューフェイス時代の顔が浮ぶ。

彼女達が肉じゅばんも付けない半裸の身体を正月の寒空に晒して、馬にまたがり、若い肌を震わせて躍動する様はニキビ期の少年の夜の床に夢想となって乱舞した。彼女達は表面、いささかの暗さもない。屈託のない笑顔で、溢れる若さを一杯にふりまいているかのように、楽しげに騎乗し演技する。

しかし、この笑いが真の微笑みではなく、彼女等の青春がいかに暗く、自由のない、人権すら剥奪された世界に置かれているかを、我が目に刻み込まれる日が来た。

その日、一月の空は、どんよりと重くたれこめ、今にも白いものが落ちて来そうな、寒い天候だった。

隙間だらけの天幕の中は、屋外と余り変らない温度で、観客は皆、正月の暗着を着飾り厚い外套にくるまって見物していた。だが、サーカス娘達には盆も正月も無い。それどこ

るか、世間の人々が浮かれ遊ぶ時こそ、彼女等は一層忙しく働かねばならないのだ。このT曲馬団では曲技の続いた後の緊張をほぐす意味で、合い間合い間に本舞台で舞踊を演ずる。今も、若い娘達が菅笠をかぶって、尻切れ伴纏一枚に赤い手巾脚絆というなまめかしい姿の、田植踊りを披露したばかり。本舞台の幕が降りるや、楽隊のファンファーレが鳴り渡り、表のたれ幕がさっと上って、それぞれの背に美少女を乗せた二頭の馬が、円型馬場に軽く走り込んできた。

簡単な鞍を置いた二頭の栗毛に打跨がる二人の美少女は、他でもない例の私の密かなアイドル中川ゆき似嬢と若き日の若尾文子似嬢ではないか。私の胸はときめいた。そもそも二人娘のその日のいでたちは、パンパパンパンパン（と、これは張り扇の音）。この寒空に金のスパンコールを散りばめたる真紅のブラジャーとパンティーにわずか申訳ばかりのパレリーナ風の超ショートスカートを腰にまとい、足には支那風の丸型跣足袋をはき、流れる黒髪に、片や紫、片やピンクの大リボンをつ結びたり。と云った案配で、ピチピチした素肌を惜しげもなく寒気に晒して向う正面で馬を止め、片手を軽く上げて「ニッ」と白い歯

を見せて挨拶を送る。芳紀正に十八、九、花も羞らうサーカス乙女の華やかな登場である。

幼い頃から粗衣の薄着で馴致されてきた女達の肌は、あたかも動物のそれのように、四季折々の厳しい風雪にも耐え得、適応するよう鍛えられているのであろうか。

オガクズを敷いた馬場の内側。板張り円舞台に女調教師が登場して、長い革鞭をしごいている。黒の長袖シャツに金モール入りの赤い乗場ズボン、黒の革ブーツで身を固めた年の頃三十ばかりの美しい女だ。

手にした鞭は、三十センチ位の木の柄に、四、五メートルの長さで小指程の太さの革の紐がくりつけられ、先端は蛇の尾のように細くなったものである。馬は全てこの鞭の音によって行動する。女調教師の巧みな手さばきによって長い革鞭が生あるものの如く宙を舞い地をはう。

挨拶が済むと女調教師の鞭が一閃して、人馬一体の演技が始った。先ず馬場を軽く二、三周普通の騎乗位で走る。続いて走る馬上に直立し片手で手綱を持って、片手を上げる。次に馬の鞍に手を置いての倒立、つまりさか立を演ずる。次には馬の尻に近い部分に立って走らせながらの縄跳びだ。その間、演技の切

れ目、変り目には女調教師の革鞭が激しい音を立てて宙に躍る。ビシッ、パチッと、実に小気味良い音が空中にさくれつする。そして時には、この長い鞭が走る馬の尻を後方から軽く追いつく。手入れの行き届いた栗色のテカテカ光る馬の尻に、革鞭の細しなった先端がまつわりつく。

馬上に演技する乙女達の肌も徐々に熱気を帯び、赤味がさして時折「ハッ」「エイッ」と可愛いかけ声をかける。演技は最高潮に達し、馬の横腹にピツタリと吸いついて走らせる忍者乗り。この時、馬を追い打つ鞭の先が故意か偶然か女達の身体に当るのを私は見逃さなかった。忍者乗りから更に高度な技に移り、乙女達は馬のタテガミにつかまりながら片足をアブミに置いて、片足で地を蹴り跨ることを繰り返す、いわば走る馬への飛び乗り飛び降りの演技を展開していた。

くるくると馬の尻に巻きつく鞭の先端が、ピシッパチッと、わずかながら演技中の乙女達の露わな背や、太腿に音を立てているのである、私は息をのんでこの光景を見つめていた。すると、突然中川ゆき似嬢の方が、どうタイミングを取違えたか馬にズルズルッと引かれて倒れてしまった。そこへ、すぐ後から

来た若尾文子似嬢の馬が急激に棒立ちになつて立ち止り若尾似嬢迄落馬してしまつた。満場総立ちとなつたが女達に怪我もなく、大したことはなかつたので観客が皆ホッとした時女調教師の鞭が鋭く空を切つて中川ゆき以嬢をいきなり、まともに打ちすえた。

右肩から左脇腹へかけて赤いシミズ張れが走り、すばやく返す鞭が胴に巻きついた。観客は一瞬シンとなつた。女調教師は「ハイ、もう一度」と女達に声をかけて再び何事もなかつたように鞭を鳴らし、失敗した今の演技の演り直しを命じた。女達はホッとした表情で今度は懸命に飛び乗り、飛び降り演じた。だがその間、女調教師の意地悪い鞭が巧みに観客の目をかすめつつ、一番痛い筈の細い先端で、必死に演技する女達の、汗ににじんだ裸の肌をネチネチといたぶっているのを私は見た。この曲馬が終つてからも、眼前に展開されたサディスティックな光景に強い興奮をおぼえて、私はしばらくその場を動けなかつた。後になって判つたことだが、この女調教師は団長夫人とのことであつた。

五

私は、その夜、夢を見た。裸電球が寒々と灯る無人のサーカス小屋で、二人のサーカス

娘が団長と、女調教師に厳しい折檻を受けている。昼間の二人。中川ゆき似嬢と、若尾文子似嬢だ。衣類を付けることを許されない娘達は、あのみすぼらしい洗いざらしの木綿製乳バンドとズロース一枚に、輝く青春の肉体を託して冷たい粗板の上に跪まづき、首うなだれている。しかも二人共、手を後に組んで固く縛り上げられているではないか。

「ゆき。今日はよくも私に恥をかかせてくれたネ。タツプリ礼を云わせてもらうから覚悟をし」

と女調教師。サーカス娘の名は、夢の中でいつしかゆきと文子になっていた。半裸の娘達はこれから行なわれるであろう折檻の激しさに恐ろしそうに震えていた。

「今日の失敗はゆきだが、とっさに、かわすことができなかった文子にも責任を取ってもらう」

女調教師の手で鞭が鳴る。

「先ず、お前達の馬にあやまれ。手をついて。と、その恰好では手はつけなかつたな、フッフッフ。いいか、お馬様にこう云え。お馬様、先程は私めの未熟さから失敗いたし、大変御迷惑をおかけいたしました。今後は、このようなことのないよう、懸命に相つとめ

ますから、どうぞ馬鹿な私めをお許し下さいませ、おい、ゆきっ、てめえから先に云え。おい、云えよう。このあま、云うんだ」

団長がうすら笑いを浮べながら、寒竹の細い鞭の柄で、うつむいているゆきの可愛らしいあごをこじ上げる。

「ハッハイッ」

ゆきは哀しげな目で団長を見上げる。

「云うなア、痛い思いをしないうちに云うんだな、ほら、お馬様とな」

団長の声は女達をなぶるように、高く低く強く弱く小屋を流れる。

「ハイ、お……おうま……」

「このあま、はっきり云え」

云うより早く団長の竹鞭が、ゆきのむき出しの肩を打つ。ピシッピシッとたて続けの鞭に跪まずく身体がよろめく。

「アッ許して……云います、アッヒイッ許して……」

ゆきは竹鞭の柄で肉付きの良い腕や胸をつかれて悲鳴を上げ、夢中で「お馬様」をやつた。

「手古ずらせやがって、始めから云えば痛い思いをしなくて済んだのに、馬鹿め」
「今度は文子、お前だよ」と女調教師。

「あたしは失敗していません」

「なにィ、こいつ」

「あたしはゆきのおかげで落ちたので、自分では何も失敗していません」

これは又何と大胆な反抗であろうか。今宵受けているこの折檻に、自分だけは関係ないと、不服の申立てを行っているのだ。

「こ、こいつ、文句をぬかして、む……」

突然の予期せぬ反撃にあつて怒り狂った团长は、文子の黒髪をむんずと掴んで頬に激しい平手打。キッと唇を結んで耐える文子。このふくよかな顔のどこに、強い大胆な意思がひそんでいたのだろうか。絶対服従のサーカス団に於て、しかも折檻を受けてる今、それはむしろ無謀とも言ふべき態度であつた。

「このアマめ、平気なツラをしよつて、こいつ、こうしてくれるわ」

バーン、バーンと左右に一つずつ团长の大きな激しい平手打が飛んで、文子は地にはつた。

「文子。お前が、お馬様をやらないうちは、今日の仕置は終らないからね。そのつもりで強情を張りな」

团长に和して、女調教師の声が響く。かたわらでは「お馬様」を言い終ったゆきが文子

のあまりに強胆な態度にあっけにとられて涙も忘れて目を見開いている。文子は後手にくぐられたまま、張り倒されて芋虫のように地にうごめいている。团长と女調教師は顔を見合せて「ニッ」と意味ありげにうなづき合う。

「さあ、お前達。大分寒そうだな。二人で馬の替りにかけ足をしてもらおうか」

团长と夫人たる女調教師とのたぐみな交替で哀れな二人の乙女は驕りに翻られている。

ひざまづいて、さめざめと泣いているゆきは、後手の縄尻をとられてあやつり人形のようになり上る。真赤な足の指先は冷気に感覚も無く、よろめく度に素肌に鞭の縞模様。

一方、平手で打ちのめされて起き上れぬ文子は、再び团长に荒々しく髪を掴まれて無理やりに引立てられた。

「さあ、二頭の牝馬のかけ競べだ。この馬場を五周するんだ。負けた方はたっぷり可愛がってやるからな、一生懸命に走るんだぞ」

と团长の声。縄尻とって引き立てられたゆきと文子は、スタートラインに並ばせられ寒さと屈辱にふるえている。

「ホラホラ、いいかい。ヨーイ……ドン」

女調教師の鞭が空を切つて激しく鳴った。

今は二頭の牝馬と化したゆきと文子は、女調教師の鞭に追われて、よたよた走り始めた。

乳当てとズロース一枚に引むかれた花恥かしい娘達が、後手に縛り上げられた不自由な姿でオガクズ敷の円型馬場を、よろめきながら走っているのだ。意地悪い夫人の手から長い調教師がくり出されて、無防備の女達の背や尻を打つ。ハチ切れそうな文子の胸が粗末な乳当ての中でブルンブルンとゆれている。

純情娘のゆきは口をへの字に結んで懸命に走る。引緊った太腿の肉がプリプリと躍動して頬に赤味がさす。四周する頃、わずかゆきがリードしていたが、負けた場合の折檻恐さからか、文子が必死に追い上げてきた。

「それっ、ゆきっ、もう少しだ。危いぞっ」

「文子っ、追い込めっ。ソレソレっ」

团长と夫人はニヤニヤしながら、このレースを見守っている。ゆきに追いついた文子があと半周でゴールという時、女調教師の長い鞭の先が文子の白いふくよかなフクラハギにからみいて、文子はどうとばかりにつんのめった。

手の使えぬ悲しさ、その量感ある肉体を自らの豊胸でもろに受けて、一瞬息が詰って目を白黒。全身オガクズにまみれて苦痛に齒を

食いしぼる。

ゆきはゴールで立ち止り、肩で激しく息をする。

「文子の負けだね」

女調教師の声が流れる。文子の頬に非道の鞭に抗議する恨みの涙が伝う。倒れ伏す文子の傍で、しゃがみ込んだ団長の手が、白い太腿をピチャピチャと叩く。

「その目はなんだ。涙はなんだ。あァん。そんなにぐやしいか。こいつ。みんな自分が悪いんじゃないか。馬鹿牝め。さ、立て。今一

もみ、もんでやろう」

団長の手はいやらしく動いて、文子の肌を摘み、撫で、はじく。

「団長、文子にブランコをさせたら？」

女調教師が団長の耳に口を寄せ何事か耳打ちする。団長はニヤリと笑ってうなずき立ち上る。高い天井から滑車を用いて、一人乗りブランコを正規の位置に下ろし、先にカギのついた竿をブランコの底辺、つまり腰を下ろす場所である鉄の棒にひよいとひっかけた。その間に文子は女調教師の手で引立てられ、

ブランコの下に縄尻をとられて立たされていた。

「縄を解かなければできねえ芸当だな。ゆきもついでにはどいてやれ、いいことを思いついたから」

団長の言葉で女調教師がゆきと文子の縛りをほどく。二人の女は感覚の失せた両手を胸の前でかき合せもみほぐそうとした。

寒気にこごえ、足踏みしながら、二人の乙女は己が身にふりかかる苦難に涙するのだった。いかに鍛練されたとはいえ、生身の人間の肌は動物のそれとは異り、一月の夜の冷気はサーカス娘の肌を刺した。

「文子。この竿にとりつけ。ゆきは文子を竿にしがみつかせたまま大きくゆすれ。いいか。文子は上のブランコに乗るんじゃないぞ。竿の途中にしがみつくだ。いいと云う迄こらえたら今夜の仕置は許してやる。いいな、それ、ゆき肩を貸してやれ」

観念した文子は、ゆきの膝から肩へ、そして地上一・五メートル程の竿にとりついた。竹登りの要領で二三手上った頃、団長の合図でゆきが竿をゆり動かし始めた。

文子のとりついてる竿の下端を持って、ゆきは前後に小走りする。心の中で「文子さ

◎本誌二〇〇号突破記念◎

△原稿募集▽

▽内容 容△

一、特異なる風俗文獻誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文獻的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、SMの他、フェテツシユ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

▽規 定△

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。
一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
一、〇以上の内容規定にて、奮って御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

△奇ク編集部▽

ん、ゆるして」と念じつつ。ゆきは自分の失敗がもとで、文子迄こんな責めに合わされるのが辛く仕置が済んだら文子のために、どんなことをしても良いと思っていた。

ブランコから吊り下った竹竿は、女一人の重みで恰好の振りとなり、ゆるく大きく行き来した。ともすれば寒気で感覚の無くなった手足は、滑らかな竹竿から滑り落ちようとする。

ズルズルと落ちかかる度に歯を喰いしばっては上る文子。団長の手には三メートルばかりの旗竿が、いつしか握られて、落ちかかる文子の裸の尻を突く。

「ホレ、ホレ、又滑った。まだまだよ、まだまだ。さあ、上った上った」

茶化しながらも団長の手は、意地悪く働いて、旗竿の先が必死にしがみつくと文子の太腿を突き、肩先を打つ。突かれる度に

「アッアッ……アッ」

と文子の紫色の唇からせつなげなうめきもれる。振子のゆれが弱まると、女調教師の手から激しく鞭が飛んでゆきの素肌にまつわり、再びゆきの小走りが始まる。

「ムムッアッウウッム……許……して。ハアッアッゆる……し……アッ」

文子のうめきが極度に激しくなり、悲鳴に近くなってきた。

「何？許してだと、こいつ、とうとう音を上げやがったな。何々、冷えたから？冷えたから、どうしたというんだ」

「ねえ、団長。文子のやつ、もよおしてきたんじゃない。ホラ、冷えて……」

「む、うん、そうか、ウァファッファッ。これは面白い。文子、せつないか、辛いかな、苦しいか。もっと苦しめ、反抗した罰が、どんなに恐ろしいか、じっくりと味わえ」

団長は夫人の言葉に、文子の悲鳴の意味を悟って、新たな責めの興味にぞくぞくとしてほくそ笑んだ。

「アッアッアッ許して……ウッアッ、許して……下さい……ヒイッ」

余りの悲鳴にゆきがたまらず、団長の足下にひれ伏して

「どうぞ文子さんを許して上げて下さい。そのかわり私を気のすむように責めて下さい。お……お願いです、文子さんを許して上げて下さい」

と、必死に哀願する。

「うるさい、手前が出る幕ではない」

ゆきは団長の足で犬のように蹴られて、転

った。ゆれの止った竿の下へ。そしてなおも哀願しようとするゆきの肩に、背に女調教師の鞭が飛び狂う。団長は旗竿を延ばして、もはや失心寸前の文子のふくよかな肉を蹴りまくる。前に廻って固くとざした女の膝を交互に突き開かせ、腹部をぐーっと突いた時が文子の忍耐の極限だった。

「ヒイッ」

声と共に竹竿を伝って、熱い液体が滝のように流れ落ちた。それは団長の靴で蹴転がされた女調教師の、あくことなき鞭の攻撃にさらされているゆきの上に、涙雨の如く降りそそいだ。

x x x

夢だった。青春の夜々、誰しもが経験するあの夢だった。その頃から、私はパンツを自分で洗うようになったのである。

翌日、私は件のサーカス団を訪れた。あの夢の中の二人も、何事も無かったように、今日も元気で曲馬を演じていた。だが、私にはどうしても、彼女等のほほえみに、ふと宿る哀しみの影が見えるような気がしてならなかった。

(終)

アルバム「美しき縛しめ」第六集 愈々完成!

緊縛美女艶姿百態

頒価一〇〇〇円(送共)

略号 「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

「出演モデル」 ○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田みゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子○新井マリ子○刑部典子の十三名

十三名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことの無いものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三名の美女の緊縛艶姿百態が、この一冊で皆さまの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。

アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集、第三集八美3Vは残念ながら売切れですが、八美4V八美5V八美6Vは只今在庫しております。引続いて八美7V八美8Vの企画をしておりますので、どうか一括してお揃え下さい。

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め (大塚)
猿ぐつわに悶える (山原)
緊縛に微笑む典子 (刑部)
瘦躯をくびる縄目 (木村)
逆さ吊りに泣く新妻 (増田)
痛めつけられる牝豹 (鈴木)
益々肥った肌に縄 (東浦)
鮮明な刺青緊縛 (山原)
長髪は肌にとろう (長野)
ゆれる吊られた女体 (梨花)

太股の刺青をただけ (山原)
荒縄と荒蕙で苛なむ (大塚)
顔をいじめられる (新井)
柱の立しばかり (山原)
赤いオシメカパー (絹川)
荒縄拷問哀愁 (梨花)
全裸の後手吊り (玉田)
案山子縛り (新井)
正面ウエスト縛り (絹川)
可愛い尻えくぼ (長野)
樹間のハダシの囚女 (桜井)

肉体自慢の開股縛り (長野)
火あぶりにあう囚女 (大塚)
汚れた麻縄縛り (絹川)
豊胸を二つに割る (長野)
水着を剥がれて縄 (梨花)
ゴムカパーの艶 (大塚)
真白き肌に樹洩れ日 (絹川)
着衣は無惨に剥がれ (山原)
裸身を晒して悶える (梨花)
縄は胸に息苦しい (大塚)
背中の刺青をさらす (山原)

全裸後手縛り引回し (大塚)	手摺りに開股責め (梨花)
両手吊りに耐えぬく (玉田)	裸身の開股縛り (大塚)
後手吊り麻柱晒し (山原)	お茶目ぶり発揮 (長野)
ネットをかぶらせる (梨花)	猿ぐつわと荒縄縛り (大塚)
山の木に曝す (絹川)	高島田の全裸の縛り (山原)
庭前に見せる艶姿 (山原)	裸身にハイヒール (大塚)
高手小手足首縛り (大塚)	ブロッコリの石抱き (木村)
手ぐさり足枷 (絹川)	生ゴムの猿ぐつわ (大塚)
裸身に光と影の綾 (大塚)	緊縛の悦虐表情 (梨花)
後手は高々と吊り (梨花)	後手に縛はきびしく (刑部)
木馬に跨がる乙女 (大塚)	豊満に挑戦する縄 (東浦)
逆さ吊りにあえぐ女 (梨花)	黒紐は白肌に映える (絹川)
デニムの拘束衣 (大塚)	裸身を踏まれる (大塚)
海老縛りに耐える (東浦)	破られたシュミーズ (梨花)
女囚第六十三号 (梨花)	六尺揮は白く映える (大塚)
吐きだした布片 (絹川)	いたぶられる足 (梨花)
白肌にフンドシ縛り (大塚)	薙の中の緊縛肢体 (大塚)
後手の背面さらし (山原)	鼻責めにあう晃子 (鈴木)
柔肌に喰い入る麻縄 (大塚)	責めに酔う恍惚境 (東浦)
後手吊りに浮かぶ女 (梨花)	逆エビにもだえる (山原)
鎖に吊られた両手 (大塚)	椅子責め媚態 (大塚)
黒革製の猿ぐつわ (新井)	見事な臍窩を晒す (大塚)
スタレの中の晒し (玉田)	豊満を割る縦縛り (東浦)
巻煙草責め (大塚)	足下にもがき苦しむ (新井)
日本髪腰巻しばかり (山原)	黒革のフンドシ縛り (大塚)
後手高手小手しばかり (絹川)	浣腸器の恐怖 (大塚)
立木縛りムチ打ち (桜井)	美肌は縄に酔う (長野)
エビしばかり苦悶姿態 (梨花)	吊られ吊られて (木村)
高島田着物あて姿 (山原)	白輝の後手しばかり (大塚)
臀部誇張股間縛り (大塚)	責めに愉悅する女 (山原)
強烈な後手と乳房 (梨花)	マゾの境地露呈 (木村)
脱げかけたズロース (絹川)	プレイに疲れたはてる (絹川)
柱に後手しばかり (玉田)	乳房は光り輝やく (大塚)
強烈な鼻ひねり (大塚)	全裸美プラス縄目 (長野)
足挙げ椅子しばかり (東浦)	

夏彦蛇行録

『彼女の「スゴイ」という本』

△梶山季之の非常階段を読んで▽

堀 夏彦

会社での会話

颱風二十四号が去って、めっきり秋らしい冷気を感じる朝。——駐車場難で早目に出勤して一服つけていると、
 「お早うございます。課長さん、梶山季之という作家知ってます？」

ニヤニヤして加賀見靖子という。

「うん、聞いたことあるようだな。作品は余り読んでないが」

何かたくらみがあるのかと警戒しつつ
 「やぶからぼうに何だい。その作家がどうし

たというんだ」

「別にどうしたというんじゃないけど、昨日帰りに東京駅の売店でチョット何気なく買った本がスゴイのよ」

そこで彼女——加賀見靖子は、声をおとして更にニヤリとした。

仕事の始まる朝の挨拶ついで、いつもの会話だ。

靖子は私の課では最古参組の二十七才の半オールド・ミス——複雑な家庭の事情で、いまだに結婚はしていないが五年越しの恋人がいる故か変にいじけたところはなく明るくて

ズケズケ物をいう。仕事も早くはないが、正確で裏表がないので夏彦も信用している娘。

「何という本？」

「非常階段」

「スゴイって、どんな。私ぐらいになると、チットやそつとのことではスゴイとは申しません」

私は多少からかい気味にいった。

「でも、恥かしくて、とても電車の中で読めなくてよ。何の気なしに買ったんだけど、梶山季之ってあんなくだらないこと書く作家だとは思いませんでしたわ」



靖子は少し興奮ぎみに私に訴える。

「ああいうの何ていうのかしら？アブノーマルっていうのね。兎に角ショックでしたわ」

そこへ若い連中が威勢よく出勤してきたので、靖子との会話は中断されてしまった。

その日帰りがけ会社の封筒に入れて

「朝、お話した本、お読みになりますか？」

と靖子が持ってきた。

「君が余りいうので、少し興味がでた。ではお借りしよう」

深夜

夏彦は例によって午前一時半頃目覚めると枕元の「非常階段」をとりあげた。

靖子が騒ぐ程のものじゃない。どうせスリラーか何かで殺しの方法か、場面に、ショックな箇所があるぐらいだろう。パラパラとページをくってみた。といきなり目についたのはクリスターマニアを以って任ずる夏彦の目を刺す浣腸場面――

△夫の昭一郎は、彼女のからだを太い麻のロープで、ぐるぐる巻きにしたり、両手を背中に回させ、海老のような恰好に縛り上げたりしだした。

△中略▽

彼女は夫からいじめられていると、からだの細胞がぞくぞく震えてくるのを感じた。それは恐怖でなく恍惚境へ誘う性質のものであった。

ところで最近、夫は――結婚して四年目であるが――奇妙ないじめ方を覚えてきた。それは行為の最中に浣腸をするという遊びである。

× × ×

それは浴室の中に鉄製のベッドと、ビニール製のマットレスが持ち込まれて来た夜に、はじめて夫から教えられた。

「おい……ここへ寝るんだ……」

と夫は、ベッドを指さした。彼女が衣類を脱ぐとすると、夫は首をふって、

「いや、そのままでもいい」

といった。玉姫がベッドに横たわると、夫は四本の脚についた鎖に、彼女の手足を結えつけた。これで完全に、彼女の自由は奪われたことになる。彼女は家では支那服をきているのだが、夫は下履きを剥いで、長いこと愛撫をつづけた。そうしてやにわに、その行為を中断すると、浴室をでていった。すぐに夫はもどって来た。

「どうしたの」

「いいから目をつぶるんだ」

夫は彼女に目を閉じさせた。……

だが夫が攻めたのは期待した部分でなく、肛門の方だった。冷たい液体が一気に注入されるのがわかった。

「ああっ！」

彼女はのけぞった。

「力をぬくんだ！」

夫は命令した。

「ああ、気持がわるい！」

「力を入れたらいかん！」

夫は乳房に歯を当てながら怒ったように命令するのである。仕方がないからいわれたままに腹の力を抜いて見ると、なんだが腹の工合がおかしくなりはじめた。

「あなた……何をしたの？」

彼女は驚いていった。

「下剤をかけたのさ」

夫は平然と答え浴槽の縁に腰をおろして、煙草を吸いはじめる。彼女は身悶えた。

下剤をかけられたのだから、当然の帰結として、排便の欲求が起きる。しかし彼女は支那服を着たままベッドに縛りつけられているのであった。

「あなた！」彼女は叫んだ。

「早くこの鎖をほどいて！」だが夫は冷然と

「だめ、だめ！」

「あなた、早く！」

「我慢しろよ」

「なんてこと、なさるの？」

「あと五分の辛抱だ！」

「ねえ、だめよ！早く！」

「ふっふっふ……あと五分だよ」

「待てないわ……」

「待て、待て……」

夫は両脚の鎖をほどいた。しかし上半身の自由は与えられない。脚をばたつかせて、彼女は、

「あなた……」と呼びつづけた。

しかし夫は彼女をそのままにして、外に出ていったかと思うと、ナイロンの下着や、コルセットをもって引き返して来たではないか――。

「やめて！」

彼女は夫の意志を悟って低く叫んだ。しかし夫はニタニタ笑いながら、ピッチリと肉に食い入るようなコルセットを、あてがうのだった。

「ああ！ こんな恥ずかしい目に！」

「あと一分五十秒……」

「ああやめて！」

夫は秒読みをしながら、眉根を寄せ、歯を食いしばり、尻を浮かせて、あることに耐えている彼女を眺めた。

「ああ、神様！」

「こんな目にあうなら死にたい！」

「あつ、もうだめ！」

夫の手が彼女の右手にかかった時、玉姫は張りつめていた緊張感が、どっと崩れ、すでに制止できなくなっていた。

彼女は泣いた。口惜しかったのだ。

だがどうだろう。夫の武谷昭一郎は、彼女が我慢しきれなくなつて、排泄したと知ると猛獣のように挑みかかって来たのである。――その時玉姫は、いうにいわれぬ、鋭い快感を覚えたのだった。行為のあと、夫は彼女をそれこそ舐めるようにして後始末してくれて長い長い接吻と、抱擁をくり返したのである。

△中略▽

この刺戟の強い遊びは、いまでは武谷昭一郎、玉姫夫婦の秘密のたのしみになっていたのである。▽

――ああ、クタビレタ！

長々とその一節を写すことの愚かさより、夏彦は慎に不思議な気になるのである。

これだけの描写を、奇クのような専門誌に於てすら発表することが不可能なのか。少くとも現在の奇クでこれだけの生々しい描写をしたら編集部は忽ち、その筋から目を光らせられる破目に陥るのではなからうかということだ。それが光文社のカッパブックスの一冊として堂々と駅頭で売られているのである。

高校生でも、BGでも、誰でも一応、有名作家の有名出版社の単行本として、何の恥じらいもなく、堂々と購入できるということ。

勿論、マニアである夏彦には特別に強く写るのかも知れぬし、梶山氏のねらいが『トラブル・コンサルタント伊夫伎亮吉』を現代青年の偶像として『セックスと金』を縦横に駆使して、複雑な資本主義的悪に挑戦させるねらいはわかるのである。

しかし夏彦はこれを十代、二十代の人間が読んで刺戟を受けない人は、まず少ないのではなからうかと思うのだ。（これは独り善がりかな）

現に加賀見靖子のようにノーマルな明るい娘が、相当にショックをうけ興奮して「スゴイ」というのは少くとも作品のストーリーや

作者の意志をいつているのではないと思える。

まず間違いなく、その部分的描写を指しているのだ。

といって夏彦は別に文部省や、その筋のお役人ではないから梶山氏の作品を読むとか読ませたくないというのではなく、現在の奇ク束縛された不自由さを嘆かざるを得ないのである。

片隅に不遇をかこっている奇クと、陽の当る場所で堂々と面をさらしているこの本に何か割り切れぬ気持をもたざるを得ない。

『非常階段』が、特に純文学作品（この言葉少し古いかな）というのなら別だろうが、マスコミにのった娯楽読物の域は出ないのだから、軽く、面白く、読まれれば作者は満足だろうと思う。

ところで面白くという題材はネタ切れになりつつあるので、作家が奇クの分野にそれを拾いに来た。——そんな感じが莫としてするのである。

× × ×

兎に角、夏彦は最初から通読してみた。未読の人のためにざっと登場人物を上げよう、もっとも『夜の配当』を読まれた人及びつい

先日までテレビ連続物『夜の配当』を見られた人はその続編であると思えばいい。

◎伊夫伎亮吉——主人公。トラブル・コンサルタント所長、世界レーヨン他、大会社を手玉にとって「のっとり」「つぶし」は勿論、金とセックスに生きるスーパーマン。

一流料亭のおかみ、貴金属商女社長、大会社社長令嬢とやたら女にもてるその方のテクニシャンで、目的のためにはサディストを演じ、自分の女を使って相手の弱味をにぎるぐらいは朝飯前という、大変な、そして羨ましいような男。

◎香川玲子——香貴堂宝石店副社長（元香港美貌スター陳玲玉）——彼女の夫は、戦傷をうけインポ、二億円のダイヤ販売を伊夫伎に依頼し、彼の大胆な人を食った方法で成功するが、やがて、完全な彼のテクニクに参った女。後、東西織物偽装倒産をめぐって、整理屋武谷昭一郎と、伊夫伎が対決するとき、伊夫伎のためにサディスト武谷の犠牲になり、流腸され汚される。

◎徳光せつ——赤坂の高級料亭女主人、元世界レーヨン社長の二号——彼の生前から伊夫伎と関係があり、彼女も完全に彼のテクニクに参り、惚れこんでいる。伊夫伎の大きな取

引に蔭で色々力をつくす。

◎武谷昭一郎——前述引用した流腸マニア——本職は桑名の暴力団の親分、会社のつぶし屋——東西織物の「のっとり」をめぐって伊夫伎と火花をちらす。

◎武谷の妻玉姫——玲子の友人であるところから伊夫伎が近づき、彼等夫婦のSM遊戯の秘密をにぎる。玉姫はてっきり伊夫伎をSと思い込み、彼の強引な愛撫をうけてしまう。彼女が陶醉の中にある間に、金庫の有力証拠（東西織物の「のっとり」に関する）を伊夫伎はさらう。

◎その他女装愛好の青年、芳野眉美氏好みの青年等、華やかに大勢登場するが、皆一癖ある人物ばかり。

× × ×

さて梶山氏の描写を写すだけでは奇クにも迷惑をかける心配は先ずなさそうだと思い、先にも長々と夏彦好みの箇所を引用したが、もう一つ。終章近くの流腸場面を紹介しておく。

（こんなに安心して流腸場面を長々と表現できる機会は仲々ありませんからね）

△暗闇の中で、ドアの閉まる音がした。
（ああ、彼だわ）

夢うつつに、香川玲子はそう思い、寝返りをうって、俯伏せになっていた。パンティをはぎとり易いようにと、思ったのである。

暗闇の中で衣^{きぬ}ずれの音がしていた。

上着をぬぎ、ズボンをぬぐ音。ネクタイをはずす音。カフスボタンをとり、ワイシャツを椅子の上に放りだす音……。

(ああ帰って来たわ……)

香山玲子は、そう思いながら、また眠りに落ちた。それからどれだけたったろうか。

不意に彼女は目覚めた。目覚めたというよりなにか、からだの異常に気づいて飛びおきようとした、といった方が当たっている。

両手首が、強く緊縛されていた。

「いゃん……亮吉!」

玲子はいった。気づくと両脚も結わえられている。

「いたづらは、やめて……」

暗闇に向かって声をかけたが黒い人影は何もいわず、両足をつかむと、やにわに異物を肛門に当てがった。それと同時に、何か冷たいものが体内に逆流した。

「あっ、やめてっ!」

玲子は叫んだ。

「亮吉……やめて! ひどいこと、するのね

!」

ベッドからとび降りようと脚をばたつかせていると、にわかに部屋の電灯がともった。

「ああっ!」

玲子はのけぞった。人影は、恋しい亮吉ではなかった。武谷昭一郎だった。酔眼を見ひらいて、武谷はにたにた微笑^{わら}っている。

「なんてことを!」

「もう今夜から、きみはおれの女だ。……」

「ええっ!」

「さあ、わめくがいい」

「やめて!」

玲子は思わず悲鳴をあげる。悲鳴をあげながら彼女は床の上に転がり落ちていた。床の感触は冷たかった。

みると一面に、ビニールの大きな風呂敷が敷きつめてある。

「お願い! 手だけでも、ほどいて!」

しかし、ナイロン・ストッキングでしぼられた両手首は全く自由が利かなかった。

「だめだよ……」

武谷は含み笑いをつづけた。

「ああ……」

玲子は、尻を、もぞりと動かし、起き上がろうとした。男はベッドに腰をおろし、ぐい

と下腹を両足で踏みつけた。

「おまえは、おれの女だ……」

「嘘! いつ、そんな……」

「伊夫伎君は、君を捨てて、金沢に行ったぞ……」

「嘘、嘘……」

「思い切り、わめくがいい」

男の足に重味がかかった。

「ああ!」

玲子は苦痛に顔をゆがめた。

「ねえ……こんな恥ずかしい目に、あわせな

いで!」
「ふっふっふ……だめだよ。そこで往生させてやる」

——数分後

部屋の中には、異臭がたちこめていた。そうして床の上では、二匹のけものが喘ぎつつからみあっている。V

再び会社にて

二日後、私はいつもより更に早目に出勤して、加賀見靖子の現われるのを待った。彼女も長年の習慣上、早いので皆の出勤する前に「非常階段」を返えしたかったからだ。
「お早うございます」

彼女は愛嬌のある顔を、ほころばせながら入って来た。

「加賀美君、この本有難う」

「どうでした？ 課長さん好みの本でしょ」

私は内心、彼女の真意を計りかねて、ドキリとしながらも、

「うん、まあね。でも、確かにあんな世界もあるかも知れんね。若し、伊夫伎のような男が実在したら、女性皆、いかれてしまうだろうね」

「ええ、私もあれは作者の理想像だと思うけど、何だか課長さんと似てるみたい」

「オイオイ、冗談いうな。わたし如き平凡なおとなしい男をつかまえて……」

「ふっふっふ……でも経理課の伊藤係長さんがいつてたわよ。課長の二十代はすごかったんだって——今でも水商売の女の人にすぐもてるんだって、この間、山に行ったときいろいろ聞いたわ」

「加賀見君、それ、ほめてんの？ けなしてるの？ それとも強迫？ アハハハハ……」

何か彼女に秘密をにぎられたような、くすぐったさを私は笑って逃げた。

「強迫かも知れせんわ。この本の貸賃、割と高くつくかも……」

「まあいいでしょ。その内まとめてお払いしますよ。梅林のとんかつ位ならね」

靖子は無邪気に喜んで席に帰っていった。

× × ×

（あの娘は俺の異常な好みを何かで感じているか隙を見せて俺を誘惑しようとしている。態度の端々に今までの経験から、男を誘っている色気がにじみでている。思い切って手を出して俺の思う通りの女に仕込んで見るか、いやいや、やっぱり、今までの信条は守らねばならない。職場の女に手を出すな。それによって脱落していった仲間を、お前は何人も見てるじゃないか。靖子の後には何がかくれているかわかりやしない。やめろ、やめろ助平根性を起すな）

一瞬の妄想から返った、夏彦は又、善良で、事なかれかしのサラリーマンに戻った。そして今日の仕事の段取りとスケジュールをきばきと記入しはじめた。

（一九六五、一〇、二二）

『映画“花と蛇”に

肚を立てる』

奇クに「花と蛇」映画化進行の記事を見

た。いつ封切られるか、心まちにまっていると、新聞の映画広告欄に小さく、それもたった一館上野セントラル劇場にて上映されていることを知った。

仕事がいそがしく仲々行かなかったが、これだけは見のがしては——とやっと封切って三日目に入った。九月八日だったと思う。「囁まれた乳房」とか何とかいう映画の途中であったが狭い館内は超満員。一応冷房は利いているのだから熱っぽい空気と陰気な静けさ。「乳房」が終って、いよいよ「蛇」になった。題字の背景から縛られた裸女のバック。いいぞ——これから浣腸場面を、どのよう表現するか暗示するかに期待した。

しかし、私は全く落胆した。——

団先生があれをよく映画化に承知されたものだ。ストーリーも登場人物のイメージも全然別物だ。却って「花と蛇」特集号にある、写真や絵から楽しい空想を展開させていた方が百倍もましだと思った。

僅かにラストシーン近く、主役の女優が下半身を全く隙間なく縛られて責められる箇所での表情にフンと思えただけ。

愚作とも駄作とも評しようのない代物。セントラルに入っていたお客の恐らく八〇%以

上は奇くに多少とも縁のない人達ではなからう。映写が終って黙々と帰る人達の表情に失望のいろを、はっきりと私は感じとった。

それでも上映中、夏彦のすぐ前に坐った三十恰好の男が題字のところから、終りまで必ず責め場で二、三枚ずつシャッターを切っていたのが、印象に残った。つまらない写真をして——と思う反面、その青年の真剣な横顔を親しみ深く、眺めたものである。

× × ×

確かに「黒い雪」以来映倫の態度も硬化したに違いなからうし、色々な制約も承知できる。しかし、例え裸体部分が少くとも責め場が少くても、いくらでも表現の方法があると思うのだが。遂にいちぢくはおろか浣腸を暗示する何物も写らなかつた。

例えば別室で川田が、又はズベ公の一人がその用意をする場面とか、苦痛にゆがむ夫人の顔とか、指の動きとか排便や排尿を暗示する器具をバックにおくとか——

少くとも映画を作ろうとするからには、もう少し、何かの技法があるのじゃないかと思う。

しかも終りに川田はじめ悪役を皆殺してしまっているのだから続編又は改訂版を出そう

にも、どうにもならなくしてしまっている。尤も、あれにこりて再び見に行くことはないであろうが——（一九六五、一〇、三）

「鬼六先生礼讃」

十一月号、例の浅草の店で入手、一読したので真夜中の床に腹ばって雑感を——

やはり何といっても庄巻は「花と蛇」ですね。続編になつてから種々の制約がある故か少し低調と思えて来たが、十一月号からは色々な夢が、再び見られるようになって嬉しいです。

「花と蛇」は小説であるかかないかなどという難かしいことを論じていられる方々もありましたが、兎に角、鬼六先生はエライ職人ですよ——。

そんなことをいったら若輩の素人が生意氣と思われるでしょうが、私は素直に敬服します。作品そのものの芸術性からいったら正直余り価値あるものとは思えませんが、その作法といい緻密に計算された設定といい会話のたくみさといい、相当の実力をもった作家だと私は思います。或は著名作家の余技かも知れませんが、金銭、日当のアルバイトでないことは作品の中に感じられる迫力と、作者の

妖しいまでの情熱でわかります。

少くとも鬼六先生が「花と蛇」を執筆しているときは団先生の中の「鬼六」がひたむきな心で純粹に打込んでいたことが彷彿と浮んでくるのです。そんなひたむきな心と純粹さが読者を魅きつけ、夢中にさせる魔力をもっているのじゃないかと夏彦は考えます。あの中にでてくる事柄や、人物は現実には起り得ないと承知しつつ、そんな事件や、人物が身のまわりにいくらでも、うようよころがっているような親近感を読者は感じ、自然にひきこまれていくのでしょう。

あの中にでてくる人物像は、かなり広い範囲に亘り人間のもつ共通な一面をどこかに発見する筈です。夏彦にいわせれば完全に正常な人間なんて存在しないと思うし、若し現代にそんな人間がいたとしたら、彼こそ異常かある意味での不具者に外ならないと思いますよ。尤も正常と異常という内容の限界は微妙で難かしいと思いますがね。

現にこの夏彦にしても、（或は真性かも……）自分では八俺ぐらいのは人に迷惑をかけるじゃないし、中年男としては普通なんじゃないかなVと自分を許せるし、生きる幅が広がったような気もするんですよ……。

脱線してしまったけど、あの小説!には夢があるし、現代の人間像を象徴しているし、それに人間の可能性を示唆してくれるような気がしてくるんです。汚れた人間、汚された人間を描きながらそこに夢と美しさを、少くとも私は感じられるのだから、立派な「小説」といいていいだろうと考えますね。

理論派? の方には「そんなの論理になっていない。夏彦って野郎少し馬鹿じゃないのか?」と叱られそうですが――。

でも軽く素直な気持ちで感じが、こんな風にすらっすらとでてきちやっただです。悪しからず。

『クリスタルフォト雑感』

夏彦の奇クを見るたのしみの一つに分譲写真の広告がある。

尤もそれはクリスタルに関するものに限られるのだが例えば十一月号の新版分譲品の中に美木乃々子というモデルの「ぬる」「ぬか」の広告があるとまだ彼女の姿態はどんな類形に属するのだろうか、五枚の姿勢の中にどんなものがあるか、どんな表情と想像はつきないのだ。又、宣伝文句がふるっている。「ぬか」辻村隆の手で、さまざまな浣腸器を駆使

して浣腸を施されている乃々子の魅力的な姿態をファンの要求に応じて作成しました――

辻村ダンナがどんな責め方をしたか、乃々子は、それにどんな反応を示したか、又実際に挿入されたのだろうか。空想は無限に広がる。うまくやってやがる。羨ましいね、本当のところ。

乃々子という新人、どんなタイプの娘かしら……限りなく妄想は広がって行く――。

ここ二、三年の本誌の中から印象に残ったPR文句だけを見ても、楽しいものがいっぱい――三十八年三月号の紹介。

(きか)――責めの中でも浣腸が一番好きだという東浦ひかるに対して、実際に彼女のためのプレイとして実施した浣腸の場面を……という文句。古くは、たしか伊吹まさ子に辻村氏が実施したというが、ひかるにも本当に実際に実施したのだろうか? どんな薬液を使い、どんなポーズをとったのか? 撮影中、彼女はどんな反応を示したろうか。同じくひかるには(かく)――強制空気浣腸(かな)百CC硝子浣腸、(かむ)浣腸責のムードなどの紹介があって楽しませてくれる。前にも書いたが現役のモデル嬢の中では梨花さん、

綿川さんなど、瘦型の女性が好きな夏彦。だから、関連資料の部の中から一度、そろえたいと思う。それにしても梨花さんの(しか)嘴管挿入などまだ在庫しているか。

更にそれよりも、今まで注文をためらった理由の一つにどうせ、まあ市販できるフォトなのだから、いざ届いてそれを開いた時、却って失望、落胆が大きいのではないか、ということだった。(期待してはいけない。宣伝文句をよんで想像を逞ましくしている方が楽しいんだ)と自分を納得させてきた。でもやはり実物を見たい、何かを期待したいのが人情であり、平凡な人間の共通する助ベエ根性なんだね。何だかこんなことをいっている内に本当に欲しくなった。今度このノートを送るとき一つ注文してやろう。

でも全国には相当マニヤもいるんだろうから分譲フォトも相当でるんだろうな。どんなモデルのどんなフォトが一番多いか人気投票でもしたら面白いし、購入のときの目安の一つになると思うが、これは色々な面からむづかしいでしょうね。

どんな律気そうなお堅い人物でも、宴席などであのありきたりの写真を見せられて、嫌な顔は見せないし、自分の集めたものを平気

で半ば自慢げに見せたり、贈ったりする。しかし、こと浣腸に関するものはどうも、誰にでもという訳にはいかないのだろう。

しかし、同じ東京に働いている数百万の人間の中の少くとも数万人の中にはひそかにクリスターマニアのいることは間違いないと考えただけでもニヤニヤせざるを得ない。

どうせ、人間なんて大した違いはないんだよね！

十二月号雑感

十二月号昨日（十月二十六日）入手、いま一読したので大ざっぱな感じを一つ二つ。

毎日仕事に追われて疲労した頭には何かやたらと理屈が多く、この号は素直に馴染めないというのが第一の感じ。

別にヘリクツだとはいわないし、論評、批評も奇クを高めていくためには大切だと思うが、余りそればかりだと食傷する。もっと気軽に楽しめるフランクな雰囲気欲しいと思う。新人や若い人の告白や体験記をもっと多く載せられないものだろうか。よし文章は稚拙であれ、表現が危険であれ、手を加えて、そういう人達の作品を、私などは心からのぞむね。

誰彼という訳ではないが、常連の先生方がほんとにペンの先で、手前勝手のことばかり楽しんでるようで不愉快な気がするね。

私の「蛇行録」載せていただいて有難いが私自身、そういう常連の一人にはなりたくない、いまあらためて反省していますよ。

別に自分の好きな分野だけから、物をいうなという訳じゃなく（そういう点私などもその一人）余り専門家？が増え言葉の上のやりとりが増えたんでは、かたが凝って仕方がないということ。

案外、底辺には夏彦ぐらいの単純でレベルの低い方々も多いのではないかと思うので生意気ですが一言――。

× × ×

十二月号では何といっても、鬼六先生の「蛇」が見えなくなっただのはさびしかった。その穴うめで私の日記風のものが載って嬉しいうより恥かしいような気がした。期待された大方の読者に、さぞガッカリされたこととお詫びします。

若し今度、私のこれが載せていただく幸運があるとしたら読者通信欄にでも小さくどうぞ。十二月号が低調な中でやはり大ベテラン辻村氏の「クリス・ラプソディ」は断然ピカ

一的存在。

美木乃々子さんの姿態にも接しられたし、何といっても行動の事実が裏付けされているだけに文句なく魅かれた。憧れの人物、辻村ダンナよくやってくれた。たまたま題材がクリスターだからいうのではないが、氏のカメラハントには何の抵抗もなく大方の読者が毎号大いに期待していると思う。一度病気をされた由、大いに自愛の上、今後も健斗を祈りたい。

もう一つ「H診療所にて」の宮辺さんの短文、内容が私好みなのでやはり異常な関心をもって読んだ。体験を通したもののだけに短い文章だが、いろいろニュアンスに富んでいて心臓にこたえた。

行動派を宣言した私だが、彼女に呼びかけるには尻ごみを意識する。

理由は彼女が看護婦さんで専門家であるという点と、余りに若く、やはりとても打ちできない「高嶺の花」を感じてしまうのだ。でも、八もし浣腸というムードを望まれる方があったら、私でもその御希望を満たす自信があります。どうぞ赤十字――どうぞVという文字には未練を感じるよ。

「珍学的善讚美論」 ブンガク

—小説・花と蛇は善である—

夜乃探郎



△ある日、あるとき、アメリカで「エロ本」にかんする査問会が開かれて、証拠物件としてあるパンフレットが提出され表紙の写真が女性のセックスを示しているからワイセツだとされた。そのとき、ある女性は「女性の身体のだんな部分でもワイセツとは思わない。一部分がワイセツということになれば、身体がワイセツということになる。人生もワイセツになっってしまう」と怒った。▽
—「オール読物」十二月号・△エロスの栄え▽里見真三・より

はじめに、ズバリなぞ小説△花と蛇▽は善

であるか。そこから書き出そうとしたが、やめた。たまたまこの表題を記しお風呂に行き、さらに構想をねってこようとした帰り新刊書店で「オール読物」十二月号の「レポート特集△性▽」の表紙、唄い文句が大変と気になって購入。その一つ「エロスの栄え」里見真三・△ワイセツ文学がいけないのなら人間そのものもワイセツなのでしようか？▽という目次付け文が眼に入っただけである。（これはブン学の肴になるな）そう思った。内容を見、その感を強くした。犬もあるけである。

—前略—「もっと、もっと」ひとつながりの高い低いなり声が、彼女の喉から押し出

された。二本の指には更に力が加えられた。切株は鋼鉄の切片に変わっていた。—中略—この一節は、さる同人雑誌にのせられたものである。—中略—考えてみると、同人雑誌ほど「表現の自由」を享受できる舞台はあるまい。—中略—「あなた好き」とわたしは歓喜の中でうなった。いい言葉だと思った。ああ堂々のリアリズムである。

—これは「エロスの栄え」の一節である。すでに公刊された△オール読物▽に出たのであるから、K誌もカット心配ないリアリズム？珍小説紹介のくだり。切株とは何であるかETCは説明の要もない。ここまでが、引用の限界。こんな紹介の小説的なS小説を書け

とは云わない。常識の問題である。ただ、ちよつと氣になったのは△表現の自由▽という言葉だ。同人雑誌とは表現の自由が（その方向はともかく）先決される。市販されにくい読者があまりにも限定される故である。さてあまりにも表現の不自由がなげかれる、同人雑誌的と評されるK誌。まさに奇なる物である。それこそ△奇譚▽OK誌にとってのそれは、だれでもが書き、よほどの作文的（この場合は文の未熟さというより、チンプンカンプンということ）投稿でなければ九分九厘、誌上発表される。―これが、同人雑誌的K誌のよさだろう。しからば何も△同人雑誌的▽は氣にしない、氣にしない。むしろよろこぶべきだろうか。

ここから△小説・花と蛇▽の珍評は出発される。文学上に於ける悪とは何か。または善とは何であるか。（私はたしかにローカイなる人間である。しかし一度、書くときまればジャズるくせはあるが、筆法はまげない。芯はたしかなものを入れない。ごまかされないように）。またはワイセツとは何のであるかETCの問題について考えて見たい。

善かならずしも善ならず。悪かならずしも悪ならず。早い話が、△勝てば官軍、負けれ

ばゾク軍▽。近い所で△カワイさあまって憎さが百倍▽。△戦いで人を斬るのがサムライ（軍人）ならば、平和で斬る（犯罪）のは罪となる。―この奇妙な論理が、文学ではいっそう複雑性がからまって、からまればからまる程に△真実▽となる。難解な文章ばかりが学術でない、笑って斬る（語る）もこれサービスの内。ドストイフスキイの文学をマン談調でやる心意気がホシイネ。（ジャズはますます音高し）。どうして、力んで△花と蛇▽は悪でないと評する必要がある（久我さんには悪いけど）。△花と蛇△はまさに善であり、善讀美こそ必要である。（私が力んだのは、文学でない、読物と横ヤリを入れられたからである。あれといまのポイントは違う）もはや文学として一丁、すべり出しているのだから。△花と蛇▽のストーリーはよめば判る。そのために連載されている。判らないのは△善▽のことである。（このジャズは解説でない。珍学論である。）

女を責めることは△美▽である。それをながめるのはたまらなくスリルあり、よい気持である。スケベイ（ワイセツ）という言葉はマニアの中では通用しない。もし△花と蛇▽が小説として△美▽があるのなら△美▽は昔

から悪ではないことになっている。ワイセツでもない。芸術として評される。△文学に悪を▽でなく△文学の悪は善である▽善を讚美しようとしてシヤレるべきではないか。

サド文学の△文学▽として評価されるのは悪の描写というより芸術かどうか。そこに、なんのために悪的描写が必要であつたか―という必然性が問題されるべきだろうか。文学では△必然性▽は、例えそこに△悪▽があつても「人間の文学」としてハカリをかけられる。いま、良書と評されるトルストイの作品モーパーッサンの作品ETCもかつて色眼鏡で△悪書▽ときめつけられた時代もあった。

（この文は研究でないから△参考▽は出さない諒とされたい）。事実（社会に行なわれて犯罪とキメツケられた事件）と、小説（虚構）と、混同してはいけない。事実が事実。小説は小説である。もし、そそかしい読者があつて、遠山令夫人が悪人たちに責められたから、これはエロ（または、悪書的小説）と断ずるのなら、はなはだもって軽そつと云わなければならぬ。小説の中の事件は、法律的問題は通用しない。問題は、この作品全体から受取るマニアの態度である。そこからロマンとも、または大変勉強になったとか、そう

感動する、プラスになるのなら、はなはだもって△小説・花と蛇▽は善なる小説と評すべきだろうか。悪の効用とは悪を出して△美▽と変ずる作者の手腕（思想）と、読者の答えから生れるものである。門前の小僧習わぬ式では、小説の悪は論じる資格なし。その点、K誌の読者はみな、この「花と蛇」のファンのようなから、△花と蛇は善である▽と言っても、ツーカー式に、ハハンとうなづかれると信ずる。

表現の問題、これは特にSM小説には必要だろう。しかしことさら△花と蛇▽善論には必要ない。敵は本能寺にありである。——ここまでかけば後はクドイヨ。（これが本当である）しかし、サービスピ精神あまりある私は、もっと書く。正直いって、私はボンクラのせえか、沼氏の文章は、あまりにムズカシくて、判らない。だから彼の△評論とまで▽と云われても、書きようはない。いままで幻ばかりたべてきたバチだろうか。（沼氏の文献カチをみんながいつてゐるから、そうであるうがーと、私は別に反対はしないが、アンナに面白くない文章もない）

まさに世界のザ・ベストセラー「聖書」と同じく、その評価ははなはだ神秘にして、奇

怪？である。西洋の文学は、聖書が大きな役割をしている。日本でもことホンヤク物をよまんとする位の方は△常識▽として、よむべきだろう。いやよんでいよう。ところで全巻を完全に読破したというお方は手を上げて頂きたい。沼氏の作品をケナシていたのでない。奇怪？だと評してホメテいるのである。（芳野さんなら判ろう。いや、こんな子供ジミタ珍論など、判らない方はどうかしている）

——さて、また△花と蛇▽に移ろう。この小説をサシミのツマにして、とんでもない話をするのは、よくないことだ。文学（小説・花と蛇）を文学と格付けする必要はない。小説か読物か？は、私のヤジである。辻村氏はなぜカメラ・ハントをするか——と、評論するようなもので、辻村氏の△アブ▽は定評済みである。

本当は△花と蛇▽もそうならなければならぬ。前衛とは、とにかくブチコワシ作業である。なんでもコワシテ、そこから（新しい物が生れる）まったく恐い言葉だ。その怖さが判らなくては△前衛▽もオシャベリできないだろう。芳野氏は、過去をコワシタから△前衛▽を、いま盛んに広告している。一例・

悪は善である。しかし私の見る所、文学の世界に悪書などない。みな△善書▽ばかりである。もっとK誌にも善讀美論が上るべきである。いつまでも既成のモラルに眼をむき、肩をいからしめてもつかれるだけ。そんなのは犬にくわれる。

——長いばかりが本格とは云えないだろう、寸言ということもある。つまり私はエキスをこの文につめこんだつもりである。

最後に「花と蛇」の評価を（親切心があるからね）くだけてやっちゃうよ。団氏は書きたいから、これを書いた。これ（必然性）。面白いとは、それが読者に判るからだ。眠くなるのは悪書である。この花と蛇は眼をパツチリさせてくれる。アンブルよりきく。だが、ときたま反射作用を起す。△美津子さんカワイソウだな）そしてまた時には（もっと責める、責める）これ小説の刺激と（善悪のデリケートな所）で、それこそ前衛的なろまんを生み出すとする団氏の見せ場である。そして、既成モラルに正しくプロテストしようとする読者のフミキリ台である。そこから△美▽も（ロマン）もあふれてくる。

（おわり）

女相撲物語

花の女斗美たち

(3)

奮斗士好太

今井さんはちよつとの間でしたが、私たち三人の顔を順々に見くらべながら、だまったまま立っていました。

私は初めてのマワシ姿がさすがに恥かしくそれから何か変な恰好をしているのではないかしらと心配になってきて、ひとりで顔が赤くなり、何だか今井さんの顔を見ていられないような気持ちになってきました。下を向きながら横目でヒロちゃんや津野さんの方をうかがいますと、二人は別に心配そうな顔もしていないので、少しは安心しましたが、それでも顔を上げられないのでした。

しかし、そんな気持ちも今井さんの話しはじめたことでおさえられました。

「相撲の練習というと、すぐ押し合ったり、投げ倒したりすることだと思ってしまうけど

……それも練習にはちがいないけど、あんなたちには、そんな練習をする前の練習……とでも云うのかしら……つまり相撲をするために覚えておく必要のある基本を練習してもらわなければならぬのよ」

私は意味がよくわからなかったので、頭の中で云われた言葉をもう一度くり返ししながら今井さんの次の言葉を待ちましたが、津野さんは例の早のみこみのくせで、さっそく口を出しました。

「わかります。四股とか仕切りとかっていうことでしょう」

今井さんは、ちよつと笑って

「四股は基礎練習のうちにはいるけど、仕切りは私たちの相撲の場合、ルールの一つだね。大相撲の場合は、むしろ高等なテクニッ

クということになるかしら。つまり基礎練習というのは、あんなたちのからだに相撲というスポーツをするのに適したからだにつくり直すための練習ってこと。たとえば数学の勉強をするにはまず方程式を覚えなければならぬでしょ。方程式も知らないで数学をやって、まあ簡単な問題なら解けるのがあるかも知れないけど、少し進めば全然わからなくなるってこと。それと同じように相撲だって何も基本を知らないで最初から取り組んで投げたりなんかばかりやっていたら、少し力の強い人におつかれば、もうダメってことになるわけよ」

今井さんは、そこでちよつと言葉を切ってぶつかり合いをしている小林さんの方を見ました。そして



「相撲がただ力くらべだけだったら重力の法則から云ったって、あすこらにいる人に誰もかないってないわけだけど、残念ながらその法則は通用しないようだね」

今井さんの言葉のように、土俵では大きな小林さんがフラフラになってころがされていきます。ふとっているだけに汗っかきらしく、広い背中一面に砂が張りついています。

「相撲っていうスポーツは土俵の中のわりか

しせまい場所で短い時間の勝負でしょ。それに足のつまさきでも、ちよつとでも土俵から出たり手のさきがほんの少し砂をかすたりしただけでも負けになるんだから、ただ力が強いというだけではきまらないのよ。そりゃ力が強かったりからだが大きかったりすることは有利なことだけど、それを短い時間に百パーセント発揮できなかったら何にもならないわ」

今井さんがこう云うと

「毎日あんなにキツイ練習をするんですか」

とヒロちゃんがおそろおそろ尋ねました。

私を相撲部へさそったくせにいきなりあんな猛練習を見せられたので、すっかり弱気になってしまったようです。

今井さんは、ヒロちゃんの心配そうな様子に笑いながら

「心配しなくて良いわよ。最初からあんなことしろなんて云わないわ。いきなりあんな練習させたら、あんたたちみんな明日から学校休まなくちゃならなく

なるわ。あんなにひどく投げられたりころんだりしてもケガをしないのは、デタラメにやってるんじゃないよ。相撲の勝負は短い時間だから云っても、ただ理くつを頭で覚えてるだけではダメ。短かいかわりに動きが早いでしょ。だからいくら理くつがわかっていても、その時に直ぐからだが動かなくちや何にもならないわけよ。からだに完全に覚えこませておけば、頭の中に考えが浮かぶと同時にからだの方もそのとおりに動いているってのが理想で、そのためにあんなキツイ練習が必要になってくるの」

ヒロちゃんも津野さんも、ほかの物音は耳に入らないような熱心さで、じつと聞き入っています。

「相撲の基本なんていうと、むづかしいことになるけど……簡単に云ったら腰を中心にした動きということね。どんなスポーツでも腰のバランスってことが大切だけど、とくに相撲の場合は、さっきも云ったように指の先がほんのちよつとでも土俵にふれたら負けでしょう、だから腰のバランスってことが、ほかのスポーツよりも何倍も重要になるのよ。そうやってマワシを締めてるのも腰の構えがポイ

ントなんだったことをからだに覚えこませておくためのよ」

今井さんは、そう云って私に

「どう？マワシを締めた感じは？」
とききました。

「ハイ、スゴクキツク締めてもらったので息苦しいみたい。それに何だかからだがフワフワしてるようなんです」

今井さんは笑いながら

「初めはみんなそんな感じなのよ。マワシに負けちゃったのね。おなかにウンと力を入れてることよ」

と云ってヒロちゃんの方に

「あんたはどう」とたずねます。

ヒロちゃんは

「ハイ、わたしもやはり、そんな気持なんです。でも何だかスゴク緊張しますね」

「そう。マワシを締めるってことは精神を引き締めるってことにもなるのよ。だからマワシを締める時はおなかをね、ちよっとへこますようにして締めたらいいのよ。ギュツと腰に喰い込んでくるくらいに締めると、それだけでもファイトが湧くものよ」

「ほんとですね」

とヒロちゃんが云いましたが津野さんが、

それに続けて

「でも、ちよっと痛い」

と顔をしかめて見せたので、そのおかしな顔つきに今井さんも思わず笑い出してしまいました。

今井さんは、またまじめな顔になって

「マワシが痛いってことも、さっき云ったよ。うな、あんたたちがつまり、相撲をするからだになんていないっていうことなのよ。だからしばらくは我慢しなくちゃならないわ。だんだん慣れて痛くなくなってきたら、それと同じように相撲も覚えたんだと思いなさいよ。まあ話はこれくらいにして、じゃあ始めましょうね」

そんなことで、結局その日の練習は『そんきよの姿勢』とか『四股のかまえ』などのコーチを受けたのでした。

ふと気がついて見ると、私たちのうしろにさっき出かけて行ったマネジャーの笠原さんがいつの間にかもどっていて、マワシ姿になって立っていました。そして今井さんと一しよに私たちのコーチをしてくれました。

しかし、TVの大相撲などで見なれた『そんきよの姿勢』や四股をふむというただそれだけが、こんなに苦しいとはほんとうに驚く

ばかりでした。

ひざを曲げてしゃがむ——ただそれだけのことが、なかなか云われるとおりにできないのです。ひざは九十度以上くらいには開かないし、両手でひざにつっかえ棒をした上体は前こごみになって、それでも前後にフラフラと揺れるのです。

「なんて、あわれなかつこうだね」

今井さんは云いながら、うしろへまわって肩をささえて

「ホラ、もっとヒザを開いて」

肩をささえてもらっているで倒れる心配はないのですが、なかなか云われるようにヒザが開きません。

「お尻を突き出してるからダメなのよ。もっとおなかを出すように。そう、そう」

ようやく合格をもらいましたが、今井さんの手ははなれると、たちまちヨロヨロと転びそうになって、バッタリと手をついてしまいます。

「ハイ、もう一回」

立ち上がってからもう一度やり直します。こんなことを五回、六回と繰り返していると最初は足首の筋肉——そしてだんだんと太ももの筋肉が張ってきて、十日くらいになると



まるでやけるように痛くなってくるのです。立ち上がるたびにマワシが少しずつズリ上がるのか股を通っている部分が喰い込んでいきます。ダラダラと汗が流れてきます。

となりのヒロちゃんや津野さんも私と同じように悪戦苦斗の真っさいちゅうで、お尻をたたかれたり肩をおさえられたりで真赤な上気した顔でがんばっていました。

まだ練習が続けている上級生たちにあいさつしてロッカーへもどると、私たち三人はまるで申し合わせたようにマワシも解かずには

M.U.

タヘタとすわりこんでしました。

「ずいぶんキツいのねえ」

さすがのヒロちゃんも弱音しか出ません。

「これで軽くだつて云うんだから恐れ入ったわね」と津野さん。

しかし津野さんの方は、ヒロちゃんほどには参っていないようで、三人の中ではいちばん元気でした。私など口をきくのもいやなほどぐったりして、だまって下を向いているだけなのです。

「でも、わたし止めないわよ」

ヒロちゃんは気を取り直すように云って「だってさ、たった一日で逃げ出しちゃったりなんかしたら、もうあの人たちの前通られないわよ。だいいち相撲もとらせてもらえないうちに止めるなんてくやしじやない」

「そうよ。わたしたち団結してがんばりまし

ようよ」

と津野さんも云って

「そうね。わたしヒロちゃんより強くなるまで止めないわよ」

私もヒロちゃんを見て笑いながら云うと、ヒロちゃんは

「何を、なまいきな」と笑いながらとびかかってきて私を押し倒しました。すると津野さんが「ホラホラ、基本も知らないで取っ組みあいなんかすると、ケガするわよ」とまじめくさった顔で云ったので、また三人とも顔を見合わせて大笑いになってしまいました。

マワシを解くと、それまでキツく締めつけられていた腰のあたりが急にふくらんだような感じがします。そしてポカポカとほてるようでした。解いたマワシを手に行っていると急にもう一ぺん締めてみたいような気がしてヒロちゃんに

「ねえ、もう一度マワシ締めてみない？明日からわたしただけで締めなくちゃならないんでしょ、だから今のうちに締め方やなんかを覚えておきたいのよ」

と云うとヒロちゃんは

「そりやそうね。じゃ、わたしが締めてあげようか、津野さんも見ててよ」

と云いましたが、津野さんは

「あーらいやだ、もっと早く云ってよ。わたしもうパンティはいちやったし、マワシもすっかりたたんじやったわよ」

と口をとがらせました。でもヒロちゃんが「いいじゃないの。どうせたんだのならかえって締めやすいわよ」

津野さんも

「そうだね、じゃそうしようか」

と云いながら、ロッカーへしまいかけたマワシをまた出してきました。

私はマワシを前に当てながら、さっきの練習の時、股に喰い込んできて痛かったのを思い出して、ヒロちゃんに股を通す部分をあまり細くしないよう頼みました。そして今井さんに云われたように、おなかをへこませながら締めこんでいました。

グイ、グイと気持よく締まるたびに、またさっきの緊張がよみがえってきます。

締めおわって「ウン」とおなかに力を入れますと、おなかの底の方から何か熱いものがムラムラと胸の方へこみ上げてくるような気持がしました。

私が終ると津野さんがヒロちゃんのマワシを締め直してやり直しました。

「こうやって裸になっているところをくらべますと、同じような体格に見える津野さんとヒロちゃんの体つきのちがいが、はっきりわかります。」

ヒロちゃんは色白、そしてどちらかと云えば上半身が発達しているほうで、とくに肩の丸味や、胸のあたりの厚さなどは相当なものです。肉づきのよい両肩からムッチリした胸もとのひろやかな台地の上には、二つの青春のつぼみが、まだ幾分おさなさのおもかげを残したやわらかい姿をならべています。ウェストのくびれが少くないので広い背中のスロープが、そのまま巾広く張った、やや平たい感じのするお尻へ流れているのが欠点とも云えるところで、そのためこの肉づきのよい上半身にはちよつとふつりあいなほどにスナリした足をもっているのに、からだ全体としては少しばかりポッテリしているという感じを受けるのです。ですから中学の時に、口の悪い人が「おダンゴに二本のク



シを刺したようだ」などと云ったりしたものでした。

こんなヒロちゃんにくらべますと、津野さんは、浅ぐろい肌、そしてかたぶとりというのでしょうか、からだ全体からヒロちゃんにはないピチピチした弾力が感じられます。肩

のあたりの肉づきなどはヒロちゃんに及ばないものの、胸の起伏はずっと大きく、谷間をはさんだ二つのふくらみも、もうほとんどとのった形を見せて、処女のいのちの唄をほこらかに唱い上げているようでした。キュッとくびれたウエストが、ほどよいアクセントとなっておなかの表情を引き締めています。ブクリとした丸いお尻は、ヒロちゃんほどの巾の広さはありませんが、そのかわり、まるで二つの球をならべたように張り切っていて、指で突いたらピンとはねかえされそうなくらいなのです。

「相撲をしているうちに肉づきだってよくなる」などとヒロちゃんが云っていたけど本当かしら。ヒロちゃんみたいにポチャポチャしたのはイヤだけど、津野さんのようになれたらいいなあ」と思いました。

ムチムチしたヒロちゃんの腰にマワシが気持よく締まっています。色白の肌に青い色のマワシがよく映えます。

「あなた色が白から青がよく似合うね」津野さんが結び目をギュッと締めてやりながら云いました。

「そうかしら」ヒロちゃんが自分のからだを見下ろすよう

な形をしながら嬉しそうな顔をしました。

「グツとくるわね。新しいのも青いのにしてもらったらいいわ」

私が云うと、津野さんも

「そうね。そうしてもらいなさいよ。……それじゃ、わたしは何色がいいかなあ」

と首をかしげて急に

「そうだわ、黒がいいわ、殺し屋ムードで黒なんてのはどう？」

と云います。

「あなたにピッタリだわ。イカすでしょうねきつと」

私が云いますと

「じゃ、あんたは何色にするの？おとめの情熱で赤なんてのはどう？」

「馬鹿にしないでヨ」

「じゃピンク、オレンジ」

「何をふざけてるの。あなたの番よ」

津野さんがパンティをおろすと、プリプリした丸いお尻が顔を出して、ヒロちゃんが

「へー、かなりみごとなおヒップだわね」

感心したような声を上げ、津野さんはちよっと赤くなって腰をくねらせながら

「そんなにジロジロ見るもんじやないわ。ビククリするほどでもないでしょ」

とマワシを当てます。股を通してお尻に引

き上げ、腰にまわしてグツと締めます。肉づきのいい津野さんの腰に吸いつくようにマワシが締まって行くのを見ているうち、私はふ

と思いついてヒロちゃんに「そのあとわたし

がやるわ」と受けとると津野さんに「ハイ、おなかをへこませて」と云いながら力いっば

い引っぱると、マワシはギュッと音を立てるくらいに締まります。津野さんは

「そんなに……強く……締めないでよ。呼吸……が……できない……じゃない……の」

と苦しうでした。知らん顔をして、どんどん締めてゆき、最後の結び目を思い切って

引き上げました。

丸々としたお尻に、みるみるマワシが埋まるように喰い込んで津野さんは、たちまち

「イタ、イタ、痛いわ。ひどいじゃない」

と顔をゆがめました。

私は

「さっきのお返しよ。たっぷり受取ってちょうだい」

と云いながら津野さんを見ますと、半分泣き顔になっています。

「だって、こんなにきつくしなかったわよ。ちよっと引っぱっただけじやないの」

「何やってるの。そんなベソかいたりして」とヒロちゃんが笑うと

「笑いごとじゃないわ。ほんとに痛かったのよ。ああわたし涙が出ちゃった」

と目のあたりをぬぐっています。私もちよつとやりすぎたかしらと思って

「お返しが多すぎたようね。ごめんなさい」

とあやまりました。津野さんは

「いいわよ。そのうちにタップリお礼してあげるから。そうそう、ぶつかりがいこするようになったら十分にあたいが満足するまでシゴいてあげるわね。もうフラフラになって、わたし立てないわ」なんて云ってもゆるさないの。サア、もう一丁って引きおこしてまたドスンって投げとばすのよ。ああ気持が良いこと」

「そんならわたしの時も、おんなじようにしてころがしてあげるから」

「あんたなんか投げられるもんですか。わたしがドーンとぶつかっていったら、壁板までふつとばされるでしょうよ」

津野さんは、そんなことを云う間も、いっしょうけんめい、マワシを押し下げていましたが、自分でもそんな形におかしくなったのか、私と顔を見合わせて「アハハハ」と笑い

出してしまいました。

服を着終って校門のところまで三人で並んで行きました。

にぎやかだった校舎も大分人氣がなくなつて、夕日を反射している窓ガラスももうほとんど閉じられています。

汗ばんでほてった頬に夕方近くなった風がこころよく感じられ、スポーツのあとのさわやかなつかれが一種の満足感を与えてくれます。校門のところで津野さんに別れました。

私とヒロちゃんとは同じ方向へ帰るので、が電車通学をしている津野さんは、私たちの帰る方と反対の方向にある駅へ行くのです。

津野さんと別れぎわ、ふと思ひ出したことを聞いてみました。

「あんたの名前ってヨシエっていうの、それとも榮子っていうの？」

津野さんは、いたずらっぽい目をして

「わたし、そう云った？。どっちでもいいのよ。本当はヨシエって云うんだけど、家ではヨシエなんて呼ばないで、ヨシエのエだけとってエーコ、エーコって呼ぶのよ。それでわたしもうっかりすると、エーコって云ってしまふ時があるの。さっきもエーコって云ったかしら」

「なんだ、そうなの。のんきなね。そいじや、わたしたちも、エーコって呼ぶことにしようか」

とヒロちゃんが云いますと

「どうぞご自由に。わたしも、その方が聞きなれてるのよ」

とのんきなことを云って

「じゃバイバイ。あしたも、がんばりましょうね」

とスタスタと歩いて行きました。

「のんきな人ね」

と私が云うと

「でもおもしろい子ね。ファイトもあるし」とヒロちゃんも、氣に入ったらしい様子でした。

その夜は床に入ってからなかなか寝つかれませんでした。

笠原さんや今井さん、小林さんなどの顔が次々と浮かんできます。汗にまみれた金田さんの顔と激しいぶつかり合いことがダブリます。はじめて締めたマワシの感触がよみがえってきて、腰のあたりに手をやりながら一層興奮をかき立てられるのでした。

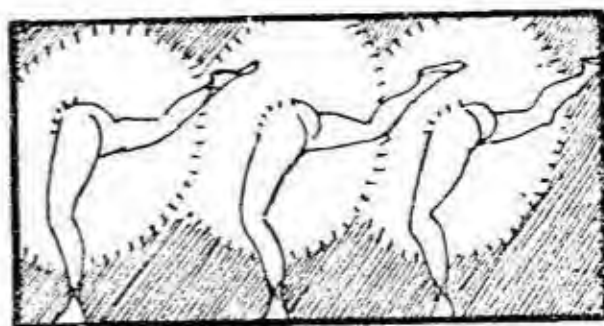
(未完)

論壇提言

小説『花と蛇』

その文学性について――

保 藤 久 人



九月号で夜乃探郎さんが「羞恥文学『花と蛇』」によってVと題して論壇提供への提言をなさった(奇クサロン)。

「読者の公平なるお声が聞き度い」と、仰言っている。

ところが、以来折にふれ「読者の声」というものを耳にし乍ら、残念にもその的を射ていると思えるものは見当らなかった。

十一月号に到って漸やく久我庄一さんが、

「文学的悪讃美論」という表題で「花と蛇」

についての本格的な作家論(作品論)を発表され、「花と蛇」をA小説Vと結論していらっしゃる。そして更にA悪讃美論V↓A芸術性Vにまで言及していらっしゃる。

尤もなことだと私は思う。

特に文中の「……作者の創作的苦心(表現的な)執筆態度には頭が下る。制約下でもS M小説を書くことが出来るという意味でも」

と、いうこと。並に、言葉の魔術的表現手法を作家論として讃えていらっしゃる。

これ等の点は、私などにも教えられるところが多く常に感じ入っていたものだが――。

併し、作品論とした場合、正直に言って何故か私は、物足りなさを覚えたものだ。

だが扨て、私の様なものが烏滸がましくもこんな文章を綴ることは、或は筋違いかも知れない。実際に、私の作品に対してのむづかしい論的なことは書けそうもない。

が、一愛読者としての忌憚のない発言ならば出来そうなので、敢えて、ささやか乍らとペンを執り始めた。



一応、「花と蛇」を外貌的に通読して見よう。その場合、まず目につくのはその全体……ストーリーの安易さであろう。

気品のある令夫人・清楚な令嬢・健康美溢れる若々しい美女・端正なる美少年といった「善」的人物が登場し、対するのは、悪徳社長・暴力団の親分幹部・チンピラやくざにズベ公という、それが当然の様な「悪」役。

誘拐・囑る・凌辱・ブルーフィルム。納屋・地下室・土蔵・秘めやかなお座敷。何処を見ても、物語りの構成は通俗性読物

の範疇を抜け出すことなく、興味本位の大衆読物の趣きを呈している。

つまり全ストーリーが最も安易な△通俗性△読物的△によって貫ぬかれているのだ。

その為に△小説△と△読物△といった様な個人的思考による場合の、まぎらわしい要素も多分に持っているということも出来る。

併し、この作品について、真因的に思考するならば、何故この様な△通俗性△を表面に出さねばならなかったか、という点を重視しなければならぬだろう。

面白くする為。誰にでもすぐ馴染めるようにする為。空想乍らどこにでもありそうな話にするのに都合の良い為……。

作者の真の意図はどの辺りにあるのか私には判らないが、安易な構成に対する理由は、右の他にもいろいろあることと思う。

が、その実態……この様な△通俗性△は、SM小説に於ける一種の宿命的な骨子といえるのではないだろうか。

若し仮りにこの△通俗性△を排して△即現実△として書かれたものであるとしよう。

と、それは、余りにも生々し過ぎるのではないか？ 大抵の人の心の中にあるヒューマニズム的心理に、或る種の抵抗を与えるので

はなからうか？

本能的に、或は嗜好的に△悪讃美△を肯定しながらもついて行くことが出来ず、逆に否定的となり、実際の考えとして、最終的には△現実離れ△と断定せざるを得なくなる。

そして、有り得ない、という意識の先立ちと共に、つまらぬものになり、果ては馬鹿馬鹿しくなって仕舞う。

つまり△夢△が皆無な為である。

つまらぬ部分をつまらぬものにするには、形態を創作より脱して、所謂、告白・手記・体験という、私的生活から割出した△個人△に終始し、従って綴る文字も「真実」になり、益々反道徳的、非社会的な悪業の実態となってしまう。

それでは非人間的だし、人間喪失を意味するものともいえるし、大抵の人は嫌悪し忌避するのではないだろうか。

「花と蛇」の場合、読者はまず先に作品の創作であることを認識する。

創作・創意に依る文章なので、そこには、△現実△と△空想△が巧みに秘められていることを認知し、その上で、それ等総てを△幻想△として受入れることも出来るのだ。

そしてこの場合、最も安易に人々に歓迎さ

れそうなストーリー。△即現実△でない所謂△通俗性△読物的形態△……大衆に好まれそうな面白味と興味点を浮き出すことにより、読者……人の目と心を魅きつけて注がせる。その上で、その内面……本来の目的である奥深い部分に誘い込んで行けば良いのだ。

◇――◇

「――可からず」に対すると人間は甚だ弱いもので、見ては不可ない・しては不可ない、と言われると、尚更に、好奇心も手伝って、見た行ない度くなったりするのが人の常。その「――可からず」の部分に大きく地位を占めているのが所謂「悪」と觀念づけられているものなのだ。

そしてそれが「――可からず」であるが故に、一般的傾向として、人々の心の中に、一種の憧憬的心理が芽生え育ち「――可からず」に相対して行こうとする。

寂しいことながら、SMも又、その「悪」的觀念思想で意味づけられている。

従ってアブニストにはそれが更に強い渴仰心理となり勝ちで、SM、その非現実的な部分に、夢を夢見て……つまり△幻想△。

私達は常にそれを追求め、その心理に答えて呉れるのが△SM小説△なのだ。

併し、「——可からず」であるが故に、本筋である△真理Ⅱ心理Ⅲに終始することが出来ず、意図外の粉飾（通俗的興味点）を施し更に△虚構Ⅳに対する実証を、その外的形態で示さねばならない。

これが△SM小説Ⅴの一つの宿命ともいえる——。

◇——

元来、SMに関する小説というものは、その大半が△心理Ⅲ△官能Ⅳという一分野に属するものであり、従って、SM小説と銘打ったものを読む時は、読者は各個人で外貌的通俗性を排除し、徒らに刺戟のみを追うことなく、その文中に流れる真の内的なもの、つまり△SM真理Ⅱ心理Ⅲを見極めつつ満喫す可きもの。

それが△読者の作法Ⅳであり、△礼儀Ⅴである。そして「花と蛇」は実際にその様な精神によって貫かれているのだ。

だから、その辺りを見落しては何一つ作品に対して喋ることは出来ないし、このあたりの混同が意味のない論議の元となり、かえって作品を疵つけているように思える。——。

◇——

小説「花と蛇」を極端に言えば△静子Ⅳと

いう高尚な令夫人と野獸派的小悪党△川田Ⅳによって代表されているともいえる。

読者（人間）にとっては、静子夫人は一つの理想像であり、川田は大衆を意味する庶民（読者Ⅱ人間）と推定することも可能だ。

そこに△夢Ⅱ理想像Ⅲと△現実Ⅱ読者Ⅳの二つの形態が、両立し乍ら確立しつつ交流しているといえるし、その△夢Ⅲと△現実Ⅳが同時に△人間Ⅳであることを物語っている。

妖しいともいえる人間性の深奥。作者はギリギリのその姿を、美と悪に託し、文字……文章によって書き尽そうとし、実際にそれが果されている。

それが、小説「花と蛇」の総べてなのだ。人間↓その心↓その性↓SEX！

内面を形成している秘めやかな部分……そのもの。それでいてどうすることも出来ない人間としての本質！

令夫人静子は、憤怒↓恐怖↓羞恥に始まる凡ゆる人間感情を示しつつ、その本質に触れ人間であるが故に、逆に、最も人間的な部分を抑えることも出来ず、又、耐えることも勝つことも出来ずに諦観心理に陥って行く。

そして哀れにも悲しく、その道程で、極め

て人間的な本質に目覚め、その自覚に伴い、心の何処かは、その「何か」に溺れようときえる。

「花と蛇」の文中には、△美Ⅳを代表する静子夫人の人間的な心理変化が、瑞々しく生々しく綴り込まれ、内的深奥の感情の流れが耽美的に浮き沈みしているのだ。

最極限的な人間自覚への道程……人の心をこれ程見事に、その性的本質を画き尽しているものは少ない。

静子夫人の内面描写こそ△人間Ⅳを表示解明し得る最大級の文字であり、同時に、そこには実質的な夢△現実Ⅱ幻想Ⅲがある。

これこそ、文字による芸術△文学Ⅳであり、従って「花と蛇」は稀に見る△羞恥小説Ⅳと断言出来るのだ。

兎に角、「花と蛇」は優れた作品であり、表面的な通俗性は、単なる「装飾的虚構」に過ぎない。大方の愛読者は、「花と蛇」に接して、幻想的夢現（SとMの）を感受することが出来るのではないだろうか。

——私はそう信じている。それで良いのだその辺りに始めて△小説・花と蛇Ⅳの実質的な価値が存在し、多くの読者を熱狂させるのだと思っている。（四〇・一一・二二）

鬼六談義

にっぽんさんもんえいが
日本三文映画

団 鬼 六

九月、十月は全くの多忙で、KK編集部より原稿催促の葉書を頂きつつも遂に／＼切に間に合わず、「花と蛇」を御愛読下さる方々には真に失礼致しました。

この次からは、かかさず——といっても、のんきな小生の事、それに放浪癖など手伝うので、愛読者の信用も大分なくした事と恐縮している次第である。

人間、仕事が忙しいという事は考えれば有難い事であるが、ただ、盲目的な勢に自分を乗せている場合が多いものである。事實はそこに意味があり、内容があり、世の中の人

すべて、何の抵抗もなく盲目的に働くのが普通なのであるが、私のような横着者も中にはいて、ああ、うんざりした。何か面白い事はないものかと眼をキョロキョロさせたがる。そうした横着が嵩じて、何時かの八鬼六談義Vにも書いたような映画（花と蛇）を作ってみたわけであるが、映倫がああもうるさくては全く不愉快で、もうやめたと思っていたところ、私が、この種の映画に手を出した事を知った独立プロ映画のあちこちから、次々と脚本の注文が来た。ベッドシーン四五箇所を含める事、費用の

あまりかからぬようまとめる事という独立プロ独特の条件はあるが、それをのみこんで、ピッチをあげれば一本、三日ぐらいで書きあがるので、これはいい内職だと助平根性も手伝って仕事の合間に書き始め映画「花と蛇」以来色々なペンネームを使いわけて六本ばかり仕上げたろうか。すると最近、家内が口をとがらせ始めた。小生のもとへ出入する映画製作の連中がその都度、御親切にも映画のポスターやちらしなど置いていってくれるのだが、ケバケバしいピンク映画のそうしたポスターなどが子供の眼にふれては教育上よろし



くないというのである。月々送られてくる脚本や雑誌などには眼を通した事もない家内であるが、私の机の下に積まれていくポスターを見て、おどろいたようだ。

そんな或日、一緒に局の仕事をしているKという友達がやって来て、「君、S君にこの前聞いたのだが、時々、ピンクを書いてるらしいね。そりゃまずいぜ」という。何故、まずいんだと私が聞くと、「第一、恰好が悪いと思わなかね」というのだ。

私は、家内にブツブツいわれ、虫の居所が悪かったせいもあったが、日頃、親しくしているKと、その日は喧嘩してしまったのである。Kは、私がこういった言葉が頭にカチンと来たようであった。

「君が××テレビで書いているドラマの方がよっぽど恰好悪いよ」

我々の仕事は、一つのシリーズものを四人ぐらいで交代に執筆するのであるが、ついこの間までホームドラマをやっていたのに、今は刑事が出てくるサスペンスものである。仕事熱心な作家は、新聞に出てくる兇悪事件を切り抜いてスクラップし、更に熱心なのは、殺人事件などが起ると、記者と一緒に現場まで出かけ、状況をメモして来るというのもし

る。そんな事しながら、何か創作のヒントをつかもうとするわけであるが、私は一度もそんな事をした事はなく、仕事に不熱心である事は、自他ともに認めているわけであるが、必ずしも、そういう努力をしたからとて、その作家の創作が秀逸なものになるとはいいい切れない。むしろ、怠惰な私の方がKよりも上等のものを——いや、そんな事はどうでもいいが、私のいいたいのは、連続ホームドラマがおわって、刑事シリーズものを書くというシナリオライターの恰好悪さである。自主性などまるでない。飛躍したい方をするなれば、ライターたるものの全部が恰好悪いことをしている。つまりは不遇なのだ。

スポンサーの要求、局の希望、更にディレクターのアイデアも加味しなくてはならず、そんなもの一つ一つに妥協して書くシナリオというものの阿呆らしさ。いうなれば、仕立屋職人みたいなものである。私などは結局、スポンサーや局の眼をごまかすようにしてシナリオを作るわけだ。

成程、こいつは面白いと部長連が喜ぶのを見て舌を出す。へへ、ひっかかりやがったというわけだ。

いいたくもない気持を原稿用紙に書いて、

ほめられるほど、奇妙な気分になるものはない。好きでもない女にラブレターを書いて送り、女がその気になった時のようなものだ。映画とか小説とかいうものは全部とはいわないが、こういう誤解から出来上っているものが多い。批評家の批評も誤解から出来ているものも多いものだ。高名な批評家が何かを感嘆いして、つまらぬ映画を、これは傑作だときめつけるとおかしなもので、我々が見ても、それが傑作であるような錯覚に陥ってしまう。四方八方、誤解の糸にひっぱられて均衡を保って立っているのが映画であり、小説であるのだ。

これがいい作品かよからぬ作品か、作った人間が一番知っているのではなからうか。人から、君の作品は傑作だといわれて、冗談いうな、ありやインチキだと胸をはっていえる作者は大物である。読者も記憶されている事と思うが、私の知人の或る若いピンク映画の監督は、この誤解された批評のために、彼の作った映画が、幸か不幸か、ドイツの映画祭に出品される事となり、本人も有頂天になってドイツまで行き、そこで得た批評が、稀に見る駄作。映画も本人もケチヨンケションにけなされて日本にもどって来たわけだが、本

人が自分の製作した作品の価値はどの程度のものかわかってるのであるから、ドイツなどへ作品が送られると決着した時、断乎それを阻止すれば、どれだけ男が上ったろうか——そういう意味の事を彼にいうと、いや全くドイツの批評家は見る眼がない、というのである。となると、本人でも自分の作品を誤解する場合もあるのだろうか。彼に肩を持ったいい方をするならば、気持を知ってもらおうと思って真剣に制作したのに、これが批評家に通じなかったわけなのであろう。あまりにも深遠な思想のためか、表現力が足りなかったせいか、それはわからぬとしても、映画にせよ小説にせよ、中味というのは大ていそんなものだ。

相変わらず話は脱線してしまっただが、しかしKK誌の読者はテレビのスポンサーのようにごまかしはきかない。映画・花と蛇など原作を冒瀆したものであるという事がKK誌に出ていたが、如何に私がこういう種の映画規定というものを説明したとてマニヤにはわかってもらえない。つまり、いいわけ無用ということになるわけだ。更に今後いよいよ映倫規定がきびしくなる事を思えば、KK誌に呼びかけて見て頂けるようなものは、私としても

自信がない。もう数本ピンク映画の台本を書いたが、ほとんどが、おどろきのベッドシーンを付け私の好むものはわざとさけてある。やるなら、徹底的にやりたいし、出来ぬなら中途半端なものをさらけ出す事は、ひかえた方が賢明と思ったのだ。

ところが、面白い人はいるもので、私は最近、関西方面でこういう映画をあつかっている社長より仕事の注文を受ける事になり、プロジェクトサと一緒に会ったのだが、人の良さそうな五十前後のその社長は、あんな、伊藤晴雨さんをモデルにして一丁書いてくれはりまへんか、といったのである。プロジェクトサのY氏より社長は、私がSM的なものにいささか興味を持つ人間である事を聞かされていたらしく、ほな、わいの企画を聞いてもらいまひよ、という事になったのである。Y氏の話では、その社長は、SMもののオーソリテイという事で、それならばと、こちらも食指が動かぬでもなかったが、やはり、映倫という事が気にかかり、はりきるだけ損のようない気にもなる。この種の映画を手がけていて一番腹が立つ、というより笑止千万なのは、脚本はとにかくにも勧善懲悪をテーマにしなくてはならぬ事で、つまり悪人は亡ぼさな

くてはならぬという奇妙な規定があるのである。私は、連載している「花と蛇」の如く、悪人はなるだけ亡ぼさない事を好むので、こういう規定はどうも勝手が悪い。

それに私は、第一、伊藤晴雨という人物については、ほとんど知識がない。晴雨翁の絵は、私も何枚か所蔵しているが、そして、日本髪華美な衣裳をまとった女性の緊縛姿というのは私の好みなのでもあるのだが、どういふわけか、私の晴雨翁の絵に対する感じを率直にいわして頂くなれば、女の肢体に色気というか生氣というか、そうしたものはとほしく、陰惨な感じが先に立つのである。これは私の趣味ではない。森の中の古い神社にかけられた絵馬の如き——いささかオーバーな表現だが——どうしても一時代昔の絵だけに蒐集好きな私も、さほど食指を動かさなかった。

どちらにしろ、人の自伝的映画というものは、誤解を生みやすく、私としては、一応、断わって、戻って来たのであるが、しばらくして、その社長より電話があり、別に晴雨でなくてもいいから、ああした人間をテーマにしたものを作れといってきた。一応、考えてみると返事はしたものの、さて、どんなもの

が出来るやら。

この種のピンク映画も、こうした制約と制作過剰の現在、段々とふるいにかけれ、亡びるものは亡び、残るものは残り、来年のなかばともなれば、これらのプロダクションの数もぐっとへる事だと思う。つまり、いいかたはおかしいが、不真面目なものは潰れ、真面目なものは残るということで、品質向上の点から考えてそれはよい事である。

ここ何カ月か、この種のプロダクションと関係して感じた事は、こういう映画を制作する連中は、ツバめけた才能の持主だという事である。とにかく、二百五十万程度の金で一本の映画を作りあげるのであるが、クラシク・インからアップまで一週間というのに驚かされる。この間、私の関係したプロダクションでは私の脚本に出てくるマンションや家屋など、今日は監督の家、明日は助監督のアパートという具合にお互いに自分の住んでいる場所を提供し合っている。そのうち、私の所へも来るのではなからうかとビクビクしていると、案の状、映画の製作主任というのがやって来て、物干台のシーンにぜひともお宅の二階をおかりしたいという。

何時の間に我が家の物干台に眼をつけてい

たのか、その鷹のような眼には恐れ入った。

まだそれ位なら、ましな方で、何時であったか、私が以前住んでいた三浦三崎あたりの風物をおりこんだ脚本を書いた時、三崎へロケに出かけた撮影隊から連絡が来て、その地の料理旅館に愛人と二人招待してくれたのは有難かったが、旅館の一間でのんびりしていたその日の夜、また制作主任がひよっこりやって来て、真に申しかねますが——ときり出し私の愛人をちよっと貸せという。映画に出てくる風呂場のシーンをその旅館で撮影中なのだが、主演の女優と風呂の中で話し合う役になっていた女の子がひどい風邪をひいて出演出来なくなったので、そのピンチヒッターを頼みに来たわけだ。

といっても、こと愛人を風呂の中で他人の眼にさらすというのは、二階の物干台を貸すのと大分わけが違うので、私が苦り切ると、湯につかっている所をうしろから、ちよっと撮るだけだといって、ねばり出す。こちらもいわば、スタッフの一員であるから、無下に断わるわけにもいかず、ようやく愛人を納得させ、彼女も私とのプレイでまだ消えやらぬ肌についた縄のあとに気にしながら、スタッフ連に伴われて風呂場へ行ったのであるが、

私も気がかりで落着かない。

そこで、のぞきに行ってみる事にしたが、関係者以外立入禁止と風呂場の戸に紙がはられてあるのはよかったが、いざ中に入っていると、ひょうたん型の湯の中につかっている女優と私の愛人のまわりには、カメラマン、ライトマン、スクリプター、進行係、何やかやとベトナム兵みたいな帽子をかぶった不思議な連中が、ぎっしりうずまっている。カメラと湯の中に入っている女優との距離を実に丹念に巻尺で計り、貴女、もう少し右、貴女もう少し左へ寄って、などと指示しているのは、助監督らしく、それにしても、旅館のハッピを着ているのは、どういうわけだと思っていたら、ハンチングをかぶっていた監督が急に小首をかしげて、「君、誰や」とそのハッピの男にいう。へえ、ここの番頭代理ですと答えた途端、その男、周囲のスタッフ連に外へ突き出されてしまったのであるが、撮影のゴタゴタにまぎれこんで、女優の裸をさわりに来るなど、田舎旅館には、ふざけた番頭もいるものだあとで大笑いだった。

このように、お前とこ、ちよっと貸せ、という調子で、スタッフ一同、家も提供すれば私のように女まで、ちよっと貸せと持ってい

かれ——いや、その時など、持って行った旅行鞆から、背広、ネクタイ、全部、小道具として持って行かれたのであるが——仕出しの人数が足りない時は、監督でも助監督でも、通行人や酔っぱらいぐらいやってのける。どさ廻り劇団の楽屋の雰囲気の中で、こういう映画は実に手ぎわよく制作されていくのだ。

この間、やはり内職にこういう種の映画の脚本を書いている友人と久しぶりに逢い、小さな酒場で飲み合って、超人的なスピードで映画を作るそれぞれ関係したプロダクションについて語り合ったのであるが、彼は、私にいや、君が関係したプロダクションなどまだましな方だ。俺とこなんてひどいもんだぜ。という。どういう風にひどいのかと聞くと、俺が仕事をしているプロダクションなんて、早いってものじゃない、脚本がまだ出来上らないうちに映画が出来てしまうんだ。それに私は私も眼をパチパチさせたが、彼が仕事をしているプロダクションはフィルムを配給会社に納入する日が近づいているのに、金策に手間どって、なかなかクランクイン出来ない。スタッフやキャスト、脚本屋にもギャラの半金を先に渡してからスタートするというのがこの社会の常識である。ようやく金の都合が

ついて、彼も半金を受取ったが、脚本は明日の夜までに書けという命令である。そりゃ無茶だといいながら彼は早速、筆をすすめたものの翌日の夕方になっても半分も出来上らない。出来上りを待ってれば期日に間に合わない。と見た監督は彼のもとへかけつけて来て、彼から脚本のプロットを聞き、脚本なしでスタートしたというのだから、この監督も大した男である。スタートしてから二日後に原稿が出来、それが台本に印刷された時にはこの映画は出来上っていたという。正に神技である。規定として、映倫にはクランクインする前に台本の検閲を受けなければならないのであるが、この場合は映画が出来た事を隠してあとから台本の検閲を受けに行ったという。こうなると正に喜劇であるが、仕事している連中は笑ってはいられない。皆、それぞれの生活がかかっているのであるから真剣そのものである。

この種の映画を作っている人々の共通している事は映画作りが大好きであるという事だが、いいかえれば、映画仕事しか出来ないというタイプの人が多いものである。その数の多い事には驚かされる。どこかのプロダクションが仕事に入るとなれば、カメラマンやラ

イトマン達が仕事を求めて、どっとやってくる。一体、どこからこれらの人々がわいてくるのか不思議である。監督にしても然りで、プロジェクターは、その人選をするのに一苦労というところ。製作期間中、以前は全く知らなかった連中同志も仲良くなり、しかし、わずか一週間か十日あまりで、組織的活動が止ると、そのまま、各自、いずこかへ四散してしまふのである。

監督も若いのはテレビ映画の助監督を三年ばかりやったというだけで、この道でのし上っているのもいれば、かつては大映、松竹というような大会社の直属監督であったのをくずれて来た年配の監督もいる。一日の仕事が終ったロケ先の宿屋で酒を飲みながら、若い監督は五社の映画なんて我々と大差はないなどといばり散らし、年輩の監督は、現在、売り出している女優の名などあげて、あれを最初育てたのは自分であるという事をぼそぼそいい、かつての順風時代をまるで昨日の出来事のように語るのだ。

三文映画とはいえ、レベルはさておき、こうした新鋭もいれば、ベテランもいる。ところがスタッフの中に、こいつ、少し、阿呆かと思われるような奇妙な人間もいるものであ

る。

前にもいった通り、こういう三文映画は、そこらにあるものを何でも間に合わせて作るという事をモットーとしているのであるが、「花と蛇」の映画制作にあたっている時、監督の助手というような仕事をやっていた何とかという男——小道具集めを専門にしているような男であったが、実にあわてた男で、脚本を書き出した私の所へやって来て、うるさいほど私から映画に必要な小道具を聞き出し走り廻るという迷惑千万な男で、題字の「花と蛇」を見て、花なら、私の叔母が花屋をしているので何でも手に入りますが、しかし蛇は弱りましたな、今から浅草の蛇屋に頼んでおきましょうか。といったものだ。君、題名が花と蛇だからといって、どうして本物の蛇が出演しなくちゃならんのかね、と私が腹を立てていうと、彼は頭をかきながら、この題名を見た途端、この映画は、蛇を首にまいて踊るストリップパーが出演するものだと感じたという。花と蛇という題名とストリップパーのスネークダンスとどういう因果関係にあるか私も理解に苦しんだが、とにかく、こういう不思議な男がスタッフの中には一人や二人、混っているものである。

スタッフだけではない。キャストの中にも

面白いのがいる。あるプロダクションで、この前、女優の募集をやった。勿論、すべて、知人に頼んであちこちから集めたズブの素人であるが、その中で、顔も十人なみだし、頭もなかなか良さそうな女がいるので見に来ないかという友人の監督からの連絡を受け、その事務所に行くと、頭をソフトクリームのような形に結った十九才だという長い顔のその女性は、前の椅子に坐った監督氏と私に向かつて、最近の映画制作態度は文芸ものを敬遠し、享楽主義的なテーマを追求するばかりで、なげかわしいという意味の事をしゃべりつづける。相当、何か勉強している女に思えて、貴女、どこかに所属なさっているのですかと、私は彼女が劇団か演劇サークルに所属している女性のように感じられて聞いたのだが、彼女は、エチュードに所属しておりますという。エチュードとは習作という意味であるから、なかなかいい名前の劇団ですね、とほめると、いえ、喫茶店です、というのだ。喫茶店に所属しているとは、どういう事か。ふざけていっているのだと思ったら、本人は真顔でニコリともしない。少し、頭がおかしいのだと監督氏と私は、うなずき合ったものである。

ある。

とにかく、週刊誌などに取りあげられているピンク映画のもう一つの舞台裏はこういったものである。

今回の鬼六談義はSMに関するものではなく、ピンク映画雑感に終始してしまったが、たまには、こうした真面目な話も一興かと思う。

仕事に疲れた時、ふと週刊誌にでも眼を通したくなるのと同じようなもので、私はK誌を愛しているし、またそうした気分執筆もつづけてきている。連載している「花と蛇」のように、内容の制約(描写は別として)を受けず、好きな世界を書き、好きな人々に愛読されるほど、作者としても嬉しい事はない。妥協し合った仕事をしている時だけに、ふと閑を見つけて、「花と蛇」を書く時は、全く自分の時間がきたようで気楽な気分だ。愛読下さる人々のちよつとしたこの場をつくるためにも、これから出来るだけ、連載をつづけていくと思う。

十一月号を見て、「花と蛇」が小説であるか読物であるかの論争(とはオーバーな)というふうな記事を発見したが、何時の間にそういうふうな事になっていたか、この所不勉

強故気づかず、また、論争して頂く事は結構であるが、作者の私に一言くちばしを入れる事を許されるならば、小説でも読物でも、そんなものはどっちでもいいという事である。あえて両者の肩を持つために、あれは小説的読物とでもしておこう。熱心に執筆されている先生方には叱られるかも知れないが、KK誌上に掲載されているものはすべて一種独特そして異常な世界であるだけに、小説とか読物とかと断定した言葉をつけるのはおかしく頭にKK的とことわるべきであろう。KK的小説などというように。

とにかく、私には、小説でも読物でも結構なのであるが、それよりも私は自分が浅学なせいか小説と読物は違うのかはつきりわからない。文学が娯楽かというなら話はわかるが、小説だって読物じゃないかという気がする。昔、小説読物という雑誌があった。ただ感じとしては、小説という名を強いてとりつけられた場合、何か人生を一つの窓からのぞいて物語らなくてはならない気になるし、読物という名をいただければ、大衆娯楽的に軽いタッチでまとめねばならないような気になる。だから小説なり読物なり、はつきりとりきめられてしまうと、こちらとしては有難迷

惑、方針を指示される事は好ましくない。私の目的は、KK誌を愛し、そして、花と蛇的なムードを好まれる少数の限られた人々に楽しんでいただく事である。マニヤの方々に批評して頂く事は、参考にもなり、はげみにもなるが、あまり、むつかしい事を論じられるとうろたえてしまう。私としては今後ともそういう事には拘泥せず、現状を維持して、すすめていくつもりであるから、この際、一応、お断わりしておく。三文々士が、ぶっつけ本番のKK的駄文を書きなぐっていると思って頂いて結構である。

映画「花と蛇」アフレコの時、あるピンク映画のカメラマン助手をやっているアルバイト大学生がスタジオに私を訪ねてやって来た。KK誌「花と蛇」の猛烈なファンというのである。私は何となく照れくさいので逃げていたが、彼はスタッフの中に友人がいるので、ズカズカ、ミキサ室に入ってきて来て、私は彼にとっつかまり、食事時だったので、彼と私は一緒に食事をしたのであるが、きつい近眼鏡の中で、しきりに眼をしょぼつかせる彼は、しかし、なかなかの雄弁で、SMについてあれこれ語り、自己の性情を何とか定義的に結論づけようとしているようだったが、

私が、KK誌「花と蛇」を如何に読むかと聞くと、今まで読んだこの種の小説の中では最高傑作だとほめてくれたのは嬉しかったが、彼は次にこういった。先生には悪いが、結局僕は、あの小説をオナーニの素材にしてしまします。参ったね。しかし、何も悪い事ではない。彼女もなく、金もとぼしく、一人、下宿の四畳半に住み、年中アルバイト暮しをしている大学生に対し、たとえ、そういう方法であっても「花と蛇」がなぐさめているというなれば、存在価値もあるうというものだ。私としても、さほど嫌な気分でもない。小説であるとか読物であるとかいうより、案外、その学生がいった言葉の方が真実に近いように思われるのだ。極端ないい方をすれば、「花と蛇」とは一種の興奮剤——そういうわれたとて、私は腹を立てぬ。

要するに、「花と蛇」は、この道の理解者だけで、自己の空想をおりませつつ、こっそり読んで頂きたいものだ。作者として、一番嫌な感じは、この道（つまり花と蛇的な）が楽しめぬ人達に読まれる事である。というのは、さっき話したアルバイト学生のように、最高傑作だとほめて下さる人がいる反面、このムードにとけこめぬ人の眼には、無茶苦茶

以外の何ものでもないとうつる場合があるからだ。たとえば私なども、KK誌に掲載されているものの大半はなんとなくわかる気であるが、生首ものなどとなれば、全くわけがわからない。それと同じである。読むのは人の勝手だといわれればそれまでだが、縁なき人の眼でのぞかれるという事は（まあ、のぞきもしないだろうが）ストリップパーが女客にのぞかれる気分にも似て嫌なものである。

いささか弁明めくがSMを主眼にした映画の場合、わからぬ奴は見るとはいえず、映画「花と蛇」なども妥協的にああいう形にしなければ仕方がなく原作を冒瀆しているなどと叱責されるより、ああいう原作のものを

映画にしようとした事を叱責されるべきであろう。あの映画を配給した会社の社長の話では、「花と蛇」は久しぶりのヒットであったという事だが、私にすれば何だか申し訳ないような気分。せいせい小説の方で（便宜上小説といわせて頂く）がんばらせて頂く。

話は再びもとへもどるが、最後に一言、私が連載している「花と蛇」は小説か読物かは知らないが、（今後便宜上小説といわせて頂く）これはKK誌の世界にしか通用しないという事を知って頂きたい。外の世界にも通用させるためには、おのずから書き方も変ってくる。小説なり読物なりの作法というものをそなえなければならぬし、色々と段ど

女性写真モデル募集

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌受読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記載の上編集部宛お申込み下さい。報酬そ

の他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

りもある。となると、KK誌では大きな顔の出来ない代物になる。KK誌の特徴は、勿論他誌では試みられない特異な題材をあつかっているにあるが、私が愉快に思うのは、作法を無視した小説なり随筆が掲載されている事で、これもあまり他に例がない。これが私の一番気に入っている点であり、私自身、KK誌しか通用しない小説を、つまり、そこに力を入れ、勝手気ままに何のプロットも立てず書き流している。小説とか読物とかいわれると、うろたえたと私がいうのは、このように作法を無視した描き方をしているからであり、今さら心がけを変えよう気にはなれない。つまり、こういう態度が、何時か私の書いたSM小説作法にくつつくのではなからうか。

KK誌の世界にしか通用しない小説も愉快だが、KK誌の世界にしか通用しない論争もまた楽しからずやである。しかし、これは私の希望だが、小説か読物かなどいうのは、どうもKK誌らしからぬ題材のように思える。SにしるMにしる、その他、色々材料がある事だし、誰かもっと気のきいた論争をやってくれないものだろうか。私は、それを期待している。

(完)

△K・K時評△ 辻村隆、写真で登場（辻村隆・対談で）
（山原清子）

ドラマから生れた △ひかり二号の車中△

新人女流美術家登場に拍手！

論壇の新転を願う

—新年号の展望—

橘行司子

論壇

奇ク論壇が活発になることは賛成だ。しかし感情的になったり、あまりにも独善的になり過ぎることはうまくない。マニアとエゴイズムは本質的に兄弟きょうだいのような物だが、これがよい意味で、現在、執筆されている△雲は天才である△と木戸川健氏に評される「黒淵嬰一」と称する男△たる黒淵氏や、神酒一本槍ネクターの芳野眉美氏のようにだとプラスされる。個性的な独自の文体も生れることになる。下手すると、対社会的にも暗い自分のカラにまします

すとじこもるようになり、奇クの読者として、木を見て森を見ざるものだと思います。いや、反対でした。全体を見て、部分を見ずでした（読者通信・木戸川健）という木戸川氏に指摘されるような傾向に、ややもするとなりがちだ。

「奇クサロン」の△泥沼に落ち込んだ奇ク△宗像俊彦。『読者通信』京都市（有田一文）東京（藤田一夫）大阪（河内正夫）などの各氏の投稿を見て残念ながら少しくそう感じられた。（奇クの前途を思う生一本さは察しられても）

—昭和四十年年度までは、まだ論壇のテイサイを取っていたようだと推測されたが、四十年年度新年号に至ってそれがくずれ、その紙背に感じられるのは「あまり読者をなめきった作品を載せてはしくない」という、とばかりが編集者失格？ まで云わんばかりの力ミつきようである。

はたして、そのように「奇ク二百号に亘る歴史で今ほど内容のない。フヌケタ墮落した時はない」——のであろうか？

口絵並にグラビヤ写真が全廃された四十年年度三月号より現在（41年度新年号）まで。編集部の人読む雑誌△脱皮のかけ声にあわせ、支持ある投稿をされ続けてきた大方マニアの誠意が「今ほど内容のない」又は△大部分は毒にも薬にもならぬ雑文△など批判じみた声としてはね返ってきたことについて（一部の声であっても）どう大方マニアは第三者的にお考えであろうか？

論壇の活発化及び作品評を、共通の広場すべては過渡期としてオセッカイしてきた行司子だけに、いかになんでも△奇ク論壇△もこうまで生なまな言葉が飛出した事に、おどろく他は無い。

なお、次のような声も別論としてきかれた

ことも附言しておきたい。―摘宜抜萃―

『読者通信』福田久文・「何という素晴らしい黒瀬さんの十二月号のアドネの最後の二、三頁は、わたしには特に感銘深うございました」(名古屋・M七〇生)は「十月号で福田久文さんのMレポートを読みました。私にとりましては最近にない素晴らしい記事でした」。(愛知県・守山博)は旅先の駅前の書店ではからずも奇クを拝見し立読みしたところ、すっかり魅せられ、早速一冊購入いたしました」。(石川・忍頂寺隆)は「最近読む雑誌としての特色がよく発揮され内容が充実してきたのは同慶の至りです。……今後とも益々活発な論戦を期待します」(三重県・松坂京子)は「はじめてお便りいたします。本誌を拝見し、奇クの発展を心から喜んでおります」(和歌山・村上二三)「最近では、誌上に掲載の作品に対する批評や論戦? が非常に活躍(発?) になり私達にとっても、活気や熱気が誌上に感じられてうれしく存じます。殊に先月号の作品に対する感想がいち早く、すぐ次号に載るなど、迅速さは本誌が大変身近かなものを感じられます。……より一層読者に身近かな楽しい雑誌にしていただきたいと願っております」(八註・カッコ「」)

内の文字は行司子V(京都市・稲田慶子)は

「……私達のような第三者的立場から読んでおりますと、……結構たのしく面白く読んでいる方々も多いのではないのでしょうか。……公平な立場から考えて、今の奇クが一方に偏しているということは考えられません」○総論的に、宗像俊彦氏などのような八泥沼に落ち込んだVという対奇ク酷評も掲載されれば、同氏が「いささか腹にすえかねる」という夜乃探郎氏の投稿(八・実験告白Vが本文巻頭にのるかと思うと、福田久文氏の「地獄メモ」に答えても登場。八神酒Vを酒の肴にした酔人酔談の木戸川健氏が達者なエッセイを見せれば「通信」黒瀬一怒る(?) という奇ク誌上で八黒瀬一と称する男Vが現われる等々。これは公平なる編集の一つの証しでもあるのか。刺戟のある八論壇Vとは、八読者中心Vの編集とは、このような物と考えられる。しかし、昭和四十年度も終り近くなって論壇も八対・奇譚クラブV評と真剣に白熱(40・12月号「秋色の中での雑感」保藤久人・など)化してきたのが、四十一年度新年号で一部のマニアの最極論? が見られたことで感情むき出しの八泥試合? Vの様相をさらけ出さんとした(その異論もあった

が)このへんでSMの本質を衝くような八対奇ク評から一步前進! V論壇の新転を願う――これが期待であり、真言である。

編集お手並拝見

昭和四十年十二月号の八奇クサロンV冒頭で編集子は「ひかり2号の車中で」京都で大きくなり大学を卒えてから好きな商業美術をやっている」という妙齡の女性と「快楽主義の哲学」が取りもつ縁で知りあった。それが今回(41年・新年号)の八編集後記Vの「表紙を従来のもので一新してみました。……新年号ということで特に金と銀を配色してもらいました。本文中のカットも若干」という――見事な実が結ぶことになった。ともかく、新人女流美術家登場に心から拍手を贈りたい。また、直感的に初対面であっても相手の才能を見ぬき、思い切って登用。これは編集子の常に奇クに新風を送りこもうという熱意と決断がうかがわれ、頭を下げた

「表紙」

高級風俗文献誌にふさわしい黒と銀による繊細な感覚と、耽美な夢幻感、これはどう

しても、十八世紀のフランスの艶情版画の世界の流れをくむ装飾芸術の「美」が感じられる。本文中に江川詩二氏の「人魚責めパノラマ館」が掲載されてあるが「人魚」という存在そのものが伝説の彼方に秘められた世界のものだけあって、一層の詩情がたただよう。

（裏表紙はシルエットによる物だが、表紙と対象的な組合せが生きている）

「カット」

「F・実験告白」夜乃探郎氏に使用されたものは、おそらく、新人美術家の手によるものだろうが、細い指先と、そこからしたたる血のりは、華麗な残酷さを見せ傑作。それと「神酒」を酒の肴にした酔人醉談・木戸川健氏の文中に使用されたカットを上げておきたい。（こちらは、前衛的な画として）

「あれこれと一言」

「奇クサロン」の『憎まれ児』の弁・編集子の言葉は『久我庄一メモ』とあわせ読めば、その妙味はさらに倍加されようか。誌上、マニアの声として、いかにもユーモアぶってとか、奇クの本領であった本格的SM小説や真摯なアブノーマル・セックスの告白はどこ

へいったのか」という批判が上っているが、その線からいって他面、この程度の奇譚とは遠い？ オフザケ？ でさえ「全般的に異常性欲の極端な表現が充満しており」と神奈川県児童福祉審議会から勧告される現状。

この点、よく再考することによって「読む雑誌」という言葉も身近なものとして生きて来ようか。（微妙なる課題である）

○総論的に「読者通信」の「なんだか八方美人的に皆の人々に気を使っているようで、むしろいいらしいほどです」という京都市・稲田慶子氏の編集部によせる言葉はいまの時点にあって生きている。みなさんどうでしょうか——。（ただし、編集子の退きやくラッパも、ときに「新聞の値上げを攻撃した投書」を載せた新聞を、今までのところ見ないが、新聞値上げ反対のデモをするオバサン連の写真を大きく取り上げる新聞があると、新聞の記事も大分信用できるのだが」という音色を響かせることは心強い気持ちもいだかせる——編集部だより）

小説

「芳野眉美氏へおわび」

その月に出る号の「時評」を、すぐ翌月号

に掲載することは、どうしても編集の切を考へに入れて短日間の執筆、投稿をよぎなくされる。そのため、説明不十分な点も露出される。前回（40年12月号）のこの欄で取上げた『御厨番秘聞』最終回について、舌たらずの点がありましたので訂正・補足します。この作品を新しい出発点として、今後、この種の神酒をモチーフとした時代小説シリーズが続々と発表特異な「神酒文学」というものが近い将来完成されたとしたら、対外的にも『文学』として評価されよう。又これは奇クの前途を象徴する「御諒解」を願う。

○総合時評という形式と、設定せる頁から小説批評といわれるものを書くことは無理である（いつもアウトラインにとどまることを諒されたい。時期を見て「読む雑誌・K誌」の今後を思う「新年号掲載と似た別稿形式で少しく述べることもあろうか」いま盛んに、りっぱなSM小説出でよ！と声が上がっている。それには単なる感想でなく、たしかに小説批評というものが、投稿裏付けされて、小説執筆者もよい勉強になり、さらに張合いがあるらうか。

『妙心尼覚書』芳野眉美。『首化粧』八悦庵絵灯籠——その十六——万田不二・「痴人

の糧』へ旅愁▽山本一章・『台湾の女』江間和男の各氏の作品は、その対象になろうと思う。なおへ編集部だより▽にあった言葉「『文章学院』でも開設するか」これは多少、ユ一モア？も察しられるが、ひょうたんから駒が出たという話もある。一つ、団鬼六氏か、辻村隆氏あたりで、誌上講師となってみては――。

○『花と蛇』(続篇・第十三回) 団鬼六氏の掲載をよろこびたい、ただしさし絵の無かったことが残念。

読物・エッセイ・告白その他

○辻村隆・山原清子―対談『宴はてて』辻村隆・は辻村隆氏がそのエネルギーようちやうな容貌を挿入写真によってお目見得させたことが、トピックではなからうか。(行司子の知る所で、はじめてそのお顔に接した)また相対する山原清子さんは、いつものへ刺青姐御▽の表情はなく素顔が見られたことも珍しいフोटである。対談内容は、別段、解説する必要はないほどザックパランな興味ある読物となっている。

○『ポケット・ブックに発見したM的小説クライマックス紹介』河津安春・について。

このところ、M的文献がややすすくない折おりから、これは「異色雑誌の旗手」たる期待がもたれる。へ優しい二枚目のようなペンネームを頂いてニヤニヤして▽の登場のようだが、かつて白表紙時代の沼正三氏の評論にまけるとおとらない快心ホームを切望します。

○へ奇クサロン▽ズバリノ直言による――

◇SM夫婦プレイ同好者の皆様方へ、長田実・SM夫婦プレイは、奥様の協力があって出来る。夫婦円満はSMプレイよりといううれしい告白(こうなつてこの傾向のマニアも共鳴、続々とサロンにフोटが発表されることを期待したい。)

◇妖しいMの期待―「十三妹」寸感―T・T生：行司子も連載はじめの頃は朝日新聞を取っていたので読んだ。中国文学のオーソリテイとも評される武田泰淳氏の筆法は、さすが堂に入って居り、十三妹のようなあでやかな女芸者になら、首を斬られても？、などいうM男が出るかも知れない。

◇山中冬子さん・「私の誓約書」や「おんなドレイのうた」など、これを読むS男はおそらくハッスルするでしょう。小説でないへ事実▽が、このような形でそのまま存在するのなら――現代の奇譚千一夜。

◇サロン楽我記(第十九回) 辻村隆・来年はお産が薩張りかどうか、次の章へ風俗▽を、御参考までに貴方に捧げます。

風俗

『オール読物』昭和四十一年度新年号のへど存じですか？▽の「出生率」の一節。「ゴム製品から発泡剤、さらには経口薬と「文明の利器」に恵まれた現代だから時期は自由に選べるわけではある。が、それより、ひのえうまの出産を狙うというチャッカリ組が多い。ライバルが少なくなるから、子どもの入学や就職は有利だ、というわけだ。ふたをあけてみたら、逆にベビー・ブームだった、という悲喜劇も起りかねない形勢なのである。」

もう一つ、ある新聞・十一月末発行のコラム欄にへ勇敢に貫く人のある丙午▽という川柳がかかされており、その次に「来年生まれる女の赤ちゃんが結婚適齢期になるのは昭和六十年頃だ。それまでこの迷信が生きているとも思えない」と出産けっこう？と思われる強気な寸言がのっている。

× × ×

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 神酒街道

B 黒淵嬰一氏に

C 私信公開に就いて

D 夜乃探郎氏と木戸川健氏に

E 奈美江のジン

F 裸対談

A 神酒街道

(1) 奈美

十二月号の続きである。

十一月八日、奈美に電話。休み。

十一月九日、店に寄る。奈美がいた。いたけれど、先客があった。

「十分ほどお待ち下さい」

とレジが云った。この十分はあてにならない。が、せっかく寄ったのだから待つことにした。こうなると気が短かいのか長いのかわからない。

結局、四五十分待たされた。先客は入った



ばかりだったのである。レジの言葉を信用するものではない。

先客を送りだした奈美が、気がついて近づいて来た。

「あなただったの」

「お久しぶり」

「サングラスなんかかけているから、わからなかったわ」

「テレヤだからね」

「どうだか」

「とにかく、やっと会えた」

「あら、いらしていたの」

「いつも休みだ」

「ごめんね、風邪をひいたのよ」

「うつしてもらいましょるか」

「うつしてあげるわ」

個室に入ると、

「お待ちになった」

と奈美がきいた。

「ちょっと」

「わるかったわね」

「待たされたほうがいいんだよ」

「あら、どうして」

「今夜は冷え込むからね」

「ああ」

奈美はにっこりした。約束をおぼえていたらしい。

「飲むの」

「飲みたいね」

「今夜は大丈夫よ」

と奈美は云った。

「今、行こうと思っていたの」

「それはそれは」

「ちょうど、よかったわ」

「よかった」

「軀を洗う前に、飲む」

「そうだね、どっちみち、水びたしになるからね」

「フフ」

奈美は椅子に腰を掛けた。心持ち前に軀を浮かせる。

「強く、吸っちゃ、だめ」

と云った。

「でないわ」

蛇口をひねったから、すぐ水がでてくるわけにはいかない。

でるまで、待った。

「いいわ」

と奈美が促した。

(2) 朱里

十一月四日、朱里来店。

十一月九日、朱里に電話。休み。

十一月十一日、朱里に電話。いた。

「ゲイボーイと半年ほど同棲していたのよ」と朱里が云った。

「その男がね、普通のSEXにぜんぜん興味が無かったの」

「同性愛」

「そうね、女装している男なんだから」

「おかしい関係だな」

「そいつに教えられたのよ」

「男を責めること」

「ええ」

「どんなことをした」

「縛って、鞭で打つの」

「へえ」

「会員制のSMバーに連れていってもらったこともあるわ」

「えっ」

「ホントよ」

「あるところにはあるんだな」

「鞭を持っていたわよ、その女の人」

「初耳だな」

「ゲイボーイって、面白いところを知っているわね」

「商売柄ね。そんなこともあるだろう」

朱里の体毛は少い。そのかわり、体臭は鋭い。

「そんな客は、ここでもある」

「あるわ」

「ここでは、なんで打つの」

「ハンガー」

ロッカーに木のハンガーがある。

「あれかい」

「ええ」

「痛いだろう」

「痛いでしょうね」

「傷は」

「つかないわ」

「そうかねえ」

「意外につかないものよ」

「音が外に聞こえるな」

「そうね」

「困るでしょう」

「平気」

「慣れたものだ」

「面白いわ」

「ところで、飲ませたことあるの」

「あるわ」

「あっさりしている。」

「それなら大丈夫だ」

「何が」

「俺のことさ」

「俺のこと、って」

「俺にも飲ませろ」

「あら」

「おかしいか」

「だって」

「そうは見えない」

「ええ」

「飲みてえな」

「まさか」

「飲ませろ」

「だっ子ね」

「そうだ」

「いいわ」

朱里は裸になると、湯にひたった。

「どうやって飲むの」

と云った。

「でるの」

「少しよ」

「どうでもいいよ」

湯から出た朱里が、前に突っ立った。

「じゃ、立ったまま」

仁王立ちである。

「――」

(3) 晴子

十一月九日、店に晴子を訪ねる。休み。

十一月十七日、レジーで晴子を指名すると

レジーと話をしていた女の子がクスッと笑った。

「あなたが晴子さん」

「ええ」

「それは失礼」

「こちらへ」

「紹介してもらったのでね」

「誰かしら」

紹介者の風体を告げる。了解。

「お友達がいれば、呼んでくるのだけど」

「二人で責めるの」

「そうよ」

「とんでもない。俺は飲むだけでいいんだ」

「そんなこと、したことないわ」

と晴子が云った。

「そんな人、いないもの」

「ここにいろよ」

「うそ」

「うそかどうか、実験してみましよう」

「困るわ」

「でませんか」

「なんとか、でるけど」

「それなら、いかがですか」

「とにかく、少し、考えさせて」

「どうぞ、ごゆっくり」

「タバコは」

「有難う」

晴子は、大きな髪を無造作に束ねて、リボンで結んでいる。

「あなたのお友達、飲ませたことあるの」
「ないわ」

「それは残念だ」

「やせているから、裸になるの、いやだな」

「着たままでいいよ」

「だって」

「おトイレに行ったつもりになればいい」

「はずかしいな」

「してしまえば簡単だよ」

「誰にも話さないでね」

「話しませんよ」

「それだけは約束して」

「約束するよ」

「お友達に話をしたら、イヤよ」

「はい、はい」

「それならいい」

「始めましょう」

「どうすればいいの」

「好きなように」

「知らないもの」

「じゃ、自然にいきましよう」

晴子がトイレのつもりになったかどうかは知らない。晴子はまたぎ、かがんだのである。顔にあふれて、口に、鼻に、そして、眼に入った。眼が痛い。

帰宅の途中、薬局に寄る。

若い女店員が、

「眼が赤いですね」

と云った。

「どうかしたのですか」

「女性の毒気にあたったのですよ」

「まあ」

眼薬をもらって、その場で点眼した。眼に
しみる。

(4) マリ

十一月廿三日、朱里が休んでいたの、かわりに、いいかげんな名前を指名したら、側で電話をかけていた子が振りむいた。

電話を置いて

「どうぞ」

と云う。

「あなたが、マリちゃん」

「ええ」

「それは失礼」

眼がかくれるぐらいふさふさしたオカッパが妙に似合う子である。黒のアイシャドウがオカッパにマッチして面白い。

さっさと服を脱ぐと湯舟に長々と寝そべり。とにかくくたびれた。

「飲ませたことある」

いきなりこう云ったのは、酔っているせいである。酔っていると、何もかもめんどくさいので、用件しかいわないことにしている。

「何を」

だまって、マリのすんなりした両脚の間を指さした。

「ないわ」

「飲ませてみたいとは思わない」

その時、マリが薬を飲んでいることに気がついた。立っていても、上体がゆれている。

と、いきなり、マリがショートパンツを脱いだ。

「早くしてよ」

とマリは云った。

「でちゃうわ」

すでに、矢は射られていた。

「あら、あら」

あわてて、マリの脚に抱きついた。

全身がマリの滝の中にあつた。

(5) 結果報告

四十年元日、月に一人、知らない女性より神酒を拝受する目的をたてた。その結果は、毎月の「濡れにぞ」に発表してきた。即ち、

一月七日蘭子、一月十九日雪絵(四月号)

二月十四日麻里子(五月号) 三月廿四日六月

十三日伊根子（六月号、九月号）四月十六日、七月十八日襟子（七月号、十月号）五月十八日T（八月号）八月十日M（十一月号）十月廿三日京子（一月号）今月の、奈美、朱里晴子、マリ、で十二人。目的は終わった。

森山美歌夫人は別格である。

蘭子と襟子は、数多く交際した。彼女たちから拝受したのは、神酒ばかりではない。

ささやかな目的をたてるのは楽しい。

B 黒淵嬰一氏に

奇ク誌上での私のペンネームは、芳野眉美だけです。他のどなたとも、同一人物ではありません。断言します。

C 私信公開に就いて

木戸川さんが心配しておられた私信公開に就いて一筆。（一月号「醉談」参照）

いただいた私信はすべて焼いています。保存しておきたい赤裸々な私信は多いのですがやはりプライバシーは守らないといけませんから。発表してもさしつかえないと判断したり（御本人がすでに誌上に発表している場合とか）了解を得た場合は使わせていただくこともあります。が、秘密は守ります。それが

エチケットですから。

「みだりに私信を公開」していたら、タイヘンなことになりますよ。交際は出来ません。

例えば、奇ク誌上に発表出来ない私のプライベートな問題を辻村さんに話をしても、辻村さんは一度も口外したことはありません。

私も同様です。特に、辻村さんの達筆は、すべて保存しておきたいユークワにかられるのですが、読んでしまうと焼いてしまいます。

誰にも話しません。話してもいいことと、悪いことぐらいの判断はつきます。

私の神酒放談にしても、誌上に公開出来るのは、氷山の一角とお考えになったほうがよろしいかと存じます。書けないことのほうが多いのです。おわかりですか。誌上に発表出来るのは、限られた一部分です。部分を強調して判断されると困るのです。

私信公開に就いては、誤解されたくありません。必要以上に気を使ってもかまわない性質のものでしょう。

信頼の尺度は、口の軽重で問われるべきものでもありません。そう思います。

D 夜乃探郎氏と木戸川健氏に

一月号「しお辛かった」と「醉談」拝見し

ました。私のスベテを御丁寧に解説して下さい。有難う御座居ます。自分でも気がつかなかった種々の点をネンイリにお教え下さって大変参考になりました。

ただ、お二方共、わざわざ神酒実験までなさることはないと思いますよ。神酒を飲む、飲まないは別問題で、飲んだからどうの、飲まないから理解出来ないというわけでもないでしょう。そこまでなさなくても、神酒党でもない御二方が、私のことを十二分に理解して下さい。あまり御無理なさらないように。

この頃、こんなことを考えているのです。神酒をはなれたとき、壁が突き破れるのではないかと。といっても、誤解はなさらないで下さい。私は一生神酒を追い続けます。これは私のSEXなのですから、どうも、アメーバみたいな発言で申し訳ありませんが、いまのところ、これだけしか云えません。

E 奈美江のジン

「ちびりそうよ」

とゆき子が云った。

「ゆき子のを飲ませるか……」

と亀公が囁く。

「OK……」

とゆき子は答えた。突然奈美江は尿意をもよおした。ハイボールを二杯、飲んだせいらしい。亀公が、ジンの空き瓶を取り、また這いながら戻って来た。

「ゆき子、私が入れるわ」

と奈美江が云った。

ちんぴらが、ヒエツと叫び、バーテンが、

「俺が飲みたい」

と叫びた。もちろん小さな声である。

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対すると連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

突然、怒りが奈美江を襲った。なんの怒り

か自分でも分らない。ツイストを踊る前の昂奮状態にかられた。奈美江はジンの空き瓶を不良工員から奪い取ると、走り出した。

口が小さいので瓶の底に少ししか入らなかった。ハンカチで濡れた瓶を拭いた。

奈美江と、バーテンと、ちんぴらが、大男の傍に行った。足首に皮バンドを巻きつけたまま、相変らずの大騒ぎである。

バーテンが中腰になりながら、大男をゆり

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

動かす。やっと眼を開けた。奈美江が大男の眼の前で瓶をゆすった。自分が飲む真似をして大男に差し出した。大男は無言で瓶をひったくって口に運んだ。

「ウオ……」

「うわ……」

大男はむせながら吐き出し、飛び起きようとして、足が動かず丸太棒のように転った。

——以上、黒岩重吾「花を喰う蟲」新潮社版より。

奈美江、五尺三寸、小柄な毛唐のような均齊のとれた軀、乳首がはっきり分る薄いブラウス、丸みをおび、精気が発しているような尻、喫茶店のウエイトレスからファッションモデルになった、十八才。

F 裸対談

銭湯に行くと、

「あら、お兄さん」

ときた。また会ってしまった。

「お早よう」

彼女？いつでも前をかくしているから、拝見することが出来ない。彼女？の前は、いったいどういうことになっているのだろう。

「よく会うね」

「だって、お兄さんに会いたいのですもの」
入浴時間に合わせて来るのだという。
「それは光栄だな」

いつも銭湯開始と共に入るのである。
並んで洗っていると、

「うらやましいわ」

と軀を女なみにくねらせる。気味が悪い。

「なにが」

「だって、お兄さん、わたしのより肌が綺麗
なんですもの」

「よせよ」

彼女は、有名なゲイバー『K』のトシマで
ある。いつでも着物。

「着物代が大変だろう」

「そうなの。誰か、スポンサー紹介して下さ
らない」

「その道はね、俺はよく知らないんだ」

「そうかしら」

これ、野郎同志の会話である。念のため。

「髪を染めている奴がいるだろう」

「ええ」

「あいつに云っておけよ。入口の前で脱ぐな
って」

「どうして」

「だってよ、戸を開けるだろう。髪を染めた

奴がさ、ヒラヒラした飾のついたおパンティ
を脱いでいるところにおつかれば、ギョッと
するぜ」

「そうね」

「一瞬、女湯と錯覚すらあ」

「それよ。この間もね、女湯だと思ったのね
そのお客さん。あわてて戸を閉めて、隣りの、
ホントウの女湯に入ってしまったのよ」

「そうだろう」

「そしてね、どっちが男湯だ、って叫んでい
たわ」

「まるで落語だな」

「面白かったわ」

二人の間に、なんの関係もありません。念

のため。

「あの、オッパイの大きい子は来ないのか」
「一人で旅館のお風呂に入りに行くの」

「はずかしいのかな」

「そりゃそうよ」

「可愛いオッパイだよな」

「見たの」

「見たことあるよ」

「あの子は、本当に女らしいわ」

「ああなっちゃ、もう、男にもどれねえな」

「そうね。下も切っちゃったし」

「えっ」

「完全に女の子よ」

彼女、ヒゲをそり始めた。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接発行所へお申込を！ 定価 五〇〇円 (〒20円) 略号「文献」

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹
女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した
本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び
集録出来ない特殊文献を満載いたしましたし
残部僅少ノ 売切れ近し。絶対に二度と入手できない素晴らしい内容の絵画写真集です。